323
85

始

辭海

大正
4. 2. 10
購求

緒言

大正の昭代奎運の隆盛に伴ひ各種の辭書は頻々として世に出で、宛然千紫萬紅の態をなす。然れども未だ一以て百事を辨じ得るものなく、彼を探り此に問ふの不便尠しとせず。百科辭書の如きは浩瀚に過ぎ、而も語辭に乏しく、亦憾なき能はず。編者玆に見るあり、各種の辭書を參照斟酌して本書を編纂す。

本書は我國の古今雅俗の言語を始め、漢語・佛語・洋語等を網羅し、加ふるに故事成語・俚諺・漢字異同辨等を以てす。而して和漢の人名・地名・書名等を插入し、更に又、字音假名遣表・漢

字音訓便覽附難訓・難地名字引・難姓氏字引・和漢年號早引等を附錄となせるは、前述の主旨に他ならざるなり。

出版を急ぎ、爲に推敲修補の暇なく、特に紙數の制限により、前後均整を缺けるは、編者の素志に副はず、慚愧に堪へざるところなり。他日改版の時を待つて補訂改善せんことを誓ふ。博雅の君子諒恕を賜はらば幸甚。

大正三年孟春

郁文舍編輯所にて

編者識

凡例

一、語辭の排列は、五十音の順序に從ひ、濁音は清音の次に、促音は「つ」の部に、撥音「ん」は「む」の次に排置し、其冒頭に於て圖解をなしたるは、發音に便せんが爲なり。

一、語辭の排列は、古來の歷史的假名遣に從ひたるを以て、其下に現今の標音的假名遣を記入したり。〔「くわ」は「か」とすべきにあらざれば後日必ず刪正すべし〕

一、外來語は、片假名を以て國語の次に記載し、長音符「ー」を有せるものは、其上の假名に他の假名の連合せるものの前に排置したり。

一、人名の上には符號〔を冠して他と區別したり。而して人名は地名に先立ち、同姓は相集め其名の頭字の音によりて竝列したり。

一、其人の著書・歌集又は其土地の山川・舊蹟・產物などは、便宜上其次に竝列して

説明の重複を省きたり。

一、「の」を以て連合せる複合語は、其上の名詞の次に竝列し、其語に關せる成句・俚諺も亦、其次に附加したり。

一、其語より出でたりと思はるゝ語にして、三音以上、又は漢字二字以上のものは、便宜上其次に竝列して、聊語原を知るに便ならしめたり。

一、語釋は、平易適切を旨とし、力めて例證出典を擧げたり。其原義の轉々して數義を有せるものは㊀㊁㊂㊃㊄の記號を付して區別したり。

一、古今に通じて用ゐらるゝ語辭と區別せんが爲に、古語には㊐の記號を付し、口語には㊏の記號を付したり。

一、品詞及び用言の活用を示すに用ゐたる記號は次の如し。

名……名詞　代……代名詞　數……數詞
形一……形容詞久活用　形二……形容詞志久活用　自動……自動詞
他動……他動詞　助動……助動詞　助……助辭（弓爾乎波）

副……副詞　接……接續詞　感……感嘆詞
接頭……接頭語　接尾……接尾語　枕……枕詞
四……四段活用　上一……上一段活用　下一……下一段活用
上二……上二段活用　下二……下二段活用　カ變……加行變格活用
サ變……佐行變格活用　ナ變……奈行變格活用　ラ變……良行變格活用

一、科學上の術語たることを表はすに用ゐたる記號は次の如し。

（哲）哲學　（心）心理學　（倫）倫理學　（論）論理學
（佛）佛教　（天）天文學　（地）地文・地質・地理　（數）數學
（理）物理學　（化）化學　（鑛）鑛物　（植）植物
（動）動物　（病）病氣　（醫）醫術　（兵）兵法
（法）法律　（經）經濟　（商）商業　（建）建築
（演）演劇

一、字音假名遣表は、一目、漢字音の異同を辨ぜしめんが爲に編せるものなり。

一、音訓便覽附難訓には、普通に使用せらるゝ漢字を總畫順に排列し、其下に片

假名を以て音を表はし、平假名を以て訓を表はせり。更に片假名を以て附記せるは、漢文に於ける助語の訓なり。而して二字以上連合して成れる言語の難訓・異訓を知るに苦むもの多ければ、特に列擧して便覽に供せり。

一、難訓地名字引・難訓姓氏字引は、古今の地名・姓氏中、其最も訓み難きもののみを列擧したるなり。

一、和漢年號早引は、和漢古來の年號を見て其時代の帝王を知り、且つ今より幾年前に當るかを迅速に知らんと欲するものゝ爲に編せるものなり。皇紀と記せるは、其の帝王の卽位元年にして、此より六百六十年を減じたるものは西洋紀元なりとす。

漢字音訓便覽附難訓

一畫

一　イチ　ひと　ひとつ　ヒタスラ　モツパラ
—人　ひとり　イチジン
—イチのひと
—入　ひとしほ
—八　イナハツ　イチのハチ　チーハー
—十　ひとそぢ
—刀　イチのかたな
—大臣　イチのダイジン
—上卿　イチのシヤウケイ
—上　イチのかみ
—寸　ちよつと
—寸法師　イツスンボシ
—才　イチのザイ
—子　ひとりご
—口　イチのくち
—口同音　イツクドウオン
—日　ついたち
—六　イチのロク
—五　イチのゴ、
—切　イツサイ
—手　イチのテ
—斤染　イツコンぞめ
—片貝　かたびらがひ
—伏三仰　つきよ
—后　イチのきさき
—向　ひたぶる
—年　ひとせ
—角魚　うにこうる
—周　むかはり
—杯　ひとはた
—物　イチモツ
—所　イチのところ
—法師　イチのホツシ　をとこひ
—昨日　をとつひ
—昨年　をとし
—昨昨年　さきをとし
—段　ひときり
—重　ひとへ
—者　イチのもの
—食　イチジキ
—品　イツポン
—宮　イチのみや
—夏　イチゲ
—狹間　イチのはざま
—御子　イチのみこ
—國　イチのくに
—途　イチヅ
—期　イチゴ
—揃　ピンぞろ
—越　イチコチ　イチコツ
—廉　ひとかど
—臺　イチのダイ
—種物　ひとくさもの　イツスもの
—節切　ひとよぎり
—應　ひとわたり
—獻　イツコン
—鯖　イチのびれ

乙　イツ　オツ　おとこ　きのと
—女　おとむすめ　をとめ
—鳥　つばくらめ

二畫

二　ジ　ニ　ふ　ふた　ふたつ
—人　ふたり　ニのひと
—十　はた　はたち
—十日　はつか
—十歲　はたとせ
—丸　ニのまる
—日　ふつか
—月　きさらぎ
—心候　ニかた
—矢　ニのや
—回　ふたより
—合半　こなから
—足　ニのあし
—形　ふたなり
—町　ニのまち
—重　ふたへ　ふたしへ
—品　ニホン
—食　ニジキ
—宮　ニのみや
—幅　ふたの
—腕　ニのうで
—進三進　ニツチもサツチも
—道　ふたつのみち
—舞　ニのまひ

丁　テイ　チヤウ　ダウ　よぼろ　ひのと
—日　チヤウのひ
—列綿油　テレメンテイナ
—香　ちやうじ
—翁　あけび
—幾　チンキ
—斑魚　みだか
—雜　デツチ
—髷　チヨンまげ

十　ジフ　と　とを　つつ　そ
—二月　しはす
—入　そしほ
—寸鏡　ますかがみ
—六夜　いざよひ
—六島海苔　うつぶるひのり
—日　とをか
—手　ジツて
—布　ジフ
—字街　よつつじ
—列馬　とをつらのうま
—回花　とかへりのはな
—戒　とをのいましめ
—樣草　がんらいこう
—編　とふ
—德　ジツトク

卜　ボク　うら　うらなひ
—活耳　しめちたけ
—食　うらはみ
—庭　きには

七　シチ　ヒ　かひ　さじ
—首　あひくち

七　シチ　なな　ななつ
—十　ななそ
—寸　みつき　みづつき
—夕　たなばた
—日　なぬか　なのか
—五三　しめ
—里香　ぢんちやうげ
—所借　ななとこがり
—重衣　ななへかるころも
—座神　ななますかみ
—翁　ななのおいらく
—葉樹　とち
—諄　シチくどい
—編　ななふ
—寶　シツパウ
—顚八起　ななころびやおき

九　キウ　ク　ここの　ここのつ
—十　ここのそぢ
—十九　つくも
—万足　かなやま
—日　ここぬか　ここのか
—世　ここのつのよ
—里香　もくせい
—折　つづらをり
—枝　ここのつのえだ
—品　クホン　クボン
—重　ここのへ

—霞 ここのつのかすみ
—獻 クコン

几 キ つくゑ おしまづき

八 ハチ ハツ やつ やつつ
—十 やそ やそぢ
—八 ハツパ
—入 やしほ
—千種 やちくさ
—尺 やさか
—手 ふて やつて
—分 ハツブン ハフ
—日 やうか やか
—百 やほ
—年子 やとせこ
—角楓 かうもりかへで
—重 やへ
—咫 やた
—面 やも
—洲 やしま
—座 やつら
—峰 やつを
—格戲 むさし
—絃琴 やつをのこと
—葉盤 やひらで
—道行成 さすがり やさすがり

—歌鳥 ははつてう
—幡 ばハン
—箭結 やふじまり
—講 ハカウ

入 ニフ ジユ いり いる
—人 いりうど
—子 いれこ
—内 ジユダイ
—方 いるさ
—狂歌 いりくりうた
—唐 ニツタウ
—浸 いりびたり
—魂 ジユツコン
—聲 ニツシヤウ

人 ジン ニン ひと
—日 ひとのひ
—勾引 ひとかどひ
—兄 ひとどのかみ
—見 ひとみえ ひとみせ
—別 ひとわき
—和 ひとにんげ
—參 ニンジン
—爾 ゑ
—種

父

又 イウ また
—名 またのな
—候 まだぞろ

刀 タウ かたな
—斗 テウト
—自 トジ
—背 みね むね
—繡 ト子

刁 テウ どら

力 リキ リヨク ちから つとむ
—無氣 ちからなげ
—達 ちからだて
—盡 ちからづく
—稻 ちからしね
—競 ちからくらべ

乃 ダイ ナイ なはち ナンヂ イマシ ソノ
—米 ノウマイ
—具 ノウグ

了 レウ をはる さとる ツヒニ カツテ
—得 さすが

三畫

三 サン み みつ
—一 サンピン
—十 みそ みそぢ
—十日 みそか みそモジ
—十一文字 あるひ さもじ
—千歲草 みちとせぐさ
—丸 サンのまる
—日 みか みつか
—友 みつのとも
—五月 もちづき
—光鳥 まめをはし
—白草 かたしろぐさ
—百 みつももち
—百草 はげせうぐさ
—車 みつのくるま
—位 サンミ
—角柏 みつのかしは
—枝 さきぐさ さいぐさ
—明 みつあしげしろ
—味線 サミセン シヤミセン
—狐神 サグジ
—始 みつのはじめ
—重 みへ
—郎 サブラウ サムラウ

—宮 サンのみや
—徑 みつのみち
—途 サンヅ サウヅ
—絃琴 みつのをのこと
—從兄弟 さたいとこ
—稜草 みくり
—酸葉 かたはみ
—鵬 みのわに
—鞭酒 ジヤンパン
—寶 みつのたから
—鐵輪 みつがなわ
—藐 サンミヤク
—禮 サンライ
—鑑 みつのかがみ

工 コウ グ たくみ
—夫 クフウ コウフ
—匠 たくみ

士 トド つちに
—公 つちぎみ
—代 ついしろ
—耳其 トルコ
—芋 ほど ほどいも
—牢 つちのひとや
—花 こけ
—宮 つちのみや

—狗蠅 けら
—荊芥 ありたさう
—師 はにし はし
—產 みやげ
—筆 つくし つくづくし
—當歸 うど
—塊 つちくれ
—蜂 ゆするはち
—搔鼠 マルモット
—塵 へびいちご
—器 かはらけ
—龍 むぐらもち うころもち
—蠱 つちはった
—蕖藤 ふうとうかづら
—蝸 なめくぢ
—鯖魚 ばはせ

士 シ さむらひ
—魚 しみ
—上 ジヤウ うへ かみ あぐ ゴヒ子がハグハゆる
—日 つかぶるひ
—手 かうで ジヤウズ
—方 うへつかた
—代 あがりたるよ あがりてのよ ジヤウグ
—求 ほつえ かみつえ
—枝 ほつえ かみつえ

—梁銘 むなふだ
—達部 かんだちめ かんだちべ
—棟 むねあげ
—衆 ジヤウズ
—領 うはえり
—嶺 かんのね
—纏 あげを
—聲 ジヤウシヤウ

下 カ シタ アゲ シモ モト お さる おろす さがる くだる くだす
—手 へた
—火 アコ
—司 ゲス
—平 カヒヤウ
—枝 おろしえ しづね
—括 ゲくくり
—風 あらし おろし
—炬 アコ
—垂 しだり
—棒 アボウ
—衆 ゲス
—鞍 しづくら
—聘 したかひ
—襲 したがさね

万 マン バン よろづ
—元帥法 ダイグエンのホフ
—口魚 たら
—女 ゑむすめ
—士 さすらを
—日本 おほやまと
—衣 はえ
—外記 おほいしるすつかさ ダイゲキ
—臣 おほまへつぎみ おほまうちきみ ダイゴク
—曲 ばらのふえ はらぶえ
—角豆 ささぎ ささげ
—和風草 かぜじりぐさ
—芥 たかな
—雨 ひため
—兜 ダイズ
—青 はどぐさ
—柚 じやがたらみかん
—胡蜂 くまばち
—前張 おほさいはり
—原女 おはらめ おほはらめ
—根 すずしろ
—晦日 おほみそか
—蛇 をろち
—連 おほむらじ
—率 おほむね
—御 おほみ おみ
—御生日 おほみあれび

个 箇、个に同じ カン 竹の枝

久 キウ グ ひさし
—米直 クメのあたへ
—我梨 コガなし
—贄 おほんべ
—贄 おほみあへ

—御言持司 おほみことも ちのつかさ
—殿 おとど
—殿祭 おほどのほがひ
—黃蜂 くまばち
—戟 はやひとぐさ
—葉藻 あまも
—禍時 おほまがとき
—舅 おぢ
—蒜 にんにく
—領 おほいみやつこ
—學察 ふむやのつかさ
—膳職 おほかしはでのつかさ
—較 おほむね
—辨 おほいおほとものひ
—皆 おほむね
—鋸 おほが おが
—凝菜 ところぶと ところてい
—頭菜 かぶら
—贄 おほんべ
—饗 おほみあへ

—童 めらは
—萎 ゑぐ
—菟 ひめしをん
—裙 ちやつぼ
—寫 うるさほし
—墻 ひめがき

口 コウ ク くち
—入 クニフ
—大魚 たら
—分田 クブンデン
—風琴 ハーモニカ
—食 くつはみ
—授 クジユ
—號 くちすさび くちずさみ
—業 クゴフ
—琴 ビヤボン くごき くどく
—訊 くちのこ くどもる くつこ
—籠

弓 キユ ゆみ ゆ
—丈 ゆだけ ゆんだけ
—手 ゆん ゆんで
—末 ゆぢ ゆみづる ゆづる
—弦 ゆみづる ゆづら
—結 ゆみのゲチ
—勢 ゆんぜイ

夕 セキ ゆふべ ゆよ
—至 ゆふさり ゆふされ
—飯 ゆふげ

勺 セキ シヤク

刃 ニン ジン は やいば

叉 サ また
—手 サで
—杖 わりばさみ
—倉 あぜくら

女 ヂヨ ニヨ め なみな なんな
—子 めのこ をなご
—夫 めうと
—王祿 ワウロク
—兒茶 たまむらさき
—青 かわねくさ くそかづら へくそかづら
—官 ニヨウクワン
—貞 たづのき てらつば きねぜみりちち
—郎花 なみなべし なみなめし
—衒 ゼゲン
—御 ニヨウゴ
—將 おかみ
—陰 くば ほと

尸 シ しかばね かばね
—者 キシャ ものまさ
—春 おらがはる

己 キコ おのれ つちのと おれ

巳 シ み

已 イ スデニ ハナハダ ノミ
—降 をちつかた

也 ヤ なり マタ

亡 バウ マウ ブ ほろぶ ほろぼす うしなふ ナシズ
—人 なきひと
—八 くつわ
—狀 ブジャウ

亾 亡の本字

兀 コツ
—子 コジ ゴツシ

乞 キツ コツ こふ あたふ
—巧奠 キカウデン
—食 コジキ かたね

丸 グワン なる たま まろし
—雪 あられ

凡 ボン ハン おほよそ すべて およそ
—子 おほなご
—僧 ホンソウ

弋 ヨク いぐるみ
—射 いぐる

寸 スン ソン き はかる
—大臣 スダイジン
—白 スパク スパコ
—莎 スサ ツダ

井 キヨウク こゐぬく

才 サイ ザエ リヅカ
—枉者 サイまくりもの
—彈 サイはじけ

子 ゲツ ひとりたつ
—子 ゆうふち ゆうふりむし

子 シ ス こ み ね
—夫 こづま
—良館 ラヲだち
—郎子 ロラこ
—規 ほとときす
—婚 こたはり
—養 こがひ

巾 キン はば ちきり
—子 コジ

小 セツ を さ こ ちひさし
—八楮魚 くちら
—父 をち
—水葱 こなぎ
—石 さざれ さざれいし
—石草 さざれぐさ
—石積 いそざんせう
—母 をは
—竹 ささ しの
—竹矯 ささはぎ
—安殿 こあどの
—百合 さゆり
—好男 ささらえをとこ
—舌 ひこ
—字 をさなな
—豆 あづき
—忌 をみ
—枝 さえだ こやで
—角 くだぶえ こガク
—角草 ささりぐさ
—歩馬 とさこま
—男鹿 さをしか
—言 ことと
—夜 さよ
—雨 さめ こさめ
—波 ささなみ ささらなみ
—佩 をひも
—門 をど
—岫 をぐき
—便筒 しとづつ
—剃刀 けたれ
—苗開 さびらき
—隼 さんま
—時 しはし
—射楯 さいだて
—連翹 おさきりさう
—荻 ささらをぎ さされをぎ
—尉 こじょう
—雀 こがら こがらめ
—筒 ささえ
—蛸魚 するめ
—絨 ねる
—路 とうぢ
—腸 ほそわた
—歷木 わかくねぎ しは
—舅 をぢ
—螺 しただみ
—齋 をみ
—凝菜 いぎす
—蟹 ささがに
—鯖 こはだ
—藥 めぎ
—贏子 しただみ

山 サン セン やま
—女 あけび やまめ
—毛欅 ぶな
—丹 ひめゆり
—羊 やぎ
—谷船 サンヤぶね
—芋酒 いもざけ
—車 だし
—芥菜 はたいこん いねらし
—胡桃 おにぐるみ
—茶 つばき
—茶花 サザンクワ
—馬蝗 うじぐさ
—茨菰 ほぜづき
—連 やまがら
—陵鳥 やまがら
—雀 やまがらめ
—蛤 やがへる
—梁 きじ
—梔 くちなし
—葵 わさび
—蕨 わらび
—慈姑 おもな すみら かたくり
—鉾 だし
—賤 やがつ
—豬 ゐのしし
—鐇 やまたづ
—蘭 やまあらぎ ひよどりばな
—髯 やまかづら
—靈 やまのつかさ

川 セン かは
—骨 かうほね
—探 かはせぜり
—遠 かはをち

彳 テキ たたやむ

幺 エウ ちひさし

四畫

之 シ ゆく コレ
—遶 シンニウ シンチウ

不 フ ブ むし
—仁身 フジみ
—生兒 なさぬこ
—犯 フボン

—如歸 ほさぎす
—行馬 いかどうま
—知 いさ
—知火 しりぬひ
—取敢 とりあへず
—東者 フツつかもの
—具 かたは
—味 なづし
—性無性 フシャウブシャウ
—食嫌 くはずぎらひ
—便 フビン
—貞腐 フてくされ
—負魂 なけじだましひ
—通棒 とほせんボウ
—倒翁 おきあがりこぼし
—產女 うまずめ
—問語 とはずがたり
—躾 ぶしつけ
—謙口 へらずぐち
—覺 すずろ

云 ウン いふ コゴニ しか
—云 しかじか
—爾 しかいふ

互 ゴ かたみ たがひ
—替 かたみがはり

丐 カツ カイ こふ
—夫 てこじき

五 ゴ い いつ いつつ
—十 いそ
—十日 いか
—十戶長 さとをさ いへをさ
—十集 いさは
—十雀 ゴジフから
—十路 いそぢ
—十瀨 いせ
—二 グニ
—寸切 たんきり
—月 さつき
—月豆 そらまめ つゆ
—月雨 さつきあめ
—月蠅 さばへ
—加木 うこぎ むこぎ
—百 いほ
—百箇 いほち いほつ
—百藻 いつも
—包鰒 くるまえび
—形 けらはな さなかづら さねかづら ところかづら
—味子 ほのかほめく
—明 ひたひつじろうま
—倍子 ふし
—絲緞 ぬりよう

井 セイ ゐるさ
—備子 ねらて
—筋魚 いかなご

仕 ジフ 常につかふ
—歷生 ソモサン

仁 ジン ニン いつくしみ いはれみ
—王 ニワウ

仏 ブツ 佛の古文字

化 クワ ケ ばけ ばく
—人 ケニン

仇 キウ あた あだ
—忌 あだゆまひ

仂 リヨク つとむ あまり

仆 フ ボク たふる たふす

仄 ソク ほの ほのか ほめく

双 サウ 雙の俗字

及 キフ ゲフ ゲフ およぶ しく ゲフ ゲフ ゲフ
—已 つきねぐさ
—接 よびつぎ

友 イウ とも

反 ハン ヘン タン かへる かへす かへし そり そる そらす カヘツテ
—身 そりみ
—故 ホグ ホウグ ホンゴ ホゴ
—吐 へど
—閉 ハンメイ
—舘 にげ
—樣 かへさま
—跳 はずみ はずむ
—鼻 ヘンビ
—箇 そつぼ

分 フン ブン ブ わかち わかつ わかる わけ
—野 ありさま
—目 わけめ わかれめ
—別 わいだめ
—明 フンミヤウ
—葱 わけぎ

今 コン キン いま いんま ま も
—一 まひとつ
—上 いまのうへ いますべらき
—日 けふ
—年 ことし
—春流 ンコばるリウ

宵 ショウ よひ

朝 チウ カイ けさ はさむ はさまる

介 カイ カイジヤウ
—性

亢 カウ あがる つよし

元 ゲン グワン もと
—和通寶 ゲンナツワハウ
—直 もとね

无 ム なし

尤 イウ もつとも とがめ

左 サ ひだり

冗 ジヨウ むだ

允 イン ゆるす マコトニ

公 コウ ク おほやけ きみ
—文 クモン
—方 おほやけがた グバウ
—事 おほやけごと グジ
—孫樹 いてふ
—家 ケ たへつぎみ クギヤウ
—卿 まうちぎみ
—逢 なちぎみ きんだち
—廨 ケ ケ

六 ロク リク むつ
—十 むそ むそぢ
—方 ロツパウ
—月 みなつき
—月柿 たうぢさ
—日 むか むいか むゆか
—角志 かなかしら
—箇數 むつかし
—實汁 むジツじる

凶 キヨウ ク
—棄物 あしきらひもの

内 ナイ ダイ うち うつ
—匠寮 たくみづかさ うちのたくみの つかさ
—匠頭 たくみレウ だくみのかみ
—舍人 うどねり うちのみやけ
—官家 うちのみやけ ひめちぎみ
—命婦 うへのミヤウブ ナイミヤウブ
—供 ナイグ

—府 ダイフ ナイフ
—豎 ちちわらは
—藏察 くらレウ
—藏頭 くらのかみ うちのくらのかみ

丹 タン に
—生 にぶ
—沙草 かつぺらサウ
—毒 はやぐさ
—草 かつぺらサウ
—若 さくろ
—逢瘡 はしりぐさ
—參 にこたぐさ

予 ヨ われ
弔 テウ とむらふ とぶらふ
与 ヨ あたよ
中 チユウ なか うち
—臣 なかごみ
—間女 はしため
—暑 シヨあたり

刈 カイ かり かる
—時 かりしほ かりどき
—慈 かりき かれき

收 シウ かさね をさまる
切 セツ セチ きり きる きれ ジキリニ モロモロ
—双 きつぱ
—支丹 キリシタン
—羽詰 セツぱつまる
—禿子 きりかむろ
—味 きれあぢ
—虎落 きりもがり
—匙 モツかひ
—籠 きりこ

匹 ヒキ ヒツ むら タトヒ タトヘバ
—如身 するすみ

勾 コウ 句に同じ
—引 かどはかし かどはず
—玉 まがたま

匂 イン にはひ にほよ

勿 コツ ブツ モツ モチ ナカレ ナシ
—果 モツケ
—怪 モツケ

升 ショウ ます

—廊 とりあし とりのあし

午 ゴ うま
下 ヘン ペン さわがし
厄 ヤク あやうし
壬 ジン みづのえ
—生 みぶ

丑 チウ うし

天 テン あめ あま
—一神 なかがみ
—仙果 いぬびは いちじゆく
—仙草 たばこ
—平 テンピン
—名精 はいぐさ
—目松 きれまつ
—糸瓜 へちま はまたかな ゐのしりぐさ
—足 あまたらす
—邪鬼 あまのさこ
—竺桂 とがのき ほ けたらし
—竺桂蠟 こがラフ
—兒 あまがつ
—門冬 すまろぐさ
—花菜 すぎな

—香 はかたゆり
—香百合 ためどもゆり
—秤 テンピン
—降 あもる あまくだる
—皇 みかど すめらぎ すめろぎ すめらみこと みすめらみこと
—氣 ねぢびとのあし テイケ チケ
—廊 のつち
—神 なかがみ
—閉 テンとぢ
—採女 あまさくめ
—晴 あつばれ
—菊 なでしこ
—朝 あめのみかど あぢつみかど
—領巾 あさひれ
—蓼 ふたたび
—鼠 かうもり
—窟 つぶり テンまど
—爾乎波 あたなのハチ テニヲハ
—窓鉢 いらむし
—漿子 ひるがほ
—飯草 あなのがは あまそぎ あまそそる
—渠 くこ
—綿
—驚鳧 ピロード
—邊 テツペン

—羅 へちま
—齊 しほで
—離 あまさかる
—鷦 ひはり
—靈絲 てぐす

无 ブム なし
太 タイ ダイ ふとし ふとる ハナハダ
—刀 たち
—平簫 ちやるめら
—占 ふとまに
—白星 よいのみやうじ やうゆふつづ
—白神 ひとひめぐり
—秦寺 うづまさでら
—息 といき
—馬 ふつま
—祝詞 ふさのりとごと
—諄辭 ふさのりと
—夫 つま をうと をのこ ソレカレ カノ カナ
—兄 こじうと せなせ をひとめ めうと
—婿 めをと をつよめ
—鱣 はえ

夭 エウ わかじに うつくし

分 ケイ ガイ
孔 クコウ あな ハナハダ オホイニ
—子仆 クジヤク クジだぶれ
—雀 クジヤク

少 セウ わかし すこし スクなし スコシグ ナシ シメラグ
—女 をとめ
—頃 しばらく
—納言 すないものまうし
—時 しばし
—輔 セフ
—辨 すないおほきもひ

尹 イン つかさ まこと ただす
尺 セキ シヤク チー さか
—鰻 をきむし シヤグとりむし

夬 ケツ クワイ わかつ きだむ
屯 トン もち たむろ たむら
—食 つみいひ トジキ
—倉 みやけ
—家 みやけ

—利 パツブ バーリ
—戟天 ひひらぎ
—椒 あさくらさんせう

幻 ゲン まぼろし

廿 ジフ ニフ ニジフ はたち
—日 はつか
—日早 はつかぐさ

卅 サブ みそ みそぢ サンジフ

卩 テ
—爾乎波 テニヲハ

引 イン ひき ひけ ひく
—火奴 ほくち
—折 ひをり
—板 ひた
—屈 ひがみ ひがみ
—倍木 ひきへぎ ひへぎ
—裂 ひさく
—鳥 ひけどり

心 シン うら こころ
—太 ところてん
—地 ここち

—宿 なかごほし
—寓 みづぢち

卯 クワン あげまき

卬 カウ ギヤウ たかし あふぐ

弍 イチ 一の古字

戈 クワ ほこ

气 キ あたよ 氣に同じ

戸 コ と へ
—人 へびと
—主 へぬし
—札 へふだ へふみだ
—籍 へふみだ へふおだ

扎 サツ ねぐ

手 シユ て た
—力 たぢから
—之甲 たなうち
—巾 ハンケチ
—水 てうづ
—甲 てつカフ

—手甲 てぜがカフ
—中 たちうち
—布 たに ハンカチーフ
—打手打 ちよちちよち
—末調 たなすゑのみつぎ
—向 たむけ
—利 てきき
—斧 てうな
—兒奈 てこな
—拭 たなごひ たんでん たのごひ
—酷 てひどし
—弼女 たわやめ たをやめ
—番 てつかひ
—節 たぶし
—腓 たこむら
—糠 たずき
—纏 たまき

支 シ ささへ ささよ つかへ
—子 くちなし
—流 えだながれ
—度 シたく
—路 よこみち

欠 ホク ハク うつ
文 ブン モン あや ふみ

—月 ふづき
—机 ふづくゑ
—字 モジ
—車 ふぐるま
—色 あいろ
—理 あやめ
—屋 ふや
—部 ふびとべ
—棚 ふだな
—蛤 いたやがひ
—箱 ふはこ
—鰯魚 とびうを あと

丰 ボウ うつくし

斗 トウ はかり
—概 トかき

王 ワウ きみ
—大夫 おほきみ
—仁 ワニ
—不留行 ワウフルギヤウ かさぐさ
—瓜 からすうり
—母埜 ほうつき
—家統 ワカンどほり
—莽時 をみなどき
—耳曼 ゼルマン
—孫 つちはり つくばね ねばりぐさ

—餘魚 からえひ
—統 ワカンどほり
—蒭 かりやす
—臘 ふか

夕 ゆんめ

斤 キン はかり あきらか

弓 オンス

方 ハウ かた マサニ へ ミサカリニ
—便 たづき たつか
—眼格子 よつめがウシ
—頭魚 あなだひ

日 ニチ ジツ ひ か
—及 ひぐげ
—月紅 びじんサウ
—月桃 げんぺいトウ
—本魂 やまだましひ ニツポンだましひ
—外 いつぞや
—向 ひなた
—向葵 ひまはり ひうがあふひ
—次 ひつぎ ひなみ
—莽時 をみなどき
—耳曼 ゼルマン
—來 ひごろ

—並 ぜんなら
—和 ひより
—季花 うしざきはら
—計 ひはり
—記 ニキ
—雀 ひがら ひからめ
—置流 へ宮りウ
—給簡 ひだまひのふだ
—濟金 ひなしがね

曰 エツ いふ いはく のたまふ ココニ
月 ゲツ グワツ つき
—代 さかやき つきしろ さかいき
—次 つきなみ
—谷 わちがひ
—夜 つくよ
—經 つきのもの つきのめぐり つきへく
—隱 つきもり

木 ボク モク こりき
—乃伊 ニイラ ミイラ
—工 こだくみ
—工頭 ムクのかみ
—片 こつぱ
—天蓼 またたび わたかたび

—末 とぬれ
—牛夏 なつぐみ
—瓜 ボケ モケ ぐわう しどめ
—匡 わく
—角豆 きささぎ
—防巳 つづらかづら つづらふぢ
—毫加子 きみしりなす
—杷 こびざらひ
—性 きだち
—居 こゐ
—枯 こがらし
—偶 でく でくのぼう
—偶芝居 おでぐし しばゐ
—魚 かつをぶし づくつく みみづくく
—莵 みみづく
—通 あけび
—患子 モクゲンジ
—犀 モクセイ
—雲 もづく
—葉 このは
—筆 こぶし
—賊 とくさ
—蜂 みかはち
—綿 モメン ゆふ きまた
—綿襁 ゆかだすき
—棲樹 むくろじ
—舞 こまひ

—精 こだま
—端 こは こつば
—蓮子 いたびす いねすび
—憧 ムクゲ はちすぐ ムクゲ きはちず
—酥 きさはし
—練柿 こねりがき
—螺 みのむし
—棗蘆 はつゆふ うじぐさ
—蠶 きくひむし
—繊子 ムクレニシ

欠 ケン カン かけ あくび
止 シ とめ とむ やめ やむ とどまり とどまる とどめる とどむ よす とどまる
毋 ブム ナカレ ナシ
比 ヒ くらぶ たぐふ たぐひ コノゴロ コロホヒ オヨブ シキリニ
—丘尼 ビクニ
—目魚 ひらめ かれひ
—金稗 ヒゴンあを
毛 マウ ケ モウ
—布 ケット ブランケット
—末 けうら

—蔓 きんぼうげ
—毬 いが
—織 モール
氏 シ うぢ
水 スイ みづ もひ
—仕女 みづしめ
—田 こなた
—母 くらげ
—主 かこ
—曲 みわだ
—竹葉 いぼぐさ
—注子 みづさし
—門 みと
—泡 みなわ みつぼ
—面 みのも もつく
—取 もんどり
—咽衝石 みをつくし
—虎 かつば
—索 おきなは
—苔 かはな
—松 みる
—松樹 いちゐ
—爬忠 かうやひじり
—底 みなそこ
—針魚 さより

—派 みなまた
—馬 つなむし
—豹 あさらし
—蛭 ひる
—雲 もづく
—無月 みなづき
—落 みぞおち
—慈孤 おもだか
—櫟 ひき
—塘 みつせき
—黽 みづすまし しほたき
—團 スヰトン
—葱 なぎ
—蟲 とびむし
—銀紛 はやち
—轄 みくさみ
—綿 あをみどり
—亂 みづこぼし
—潦 にはたづみ
—蟻 ぬかえび
—鮭 あめ
—蔓草 ひゆとらのを
—龍骨 あなねかごら
—鴛刈 みすずかる
—臘樹 いぼたのき いぼたのき
—鷄 くひな
—蠆 やまめ

—鼈 とちかがみ
火 クワ ヨ ほひ
—口 ほくち
—鈸 ほべ
—保 ひもち
—屋 ほや
—氣 ほか
—酒 アルコール
—除 ひよけ
—退 ほそり
—魚 かながしら
—傷 やけど
—頭 がんくび
—鈴 コリン
—照 ほてり
—筒嘴 やがら
—腿 はむ
—腿卵 はむえきす はむえつぐ
—蕉 そてつ
—熨斗 ひのし
—燒 ほやけ
—燒鯔 きこりいを
—熾 ひおこし
—燵 コタツ
—鍼 やきはり うちがね
—鷄 ひくひさり

—蠆 やまめ
—鑽臼 ひきりうす
爪 サウ つめ つま
—遣 つまやる
父 フ ちち とと てて
片 ヘン かた ペンス ひら びら
—目生姜 めつかち セウガ
—生 かたなり
—嵎 かたそ かたそば
—幸 かたちはひ
—食 かたげ かたぎ
—畚 かたもつこ
—術 かたゆき
—椀 かたもひ
—端人 かたはも かたはうど
—絹 かたわな
—環狀 かたわなり
殳 ルマタ
牙 ゲ きば
—僧 すあひ
—藏 こばせ
牛 ギウ ご うし

—王 ゴワウ
—皮消 いけま
—皮棟 へくそかづら
—角 ゴカク
—角鰓 うしのこづの
—車 ボッシヤ
—扁 たちまちぐさ
—尾草 しほで
—尾魚 こち
—乳 ミルク
—酪 バタ
—莊 ニユウチヤン
—歷 はなづら
—董 ニウトン
—蒡 ゴボウ
—蟲 たに だに
—健丁 うしこでい
—頭 ゴウ
—頭馬頭 ゴツメウ
—膝 ゐのこづち
犬 ケン いぬ え
—毛欅 いぬぶな
—木賊 いぬぞくる
—反土草 いぬのへそくさ
—羊齒 いぬしだ

—虎 いぬいたどり
—鼎 いぬけり
—厚朴 いぬほほ
—拘杞 いぬぐこ
—崔 いぬえ
—唐柿 いぬだりがき
—射小手 いぬいごて
—莧 いぬびよう
—婚 いぬたにけ
—黃楊 いぬつげ
—黃米 いぬきび
—擧丸 いぬのふくり
—齒 いぬきりは
—榧 いぬがや
—酸漿 いぬほづき
—獨活 いぬうど
—蘇鐵 いぬがんぞく
—蕨 いぬえび

五畫

且 ショ ソ かつ マサニ シメラク マタ ゴレ
世 セ セイ
—岐乎 セキチ
—附 よつかはし
—間 セケン

—譚 よがたり
丘 キウ おか つかさ
乍 サ ザ サナがら シバラク タチマチ
—例 いつもながら
丙 ヘイ ひのえ
主 シュ ぬし シュウ おもつかさどる
—人 あるじ
—水 もんどり もんど
—司殿 とのもづかさ
—典 さくわん
—紀 スキ
—計頭 かずへのかみ
—基 スキ
—稅寮 ちからのつかさ
—殿 とのもり
井 タントン どんぶり
乎 コウ カニヤ
—古止點 チコトテン
仔 シ こ たこ かつ
仍 ジョウ ニヨウ シキリニ ナホ マダ

仙 セン やまびと
—人 やまびと
—掌 サボテン
—翁花 センチウゲ
—動木 なぎ
—虛 うむきな
仟 セン なさ
付 フ つく つき
仕 シ じ つかへ つかふ つかへまつる つかうまつる
任 ダ ダク さくなし むすめ
他 タ ほか あだし よそ
—見 あからめ
代 ダイ タイ よ かふ しろ かはり かへ かはる
—指 つまはらめ
—赭 あかつち
仇 ハン かたき
仞 ジン みつる ふかし しるす
仗 ジヤウ チヤウ つゑ つはもの

—儀 ギヂヤウ
仝 おなじ 同の俗字
尒 ジニ なんぢ
尒 前に同じ
令 レイ リヤウ のりと シム
—法 はたつもり
以 イ もて もつて オモンミルニ
—爲 おもへらく
乏 ボウ とぼし ともし
号 ゴウ 號に同じ
兄 ケイ せな せ せうと え に このかみ
—人 あにぢや ひと せうと
—子 せこ えこ
—部 このかうべ
—猾 えうけし
—鶴 このり
—鷹 せう
冊 サツ ふみ かきつけ
処 ショ 處に同じ

冬 トウ ふゆ
—瓜 かもうり トウがん
—青 くろま
—葱 わけぎ
凸 トツ でかだか
凹 アウ へこむ
出 シュツ ス井 いだす だす いづ で
—火 みつながれ
—石 いづし
—衣 だしぎぬ
—來榮 できはえ
—家 スケ
—拔 だしぬけ
—納 スナフ ス井ダフ
—稚 いだしうちき
—張 でつぱる
—端 では でばな
刋 セン きる
刊 カン カンず
刋 スン きる たつ
功 クウ いさを いさをし

—付 クワヅク
—袋 クドク

加 カ くはへ くはよ マスマス マタ
—加阿 カカオ
—比丹 カビタン
—侖 ガルロン
—特力 カトリツク
—留母 カリウム
—留叟母 カルシウム
—答兒 カタル
—密列 カミツレ
—農砲 カノンハウ
—嘎茶 カルダ

包 ハウ つつみ ぐるみ つつむ ぐるみ
—裹 つつみ

北 ホク きた
—東風 きたごち きたのまんどころ
—政所
—叟笑 ホクソ ゑむ
—叟頭巾 ホクソヅキン

半 ハン なかば なから はした
—女 はしため
—生 なまいき
—平 ハンペン

—物 はしたもの
—風子 しらみ
—者 はしたもの
—被 ハツヒ
—武者 ハムシヤ
—夏生 ハンゲシヤウ
—首 はつぷり
—息子 なからむすこ
—乾 ししび ハンがわき
—桶 ハンまり
—挿 ハザフ ハニザフ
—童 はしたわらは
—間 ハンま
—端 ハンば
—割 はにわり
—蔀 ハじとみ
—頭 はつぷり
—靴 ハウクワ
—蹄芝 しふぐさ
—臂 はつぷ

占 セン うらなひ うらなふ むう
—正 うらまき
—兆 うらはひ
—形 うらかた
—野 しめの

卯 バウ
—木 うつぎ
—杖祝 うづゑほがひ

危 シキ さかづき

去 キヨ さる いぬ
—文 さげぶみ さりぶみ
—年 こぞ
—來 いざ

召 セウ めし めす
—次舎人 めしつぎどねり

台 タイ われ イ

只 シ ただ
—管 ひたすら

叮 テイ ねんごろ

叶 ケフ かなふ グフ

叩 コウ たたき たたく
—頭蟲 ねかづきむし てめつきむし

叱 シツ アツ

叱 シツ シチ しかり いさふ しかる

叨 タウ むさぼる

叺 ハツ ハチ かます
—子 かますご

句 ク きり ふし

句 カイ もさむ あたふ
—讀 クトウ

古 コ ふる むかし ふるし いにしへ
—今雛 コキンびな
—加乙涅 コカイン
—妻 ふるめ
—受領 ふるゼラウ
—鳥蘇 ゴとソ
—御達 ふるゴダチ
—渡 ゴわたり

右 イウ ウ みぎ みぎり
—近 ウコン
—馬 ウマ
—端 ウびた
—衛士府 ウエジフ

司 シ つかさ つかさどる

可 カ よし べし べカリ
—惜 あたら あたらし
—漆 べくうるし

丞 ヒ おほいなり ガホイニ

圦 いり

央 アウ エイ なかば ひろし

史 シ ふびと
—生 ジヤウ ジシヤウ

回 クワイ 回の本字

囚 シウ さらはれ
—人 めしうど
—獄 ひとや

匝 イ はんまふ

巨 カタシ ツヒニ

四 シ よつ
—十 よそ
—十雀 シジフから
—十路 よそぢ

—三 シサウ
—方山 よもやま
—方山人 よものやまんど
—方手 シほて
—手 よつて シて
—手木 シでのき
—向 よも
—別鳥 よつにわかるごり
—阿 あづまや
—這 よつはひ
—幅布團 よのブトン
—鳥別 シテウのわかれ
—照花 いつき
—葉栄 かつみ
—衛 シエ

外 ゲワイ ゲウ井 とば はづる そと ほか
—山 とやま
—文 ゲブン
—方 とがた とざま
—床 とつどこ
—命婦 ゲミヤウブ
—重 とのへ
—架 とばこ
—郎 ウ井ラウ
—記 ゲキ しるすつかさ
—宮 ゲグウ とのみや とつみや

—借腹 ダシヤクはら
—國 とつくに
—寄 よよせ
—重 とのへ
—規 ゲキ
—障服 うはひ
—樣 ど、ま

失 シツ うす うしなひ うしなふ
—聲 ひこゑ

灯 テイ かほよし

奴 ド ヌ やつこ
—角 さいのはなづの
—袴 ヌはかま

孕 ヨウ はらむ みごもる
—女 こるめ はらめ

尼 ヂニ あま
—前 あまぜ
—結兒 ニツケル

尻 カウ コウ ゑしき
—小端 しりこぶた

—切 しきり しきれ
—居 しすゑ
—尾 しつぽ

巨 キヨ ゴ おほいなり おほし アニ
—蛇 をろち

左 サ ひだり
—右 サウ とかう とかく
—利 ひだりきき
—官 シヤクワン

巧 カウ くくみ ヨク
—嬉鳥 みそさざい

布 フ ホ ぬの にぬ しく
—子 ねのこ
—哇 ハワイ
—袋 ホテイ
—袴 ホツコ
—雲 にぬぐも
—穀鳥 ふよどり

市 シ いち
—女笠 いちめがさ
—正 いちのかみ

庁 テイ たひらか

庇 ヒ そなふ おほふ

凧 たこ いかの ぢり

平 ヘイ ヒヤウ ひら ひらぶ たひら たひらぐ むく むけ たひらす ことむく
—仄 ヒヤウツク
—地木 カラたちばな
—江帶 ヒゼタイ
—烏帽子 ひれゑぼし
—瓮 ひらか
—器 ひらキ
—題箭 いたつき

幼 エウ なさなし あどなし いとけなし
—女 なさめ
—氣 いとけ

弘 コウ ひろむ グ ひろがる
—鳥 フツ たがふ あらず ダラ ドル ドルラル

弗 ペン かんむり

弁 タウ トウ いたむ
—瓶 はめる しこる

忉 チヤウ うつ ぶつ ダース

扨 ダ うち

打

—衣 うちぎぬ
—附 ぶつかる
—附心 うちつけごころ
—擲 チヤウチヤク

扑 ボク うつ

汁 シフ ジフ しる

汀 テイ なぎさ みぎは

氾 ハン ひろがる ただよふ

犯 ハン ボン おかす
—人 ボンニン

必 ヒツ かならず

戉 エツ まさかり

戊 ボウ モ つちのえ

斥 セキ シヤク しりぞく うかがふ
—候 ものみ

式 シ 貳の古文字

旦 ダン タン あした

—面 まとも
—親 おほきみ
—親正 おほきみのかみ
—刀自 ははトジ
—子 はうこ
—衣 ほろ
—屋 おもや もや

母 ボ はは おも めおや

民 ミン たみ

氏 テイ いたる いやし

氷 ヒヨウ こほり ひ つらら
—木 ひぎ
—目矢 ひめや
—面鏡 ひもかがみ
—魚 ひを
—柱 つらら
—頭 ひヅ

永 エイ ながし
—貝部鰻 エラブうなぎ

玄 ゲン くろし
—鳥 つばくらめ

—圃梨 ゲンポなし
玉 ギヨク ゴク たま
—女婁 あまどころ
—山果 かや
—目 たなモグ
—竹 あまどころ
—珧 たひらぎ
—珧柱 ぢんせん
—莖 はせ
—章 たまづさ
—筋魚 いかなご
—釧 たなぐしろ
—蜀黍 たうもろこし
—堅磐 たまがしは
—置流 たまきりウ
—器 たまもひ
—蜻 かげろふ
瓜 クワ うり
瓦 グワ カハラ グラム
—衣 カハラぶけ
—斯 ガス
甘 カン うまし あまし
—子 あめご

—汞 かるめる
—松 はるかみなべし
—物 ためつものの
—蒸 うさに
—野老 あまどころ
—逡 にひそ にはそ
—苗蘚 あまどころ
—蔓 あまづら
—蕉 バナナ
—藍 キヤベージ キヤベツ
—藷 さつまいも
—露子 シヤウ セイ ろうろうぎ
生 いき うまれ なま はゆ あふ おふず はやす いく まる なる
—刀 なましがたな
—口 なりくち
—下 おひさがり
—干 ななび
—女房 きニヨウボウ
—方 なまかた
—日 いくひ
—爪 なまつめ
—太刀 いくたち
—半 なまなか
—立 おほしたづ
—生 なまなま いきいき

—末 おひすゑ
—松 いきのまつ
—拔 はたぬき きごこね
—所寢 たどころね
—受領 なまズリヤウ
—面 いけづら いきづら
—海藻 ななめ
—姜 シヤウガ
—計 みすぎ
—强 なまじひ
—臭坊主 なまぐさボウズ
—業 すぎはひ なりはひ
—粹 きつス井
—腹 なしはら
—憎 あやにく あいにく
—絹 すずし
—薑 はじかみ シヤウガ
用 ヨウ もちゐる モツテ
—足 ヨウたし
田 デン た
—中蟒 たつひ
—平子 たびらこ
—舍 ゐなか
—雲雀 たひばり いなび

—鼠 むぐらもち
—螺 たにし
—鵑 ほととぎす
—龜 かうやひじり
—鶴 かづ
—廬 たぶせ
—鷄 はなすどり
甲 カフ カン きのえ から よろひ かぶと
—乙 めかり
—石 よろひいし
—矢 はや
—走 カンばしる へふこり
—香 カヒリウ あきのふた
—必丹 カピタン
—板 カンバン
—斐 カヒ
—蘿 どめ
—聲 カンをぬ
—甑 かせ
由 ユ イウ よし よる
—緒 ユ井ショ
申 シン うる のぶ ふうず まをす
疋 ショ ヒツ むら ヒキ

白 ハク ビヤク しろ しら むく まをす
—子乾 しらスぼし
—木 をけら
—木瓜 しろボシ
—木賊 しらた
—水郎 あま
—日紅 さるすべり
—及 しらん かがみくさ
—地 あからさま
—辛樹 あさがら
—芋 はきいも
—芷 よろひくさ
—花米 はぜ
—花香 をとこへし
—風 あきかぜ すずめのをとげ
—前 のかさみ ゆふだち むらさめ
—雨
—者 しれもの
—氣 きり
—兎霍 いけま
—凰棄 くさのわう
—和幣 しらにぎて
—金 プラチナ つぐみのいね
—英 ほろし はふに
—粉 おしろい はふに
—粉婆 しろこばば

—馬 しらあしげ
—馬陣 あをうまのヂン あをうまのセ チエ
—馬術會
—桑 まぐは
—參 しやじん
—痢 なめ ビヤクリ
—湯 さゆ
—葉鐵 ブリキ
—眼 さめ
—帶魚 たちを
—魚 みごひ しみ
—齒者 あをはもの
—膠木 ぬで ぬるで
—頭公 をさなくさ たかくさ
—頭鳥 ひよどり
—頭髮 むくどり
—薇 くろくさ ふなばら
—熊 みなしごぐさ はぐま
—膽木 はぜうるし
—駱 しらかはらげ
—蟻 はあり
—羅布 うねおり
—露蟲 かげろふ
—鷺鷥 ペルツケイ
—髮 しらが
—歎 やまかがみ

—驛 しなあかげ
—鐵 しろめ
—鰱 しろだいら
—鹽 あわしほ
皮 ヒ かは
—籠河豚 かはごよぐ
皿 ベイ ベウ さら
—骨 チコツ
—鉢 さハチ
目 モク まな めま
—子 めのこ
—子算 めのこザン
—切 めつきり
—文字 めモジ
—打錐 もうちぎり
—皮 まびき
—目雜魚 めめザコ
—交 まながひ まくはひ
—合 まくなぎ まくはひ
—伸 まのし まのず
—庇 まびさし
—取夾纈 めとりぐくり
—枝 めぬき
—氣 まけ

—前 まさか まのあたり
—貫 めぬき
—尻 なしり まなじり
—途 めド
—欲 めほし
—映 えはゆし
—處 めど
—眩 めんくらふ
—無籠 まなしかたま
—論 もくろむ
—塞笠 めせきがさ
—紫 まぶし
—翳 ひ
—陸 まかげ
—聰 めざとし
—張 めつば
—離蛙 めかるかはづ
—覺種 めさましぐさ
矛 ボウ ほこ む
矢 シ や
—人 やシ
—集 シブめ
—塲 やには
—幹 やがら
—獨密 シドミ
—獨鈷 やドコ

—籠 シこ
石 コク セキ ジヤク いし いは
—上 いそのかみ
—木 いはき
—帆 うみまつ
—瓜 もつこく
—竹 なでしこ
—形代 いしのかたしろ
—投 いしなご
—花 かき
—花貝 せかひ
—花栄 ところてんぐさ
—決明 あはび
—炎蝶 ままわ
—柏 うみまつ
—長生 はこねぐさ
—南 かつぺ サウ シヤクナゲ
—首魚 くち いしもち
—垂水 いはつらら
—斑魚 いぐひ うぐひ
—莖 こも サクナン シヤクナゲ
—楠 きワウ
—黃 せしめうるし
—漆 うみまつ
—梅
—蝴 ほや

—腦 パラフイン
—絨 いしわた
—莘 ふとつは くみのかしは
—蚴 かめのて
—榴 ザクロ ジヤクロ
—蒜 かはかんじ はねげぐさ
—椰 いしき
—蓯 こも
—蓯蓉 いそまつ
—蓉 つはぶき
—髮 あをのり
—繅 いしぐさり
—鮫魚 むつ
—蟹 やまがに
—龍 とかけ
—龍茜 たがらし よかつみ
—龍銘 うしのひたひ
—擲 いしなど
—擲子 いしなとり
—鷄 かじか
—鷄冠 いしとさか
—蠶 いさごむし いねちろぎ
—樣 いちひ
—鹼 サボン シヤボン

示 シ しめし しめす

禾 クワ ワ いね
—偏 のぎへん
它 タ へび ほか 他に同し
穴 ケツ むだ あな
穴 ケツ あな
立 リツ リフ たち たつ たて たて タチドコロニ
宄 キ かしまし よこしま
—合 たたあはせ
—坊 たちん ボウ
—砂 たてすな
—前 たちまへ
—派 リツパ
—薦 たつども
辶 すべる

第八畫

丞 ジヨウ ジヨウ そへ たすけ
—人 シジ
—集 シブめ
—塲 やには
—幹 やがら
—獨密 シドミ
—獨鈷 やドコ

亟 クワン セン しきり
亙 コウ わたる ひろさ
交 カウ ケウ まじり まじる まじ ふまず かはす かよ コモゴモ
—名 ケウミヤウ

—剪 しみ
—趾 カウチ
—樣 かひざま
亥 ガイ ね
亦 エキ ヤク また も もまた
夸 コクワ ほこる
企 キ くはだて くはだつ
仿 ハウ さまよふ
仰 ギヤウ ガウ おほせ おほす あふぐ あをのけ あをのく
仲 チウ なか つぎ
—人 なかうど
件 ケン くだり くだん
任 ニン まけ まかす たゆ まま タトヒ
—俠 をことだて
—例 あとのまま
—請 さうしのまま
伉 カウ あひて たぐひ
伊 イ これ カノ ゴノ イヅレノ
—丹酒 イタミさけ
—吹木 いぶき
—勢御 イセのゴ

—賀專女 イガたうめ
—逢 ずて
伍 ゴ くみ なかま いつつ
价 カイ おほいなり よし
伎 キ ギ わざ わざをぎ
伏 フク ふす
—金 ふせがね
—翼 かうもり
伐 バツ きる ほしる
休 キウ やすみ やすむ やすらふ
—字 やすめジ
—否 よしあし
—辭 やすめことば
兇 キヨウ わるもの
充 ジウ ジウ みつ ふさぐ
—行 あてがふ
—行扶持 あてがひブチ
—蔚 やくもサウ めはじき
兆 テウ きざし しるし
先 セン まづ さき
—繰 センどり

光 クワウ ひかり ひかる
—澤 つや
—絹 ねめ
—螺 すべた
兇 キヨウ あし うつ
全 ゼン ぜつたし
—手 まて
—生絹 なるすずし
—帶 まるおび
共 キヨウ とも むた
再 サイ ふたたび
—來月 サライゲツ
—從子 いやいとこ
—從兄弟 いやいとこ
—從姪 またいとこちがひ
冰 ヒヨウ こほる つらら ひ
決 ケツ 決に同し
冴(匹) コウ さゆ
冲 チユウ をさなし ひひる
虫 キ むし
劣 レツ ワヅカ おとり おとる

刎 フン くびきる
刑 ケイ キヤウ のり おきて ただす うたへ ただすつかさ
—部省 うたへさだむるつかさ
列 レツ つら ねつ
—見 レケン
—罰 つらなむ
刈 ケツ くじる
匠 シヤウ たくみ
匡 キヤウ ただす
印 インしるし がね
—籠湯波 インロウゆバ
危 キ あぶなし あやふし ホトンド
—宿 うしやめ座し
吃 キツ どもる
—哩字 キリジ
—驚 びつくり
各 カク おのおの
合 ガフ あふ ガツ あはす マサニ スベテ ベシ
—子草 よめがさら
—切囊 ガツサイぶくろ

—方 あひかた
—羽 カツバ
—式 カツば
—期 ガフゴ
—嚣 ゴキ
—黃土 あはせウド
—葬罪 あづなひのつみ
—圖 あひヅ
—緒 あはを
—緣奇緣 あひエンキエン
—點 ガテン ガツテン
—歡木 ねぶのき ねむのき
—鯨 あはせざす
—鱶 あはせざより
吉 キツ キチ え よし
—士 キシ
—方棚 えハウだな
—舌 ひなさき
—姑蘿 きりんかく
—棄物 よし きたひもの
吊 テウ とぶらひ とぶらふ とむらひ とむらふ つるす
—袴帶 ツボンつり
吋 インチ
—吋 クデ なげく アツ

同 ドウ おなじ
—年 おないどし
—胞 はらから
名 メイ な ミヤウ
—代 なしろ
—兄 なせ
—美 なぐはし
—聞 ミヤウモン
—對面 なダイメン
—鳴女 ななきめ
—殘 なごり
后 コウ ク きさき きさい のち
—料 きさきがね
吏 リ つかさ まつりごと
—道 リト
吐 ト はき はく
—出 ほきだす
向 カウ キヤウ むき むく むかひ むかふ オイテ ココニ ナンナントス
—月 むかはりづき
—股 むかもも
回 エ クワイ より かへる めぐる もとほる
—回敎 ツヰフ井ミウ

—回織 モール
—花 かへりはな
—青橙 だいだい
—咲 かへりさき イン よすが ちなみ ちむ よる
因 ヨツ シユク つど なだき
夙 なぎ なぐ
凪 こがらし
夙 キヨウ むね みだる オイデ
匈 ザ ありオイテ
在 —昔 むかし
圮 イ つちのはし
圬 ヒ こて
圭 ケイ かど たま
聿 イツ コヨ ニコ ふで
艸 サウ くさ
地 チ ダ ジ
—下人 ゲニン
—方頭人 ヂかたトウニン

—衣 こけ
—風 わらじむし
—溲 そぶ
—蕣 へびいちご
—榆 われもかう
—椹 たらし
—膚 まきくさ にはくさ
—震 なる
—錦 つた
—錢 ぜにごけ
—贈 にはづつ つちはんめう
—蘿 へびいちご
—爐 すびつ
—籠 あなはち
庄 シヤウ たひらか ハウ
多 タ おほし まさる マサニ
—草月 タぐさづき
—涎病 よだれくり
劦 ケフ カをあはす
尽 つくす 盡の俗字
夷 イ えびす えみし ひな
—曲 ひなぶり
奸 カン おかす いつはり
—囮 つつもたせ

如 ジヨ ごとし なす ニヨ
—巳男 シグ モシ シカウシテ ボカリ バカリ
—月 もころを きさらぎ
—何 いかが いかん いかに
—何兒 いかなご
—何體 いかテイ
—露 ジヨウロ
—是 カウ ニヨゼ
好 コウ このむ すき よみす よしみ すく よし ヨク
—井 しみづ
—不好 すきぶすき
—言草 つべどぐさ
—事家 カウズカ
—樣 よざま
妃 ヒ きさき つれあひ たぐひ みめ シヤク なかうと
妁 シヤク なかうと
妄 マウ みだり バウ
字 ジ あざ あざな
存 ソン ながらふ ゾンゼ
—寄 ゾンじより
宅 タク やか すまひ
宇 ウ のき やね いへ

—氣 ウケ
守 シユ かみ もり まもり
—瓜 うりはへ
—宮 やもり いもり
安 アン やす やすんず やすし イヅクンゾ イヅクニカ
—土門 アづちモン
—名尊 あなたふと
—居 アンゴ
—石榴 ざくろ
—達 アダタら アダチ
—知獸貌林 アンチヘブリン
—質母尼 アンチモニー
寺 ジ てら
—請狀 てらうけジヤウ
尖 セン とがる ずるどし とがり
—杙 とぐひ
屹 キツ ゴツ そばだつ たかし
—度 キツト
州 シユウ ス しま くに
帆 ハン ほ
匝 ゾウ こほる

年 ネン とし とせ
—中行事 ネンチユウギヤウジ
—主 としのあるじ
—次 とし み
—恰好 としカツカウ
—柴木 としばのき
—貫 ネング
—星 ネサウ
—魚 あゆ
—增 としま
—預 ネンニヨ
—端 としは
式 シキ ショク のり モツテ
—引出物 シキのひきもの
—部省 のりのつかさ
曳 エイ ひく
弛 シチ ゆるむ ゆるみ たるみ たゆむ
忏 カン みだる
忖 ソン はかる
忙 ボウ せはし いそがし
—度 ソンタク
忆 キツ よろこぶ

扛 コウ あぐ
扱 サウ やす さて
—首 サス
扞 カン ガン ふせぐ
扞 ウ さす もつ
扣 コウ ひかへ ひかふ うつ
—鈕 ボタン
托 タク ダク おす ひらく
—鉢 タクハツ
抛 ハウ なる ひく
汎 ハン ホン あまねし ミダリニ
汗 カン あせ
—衣 かさみ
—疹 あせとり かさみ
—疣 あせぼ あせも
—舍 あせぐむ
—端 あめ
汚 チ よごれ よごる よごす
汔 キツ コチ みづかる ちかし ホトンド コヒ子ガハクル
江 コウ え

—戶更紗 えどさらさ
—南 カジナミ
—浦草 つくも
—鯨魚 えつ
汐 セキ ゆふしほ
汝 ジヨ なんぢ なれ いまし
—兄 なせ
—妹 なにも
池 チ いけ
阡 セン みち
成 セイ なる ジヤウ なす
戊 ジユツ いぬ
戎 ジウ ニカ つはもの ほもの ソノ ナンゾ
收 シウ をさむ をさまる
—鬣 かせ
旨 シ むね うまし よし
早 サ サウ サツ はや やむ はやし
—乙女 サをとめ
—月 さつき
—矢 はや
—分 はやわかり

—田 わさだ
—具 はやど
—松茸 サまつたけ
—物 わさもの
—花咲月 サはなさつき
—苗 サなへ わさなへ
—苗月 サつき
—苗饗 サなぶり サなはり
—酒 わささ
—稻 わせ わさ
—練 にやねり
—綠月 サはさりづき

旬 ジユン ごゑか あまねし

旭 キヨク あさひ
—兩金 かたちはな
—脈根 みやくぐさ 系譜しぐさ
—鳥不宿 たらのき
—濟 くだら

空 アツ エチ おほあな

攷 カウ 考の古文字

竹 チク たけ
—刀 しなひ あをひえ しなれだけ
—几 たきかご
—生 たかふ
—矢籠 たかシこ

—識 イウソク ウジキ
—驗 ウダン

缶 フウ ほとき

朱 シユ あけ
—土船 あけのそほぶね
—雀 スザク
—闌 シラン
—樂 あげラ
—櫻 はなか
—欒 ザボン

朶 ダ えだ ダ うどかす

朸 リヨク リキ もりくめ あふと

朴 ボク ハク あらき ほほ

机 キ つくゑ

朽 キウ くつ

枫 フウ えぶり

次 シ つぐ ジ つぎ すがふ
—官 すけ
—座 さなり
—基 スキ
—縹 つゞはなだ
—嶺經 つきねぶ

此 シ これ この
—方 こち こなた こやつ
—方樣 こなさん
—間 こないだ

死 シ しに しね
—女郎 しにめラウ
—返玉 しかへしのたま

牝 ヒン めめ めす

灰 クワイ はひ
—汁 あく
—平 はひならし
—後 はひおくる
—神樂 ボウム おほむぎ

牟 ボウ むぐ おほむぎ

異 イ しりぞく

肋 ロク あばら

肌 キ はだ はだへ
—理 きめ

艾 ガイ もぐさ よもぎ
—糕 くさもち

芫 キフ あれの しこね

込 こむ

辻 ヘン ほとり つじ

辺 ヘン ほとり

百 ヒヤク ハク ももち オヨソ もも たび おほし
—小竹 ささ
—日紅 さるすべり
—合 ゆり
—舌 もず
—足 むかで ももたる
—弗聖 ペプシン
—部 ほごつら へくそかつら
—部根 ほごつら
—兩金 かたちはな
—脈根 みやくぐさ 系譜しぐさ
—鳥不宿 たらのき
—濟 くだら

空 アツ エチ おほあな

攷 カウ 考の古文字

竹 チク たけ
—刀 しなひ あをひえ しなれだけ
—几 たきかご
—生 たかふ
—矢籠 たかシこ

—光 たけみつ
—佛子 あぶらむし
—把 さらへ
—瓮 たつめ ごしうけ
—柏 なぎ
—魚 さより
—菜 くさにんじん
—葉采 つきくさ
—篋魚 あぢ
—篦 シツペイ
—蝨 ありまき
—節草 かまつか
—蟶 まて うみたけ

米 ベイ マイ こめ よね
—子 よなこ
—突 メートル
—笊 かたまさ
—利堅粉 メリケンこ
—浙桶 めかしをけ
—搗蟭蜥 こめつきはつた
—蟲 よねむし

卉 キ くさ

糸 シ いと
—瓜 へちま へちまうり
—石竹 いとなでしこ

—卷海牛 いとまきぐも
—卷海燕 いとまきかとぐも
—卷豆腐皮 いとまきゆば
—柾 いとまさ
—刈 いとはぎ
—虹屋 いとささげ
—結 いとゆふ いとゆふ
—遊結 いとゆふ いとゆふ
—鞋 いとのくつ いとぐつ
—蒟蒻 いとゴンニヤク
—懸賓蠟 いとかけボラ

羊 ヤウ ひつじ
—不食 もちつつじ
—机子 おほさんざし
—桃 いらぐさ
—附來 なるみ
—娑如 いつき
—麻草 どくだみ
—齒 しだ
—羹 ヤウカン
—蹄采 しのぬぎしぎし しぶぐさ
—躑躅 もちつつじ わうんつつじ みつはつつじ

羽 ウ はね
—二重 はぶたへ
—子 はね はど

—利 はさき
—風 せかは
—蟻 はり

老 ラウ おい おゆ
—少年 がんらいこう
—來 ます
—海鼠 ほや
—級郎 かながしら
—葉兒樹 うしとろし
—毫 おいほれ
—鴉蒜 しびとばな
—鴉蠅 あまな
—繫 おいかけ

考 カウ かんがへ かんがふ

両 リヤウ 兩に同じ
—下 ジニ やま

而 しかして しかうして ナンヂ スナハチ ソノ シカモ シカク

—已 ライ シ すき すきのえ

耒 ライ シ すき すきのえ
—底 ゐさり
—轅 どりくび ねり

耳 ジ みみ
—白腰馬 みみこしじろ

—珠 みみたぶ

肉 ニク しし
—豆蔻 ニクヅク
—刺 ゑめ のいずみ
—醬 ししびしほ

臣 シン おみ

自 ジ おのづから みづから ジ よりの
—前 ジまへ
—照 ほたる
—惚 うぬぼれ うぬぼる
—暴自棄 やけ

至 シ いたる

臼 キウ うす グ

舌 ゼツ した
—扱 したこき

舟 シウ ふね
—答 ふなどこ

艮 ゴン うしとら

色 ショク シキ いろ
—弗 ジコブツ
—許 いろゆり

血 ケツ ちのり

行 アン カウ ギヤウ くだり ゆき おこなひ おこなふ ゆく やる いき マサニ ツイデ ユクユク
—火 アンクワ
—平 ゆきひら
—司 ギヤウジ
—在所 アンザイショ
—居 ほかる
—宮 アングウ
—夜 へひりむし
—幸 みゆき
—脚 アンギヤ
—燈 アンドン
—菜 なぎ
—潦 にはたづみ
—器 ほかる
—摩交 ゆきずりがひ
—觸 いきぶれ
—纏 はぼき
—膝 むかはき
—險者 やまし

衄 レイ 禮に同じ

衣 イ エ そ きぬ ころも

—相 キツサウ
—楮 カウ ギヤウ アン くだり ゆき おこなひ おこなふ ゆく やる いき マサニ ツイデ ユクユク
—平 ゆきひら
—司 ギヤウジ
—在所 アンザイショ
—居 ほかる
—宮 アングウ
—夜 へひりむし
—幸 みゆき
—脚 アンギヤ
—燈 アンドン
—菜 なぎ
—潦 にはたづみ
—器 ほかる
—摩交 ゆきずりがひ
—觸 いきぶれ
—纏 はぼき
—膝 むかはき
—險者 やまし

衄 レイ 禮に同じ

衣 イ エ そ きぬ ころも

—魚 しを
—馬 かすげ
—架 みぞかけ
—被 エヒ きぬかぶり きぬかづき
—鉢 イハツ エハチ
—鉢閣 いかぶり
—桁 エカワ

西 セイ サイ にし
—文部 かぶちのふびと
—瓜 スイ井ゾウ
—施舌 みろがひ
—班牙 スペイン イスパニヤ
—藏 チベット

七畫

余 ヨ われ

佁 イ とどこほる

伯 ハク かしら をぢ
—父 をぢ えをぢ
—母 をば
—勞 もず

伴 ハン バン とも なゝ
—天連 バテレン
—造 ともの みやつこ

伢 ハウ ヒヤウ つかふ シム

攸 イウ とほし トコロ

佑 イウ たすけ

伶 レイ リヨウ もてあそぶ こもの

伸 シン のび のぶ のばす のす
—立 のだつ
—餅 のしもち

佃 チン デン つくだ

佚 イツ チツ たのしむ あやまち

伺 シ うかがひ うかがふ

似 ジ シ にる のる ニタリ ゴトシ
—貝 にたりがひ
—非 えせ
—柿 にたりがき

伽 カ とぎ なすび
—南香 きやら
—羅 きやら

但 タン ダン ただし かたぬぐ タダ

伾 ヒ おほし

佇 チヨ ただずむ

位 イ ゐ くらゐ

低 テイ タイ ひくし
—頭 うなだる

佐 サ たすく すけ

何 カ ガ なに どれ イヅレ ナンゾ イカニ
—方 どち どなた いづかた
—奴 どいつ どやつ
—故 なぜ
—首烏 かがいも
—時 いつ
—處 いづく どこ
—條 なぞう
—爲 いかがせん

佗 タ わぶ わびし

住 ジユウ すまふ すむ

佛 ブツ フツ ホチ ほとけ ほのか もどる
—甲草 つめれんげ
—面竹 ほていチク
—頂面 ブツチヤウづら
—頂薯 つくねいも
—掌薯 つくいも

—蟾蜍 ほとけびき
—蘭西 フランス
作 サク つくり つくる なす シム ダリ
—物所 つくもどころ
—樂 サクラ
侫 子イ おもねる
佑 テン うかがふ
估 ゴ あたひ
克 コク かつ ヨク
—砲 クルップハウ
兌 タイ ダ よろこぶ あつまる あな
免 メン まぬかる
兵 ヘイ ヒヤウ つはもの
—兒帶 へこおび
—馬司 つはものの つかさ
—部省 つはものの つかさ
—衛府 つはものの ねり つかさ
冶 ヤ エ いる なまめかし
冷 レイ さます さむ つめたし ひやす ひゆ
—風 したかぜ

初 ショ うひ はつ はじめ はじむ そむ
—入 はつしほ
—夜 ソヤ
—冠 うひかぶり
—陣 うひヂン
—時雨 はつしぐれ
—鳥符 はつとがり
删 サン セン けづる
判 ハン バン わかつ
—物 ハンじもの
—官 ハウグワン じよう
別 ベツ わかつ あかる わく
—當 べダウ
利 リ き きく とし
—心 とどころ
—神 ききがみ
—鎌 とがま
—篤謨斯 リトマス
努 ド つとむ ゆめ
助 ジヨ すけ たすける かすく
—風 なじ
—枝 したち

劫 コフ カフ おびやかす
—濁 コフヂヨク
却 キヤク カク かへりて しりぞく さて
—説 かへつてとく さて
卵 ラン かひ たまご たまごと
—糖 カステイラ
呑 トン のむ
—氣 のんキ
君 クン きみ
—眞物 きんまんもん
—遷子 リン やぶさか しはし をしむ
客 カク のさふえ ふえ
吭 ヒツ フ いな あらず いなむ イナヤ シカセズ
否 —應 いやオウ
含 ガン ゴン ふくむ ふくまる ほほむ ふぶむ
—籠 ふぶこもる
呈 テイ さく しめす
吳 ゴグ クレ おほいなり
—素 ゴス

—織 クレはとり
—羅服 ゴロフク
吾 ゴ あ わ われ
—木香 われモカウ
—加 あこぎ
—妻外套 あづまコート
—妹 わぎも
—御前 わゴゼ
—儕 わなみ
告 コク カウ つげ つぐ のる つぐる
—天子 ひはり
—天鳥 ひはり
呂 リヨ ロ せぼね つらぬ
—宋 ルスン
呆 ホウ あきる
—氣 あつケ
—痴 うつけ
叫 ケウ さけぶ
—天雀 ひはり
呼 イ なげく
吟 ギン ゴン うめく うたふ
吠 ハイ ほゆ バイ

吶 トツ ナチ どもる
吸 キフ コフ すふ
—毒石 スランガステー
吹 スイ ふく
—呿 あくび
—沙魚 すなほり
—雪 ふぶき ふぶせ
—聽 ふいチヤウ
吻 ブン モン くちさき くちわさ くちはし
吼 コウ ク ほゆ
—噱 コンクワイ
呎 フイート フート
吻 キツ ク くちはし みづち
虬 クワ イウ をとり ててれ
乱 ラン 亂に同じ
囮 コン こまる
困 ザ すわる 井ナガラ ヨル
坐
—脚 すわりがこ
坏 ハイ つき をか

坂 ハン さか
均 キン ナホ ヒトシク
坊 バウ まち どて
坎 カン あな コン おちいる
坑 カウ あな
—戸 やまし
壯 サウ シヤウ さかんなり
肘 チウ ひぢ
—忘 ひぢたゆし
肚 ト はら
肛 カウ しりのあな
肝 カン きも
夾 ケフ はさむ
—纈 くくし カウケチ
妊 ニン はらむ
妓 キ ギ あそび わざをぎ
妖 エウ なまめかし おようれ はけもの
妙 メウ ベウ たへ わかし
妨 バウ さまたげ さまたぐ

孚 フ ホ かへる たまご
孛 ハイ ヘ ボツ しげる はばき はし
孝 カウ ケウ よく おだやかにつかふ
宋 ソウ をる
牢 ラウ いけにへ ひさや
完 クワン グワン まつたし
—骨 みみぜのほね
宏 カウ コウ おほいなり ひびき
究 キウ きはむ
宍 ニク しし
尨 バウ モウ むく むくげ
—魚 くろだひ
—蹄子 セ
巡 ジユン めぐる
迚 テン たさる
迂 ウ まはりどほし
—路 まはりみち
迪 イ なびかめにゆく
迅 ジン はやし

迄 キツ いたる ツヒニ オヨンデ およぶ まで
尾 ビ を
—骨 をほね
—宿 あしたれ はし
—韜 をふくろ
—籠 をこ
尿 ジウ ゆばり ゆまり いばり
局 キヨク つぼね
屁 ヒ ヘ
—放蟲 へつぴりむし
岐 キ ギ ちまた
—神 ふなどのかみ
巵 さかづき
巫 ブ ム かんなぎ かうなぎ
—女 みこ
—鳥 みことり
希 キ ケ まれ コヒ子ガフ
—仙 めなもみ
—有 ケウ
—臘 ギリシヤ

庇 ヒ ひさし かばふ
床(牀) シヤウ ザウ とこ ゆず
序 ジヨ ついで ついづ
—開 ジヨびらき
延 エン のぶ のばす はふ
—引 のつびき
廷 テイ ただし チヤウ
弄 ロウ もてあそぶ
—丸 たまとり
—鈴 すずとり
弟 テイ おとと おど
形 ケイ ギヤウ かた かたち なり
—代 かたしろ
彷 ハウ ボウ さまよふ
—徨 さまよふ
役 ヤク エキ えだち えだつ ぶやく
—立 えだつ
快 クワイ こころよし
—走船 ヨット
忸 ヂク ぢづ

全 ブン あくた
扮 フン いでたつ
—裝 いでたち
扭 チウ ニユ てかし てかせ
扱 サフ セフ キフ しごく あつかひ あつかふ
—帶 しごきおび
扶 フ ブ ふもる たすく
—持 フチ
批 ヒ ヘイ はる たたく おす しめす
技 ギ わざ
抃 ベン ヘン たたく うつ
抉 ケツ エツ くじる ゑぐる
把 ハ ハウ かく とりて とつて ハンドル
—手
抑 ヨク おさふ そも そもそも
抓 サウ セウ つめる つねる つまむ
—手 かくて つまて
抖 トウ ツ ふる
投 トウ なげ
—子 など

—渡橋 なげわたし
—網 とのみ
抗 カウ ふせぐ あぐ
折 セツ セチ をり をれ をる
—延 をりはへ
—板 へぎ
—敷 をしき
—頭巾 をりヂキン
—乱 をれこだる
抄 セウ すくふ すく うつす
—絶 すき ぜれ
—撥 すくひバチ
杯 ホウ ハイ つき ブ など
汲 キフ くむ
決 ケツ ケチ さだむ きはむ カナラズ
—入 さぐりはめ
—明子 えびすぐさ
—拾 つるはじき
沃 ヨク いる やはらか
—度 ヨード
—度仿謨 ヨードホルム
—掛 いかく
—鎮 ヨヂウム
—懸 いかり

沈 チン しづむ ヂン
—丁花 チンチヤウゲ
沐 モク ボク かみあらふ やすみ
—濯 なぎむ
沒 ボツ モチ しづむ おぼる ナシ
—食子 ふし
沖 チウ ヂウ おき わく むなし
沚 シ なぎさ
沙 サ セ いさご すな
—木 スギ
—門 シヤモン
—果 りんきん
—狗 つまじろ
—茨 つた
—參 ときときにんじん
—魚 はぜ かまつか
—噀 なまこ
—駱 くろかはらげ
—穀 サゴ
—彌 シヤミ
—鱈 だい
—鰍 かなどぜう
—羅 サフラ
泛 ハン ヘン ホン うかぶ ひろし

—子 うけのをの
狂 キヤウ たぶれ くるひ くるふ
—花 あだはな
狆 チン
玖 ク キウ
—訶賚 ナダ なにおびし ナンソイカンカ
那
—謨 ナウマク
邦 ハウ くに
—人 ジヤ よしこ カーヤ くにうど
邪 せがれ
悴
阮 ゲン ゴン
阱 セイ ジヨウ おとしあな
防 ボウ ふせぎ ふせぐ
—人 さきもり
—士 ますらを
—已 あをかづら
—風 はきすがな
—癸 やまなすび
—壁 かべしろ
紀 キウ ただし ただす

—杜 ただすのもり
系 ケイ つらなる いとすぢ
忌 キ いみ いむ
—寸 いみき
—火 いんこ
—及 いがかり
—垣 いがき
—瓮 いむべ いはひべ
—部 いんべ
—懸 いがかり
忍 ジン ニン おし しのび しのぶ
—冬 すひかづら
—辱 ニンニク
志 シ こころざし こころざす シルリング
—岐傳 シキテ
忘 ボウ わする
—八 くつわ
我 ガ わ あれ われ
—兄 あせ
—家 わぎへ
戒 カイ いましめ いましむ
改 カイ あらため あらため あらたまる サラニ

—悔 カイゲ
攻 コウ せむ
旱 カン ひでり カウ カフ キヤウ さら サラニ タガヒニ アカラサマニ きさらぎ ころもがへ
更
—衣
—地 さらち
—科 さらしな
—格廬 カンガルー
—紗 さらさ
—級 さらしな
李 リ すもも
杏 カウ キヤウ あんず アンズうめ
—子梅
束 ソク たば たばね つか つかね
串 クワン ケン くし ならぶ つらぬく
—海鼠 くしこ
亨 カウ とほる うく
矣 イ 疑定の意を表はす助辭
杈 サ セ またぶり えだ
—首 サス
—極 またぶり

杉 サン セン すぎ
村 ソン むら
—主 すぐり
—雨 むらさめ
材 サイ ザイ ふるた うまれつき
杓 シヤク ひしやく ひさご
—文字 しやモジ
杖 ヂヨウ つゑ てこ
杙 ヨク くひ イキ
杠 カウ コウ はたざを あぐ
—秤 ちきり ちさり
杜 ト ヅ もり やまなし ふさぐ
—公 くも あかかう さはち かじか
—父魚
—宇 ほとさず はひまゆみ はゆり
—仲
—谷樹 ひひらぎ
—松 ねず むみ
—若 やぶめうが
—莖山 うはがねもち
—蒙 つくはね
—撰 ゾウ ゾウ
—漏

—鵲 ほとゝぎす
—鵲花 さつきつつじ
杞 キ かはやなぎ
—楊 こぶし ふたまかみ
—蘺
柚 そま
—人 そまびと
歩 ホ フ ブ かち あゆみ あゆむ
—合 ぶあひ
—行 あるき
—軍 かちいくさ
—射 ブシヤ かちゆみ
—楯 てたて
毎 マイ つね ごと
求 キウ もとむ あさる
—肥飴 ギウじあめ
—法 ゾホフ
—馬 もとめ
汞 コウ ゑづかね
—和金 アマルガム
—粉 はらや
灸 キウ やいと
—傷 いやひ

—饗 やいとげ やいとキヤウ
灼 シヤク あらたか いやちこ
災 サイ わざはひ
牡 ボ をす を
—丹 ボタン
—丹餅 ボタもち
—荊 なまえのき
—蠣 かき
肖 セウ あゆ にる
—物 あやかりもの あえもの
芋 ウ いも
—名月 いもがら いものメイゲツ
—莖 いもがら いものくき
—幹 ずるき いもがら
芍 シヤク くろくわる
芒 ボウ のぎ はしか
男 ダン ナン を をとこ
—丁 よぼろ
—子 をのこ
—今良 をとこゴンリヤウ
—風 をとこぶり
—容 をとこつき
—冥利 をとこミヤウリ

—郎花 をとこめし をとこへし
—爲鳥 をしどり
—逢 をとこダテ
—傾城 をとこケイセイ
疔 チヤウ
禿 トク かむろ はげ はぐ ちぶ
—木 をだまき
—筆 ちびふで
秀 シウ ひいづ ほ
—句 スク
—手 ほて
—眞 ほつま
—倉 ほこら
—鰭 ほだり
私 シ わたくし わたし ヒソカニ
—酒 ねけざけ
見 ケン ゲン みる まみゆ ラル アラハニ
—衣 みやぎぬ
—充行 リヤウ ラウ ラ トシ ヤヤ ヤコトニ

—人 をつと
貝 バイ かひ
—子 うまのつほかひ うまのつみ
—母 ははくり
角 カク かど くだ つの
—打 カクうち
—魚 かなむぐう
—髮 みづら
—鬣 カクづと
—鴟 みみづく
—鷹 くまたか
言 ゲン ゴン こと いふ
—出 ことづ
—依妻 ことよせづま
—痛 こちたし いたぐさ いただね
—種 どぐさ
—撰 ことえり
—靈 ことだま
—靈幸國 ことだまのさきはふくに
谷 コク やつ たに はざま
—峽 たにさき
—風 たにおろし
豕 シ ゐのこ ぶた

—首 ねのしりぐさ
豸 チ
豆 ズ トウ まめ
—子 ツツ
—油 ご
—泥棒 まめどろボウ
—明月 まめメイゲツ
—斑猫 まめハンメウ
—蔻 ツク
—腐皮 うは ゆば
赤 セキ あかし
—土 はに はにふ わに
—口日 シヤグニチ
—日 シヤグニチ
—水鷄 あかぐひな
—目比 めかかう
—目烏 しくち
—目魚 めなだ
—尾蝦 くるまえび
—豆 あづき
—卒 あかゑむは
—魚 あこう あかを
—菜 つのまた
—熊 シヤぐま をとをとし
—箭 をとをとし

—楊 かはやなぎ
—騂 やまどりあかげ
—鷸 やまどりあしげ
—驪 あかかげ
—鬣 あかうなぎ
走 ソウ はしり わしる
—下部 はしりしもべ
—百病 やぶいり
足 ソク あし たる たす
—占 あうら
—牛 あんなか
—末 あなすゑ
—組居 あぐみゐ
—袋 たび
—結 あゆひ
—搖 あがき
—纓 あしがは
—裏 あなうら
邑 イフ むら
酉 イウ とり
甫 ホ ハジメ はじむ ハジメテ
身 シン み
—形 みなり

—柱 ちりげ
車 シヤ くるま
—前草 おほはこ おんばこ
—前葉 かたくり
—懸 くるまがかり
辛 シン かのと からし
—辛 かながら
—夷 やまあらぎ
—椿 またたび
—爽 こぶし
—螺 あかにし からにし
—贏 あき
辰 シン たつ
—砂 シンシヤ
里 リ さと
—刀禰 さとの卜子
—內裏 さゝダイリ
—坊 さとボウ
—靈 ねのしりぐさ

八畫

佩 ハイ はく おび
—刀 はかせ はかし
—物 おんもの
—香 にほひのたま
佯 ヤウ いつはる

佳 カ よし
—人部爲 をみなへし
佶 キツ ただし すこやか
併 ヘイ あはす しかし トトロニ アハセテ シカシナガラ
侊 デウ ねずむ かろし
侏 シユ イツスンボフシ
—儒 こびと
侈 シ おごる
例 レイ たとへ ためし
侍 ジ さぶらひ さむらひ はべり はんべる
—女 こしもと
—臣 おもとびと
—夜 よとぎ
—婢 こしもと
—童 わらはざむらひ
—從 おもとびと おもとふちぎみ
—醫 おほとくすし おもとくすし
使 シ つかひ つかふ シム
—主 おみ
—眞 つがひざね
依 イ よる

—詁 コ
—詁鼠負 エコヒイキ
侘 タ わび わぶ
供 キヨウ グウ ク ども そなふ
—奉 グブ
—御 ゴギ
—膳 かしはで
兒 ジ こ ちご
—手柏 このてがしは
—湯食 ちごカツシ
—鶴 このり
凭 ヒヨウ よる もたる
兎 ト う うさぎ
—角 とにかく ともかく
—兒傘 やぶれすげがさ
—鉄 みつくち うぐち
—唇 いぐち みつくち
—絲子 ねねしかつら
兩 リヤウ フツ もろ フタツナガラ テール
—下 まや
些 サ わづか
亞 アク つぐ
—鉛 トタン
—刺比亞 アラビヤ
—爾答兒 アルダール
—爾箇保兒 アルコール
享 キヤウ うく
其 キ その それ
—方 そち
—奴 そやつ そいつ
—者 それシヤ
—處 そこ
具 グ そなふ そなはる ツブサニ ゴトゴトグ
典 テン のり
—侍 たいしのすけ
—書 ふみのすけ
—藥察 くすりのつかさ
—鑄司 いもじのつかさ
刷 サツ する はたく
—子 ブラシ
—毛 はけ
—匙 セツカヒ
刹 セツ てら たよ
刮 クワツ けづる する
到 タウ いたる
刳 コ くる あぐる さくる
制 セイ おさて さめむ
—吒迦 セイダカ
刺 シ とげ さす はり いら
—木 いろぎ
—刃 さすが
—青 いれずみ
—蟲 いらむし
刻 コク きざ きざみ きざむ
—牛蒡 きざみゴボウ
劾 ガイ かんがふ しちぶ ソツ をふ なはる ツヒニ ハカニ ゴトゴトグ
卒 ソツ
—塔婆 ソトバ
卑 ヒ いやし おとしむ
劵 ケン てがた わりふ
卷 ケン クワン さき まく
—子 へそ
—丹 かのこゆり
—耳 みみな をなもち
—柏 いはれば ケンナヤン ケンナン
—織 ケンナヤン
取 シユ とり とる
—出 とうで
—物 とれもの
—組 とつくむ
—垂 とりしでて
受 ジユ うけ ラル うく
—作 うけサク
—領 ズリヤウ
呼 コ よび よぶ よばふ ア
—鈴 よびリン
咋 サク かまびすし くらふ かむ アカラサマニ シバラク
咕 デン ささやく なむ
—嘯 つゝめく
呻 シン うめく にやぶ
呪 ジユ まじ ひ まじなふ
—詛 ソ
—禁 まじなひ
味 ミ あぢ あぢはひ あぢはふ
咀 ソ かむ
咄 トツ はなし
呿 キヨ ねいき
呵 カ しかる
—責 カシヤク
咎 キウ とが とがめ とがむ
忠 チユウ ふだごころなきこと
—實 まめやか まめ
念 ネン おもふ
—珠 おもひのたま
—誦 ネンジユ ネンズ
忽 コツ たちまち ゆるがせ
—布 ホツブ
—微 ホー井ツル
忿 フン いかる
快 クワイ うらむ
怖 フ おづ おそる
—氣 おぢけ
怡 イ よろこぶ
性 セイ シヤウ うまれつき さが
怯 ケウ おびえ
怜 レイ さとし
怕 ハク おそる
—痒樹 さらすべり
悅 エツ よろこぶ くるふ
怪 クワイ あやし あやしむ
—我 ケガ
—鵠 よたか
和 クワ なぎ なごし なごむ にこむ
—子 ワシ
—毛 にこげ
—衣 にぎたへ
—尙 チシヤウ
—物 にこもの
—炭 かちずみ にこずみ
—栲 にぎたへ
—琴 めづまごと ワゴン
—解 ワゲ
—稻 にぎしね
—魂 にぎたま
—幣 にぎて
—蘭 オランダ
—蘭蒐 オランダびゆ
—蘭甲 オランダあひる
—雛 なごし
夜 ヤ よる
—干 ねはたま

—久貝 ヤクがひ
—叉柄杓 ヤシヤビシヤク
—合花 しろゆり
—外出 よそで
—交 ケウ まぜ
—光貝 ヤクワウのかひ
—伽 とぎ
—尿 ゆばり
—食國 よるのをすくに
—業 なべ
—離 よかる
—溺 アン エン おぼふ ひさし オホイニ ハルカニ ダナマチ
奇 キ くすし くし ハナハダ
—日 はんび
奈 ダイ ナイ ナ ナンゾ イカン
—利 ナイリ
奉 ホウ まつる たてまつる
—行 ブギヤウ
—膳 ブゼン
—膳 カウ いはばし
妬 ト ねたみ ねたむ ねたし ねたましい
妻 サイ めあはす つま
—子 めこ
—料 あがね
姉 シ あね ね
妹 マイ いも いもうと いもと
—與我 いもとわれ
—許 いもがり
始 シ はじめ はじまり はじむ はじまる
—方 はじめつかた
姑 コ しうとめ シバラク
—姉 ちはは
—妹 をは
—射山 はこやのやま
—獲鳥 うふめ
姓 セイ かばね
姶 イ レイ さかし
委 イ ゆだね くはし
—曲 つばらか
—蛇 もこよふ
妾 セフ てかけ めかけ そばめ なんなめ
孟 モウ はち わん
—蘭盆 ウラボン
孟 マウ なさ はじめ
—涙 マンラン
定 テイ ヂヤウ さだまり さだめ さだむ カナラズ
—考 カウテイ カウナヤウ
空 クウ うつろ うつほ からう そら むなし
—木 うき うつぼき
—地 あきち
—衣 うつほとろも
—花 むだはな
—炷 そらだき
—氣洋燈 クウキランプ
—筒 うけ
—柴染 うつぶしぞめ
—春貝 うつせがひ
—勘文 うつぼカモン
—惚 そらほけ そらとぼけ
—栄 はるゆり
—虚 からうそ
—腹 すきばら
—談 むだばなし
—蟬 うつせみ
—薰 そらだき
宕 タウ すぐ ほらのいへ
宗 シユウ ソウ むね
官 クワン つかさ
—職 つかさ
宙 チユウ おほぞら
—返 チユウがへり
宛 エン あて ゴト アガカモ
—行 あてがひ
宜 ギ ウ ひべ よろし ツベナリ ベシ
—女 よろしめ
宛 ヤ
帝 レン さかはた
帛 ハク きぬ みてぐら
帚 シウ サウ はは はうき
帔 ヒ むし むしのたれぎぬ
帙 チツ ふみづつみ
—簀 ヂツ
帖 テフ かきもの
—牒本 デツテフボン
—絹 たたみぎぬ
尙 シヤウ なほ とぶとぶ
—侍 ないしのかみ
—書 ふみのかみ
—藥 くすりのかみ
居 キヨ ゐる ゐる なる ゐなが ダイ ムナシグ
—士 コシ
—行 ゐぎり
—坐 ゐぐら ゐすわり
—樣 ゐざんまひ
屆 カイ ケイ とどく とどけ
屈 クツ かがまる かがむ
—物 かがみもの
—脊 くどせ
—輪 グリ
岩 ガン いは
—木賊 いはどくさ
—石華 いはのせい
—曲 いはわた
—座 いはくら
—魚 いはな
—粗敉 いはおこし
—澤瀉 いはおもだか
—螺 いはにし
岳 ガク たけ
岸 ガン きし
—險 けさ
岨 ソ そは
岫 シウ くき
岬 カフ みさき
岷 ビン
幸 カウ さち さき さきはひ さいはひ
—先 さいさき
—若 さいわか
—魂 さきみたま さきたま
底 テイ そこ
—土 しはに
—意地 そこイヂ
—野迦 テリアカ
—滓 そこり
庖 ハウ くりや
店 テン みせ たな
庚 カウ かのえ
—樣花色 はねずいろ
府 フ ふみぐら やくしよ
—頭 フのかみ
弦 ゲン つる
弼 フツ ゆづか ゆみづか

弩 ドおほゆみ いしゆみ
彼 ヒあれ かの あの かれ
—奴 かやつ あいつ
—方 あちあつち あなたかなた
—式 あれシキ
—所 あそこ あしこ かしこ
—者誰星 かはたれぼし
—体 あれテイ
—誰時 たそかれどき
往 ワウいねゆく
—生院 ゆきてうまるる やまり
—眞似 ゆきまね
征 セイゆくからむ
—矢 ソや
拆 タクへぐ さく
披 ハツねげ ねく
—折雜 ハサラ
—頭 ハウド
—個謨 ハリウム
抹 マツなづ ねる けず
—額 マツカウ
拒 キヨクこばむ ふせぐ
抦 ヘイとる ヒ ヒヤウ

抵 テイさかよ ホホム子
—捂 もぐく
抽 チウぬく ぬきんづ ぬきいづ
拇 ボおほゆび
—指 おほゆび おやゆび
拈 ネンひねり ひねる
—華 ネンゲ
拉 ラツひさぐ ひしぐ
—丁語 ラテンゲ
拊 フはる
拍 ハクうつ ヒヤウ
—子 ヒヤウシ ハウシ
—手 かしはで
—浮 おふす
—板 ばんざさら
拓 タクひらく
拘 コウかいはる
拙 セツつたなし
拐 カイかなぐる
押 アフおし おす おさへ おさム

拔 ヒひらく
—針 ランセット はばり
抱 ハウかかへ いだく だく
—石魚 かくつぶ
—卷 かいまき
—乳母 だきうば
—帶 かかへおび
拂 フツはらひ はらふ
—子 ホッス
—底 ホテイ
—塵 はたき
拗 エウねぢけ ねぢく
—腕 だがへ
招 セウまねき まねく
—釣 をとづる
—魂 みたまふりず たまよばひ
—繩 をぎなは
坤 コンひつじさる
坩 カンるつぼ
—堝 るつぼ
坪 ヘイたひらか つぼ
坦 タンかひらか ひろし

河 カかは
—水雲 かはもづく
—貝子 みなかうな にな
—苔 かはな
—骨 かうぼね
—岸 かし
—鹿 かじか
—豚 ふぐ ふくべ ふく
—豚蟲 てうのむし
—童 かつば
—皷 ひこぼし
油 ユウあぶら
—工 よなべ
—身魚 あぶちめ いたちいを
—馬 かすげ
—國 ユトン
—揚 あぶらげ
—障子 あぶらシヤウジ
—點草 ほとこぎす
—臺 あぶらな
沼 セウぬま
—田鹽 ぬたあへ
—琴 ねごと
沮 カンゆする
—杯 ゆするつき

法 ホフのり フラン
—度 ハツ ハト
—被 ハツピ
—華堂 ホケダウ
—眷 ハツケン
—嗣 ホッス
—氣附 ホケづく
—樂 ホフラク
—輪味噌 ホロミソ
—燈 ホツトウ
—螺 ホラ
波 ハなみ
—止 ハと
—打 なをり
—稜栄 ハウレンサウ
—羅蠻計 ハラマキ
泡 ハウあわ あぶく
—沫 うたかた
—錢 あぶくぜに
—糖 カルメラ
泣 キフなく
沫 マツあわ
沛 ハイさは はた
—艾 あくなよ

沮 ショはばむ
沸 フツわく ハイわかす
泊 ハクとまる
—湖 さざらなみ
治 チぢをさまる をさむ
—部省 をさむるのつかさ
沽 コうる かふ
況 キヤウまして いはんや マスマス
泄 セツもらす もる
泛 ハン ホン ホウ くつがへす うかぶ
—子 うき うけ
泓 イウうはぐすり
泛 ゲンながる
沿 エンそふ
—鉤子 きいちご
泥 デイどろ なづむ
—人形 つくねニンギヤウ
—土 うき うひち
—水漢 のんだくれ
—炭 すくも
—犁 ナイリ

—塗 ぬりまみれ
—障 あふり
—魴 うみこ
—澪所 ぬかるみ
—鰌 どぜう
注 チユウそそぐ つぐ
—手 つきて
—連 しりくべなは しめなは
狐 コきつね
—狗狸 コツクリ
—臭 ありが わきが
—背 ねなもみ
狗 クいぬ
—母魚 えそ
—舌草 ふぢさはぎく さはをぐるま
—尾草 ゑのころぐさ ゑのこぐさ
—兒柳 ゑのころやなぎ
—蟲 いぬがみ
狛 ハクこま
狎 カフなれ カハルガハル
狒 ヒわらひけもの
狙 ソねらひ ねらふ
郡 カンゆたかにさかんなり

邸 テイやしき
—屋 つや
陀 ダきし
—螺 メイ
陛 ヒキヨさへ なり
陂 ヒはいけづつみ
阿 アオおもねる
—母 オモ
—西亞尼亞洲 オセアニアシユウ
—存女 アゾめ
—吽 アウン
—吒 アウン
—呆 アハウ
—多福 オタフク
—吝 オメオメ
—列布 オレフ
—含 アゴン
—良禮 アラレ
—刺吉 アラキ
—房 アハウ
—修羅 アスラ
—福 オフク
—禮女 アレをとめ
—娜者 アざもの

—轉菩提 アノクボダイ
—鮠 あかめ
—彌陀 アミダ
附 フつき つく つけ
—子矢 ブシヤ
阻 ソはむ へだつ
或 ワクまるひは モシクハ アリ
戾 レイもどり もどる
房 バウふさ
—租 やちん
—錢 やせん
所 ショどころ デル バカリ
—化 ショケ
—天 をつと
—以 ゆゑん
—爲 セ井 ソ井
—謂 いはゆる
戽 コウくむ
—斗 あかとり ゆとう
羌 キヤウえびす アア スナハチ
—福 ソウつよし うけたまはる うく
承 ショウ
—和菊 ソガキク

—草空 みつき
—鞋 みづつき みつき
—鬻 あまだりうけ
—鐙肉 あぶみずり
放 ハウはなつ はなる ほかす
—十德 はなちジツトク
—下僧 ホカソウ
—出 はなちいで
—杖草 いかりサウ
—兎 ハウベン
—髮 はなちのかみ
斧 フおのよき ささかり たつき
—魚 ふか
於 オおいて ココニ ヨリ ニアア
—期海苔 オゴのり
忝 テンかたじけなし
曷 イヅクンゾ イヅクンカ
旻 ビンあはれむ
—樂 ミンラク
昉 ハウ ボウ あきらかなり ハジメテ マサニ
明 メイ ミヤウ ミン あかり あき あきらか あく あけ あかるし あかす あかし

—日 あす あした
—衣 あかは あかはどり
—石玉 あかしだま
—白 あからさま
—妙 あかるたへ
—明後日 やのあさつて
—後日 あさつて
—櫃 あかびつ
果 クワはて このみ はつ はたす
—合 はたしあひ
—取 はかどる
—業 はてのわざ
—實 くだもの このみ
東 トウあづま ひがし ひんがし
—木綿 あづまゆふ
—史部 やまとのふびと
—白 しののめ
—司 トウス
—北風 ならひ
—風 コナ
—屋 あづまや
—宮 はるのみや
—國 あづま
—路 あづまぢ
—膳 あづまからげ

—雲 しののめ
板 ハン いた
—來節 いたこぶし
—道 わたりいた
—齒 ねかは むかは
松 ショウまつ
—江魚 すすき
—明 たいまつ まつげしり まつむし
—毫 まつげしり まつむし
—苔 さるをがせ
—毬 まつぶくり まつぼくり
—魚 かつを
—蘿 なつのとけ
杵 ショきね
杯 ハイつき さかづき なみ
—曷 ボイコット
杜 シまないた
—根栄 さはしをん
杼 チヨひ シヨひ ひしやがき
枇 ヒならぶ
枘 ゼイほぞ
枉 ワウまが

扶 フ はなぶさ
—移 トウ しでやなぎ
枓 トウ ますかた
枕 チン まくら
—反 まくらがへし
栀 クワ くちなし
—子 シ きのみ
析 セキ さく わかつ
—鈴 さくすず
枌 フン そぎ にれ
枝 シ えだ
—折 シ をり
—垂 シ しだれ
杷 ハ さらひ うまぐは
柿 シ かき
—糕 かきづき
柿 ハイ こけら
枩 ケン コン ひずき
—爬 こまざらひ
抄 サウ ベウ ひすま すま
—羅 サラ

—攝 へど
牀 シヤウ ゆか
杭 カウ くひ
林 リン はやし
—檎 リンご
枚 マイ ひら バイ
杜 ズ のぎ もみぬか
炊 スイ かしぐ かしぎ
炎 エン ほのほ ほむら
炙 キウ セキ あぶる
—鍋 やきなべ
爭 サウ あらそひ あらそふ すまふ あらがふ イカデカ イカデ
版 ハン いた
—位 ヘイ ヘン ヘンニ
—閉 ヘンバイ
牧 ボク まき うまき
—牛場 うしかひば
—童 まきのうなゐ
玫 バイ うつくしきたま
—瑰 はまなす

玩 グワン もてあそぶ
—具 おもちや
欣 キン よろこび よろこぶ
—求 ゴング
武 ブム たけし
—士 もののふ
—文蟹 たけブンがに
—頭 ものがしら ブがしら
毒 ドク あし そこなふ
—空木 ドクうづき
—荏油 ドクえのあぶら
毫 ゴウ しるし
炒 セウ いる
—米糕 らくがん
杏 エウ くらし とほし
—靴 タウ くつ
爬 ハ かく どる
—網 かきあみ
物 ブツ モツ もの
—本 もののホン
—多 ものさは

—怪 ものけ
—相 モツサウ ものヨンじ
—怨 ものヨンじ
—部 ものべ
—食 ものはみ
—損 ものそこなひ
—愛 ものめで
—實 ものざね
—靜 ものあらがひ
—憑 ものつき
—識 ものしり
—醫 ものむづかし
牂 ジヤウ さま
—文 ジヤウぶみ
戕 ジヤウ サン ころす かし
乳 ニユウ ちち ち
—母 うば めのと ちも
—兄弟 ちキヤウダイ
—糜 ぢふ
糾 キウ あざなはる あざなふ あざね
—返 あざがへす
—草 しば
—繩 あぜなは

玕 キログラム
政 セイ ジヤウ まつり まつりごと
—所 まんどころ まどころ
旺 ワウ さかり
昆 コン おなじ あに のち
—布 コブ ひろめ
昇 シヨウ のぼる あがる
昌 シヤウ さかん
昏 コン くらし
易 エキ かふ やさし
昔 セキ シヤク むかし へびと
—方人 むかしへびと
朋 ホウ とも
服 フク なつらふ
—部 はとり
肢 シ えだ
肫 シユン ドン おみき
肥 ヒ こやす こゆ こえ
—立 ひだち ひだつ
—料 こやし
—蘊 とねたど

肬 イウ いぼ
肺 ハイ ふくぶくし
—壞疽 ハイエソ
股 コ もも
—脛巾 ももはばき
肱 コウ かひな ひぢ
肯 カウ うけがひ がへんず アヘテ
肩 ケン かた
—絃 かたまひ
育 イク そだつ はぐくむ
肴 カウ さかな
事 ジ こと つかや
—痛 こちたし
—無 ことなしぶ
秉 ヘイ とる
—燭 ヒヤウソク
—燭翁 ひともしのおきな
京 キヤウ ケイ みやこ
—官除目 つかさめし
—都 みさと
來 ライ くる きたる

—迎 ライガウ
—經長 けながし
季 キ すゑ
—兄 あにずゑ
卓 タク テーブル
—袱 ジツボク
—氈 ショクセン
卦 ケイ うらかた
卸 シヤ おろし おろす
叔 シユク をぢ こじうと
—父 をぢ
—叔君 をぢき
—母 をば
孤 コ みなしご ワウ
侶 ワウ
—弱 ひわやか あえか
—迫 はくせこ
周 シウ めぐる
—章 あはつ
囹 レイ をり ひとや
固 コ もと かたし かたむ かたなる モトヨリ マコトニ

—唾 かたづ
—關 カウ なか コゲン
岡 カウ なか
罔 マウ しふ ナシ
—象 みづち みづは
耶 ヤ みみのあか
芥 カイ ケ からし あくた ごみ
—子 からし
—斗 ごみとり
—置 ごみく
—屋 こもく
—藻屑 あくたもくた
芫 ゲン グワン ふちりどき
—菁 ハンミヤウ カンダリス
芟 セン サン くさかる
芬 フン かうばし
芭 ハ はせを
—茅 すすき
芝 シ しば
—生 しばふ
劫 ケウ すさ つた
花 クワ はな

—車 キヤシヤ
—足 クエソク
—沒藥 はなモツヤク
—東臺 ケソクダイ
—瓦 あぶみかはら
—風捲 はなのしまき
—表 とりゐ
—美 はなぐはし
—柏 さはら
—胎衣 はなのほそわた
—堅魚 はなかつを
—斑鳥 かのこどり
—鈴 いらをこぜ
—崗石 みかげいし
—梛栄 はなな
—筐 はながたみ
—菖蒲 はなあやめ はなシヤウブ
—稻 はなしね
—魁 おいらん
—鮡 むつ
—蓴栄 はなジユンサイ
—蠟 はなびら
芳 ハウ かぐはし かうばし
—宜園 ハギぞの
芸 ウン にほひぐさ くさぎる
—香 ヘンルーダ

—臺 ぢち
芽 ガ め
—子 はぎ
茂 ケン みづぶき
芙 フ はすのは きばちす
—蓉 はちす
—蕖 はちす
迎 ゲイ むかへ むかふ
—雲 むかぐも
近 キン ちか ちかし
—仗 コンヂヤウ
—江晒布 あふみさらし
—傍 ちかほとり
—衛 コンエ
—衛使 コンエづかひ
—邊 ちかまはり
返 ヘン かへす かへる
—代 かへしろ
—樣 かへさま
迚 とて

的 テキ いくは まと
—所 いくはところ
疝 セン あたはら
疚 キウ やむ やまし
奸 カン くろくさ
盲 マウ めくら めしひ
—目 どめくら
直 チヨク あたひ ねだ なほし すぐ なほす ねぎ ひた なほる
—甲 ひたかぶ
—切 ずんぎり ねぎる
—手 ただて
—心 ひたごころ
—衣 なほし なほしのころも
—面 ひたもて
—徑 さしわたし
—垂 ひたれ
—幅 たつもの
—道 ただぢ ひたみち
—裸 ひたはだか
—路 すぐみち ただち
—會 なほらひ
—禮 なほライ

—人 しりうど
—母 やまし
—更雀 こまどり
—風草 かぜぐさ
—客 いこ
社 シヤ やしろ
—田 みとしろ
舍 シヤ や
—人 とねり
—密 セイミ
虎 コ とら
—子 おかは おまる
—列刺 コレラ
—耳草 いとはず ちやるめるサウ ゆきのした どらのみみ
—杖 いたどり さすがり
—枝 さど たぢひ
—河豚 とらふぐ
—魚 をこぜ
—斑竹 しやこたんだけ
—斑猫 ごらねこ
—頭 おはつ みみしろくろ
—落 もがり
—蜉 かざめ
—闌 さはあらら

虱 シツ しらみ
—卵 らんぎ
蚪 キツ みづち
衫 サン ころも
—衣 おほかたびら
表 ヒヤウ おもて
—文 うはぶみ
—衣 うへのきぬ
—面 うはべら
—袴 おほくちのはかま
—莚 うはむしろ
軌 アツ きしる きしめかす
—目貝 きしめがひ
采 サイ わかつ
—女 うねめ うねめ
金 キン かね コン
—平牛蒡 キンぴらゴボウ
—米糖 コンペイトウ
—打 キンチヤウ かねうち
—色 こがねいろ
—松 かうやまき
—門田 かなとだ
—柑天窓 キンカンあたま
—首魚 かながしら
—昆羅 コンピラ
—海 キンパイ
—海鼠 キンこ
—剛石 ダイヤモンド
—雀 かなりや
—雀枝 えにしだ
—琵琶 まつむし
—椀 かなまり
—團 キヤトン
—翠 くじやく
—絲荷 ゆきのした
—絲桃柳 びやうやなぎ
—絲雀 かなりや
—綠鬣 とのさまがへる
—鈴木 せんだんのみ
—雌鳥 こがねめとり
—漆 こしあぶら キンうるし
—皷 コング
—輪際 コンリンザイ
—鳳花 ほうせんくわ
—綠草 みづひきぐさ
—線重縷 いぶきとらのを
—線魚 いとよりだひ
—鳧魚 えびを
—瘡小草 ぢごくのかな ぢごくのふた
—錢菊 なつぎく
—鯽 ひぶな
—鱠魚 しび
—鱗魚 さこ
命 メイ いのち ミヤウ
—冥加 いのちミヤウガ
—嬉 ミヤウブ
長 チヤウ ながし トコシナヘニ ヒサシグ
—上 ながづかへ
—刀 なぎなた
—石 ボサツいし
—谷 ながたがは
—谷部若雀天皇 はせべわかささぎのすめらみこと
—官 かみ
—庚 ゆふづつ
—押 なげし
—柄 ながら
—門竹 しのべだけ
—春 かうしんばら
—春花 キンセンクワ
—春菊 ふくじゆさう
—炭櫃 ながすびつ
—閑 のどか
—間箏 しのめ
—精進 ながサウジン
—噸 ロングトン
門 モン かど
—並 モンテイ
—柳 おもてやなぎ
—渡 とわたる
阜 フ つかさ をか
—偏 こざとへん
—螽 いなご
隹 スイ ふるとり
雨 ウ あめ
—久花 みづあふひ
—滴 あまだり
—虎 あめふらし
—蟾蜍 あまびき
青 セイ あをし
—大青 あをダイシヤウ
—小豆 あをあづき
—丹 あをに
—天白日 ありのまま
—反吐 あをヘド
—羽木兎 あをはづく
—光 あをがかり
—串魚 さんま
—芋 はたけいも
—花魚 さば
—夾葉 はないかた
—和幣 あをにぎて
—花鸚哥 あをはなインコ
—袖餅子 あをやぎ あをやなぎ
—柳 あをやぎ あをやなぎ
—房 さもも
—相 あをんザウ
—韋 あをなめし
—茅 かりやす
—麻 あをそ
—前魚 わらさ
—海苔 あをのり
—梅綿 あをめわた
—魚 にしん かど
—魚鰾 かずのこ
—啄木鳥 あをけら あをきつつき
—鮑 あをみづら
—梁 あはのよね かしのきあは
—瓮 あをし
—葡 あまさく
—精 さかき
—腸羹 あをかちじる
—華瓮 あひそめつけ
—暖簾 あをノレン
—銅 からかね
—銅鏡 ますみのかがみ
—蜻蛉 ちをとんぼ あをふんぼ
—蒿 くさよもぎ
—頭鶏 かも
—楡 あをさし
—蝦蟇 あをがへる
—黎 あをあかざ
—獄 あをさめ
—蟾蜍 あをびき
—鴉 あをしとど
—黛墨 あをすみ
—鰱 あをたひら
—驪馬 くろみどりのうま
非 ヒ あらず
—時 ときしく

九畫

並 ヘイ ならび なみ ならぶ
—付田 なづきだ
亭 テイ とどまる とまりや あづまや しゆく
—歴 あしなづな
亮 リヤウ あきらか まこと
—亮遠稿 さやさや井カウ
侮 ブ あなどる
侯 コウ うつくし むかふ まと きみ コレ ナンゾ

侶 リヨ とも
便 ベン ビン よすが たより たよる スナハチ
—毒 よこね
—無 ビなし
係 ケイ かかり かかはる
—蹄 わな
促 ソク うながす はたる ナシ
—織 はたおり おりし
俄 ガ にはか
—羅斯 オロシヤ
俊 シユン すぐる とし
侵 シン おかす
俏 セウ やつす
俗 ゾク ならはし
俺 ヨウ ひとがた いたむ
俚 リ さとび さとぶ いやし
保 ホ たもつ たもつ やすし
—侶 ホロ
—夜 ホヤ
俠 キヤウ おとこだて たもつ
—氣 をとこぎ
信 シン まこと マコトニ
—夫 シンプ
—夫亂摺 シンプもちず
—樂 シガラキ
俘 フ とりこ
—虜 とりこ
俣 また
俤 おもかげ
俎 ソ まないた
冒 ボウ をかす
冠 クワン かんむり かうむる
—木 かぶき
—者 クワザ
剄 ケイ くびきる
則 ソク のり のつとる すなはち
剋 コク かつ ころす
剃 テイ そる する
—刀 かみそり
削 サク けづる そぐ
刺 ラツ もとる たがふ
—五味子 さねかづら
—天竺草 なでしこ
—瓜 ゆうぶら かはちや
—瓜節 かはちやぶし
—京 ナンキン
—東風 みなみゴチ
—無 ナム
—無阿彌陀 ナマイダ
茲 ジ マスマス コノ ココニ コレ
前 ゼン さき まへ
—夫 しにを したを
—板 まへカンバン
—甲 むなあて
—件 ありのくだり
—妻 もとつめ こなみ
—前年 をとゝし
—陰 まへ
—栽 センザイ セザイ
—櫛 つらぐし
勃 ボツ おこる
勁 ケイ キヤウ すこやか つよし
勇 ユウ いさむ いさましし
—夫 いさを
—魚 いさな
—細 いすくはし
勅 チヨク みことのり
匍 ホ はらばふ
—匐 はらばふ
南 ナン みんなみ みなみ
—五味子 さねかづら
—天竺草 なでしこ
—瓜 ゆうぶら かはちや
—瓜節 かはちやぶし
—京 ナンキン
—東風 みなみゴチ
—無 ナム
—無阿彌陀 ナマイダ
卽 ソク すなはち やがて モシ
厚 コウ あつし
—子 あつし
—朴 ほほ ほほがしは ほほのき
—岸草 あつげしサウ
—紙 あつがみ ボール
—綬 あつぐみ
叙 ジヨ ついづ
叛 ハン そむく
凌 リヤウ しのぐ しかる アア
咨 シ あた
咸 カン みな ことごとく
哀 アイ あはれ かなし アア
咿 イ つくりわらひ
—物比禮 くさぐさのヒレ
晶 ホン ヒン しな
哉 サイ かな
—烟管 くはへぎせる
—物比禮 くさぐさのヒレ
—瓜 コ ちのみごのなきごゑ
哂 シツ くはふ チツ わらふ
—烟管 くはへぎせる
哢 ロウ れよゝ はないき
咈 フツ もさる ハイ たがふ アア
晒 シン わらふ
咽 イン むせぶ のど のんど
咳 ガイ せき しはぶき
略 カク いひあらそふ はく
哄 コウ どつと かまびすし こゑ
咬 カウ かむ さへづる
哮 セウ ほむ さく
—酒 ほぐし
囿 イウ その
型 ケイ かた
剉 ザ きる くじく
梁 ダ ヤ あづち
垢 コウ ク あか ちり
—離 コリ
垤 テツ ありづか つか
垣 エン エン かき
—下 ゴガ エンカ かきもと
—内 かきつ
—外 かいと
—代 かいしろ
—矢間 かいやざま
—間 かひま かいまみ かいまむ かいまみる
—間見
城 キ ジヤウ しろ きづく
奎 ケイ キ とかき
卷 ケン クワン まき まく
奏 ソウ かなづ まをす すすむ
—文 まうしぶみ
契 ケイ ちぎり ちぎる
奕 エキ おほいなり さかんなり

奔 ホン はしる
拏 ダ つかむ とらふ
姿 シ すがた
威 イ おどし おどす
—衣 おどしぎぬ うけうら
姦 カン ひすかわさ かたましし
—通 まをとこ
姥 ボ モ ばば ばば とめ
—秋沙 うばあいサ
妲 コウ をんなのあざな
姨 イ をば
姨 カウ うつくし みだる
姪 デツ めひ
姬 キ ひめ
—刀禰 ひめト子
—桔梗 ひめギキヤウ
—茴香 ひめウヰキヤウ
—離鳥 ひめいなどり
—蹶躅 ひめつつじ
—摩羅 ひめかがみ
姻 イン よめとりむことり ちぎみ

姚 エウ かはよし はるかなり
姙 ニン はらむ
孩 カイ ガイ ちご
客 カク キヤク まらうど
—作兒 つぐのひと
—羅彌鐵鑛 コロオム テツクワウ
宣 セン のる のたまふ
—旨書 セジがき
—言 のりごと
—髮 わかしらが
室 シツ むろ いへ
—宿 はわいやし
宥 イウ ゆるむ ただむ
封 フウ ホウ さかひ ちぎやう ちぎやうち ふみ
—度 ポンド
屋 チク や
屍 シ しかばね かばね
屏 ヘイ ビヤウ かき さかひ
—重門 へイちもン
昼 ひる 晝の俗字
峙 ヂ そばだつ そばだつ

峠 たうげ
巷 カウ ちまた
帝 テイ ダイ みかど
—釋 ダイシヤク
帥 ソチ ソツ ス井 ひきゐる
幽 イウ かすか
度 ド タグ はかる たび たし
廻 クワイ まはし まはす まはる
屎 キ シ はば くそ うなる
—桶 たごをけ
建 ケン たつ
—闥 するがラン
昇 キヨ かく かき
弇 エン カン かさ ふさ
俞 ユ やすし シカリ
弭 ビ はづ ゆはづ
彦 ゲン ひこ
—德 ひようとこ
徇 ジユン とゝぶ

律 リツ リチ てうし のり つね ただす
彿 フツ ホンカニ
後 コウ ゴ うしろ おくれ おくる しりへ あと
—方 しりへ
—夫 うはを
—言 しりうごと ごつ うしろごと しりう
—車 ひとだまひ
—妻 うはなり
—取 しんどり
—差 しんさし
—眞風 おくれまぢ
—朝 きぬぎぬ のちのあさ
—執部 しとりべ
—張 しんはり
—裔 あとかはね
—語 あとうがたり
—輪 しづわ
—暴歌 しらけうた
—覆 あとがへり
恃 ジ たのみ たのむ
恒 コウ つね
協 ケフ かなふ あはす

恍 クワウ とけ ホハカニ
恟 キヨウ おそる
恫 ドウ うめく
恨 コン うらみ うらむ
恂 ジユン まこと おそる
恪 カク つつしむ
—勤 カクゴウ カクゴン
恤 ジユツ めぐむ
恬 テン やすし しづか
恰 カフ コフ あたかも
—好 カツカウ
—幅 カツブク カツポク
恢 クワイ おほいなり
拮 キツ はたらく もつせまる
括 クワツ むすぶ くくる
—胎蟲 なめくぢ
挍 カウ かせ くらぶ かんがふ しらぶ ただす
拱 キヨウ こまぬく
拷 こしらへ こしらふ

拝 ハイ おがむ
拾 シフ ひろひ ひろふ カハルガハル
拯 ショウ すくふ たすく
持 ジ もち もつ
—傾頭者 きさりもち
挌 カク うつ たたかふ
挂 ケイ クワイ かく かかる
—甲 うちかけよろひ
指 シ ゆび さす ゆびさす
指 エン 絹の俗字
抛 ハウ なげうつ
按 アン かんがふ おさへ
—司 アンズ
—紙格 かみおしわく
—察使 アゼチ
拭 ショク ぬぐふ のごふ ふく
—板 ぬぐひた
—篦 のごひの
挑 チウ いどむ をどる かかげ
—事 いどみごと

—燈 テウチン
拷 カウ かすむ うン
把 ハ ひきさらへ
洋 ヤウ なだ おけし
—刀 サーベル
—犬 かめ
—青 ペレン
—紅 ペレンス
—琴 ピアノ ピヤノ
—鈔 サーベル
—傘 カウモリ
—筆 ペン
—燈 ランプ
—鴨 はりけん
洊 ソン いたる
泊 キ そそぐ およぶ
—夫藍 サフラン
—英蘭 サフラン
洒 サイ シヤ あらふ
—落 シヤレ
—落臭 シヤラくさい
洗 セン あらひ あらふ
洵 ジユン とほし マコトニ

洛 ラク みやこ
—陽花 やまとなでしこ
洞 ドウ くき ほら
—穴 ほろあな
—鈴湖 トウヤヤのみづうみ
洩 エイ もらす
洟 イ すすはな つきはな
津 シン つ わたしは みなと
—人 わたしもり
—縟子 つもぢ
洪 コウ おほみづ おほいなり
洲 シユウ しま なぎさ
洌 レツ きよし さむし
活 クワツ いく いかす
—鹿草 いぬのしり
—槽 いけぶね
洽 カフ あまねし
派 ハイ わかれ えだがは
—手 ハで
洙 シユ
洚 カウ おほみづ

狡 カウ こいぬ わるがしこし
狡 ジユウ たけし
—猱 むくげざる
狩 シウ シユ かり かる
猯 バツ
郁 イク さかん かうばし
—子 むべ
耶 ヤ ちち よこしま
郊 カウ むらそこ ゐなか はら
陋 ロウ いやし
降 カウ くだす くだる おる
限 ゲン かぎり かぎる
怒 ド ヌ いかり いかる
忽 ソツ いそぐ あわつ
思 シ おもひ おもふ おぼす コヽニ
—入 おもいれ
—兄弟 おもひはらから
—所 おもひど
—樣 おもやま
怠 タイ をこたり をこたる

—狀 をこたりぶみ
急 キフ いそぎ せく シキリニ
—度 キット
—居 つきゐる
—雨 はやあめ
—須 キビシヨ
—擊肩 はやうちかた
怨 エン うらみ うらむ
恭 キヨウ うやうやし
扁 ヘン ひらたし
—魚 かれい
—螺 しじみ
—蟲 ひらむし
扃 シヤツ とぼそ とびら
斬 ハツ
拜 ハイ おがみ をがむ
故 コ かれ ゆゑ もと ふるし カルガユニ コトサラニ ナホ
—鐵 ふるかね

研 シヤク はつる きる
施 セ シ ほどこし ほどこす
—綿矢那 セメンシイナ
春 シユン はる
—日 かすが
—日局 かすがのつぼね
—伐 はるどり
—雨 はるさめ
—宮 はるのみや とうグウ
—宮坊 みこのみやのつとうグウボウ
—海 はるみ
星 セイ ほし
是 ゼ これ
昱 イク ヨク あくるひ ひかり
冒 ボウ おかす
昴 バウ すばる
映 エイ アウ はえ はゆし うつす うつる かくる
昧 バイ マイ やみ よる くらし
昨 サク きのふ

—日 きのふ
—夜 よべ
—宵 ようべ よんべ
—葉荷草 つめれんげ
昡 ゲン ひのひかり
昭 セウ あきらか
昵 ヂツ なづさふ
般 ハン めぐる カヘツテ はこぶ
架 カ がくひ たな
—麻 むし
枲 シ あさ けむし
染 セン そめ しみ そむし しむ
柔 ジウ ニウ やはらか やはらかし にこ
—術 やはら
—魚 たちいか
查 サ いかだ しらぶ みる
某 ボウ それがし なにがし
枯 コ かれ かれき かる
—荒 からさぶ
枳 キ からたち

柳 カ かせ かし
枰 ヘイ ごばん
枹 フ ハウ ばち ぶち
枩 レイ ひささき ひしやしけ
柄 ヘイ からつか え
—杓 ヒシヤク
—香爐 えながカウロウ
—燭 ヒヤウソク
柁 ダ かぢ
—杠 かちづか
柏 ハク かしは
—殿 かへでの
—浮 おぶす
—梨 かへなし
柑 カン みかん
—子 カウジ
柘 シヤ セ つる やまぐは
—榴 ザクロ ジヤクロ
柚 ユ イウ ゆず
—子 ユズ
—柑 ユカウ
—酢 くさおす
—餅子 ユベシ

柝 タク さく わかつ ひやうしぎ
—釧 さくぐしろ
柞 サク ゆメ ゆし はは そ はうそ
—子 ゆし
—木 つげ
—奴 いぬつげ
柩 キウ ひつぎ
柯 カ ふる
柱 チユウ ヂ はしら
—函 ポスト
—線 はしらみぞ
秘 ヒ ふる え
被 ひ き
—子 かや
柳 リウ やなぎ
—川 やながは
—星 ぬりこぼし
—宮 やないば
—籠 やなぐひ
—鏃 やなぎさび
柵 サク やらひ

枸 コウ ク くこ からたち
—杞皮 チコツピ
—橘 カラたち
—櫞 かふち まるぶしゆかん
枴 シユウ ひひらぎ
—撲 さいづち さいづち
柾 ショウ まさ そのさき
栂 ツイ つが とが
歪 ワイ ゆがみ ゆがむ
亟 キヨク シバシバ スミヤカニ
殂 ソ ほろぶ しぬ
殃 アウ わざはひ
殄 テン つくす ほろぶ
殆 タイ ねるほとんど ほとんど
段 ダン きた
—半 きなか
—段 ダンだら

毘 ヒ ビ あつし あきらか
—沙門 ビシヤモン
—嚧遮那 ビルシヤナ
泉 セン いづみ
—郎 あま
—海魚 うなぎ
炭 タン すみ
—斗 すみとり
—團 タドン
—櫃 すびつ
炫 ゲン ガ かがやく
炬 キヨ コ かがりび たいまツ
—火 たちあかし
炸 サク
炳 ヘイ あきらか
爰 エン ここ ココニ
玳 タイ たいまい
—瑁 タイマイ
玲 レイ
玷 テン かけ きず

—貨 ろうぞもの ろうず
玻 ハ ガラス ぎやまん
—璃 ビードロ
珈 カ
—琲 コーヒー
珊 サン ほりちりはむ
—米突 センチメートル
—瑚珠 サゴジユ
珍 チン ウン めづらかめづらし いはやなぎ ここめぐさ
—珠花
—幣帛 うづのみてぐら
胃 イ ゐぶくろ
胄 チウ かぶと よつぎ
胥 シヨ たすく あひ トモニ ミナ
背 ハイ そむく そ そびら
—心 ホイシン
—向 みがひ
—長 せたけ
—面 そとも
—負込 しよいこみ
—恰好 せいカツカウ
—梁 せみね

—乾餘 せみくぢら せびくぢら
—腸 せわた みなわた
—瘡 たこ
—撓馬 せたらうま
—囊 ランドセル
胛 カフ かいがね
胎 タイ はらごもり こどくろ
—包 えな
—盤 えな
胙 ソ サク ひもろぎ はらごもり もと かぢ
胞 ハウ え えな
—衣 えな
胚 ハイ はらごもり もと
肺 ハイ こころ
胡 コ したくび おきな ナンゾ
—瓜 きうり そはうり
—投 あないち
—床 あぐら
—枝子 はぎ あきはぎ
—座 あぐら
—桃 くるみ

—麻 うゴマ ゴマ
—鬼子 つくはね
—臭 わきが
—蕚 こえんざろ
—散 うサン
—葱 あさつき
—黄連 せんぶり
—蓋 うサン
—鼓 つづみ
—亂 うロン
—蝶花 しやがはな しやがはな
—銅器 サハリ
—盧 ものわらひ
—篭 やせぐひ
—頽子 くみ ぐみ
—獺 トド
—鐘 やなぐひ
—羅蔔 にんじん
胤 イン たね
苑 エン その
苕 テウ ふんざう たかし
苔 タイ こけ
—龍鬚 こけリンダウ
—蘚 こけ
苗 メウ なへ ベウ

—代蒔 なはしろいちと
—生 なはえ
—蝦 へわたのうを
苛 カ いらなぐ ハナハダ わづらはし
苜 ボク モク うまごやし
—蓿 うまごやし
苞 ハウ つと はかま
—苴 つと おほにへ
苟 コウ いやしくも モシ マコトニ
—且 かりそめ
苣 キヨ けしあざみ
—麻 めあさ
—蒿 ちしや ちさ
若 ジヤク もしく モシク わかし しく ゴトシ ハカノゴトキ ナンヂ
—干 そこばく そくばく
—子 わくご
—布 わかめ
—白髪 わかしらが
—郎女 わかいらつめ
—郎子 わかいらつこ
—魚子 わかなご
—湯座 わかゆゑ
—楸 わかひさぎ

苦 セン ゼン カサ子ナ シキリニ
—丹 クタニ
—爪藥毛 クづめクげ
—瓜 つるれいし にがうり
—竹 にがだり かはたけ
—味丁幾 クミチンキ
—蔘 くらら まひりぐさ
—監 にかり
—藏 はたけほほづき
苧 チヨ からむし を
—乖衣 むしたれぎぬ
—垂板 むしたれいた
—麻 からむし ラミー
—環 をだまきり
苦 セン とは さま
英 エイ はなぶさ
荆 ケイ むばら
—棘 いばら はら おどろ
苴 ショ つと あさ
苺 バイ いちご
苾 ヒツ かほり

—茂 モ しげる しげし
—竹 いくみだけ
茄 カ なすび
—子 なす なすび
茀 フツ しげる なさむ
茅 バウ ちかや
—花 ちはな つはな
—花花 ほわた
—渟 ちね
—蜩 ひぐらし
—膏菜 ほいとりぐさ
—蕈 かうたけ
茉 バツ マチ
迢 テウ とほし たかし
迦 カ
—梨帝母 カリテイモ
—陵頻迦 カリヨウビンガ
迫 ハク ヒヤク ぜむ せまる せる
—上 せりあげ
—出 せりだし
逊 ニヤ にげ

述 ジユツ のぶ
迭 テツ タガヒニ
貮 チウ へかめ
甚 ジン はは いみじ はなはだし
—三紅 ジンザもみ
界 カイ さかい
畏 井 かしこし かしこむ おそる かしこまる
畋 デン かりす たつくる
畎 ケン みぞ たに
畑 はた はたけ
—奥實 はたすみさね
疣 イウ いひは こぶ いぼ
—取蠟 いぼたラフ
—茸 いぼしめぢ
疥 カイ ひぜん
—癩 はたけがさ はたけ
—癬 しつ
疫 エキ やまひ
癸 キ みづのと

皆 カイ みな
—素 からス
皇 クワウ すめ すめら
—女 ひめみこ
—后宮 きさきのみや
—祖母尊 すめらなやの みこと
—御祖 すめらみをや
—孫 すめみま
—睦 すべむつ すめむつ
盃 ハイ さかづき コツプ
盆 ボン ほとぎ
—東風 ボンゴチ
相 サウ シヤウ あひ
—扶 たがへし
—良 サガラ
—思版 よつだけ
—舅 あひやけ
—聞 あひぎえ
—撲 すまひ すまふ
—摸 サガミ
—嘗 あひなめ あひむべ
—樂山 サガラのやま
—應 ふさはし

—識 しるし
省 セイ シヤウ はぶく かへりみる
—狩 うけひがり
盾 ジユン たて
眉 ビ ミ まゆ まよ
—子 まびさし
看 カン みる
—督長 カドのをさ
—經 カンキン
眇 ベウ すがめ
眊 バウ かすむ くらし
眈 タン ふける
矜 コン ほこる
—羯羅 シン はぐ イハンヤ
矧 シヤ サ いさご すな
砂 シヤ ザリ ジヤリ
—利
—按子 ちごくむし
—鐵 こがひ
斫 シヤク きる
砌 セイ みぎり いしだたみ いぬき
砒 イ へ はぐ

祈 キ いのり いのる のむ
—年 としごひ
—狩 うけひがり
祇 ギ くにつかみ タダマサニ カサ子テ オホイニ
—園 かみのその
垂 ス井 しづ たる
禹 ウ のぶ
牲 セイ いけにへ
秕 ヒ しひな
秋 シウ あき
—小豆 あきあづき
—去衣 あきさりごころ
—沙 あいサ
—雨 あきさめ
—波 よこめ いろめ
—茄子 あきなす
—胡頽子 あきぐみ
—野罌粟 あきのげし
科 クワ しな とが
秒 ベウ のぎ

穿 セン うがつ
—心敗醬 かのこさう
—杏 うけぐつ
窃 セツ ひそか
窪 セイ おとしあな
突 トツ つき つく
—出 つんだす
—貫 つんぬく
紛 フン そぎ
—粉 ノフ たび
紝 ジン うはがひ おぐみ えり
袂 ベイ たもと
竽 カン さを
笔 したみ いさる
籾 ウ なは めぐる
紆 キ しらす もどる
紀 クワン しろきね
紈 ヤク おはさそ つづまり つけつづまり つづめ ホボ ホム子
約

糾 キウ ただす しらぶ
紅 コウ べに くれなゐ
—木犀 いぬがし
—牛蒡 べにシヤウガ
—果客爾 コウニツケル
—花 くれなゐ べに べにばな
—格子 コガウシ
—娘 てんたうむし
—海鰲軍 べにひとて
—毬筋 べにでまりざく ら
—孤 へびたけ
—葉 もみぢ
—絹 もみ
—猿子 べにましこ
—蓮 グレン
—頭嬢子 あからをとめ
—蟲 あかこ ももはづき
—雜魚 べにザコ
美 ビ うつくし
—人局 つつもたせ
—利米突 ミリメートル
—酒 うまびけ
—國 うましくに
—浪家裏 ミノのいへづと
—織 うまこり

者 シヤ もの ハ ティレバ
耐 タイ ヨク
虐 ギヤク しへたぐ
虻 バウ あぶ
虹 コウ にじ
蚋 ゼイ はなち
衍 エン あやまり
要 エウ かなめ もとむ カナラズ
—冬青 かなめもち
匂 クワウ ののめく
訂 テイ ただす
計 ケイ はかり はかる ハルカニ カナラズ
訃 フ つぐ いたる ものしらせ
貞 テイ ただし
頁 ケツ おほがひ ページ
負 フ まけ まく おほよ
—徒箭 おひソや
—無 おほ々なし
—暄 ひなたぼこり

赴 フ おもむく
臥 グワ ふす
—杵 よこづち
—機 くつびき
軍 グン いくさ
—催 いくさもよひ
軌 キ わだち あと
酋 シウ ふるやけ かしら
重 ヂユウ チヨウ おもかさね かさね おもし おもん ずん
—一 でつち
—吹 しぶき
—波 しきなみ
—盃 かさねかはらけ
—傷 おもで
—播 しきまき
—藤 しげトウ
厘 リン
面 メン つら おも おもて
—目 メイボク
—色 おもも
—皰 にきび にきる
—桶 メンツウ

—熱 おもほてり
—倒 メンダウ
—頷 もカウ
—繫 おもがい おもづら
革 カク あらたまる かは つくりがは
—足袋 かはたび
—茸 かうたけ
韋 イ なめしがは をしがは
—革 なめしがは
音 オン イン おと ね
—助緒 ねヅを
—博士 こゑのハカセ
—頭 オンド
砡 ミリグラム
風 フウ かぜ ふり
—土記 フドキ
—日祈宮 かざひのみや
—有草 かざウぐさ
—呂敷 フルしき
—花菜 すかしたこはう
—卷 しまき しまく
—師 かぜのかみ
—雅 みやびやか

—蛤 あかがへる
—稍蛇 からすへび
—鈴菜 くるまばな
—韵 くるまばな
—箏 うなり
—輪草 さくらサウ
—藤 くろくさ
厖 バウ
飛 ヒ とび とぶ
—白 かすり
—生蟲 かぶとむし
—香舍 ヒギヤウシヤ
—馬始 ヒメはじめ
—鳥 あすか
—廉 そそき
—廉草 ふにはてぐさ
—彈匠 ヒダたくみ
—頭鑾 ろくろくび
—龍頭 ヒリウヅ
—雙六 とびスゴロク
—蟻 はあり
—礫 つぶて たぶて
—競 とびくら
食 ショク シキ くらふ たべ
—物 をしもの おもの

—國 をすくに
—國政申大夫 ちすくにのまつりごとまうすつかさ
—殘 くひさし
—栄蕚 からすざんせう
—稻 けしね
—盤 をしき
—蟻獸 ありくひ
臥 グワ ふす ふせる
韭 キウ にら
鬥 くわんぬき
剄 レイ きれ
首 シュ はじめ くび おびと
—長 ひとこのかみ
—陀 スダ
—途 かどで
—鼠 ねやまひ
—懸 かうかけ
香 カウ かをり かをる かうばし かぐはし
—芋 なんきんまめ
—果 カグのこのみ カグのの
—附子 はるすげ カウブシ
—茄 ふつばぐさ

—魚 あゆ
—荓 かみら
—匙 キヤウシ
—莫泡 カグのあわ
—椿 ヒヤンチン キヤンチン
—圓 マルメロ
—蒲 かま
—菜 ねすみあぶら
—實 カグのみ
—褐 ヒヨンカツ
—緯白 カウのぬきじろ
—橘 くねんぼ
—螺 へまだり
—鍬 はひけし
—蒲 いぬえ
—櫞 まるぶしゆん
鳧 フ けり

十畫

乘 ジヨウ のる
—切 のつきる
—物雪踏 のりものセツダ
—取 のつとる
倉 サウ くら
—稻魂 うがのみたま
修 シウ をさむ をさまる

—行 スギヤウ
—法 ズホフ
—理職 をさめつくるつかさ
—殮 シユウ たちまち
—愈 あからさま
俱 ク とも トモニ
—樂部 クラブ
俳 ハイ たはおれ わざをぎ
—人 わざびと
—優 わざをぎ
俵 ヘウ たわら
俯 フ うつぶし うつぶく ふす
—向 うつむく
—伏 うつぶす
俸 ホウ ふち たまもの
俾 ヘイ ヒ したがふ シム
倍 バイ そはく ます マスマズ
俛 ベン ふす
倦 ケン うむ うんず
倥 コウ おろか ぬかる
倩 セン ツラツヲ
倫 リン ひ ひな みち すぢ

—鉤 かかり
—睫 まかさまつげ
掘 クツ つよし こはし
—里設林 グリスリン
倨 キヨ おごる まぐ
候 コウ さぶらふ さむらふ
併 ヘイ ならはす
倚 イ よる
個 カ コ ちぢ つ
偶 テキ はなやかなり
借 シヤク かり モシ タトヒ
倡 シヤウ わざをぎ
値 チ あたひ ね タマタマ
倣 ハウ ならふ
倦 ケン うむ うんず
倥 コウ おろか ぬかる
倩 セン ツラツヲ
倫 リン ひ ひな みち すぢ

倭 ヤマト
—文 しづり しづ
—文苧環 しづのをだまき
—文幣 しづぬさ
—文環 しづたまき
—織 しづり しどり
兼 ケン かく かね かけ マタ ト
—合 かけあひ
凋 テウ しぼむ
凌 リヨウ しのぎ しのぐ
—苕 しのぎ しのぐ
—晨 いなのめ しののめ
—霄花 のうぜんかづら のうぜんかづら のうぜう
凍 トウ いて こごゆ いつ こごる
—餅 しみもち
准 ジユン なぞらへ
凉 リヤウ すずむ すずし
凄 セイ すごし
剖 ボウ わかつ さく
—葦 よしむしり
—牛蒡 タウゴボウ
—辛 タウがらし
—胡桃 タウやるみ
剔 テキ のぞく とる をさむ
—刀 はぶくら
剡 サン げづる
剛 ガウ つよし
—者 つはものの ガウのもの
剝 ハク はぐ へぐ はがす
—身 むきみ
—篤使謨 ポッタシウム
—篤亞斯 ポッタース
剞 キ きざむ
勉 ベン つとむ つとめ
匪 ヒ アラズ ズ
匐 スウ はぐさ わら
冥 メイ くらし ミヤウ くらし とほし かずか
原 ゲン はら もと
叟 ソウ おきな
唐 タウ もろこし から
—土 タウのつち はつちり もろこし
—水母 タウクラゲ
—牛蒡 タウゴボウ
—辛 タウがらし
—胡桃 タウやるみ
—茄 タウなす
—苣 タウちさ
—柑子 からカウジ
—書 もろこしぶみ
—紅豆 タウささげ
—國鳥 からくんデウ
—棣花 はねづ
—黄楊 からつげ
—網 トあみ
—撫子 からなでしこ
—獨樂 タウこま
—櫃 からと からうと
員 イン かず
—内 かぞへのうち
哲 テツ きのりし さとし
唄 バイ うたよ
唇 シン くちびる
哭 コク なく
哨 セウ ちいさし ものみ
—吶 チヤルメラ
哩 リ マイル
哮 カウ たける さけぶ
唖 ハツ なく
—喇鳥 ハハツデウ
哥 カ うた あに
—薩克 コサック
唄 ケン はく
—吐 づだみ
唖 ほつと
唆 サ そそのかす そやす
唉 アイ とよ アア
哺 ホ くらふ はぐくむ
啗 タン くさく
哽 カウ むせぶ
哈 ガン ふくむ くちあく
圃 ホ はた
垂 スイ たれ たる たらす たして ナンナントス
—氷 たるひ
—尼 さげあま
—乳女 たらちめ
—乳男 たらちを
—乳根 たらちね
—柳 しだれやなぎ しだれなぎ
—髮 かぶりは はなは はなが
—櫻 しだれさくら しでさくら
垸 クワン ねる
—飯 わうバン
埃 アイ ほこり
—及 エジプト
埋 マイ うづまる うもる
埏 エン ねやす
埒 レツ らつ レチ
夏 カ ゲ なつ
—入 ゲのいり
—小豆 なつあづき
—安居 ゲアンゴ
—枯草 とりげぐさ
—茱萸 なつぐみ
—神樂 なつかぐら
—麻 なつそ
—越 なごし
套 タウ かさなる くま
—子 かけご
奘 サウ さかんなり
奚 ケイ イヅクンゾ ナンゾ
奮 ホン いしみ いしみけ ふご もつこ
皋 カウ
娑 シヤ さ
—婆 サバ シヤバ
娘 ジヤウ むすめ
娛 ゴグ たのしみ たのしむ
娓 ビ したがよ うつくし
娠 シン はらむ
娣 テイ おとよめ
娟 ケン エン みめよし うつくし たをやか
孫 ソン うまご まご
—生 ひこばえ ひこばゆ
—枝 ひこえ
宮 グウ キユウ みや
—内省 みやのうちのつかさ
—司 グウジ
—掌 クジヤウ
—職 みやづかる
宰 サイ つかさどる うしはく
宴 エン たのしみ さかもり

宦 クワン つかふ つかさ
宵 セウ よひ よる
—行 ほたる
害 ガイ そこなふ イツカ イヅレ
家 カ ケ いへ や
—人 いはびと
—母 いろは
—兄 いろせ
—司 ケイシ
—弟 いろと
—姉 いろね
—妹 いろと
—猪 ぶた
—鴨 あひる
宸 シン のき おほぞら
容 ヨウ かたち ベシ
—易 たやすし たはやすし
射 シヤ いる
—干 ひあふぎ
—干玉 ぬばたま むばたま
—外 いはづす
—走 やよせぎ
—梁 あむっち あづち
—圃 はたけ
—部 いめ
—陽文庫 いさわブンコ
—翳 ながし
—鞴 ゆごて
屐 ゲキ くつ げた
—子 ケイシ
屑 セツ くず いさぎよし コトゴトク クダクダシク
展 テン のぶ マコトニ
島 タウ しま
—回 しまわ
—義勇 しまよしたけ
峯 ホウ みね ね を
峻 シユン たかし けはし
峨 ガ みね たかし けはし
峽 カフ かひ はさま
峭 セウ けはし きびし
差 サ さし ヤ さす たがよ
師 シ のり をさ いくさ
—走 ジはず
—勞之 やつこだこ
辱 ジヨク かづ しむ かたじけなし はぢ
—涙 かだじけなみだ
席 セキ むしろ
座 ザ くら います ます
—主 ザス
庫 コ くら
—裡 クリ
庭 テイ には
—龍膽 にはリンダウ
弱 ジヤク よわる よわむ よわし
—竹 なよたけ
徐 ジヨ おもむろ しづか ヤウヤク オモムロニ
—徐 やをら
徑 ケイ わたり こみち タダナニ
—緯 いくたて
徒 ト タダ むだ かち タダニ タダラニ ムナシク
—目 だめ
—立 かちだち
—世 あだしよ
—然 つれづれ
—罪 ザイ
—廣 ただつひろい
悁 ケン うれふ いかる
悋 リン をしむ
悚 シヨウ おそる
悖 ハイ もとる
悔 クワイ くゆ くやむ
悌 テイ やすし
悩 ノウ なやむ
悸 キ たけし あらし
悍 カン たけし あらし
悅 エツ よろこび よろこぶ
悃 コン まこと まごころ
悟 ゴ さとり さとる
悒 イフ うれふ
悉 シツ おす ひらく
挨 アイ
挫 ザ くじく
振 シン ふり ふる
—散髮 ぶつちらがみ
—舞 ふるまひ
挺 テイ てこ チヤウ
—子 てこ
挿 サフ さし さす はなみ
挾 カフ はさむ
—目 はざめ
—間 はざま
—箱 はさんはこ
捉 ソク とらへ かまへ
—迷藏 めかくし
—緒へを
捃 クン ひろひとる
捌 ハツ さばき はける さばく わかつ
捐 エン すつ へす
捕 ホ とら とらへ
捗 ホ はかど はかどる をさむ
浚 シユン さらへ さらへ
—井 ゐさしる
浦 ホ うら
—曲 うらま うらわ
流 リウル ながれ ながる ながす
—石 さすが
—行 はやり
—通 はけ
—鏑馬 やぶさめ
涌 ヨウ わき わく
浩 カウ ゆたか したむ
浙 セキ よなぐ
—水 ゆきみづ
浪 ラウ なみ ミダリニ
—逆浦 なさかのうら
—華 なには
—速 なには
浣 クワン すすぐ
浮 フ ブウ うき うかむ うかぶ
—子 うけ うき
—石 うきいは うるいし
—石糖 かるめら
—空 うはのそら

—垢 きら
—根 そらね
—氣 うはキ
—海松 うきみる
—匏 おふしひさご
—腫 むくみ
—壓子 うんか ねかが

浴 ヨク あむ
—衣 ゆかた
—槽 ゆぶね

海 カイ うみ わた
—人 あま あまびと
—上祇 うながみこ
—士 あま
—水母 うみくらげ
—月 くらげ
—中 わたなか
—仁草 どくさくり
—石榴市 つばいち
—布 め
—市 なご
—州寄山 くさぎ
—老 えび
—松 みる みるめ
—幸 うみさち
—拂子 うみホツス
—苦 のり
—苦菜 ちさのり
—若 わたつみ
—神 わたつみのかみ
—神社 わたのジンジヤ
—豚 ほたてがひ
—豹 あざらし ねつぶ
—原 わたのはら
—馬 たつのおとしご
—桐花 どべらのき
—栗 うに
—部 あま
—豚 いるか
—蛆 ふなむし
—蛤 うむき
—帶 あらめ
—華皮 カイヲギ
—黃顏 うみぎぎ
—參 いりこ
—絲瓜 うみへちま
—梟 セイツチ
—鼠 いりこ なまこ
—鼠腸 このわた
—鄕 わたつみのくに
—境 うなさか
—綿 すぼんじ うみわた
—蟹 うみにな
—團扇 うみうちは
—酸漿 うみぶほづき
—髮 いがすのり おごのり うこ
—燕 いとまきひとて たこのまくら
—嘯 つなみ
—盤車 ひとて
—蟬 はい
—獺 トド
—膳 うに
—糠 あみ あみえび
—鯽 うみたなご かいづ
—鰻 あなご
—鰻鱺 はも
—髑子 やし
—髏 みち

浸 シン つかる ひたす
涅 デツ 子ナ くり くろむ くろつち
—槃 子ハン

梁 リヤウ うつはり
消 セツ きやす きゆ けす
—息子 ぼんぼり
—梨 みづなし
—殘 けのこる

涉 セフ わたる
涎 セン エン よだれ
涓 ケン えらぶ
涕 テイ なみだ はな
浴 ガン あか ゆ よなゆ
—牛兒 げんのしようご
—溜 あかま
浬 リ カイリ
狹 ケフ さ せまし
—丹頂相 さにづらよ
—衣 さごろも
—席 さむしろ
—間 はさめ さま
—筵 さむしろ
—縫 さぬひ
—織 さおり
狸 リ たぬき
—毛 たげ
狼 ラウ ころかみ
—牙 こまつなぎ
—火 のろし
—尾稗 いねびえ
—杷草 たうごき
—烟 のろし
郎 ラウ をつと をとこ
—女 いらつめ
—子 いらつこ
—姬 いらひめ
郡 グン こほり
—鄂 エイ
陛 ヘイ きざはし
陞 ショウ のぼる すすむ
陟 チヨク のぼる たかし
院 ヰン かき やくしよ てら
陣 ヂン ならぶ いくさ そなへ
除 ジヨ のく のぞく
—月 トゲツ
—目 ヂモク
恐 キヨウ かしこ おそれ おそる
—氣 おぞケ
恕 ジヨ ゆるす
恙 ヤウ つつが やまひ うれひ
烝 ジヨウ ゴコニ すすむ アア
恚 イ いかる うらむ
恋 シ こしいまま シキリニ
恩 オン めぐむ いつくしむ
恭 キヨウ うやうやし
息 ソク いき おき いこよ
—吹 いぶく
—長鳥 しながどり
耻 チ はぢ はづかし
恥 チ はぢ はづ はづかし
耽 タン たのしむ よける
耿 カウ ひかり あきらか
扇 セン あふぎ
—骨木 かなめもち
拿 ダ 拏の俗字
拳 ケン こぶし
效 カウ いたす いさを しるし
料 レウ ハカルニ
—理 レウる
—理百合 レウりゆり

旁 ボウ かたがた つくり
旃 セン ら はす コレ
旅 リヨ たび きのはた
—行 たびありき
—籠 はたご
旄 バウ はたぼこ おいぼれ
晏 アン おそし
晃 クワウ かがやく
晉 シン すすむ おさよ
時 ジ とき コノ コレ
—雨 しぐれ しぐる
—雨饅頭 しぐれマンヂユウ
—計 とケイ
—鳥 ほととぎす
—節 しぢ
晒 シヤ さらし さらす
—木 されき
書 シヨ かく ふみのつかさ ふんのつかさ
—司
朕 チン われ
朔 サク はじめ ついたち
—日 ついたち
殺 サツ セツ こす そぐ
柴 サイ しば ふし
—折戸 しをりど
—胡 のぜり
—檀雨 しばくれあめ
桑 ソウ くは
—屬 さめざはし
栗 リツ くり
—鼠 リス
栞 カン しをり
案 アン つくえ ココニ かんがよ
—山子 かがし そほど
—摩面 アマつら
朽 クワウ
—椰 つぐ
框 キヤウ かまち かせ あしらよ ただす
校 カウ ケウ かせ しらぶ かんがよ
—倉 あぜくら
株 シユ かぶ くひぜ
楯 ジ たてがた
—東 たたらづか
核 カク さね
—子 さなご
栲 カウ たく たへ
—領巾 たくひれ
根 コン ね
—太 ねぶ
—助緒 ねすを
—堀 ねこじ ねこぶ
—菖蒲 ねあやめ
—際 ねぎ
—蓴 ねねなは
—機子 コンパス
—靈 ルーデサツク
格 カク いたる キヤク
—子 カツシ
—魯布 コロウブ
桁 カウ けた
桂 ケイ かつら
—樹 もくせい
桃 タウ もも
—瓜 うべうり からすうり
—石 からすうり
—刺紅毋 ウラニユーム
—柿 あまつし あまはし
—草樹 させのき させよのき
—梅 ウバ
—帽子 エボン
—悲 ウシチ
—悲沙摩 フヅザマ ウスサマ
—賊 いか
—群 ツコ
—滑 チコ チコめく
—頭 くはゆき ウヅ
—蠋 いもむし
—蔬苺 やぶからし
—炷 エイ ケイ あきらか
烙 ラク やきぶり
—彈 やきだま
烟 エン けむり けむ けむる
—度 けぶたし
—草 たばこ
—埃 たきほこり
—筒 キセル
—管匠 キセルはり
特 トク ことニ ダダ ヒトリ
—牙 こはせ
—花鳥 つき とき
—花鳥色 ときいろ
—花染 あらぞめ
—花毛馬 つきげうま
—花鳥田丘上陵 つきたのさかのへのみささぎ
—星壽 アメンドウ
桐 トウ きり
栽 サイ うう わかめ
桓 クワン かけし
桔 ケツ はねつるべ
—梗人參 キキヤウニンジン
—槹 はねつるべ
栓 セン くちぎ
桀 ケツ あらし わるもの
—步 かに
栖 セイ すむ
栫 セン
桄 カウ
桂 カイ
桃 タウ もも
—瓜 うべうり からすうり
—石 からすうり
—刺紅毋 ウラニユーム
—柿 あまつし あまはし
—草樹 させのき させよのき
—梅 ウバ
—帽子 エボン
—悲 ウシチ
—悲沙摩 フヅザマ ウスサマ
—賊 いか
—群 ツコ
—滑 チコ チコめく
—頭 くはゆき ウヅ
—蠋 いもむし
—蔬苺 やぶからし
—炷 エイ ケイ あきらか
烙 ラク やきぶり
—彈 やきだま
烟 エン けむり けむ けむる
—度 けぶたし
—草 たばこ
—埃 たきほこり
—筒 キセル
—管匠 キセルはり
特 トク ことニ ダダ ヒトリ
—牙 こはせ
—花鳥 つき とき
—花鳥色 ときいろ
—花染 あらぞめ
—花毛馬 つきげうま
—花鳥田丘上陵 つきたのさかのへのみささぎ
—星壽 アメンドウ
桐 トウ きり
栽 サイ うう わかめ
桓 クワン かけし
桔 ケツ はねつるべ
—梗人參 キキヤウニンジン
—槹 はねつるべ
栓 セン くちぎ
桀 ケツ あらし わるもの
—步 かに
栖 セイ すむ
栫 セン
桄 カウ
桂 カイ
桃 タウ もも
—牙 こはせ
—花鳥 つき とき
—花鳥色 ときいろ
—花染 あらぞめ
—花毛馬 つきげうま
—花鳥田丘上陵 つきたのさかのへのみささぎ
—星壽 アメンドウ
桐 トウ きり
栽 サイ うう わかめ
桓 クワン かけし
桔 ケツ はねつるべ
—梗人參 キキヤウニンジン
—槹 はねつるべ
栓 セン くちぎ
桀 ケツ あらし わるもの
—步 かに
栖 セイ すむ
栫 セン
桄 カウ
桂 カイ
桃 タウ もも
—瓜 うべうり からすうり
—石 からすうり
—刺紅毋 ウラニユーム
—柿 あまつし あまはし
—草樹 させのき させよのき
—梅 ウバ
—帽子 エボン
—悲 ウシチ
—悲沙摩 フヅザマ ウスサマ
—賊 いか
—群 ツコ
—滑 チコ チコめく
—頭 くはゆき ウヅ
—蠋 いもむし
—蔬苺 やぶからし
—炷 エイ ケイ あきらか
烙 ラク やきぶり
—彈 やきだま
烟 エン けむり けむ けむる
—度 けぶたし
—草 たばこ
—埃 たきほこり
—筒 キセル
—管匠 キセルはり
特 トク ことニ ダダ ヒトリ

—牛　ことひうし　ことひ
珪　ケイ
珠　シユ　たま
—母　あこやがひ
—數　ジユズ
—鷄　ほろほろデウ
珥　ジ　みみだま
班　ハン　わかつ　くらゐ
珮　ハイ　おびもの　おもの
脊　セキ　せ
—乾鰒　せびくちら
—腸　せわた
胴　ドウ　ふとわた
胸　キヨウ　むね　むな
—座　むなぐら
—膛　むないた
胯　コ　また
胼　ヘン　たこ
—胝　たこ　まめ
能　ノウ　よく　たぶ　あたよ
—引　よつびく

脅　ケフ　おびやかす
胭　エン　のど
—脂　べに
脂　シ　あぶら　やに
—肉　あぶらみ
—河豚　あぶらふぐ
脇　ケフ　わき
—臭　わきが　わきくさ
—楯　わいだて
脆　ゼイ　もろし
脈　ミヤク　すぢ　みち
茱　シユ
—萸　ぐみ
茈　シ　むらさきさう
茗　ミヤウ　メイ
—荷　メウガ
茖　カク　やまにら
—葱　あらら　ぎ
荔　リ　おほにら
—枝　レイシ
茜　セン　あかね

—刺　あかねさす
—根蔓　あかね
茨　ジ　いばら　うばら
—城　いばらきウドン
茫　バウ　ひろし　はるか
茭　カウ　うらぜり　まぐさ
—薑　かちゆう
茯　フク　まつほど
—苓　まつほど
茴　クワイ　ウ非きやう
—香　ウ非きやう
茵　イン　しとね
—芋　につつじ　なかつつじ
—蘢尚　かはらよもぎ
茶　チヤ　サ　ダ
—巾百合　チヤキンゆり
—焙　チヤはうじ
—蕎麥　チヤそば
—鐺　チヤがま　チヤわかし
茸　ジヨウ　かり　みだる
茹　ジヨ　ゆで
莞　ジユウ　めはじき

筍　ジユン　たけのこ
—子　たけのこ
荇　カウ　あさざ
—菜　あさざ
草　サウ　くさ
—石蠶　をれろぎ　ちやうんぎ　ちよろぎ
—名　サウな
—把　まきわら
—臥　くたびれ
—場　かやば
—鹿　くさじし
—間茹　ちぐさ
—蛭　かさびる
—鞋　わらぢ　わらんぢ
—鞋鯛　ころびがひ
—蓮化　くさレンゲ
—潛　かきぐき　かやぐき
—薦薔　あれん
—蘇鐵　くさソテツ
荏　ジン　え
—草　ジンだう
—苒　へへやか
—裹　えづつみ

荒　クワウ　あら　あれす　すさむ　すさび　すさみ　オホイニ
—木弓　あらがきゆみ
—手結　あらてつがひ
—布　あらめ
—男　あらちを
—屋　あばら
—神　あらみあさぎ
—堂　あばら　すダウ
—磯　ありそ
迷　メイ　まよひ　まよふ
—子　まよひご
—言　まよひとご
—兒　まよひ
—草　まひりぐさ
追　ツイ　おふ　ツイデ
—儺　おにやらひ
—羽子　おいはね
—物射　おんものい
—從　ツイ　ソウ
退　タイ　しりぞく　のく
—引　のつぴき
—治　タイぢる
迺　ナイ　ダイ　スナハチ

送　ソウ　おくる
迸　ハウ　たばしる　ほとばしる　とばしる
逃　タウ　のがる　にがす　にぐ
逅　コウ　カまゝかにあふ　アカラサマニ　タマタマ　ギヤク
逆　さかしま　さかう　さかさ　アラカジメ
—上　のぼせ
—叉　さかまた
—風　むかひかぜ
—燒　むかひび
—頰腹　さかづらのえびら
戝　テツ　ちひさきうり
—鮑　おちふ　たちふり
留　リウ　ル　とどまる　とよる　とむ　とどめる　ルーピ　ルーブル
畜　チク　けだもの
畛　シン　もと　さかひ　いたす
畔　ハン　あぜ　くろ
畝　ホ　ボウ　せ
畠　はた　はたけ
疱　ハウ　はれやまひ　もがさ
—瘡　もがさ

疲　ヒ　つかれ　つかる
—眼　ふたかわめ
疽　ソ　はれもの
疾　シツ　とし　やまひ　にくむ
—風　はやち　はやて
—來神　とこよのかみ
—渡　とわたる
痂　カ　さばた　かさびた
—殼　ひせ
痃　ケン　ひきつるやまひ
疼　トウ　うづく　いたむ
痀　ク　せむし　くぐせ
病　ビヤウ　やまひ　やむ
—犬　やまいぬ
—者　バウザ
—葉　わくらば
疳　カン
痧　ヒ　あせも
—子　ほろし
症　シヤウ　やまひ
痺　ヒ　みつ

益　エキ　ます
—母草　ヤクモサウ
—荒男　まずらを　まずらをとこ
—荒我　まずらわれ
—無　やくなし
盌　ワン　もひ　わん　さち
盍　カイ　カウ　おほふ　ナンゾセザル
眞　シン　まこと　ま
—人　まうど　まつと
—中　まんなか
—手番　まてつがひ
—白　まつしろ
—田　まなだ
—甲　まつカフ
—正直　まつシヤウヂキ
—字　まな
—折　まさき
—沙　まさご　まなご
—沙魚　まはぜ
—赤　まつか
—似　まね
—幸　まさきく
—委曲　まつぶさ
—青　まつさを
—而目　まじめ

—砂　まさご　まなご
—直　まつすぐ
—直中　まつただなか
—娘　まなむすめ
—烏賊　まいか
—魚食　まなぐひ
—魚板　まないた
—魚鰹　まなかつを
—麻　まを
—暗　まつくら
—辟蔓　まさきのつな
—辟　まさき
—最中　まつサイチユウ
—逆樣　まつさかさま
—盛　まつさかり
—裸　まつはだか
—晝　まつひる
—晝中　まつひるま
—槇葛　まさきかづら
—鯖　まか
—赭　まそほ　まそは
—精　ましらげ
—實　まんたう　まは
—鶴　まなづる
—冕　メイ　マサニ
眠　ミン　ねむり　ねむる

眩　ゲン　めくるめく　まはゆし
矩　ク　のり　まがりがね
砥　シ　テイ　と
砭　ヘン　いしばり
—針　いしばり
破　ハ　やぶる　わる
—子　わりご
—生薑　やぶれショウガ
—風　ハフ
—落戸　たろつき
—亂　わわく　わわくる
砰　ハウ　いしのとゝ
砧　チン　きぬた
砲　ハウ　つつ
—手　うちて
祟　スイ　たたり　たたる
祐　イウ　さいはひ　たすく
祖　ソ　おや
—父　おほぢ　おぢ　ぢぢ
—母　おばば　おば　うば
—母獄　うばがたけ
祓　フツ　ばらひ　はらふ　はらへ

祚　ソ　さいはひ　くらゐ
祓　フツ
祝　シユク　いはふ　ほぐ
—人　はふりと
—竹棒　ほいたけボウ
—部　はふり
—詞　のりと　のつと　のりとごと
神　シン　かみ　かん
—子　みこ　かんこ
—切衣　かんみぞ
—木　さかき
—戶　かむべ　かんべ
—主　かうぬし　かんぬし
—代紀萃牙　ジンダイキあしがひ
—立　かんたち
—仙菜　あなのり
—衣　かんみぞ
—祇伯　かみづかさのかみ
—酒　みき　みわ
—祝　かんほぎ
—馬藻　なのりそ
—託　のりぎ
—部　かんとも　かんべ

—宿　かんやどり
—稅　かんぢから
—集　かんつどへ
—駐　かんづまる
—遣　かんやらひ
—漏岐　かわロギ
—壽詞　かんよごと
—樂　かぐら
—樂衣　おほよそどろも
—舘　かんたち
—機織　かんはとり
—隨　かんながら
—管祭　かんなめまつり
—鎭　かんづまり　かんづまる
—議　かんはかり　かんにかる
—雛　ひほろぎ　ひもろぎ
—籠　みもろぎ
—籠石　かうごいし
祠　シ　ほこら
秦　シン　はた
—皮　とねりこ　たむのき
—尤　つがりぐさ　はかりぐさ
—吉了　サルカ
—椒　さんせう
租　ソ　みつぎ　かりもの

秩 チツ ついで つかさ ふち
秤 ヒヨウ はかり はかる
—匠 はかりや
—索 とりを
—盤 はかりざら
秣 バイ まぐさ
—槽 まぐさをけ
秘 ヒ ひむ
窈 エツ ふかし くらし
宵 エツ ふかし うらみのぞむ
窄 サク せまし つまむ すぼむ
站 タン ひさしくたつ
罠 ビン ミン わな つる うさぎあみ
袍 ハウ うわ のきぬ ありさき
袒 タン かたぬぐ
袗 シン へり ひとへ
袖 シウ そで
—時雨 そでしぐれ
—着衣 そでころも
被 ヒ ふすま おほふ かぶる かうむる かつぐ ラル

—下 くださる
—下物 くだされもの
—衣 かつぎ
—使者 つかはれもの
—物 かづけもの かづけもの
—風 ひいほん
—間草 とはれぐさ
—憎子 にくまれつこ
—憎口 にくまれぐち
袖 ハ バツ あこめ とはり
笋 シユン たかうな たけのこ
笄 サイ かうがい
—曲 かうがいぐる
笆 ハ いはらだけ
笏 コツ しやく さく
—柏子 しやくにやツシ
笑 セウ ゑむ わらふ
—柄 わらひぐさ
—資 わらひぐさ
—種 わらひぐさ
笊 サウ いかき ざる
—蕎 ざるそば
—籬 ませて むぎこくひ

笈 キフ おひ ふみはこ
粉 フン こな
—弼 ふずく
—熟 ふずく
—餐 しんこもち
素 ソ もと アラカジメ モトヨリ
—人 しらうと
—手踊 スてて とをどり
—見 ひやかし
—性 スジヤウ
—皿垂 スぴたたれ
—破拔 スツパぬく
—海松茶 スみるチヤ
—晴 スばらしい
—顔 あながほ スがほ
—鐵 スがね
索 サク むね
—麵 サウメン
紋 モン プン もやう かた
紊 ビン ブン みだる
納 ナフ ナ なさまる をさむ
—戸 ナンド
—豆 ナツトウ

—言 ナゴン
—所 ナツシヨ
—屋 ナヤ
—涼 すずみ
—得 ナツトク
紐 チユウ ひも かほ
—釦 ボタン
純 ジユン ほつる
紕 ヒ ひよひ ほつる よる
紗 シヤ サ うすきおりもの
—綾 サヤ
紙 シ かみ
—下蟲 うながし
—手 かうて かうつかみ
—屋紙 やがみ かみヒヤウブ
—屏風 かんぶくろ
—袋 かうより かうひねり
—捻 いか たこ
—鳶捻 かんぜんより
—幣 さつ
—絰 かうより こより
級 キフ しな
—絕布 しなだゆフ

紛 フン まがふ まぎる まぎれ こぼ つはし
紡 ハウ つむぐ
—苧 うみを
—絲車 はやそ
—錘 つむ つみ
紜 あざふ あざはる あさなよ
缺 ケツ かけ かく
—片 かけら
—唇 いぐち
羌 イウ みち みちびく
—活 うどもかき
—桃 くるみ
翁 チウ おきな をち
—進 おきなさび おきもさぶ
竝 ヘイ むらぶ
翅 シ つばさ
耄 バウ おゆ おいぼれ
—老 マウろく
耆 キ おゆ こしより
—婆草 ルーダ
耕 カウ たがやす たがへす

耗 カウ めり へる つひやす
耘 ウン くさぎる
耙 ハ まぐは
臭 シウ くさし にほよ
—水 くさうづ
—素 ぶるおむ
致 チ いたす おほム子 ジム
—齋 をみ
舐 シ しやぶる なめづる わぶる
—瓜 まくはうり
舫 ハウ もやひ むやひ もやよ むやよ
般 ハン めぐる はとぶ かへづ
—若 ハンニヤ
航 カウ よね わたる
蚍 ヒ おほあり
蚩 シ あざける あなどる
蝌 ゼン うはみ
蚊 ブン か
—丹鳥 かすひどり
—母樹 いず

—食 かつくひ
—飛白 かがすり
—蠣 かや
蚌 バウ どぶがひ はまぐり
蚋 ゼイ ぶと
—子 ぬかご
蚓 イウ あくた かい
蚜 カ かみ きしる
—蝨 ありまき
蚤 サウ のみ
衷 チユウ まこと こころ
衰 スイ おとろふ
衾 キン ふすま
袁 エン
訊 シン ジン じぶ かづね ことは
討 タウ うて
—手 うて
訐 ケツ あばく
訓 クン ケン をしへ よむ よみ をしふ
訕 サン そしる

託 タク かこつ かこよせる かたこ タクす
—言 かごと
—馬野 つくまね
訖 キツ をはる スデニ カツテ コトゴトク
記 キ しるす
豈 キ あに
豁 セウ ゆにす
豹 ヘウ
豺 サイ やまいぬ
冢 チヨウ つか をか
財 ザイ からリヅカ
貢 コウ みつぐ みつぐ
隻 セキ ひつ かたわれ
起 キ ムく サラニ おこる
—端 たちは
躬 キユウ みづから み
軒 ケン のき
—廊 コンラウ

酌 シヤク くむ
配 ハイ くばる
酒 シユ さけ き
—外 さかはづれ
—母 もと
—注 ちろり
—帘 さかはた
—祝 さかはがひ
—神 くしつかみ
—章 さかのり
—湯 さゆ
—精洋煊 アルコールランプ
—醋 さかみひ
—甕 みわ
—醬 さかしほ
—蟻 さかぎさる
釜 フ かま まろかなへ
—祓 かぶンばらへ
—茹 かさゆで かまうで
釘 テイ くぎ
釚 キウ つく
針 シン はり
—孔 めど
—河豚 はりふぐ

—魚 さより はりを
—獨活 はりうど
—螺 はりなすび はりにし
閃 セン ひらめく
飢 キ うう う
馬 バ マ メ うま むま マルタ
—子 マと
—毛 す
—爪 ぶつ
—手 メて
—牙骨 うまのきばね
—自物 うまぢもの
—尾 す
—尾韜 ぶをぶくろ
—刷 うまはだけ
—姦 うまたはり
—架 うまとめ
—脊瘠 たこ
—城 うまき
—居 をひしば
—被 うまぎぬ
—陸 やすて

—部 メブ
—切 やぶたま たにぶすべ ほこりだけ
—蛤 まて
—陰貝 うまのくちかひ
—糠 こまつなぎ
—塞 うませ
—道 メダウ
—鈴蓍 じやがいも じやがたらいも
—銜 はみ
—鬗鬼 いばひづる
—察 うまのつかさ メレウ
—醉木 あしび あせぼ
—頭 メズ
—頭娘 かこひ
—鮫魚 さはら
—猲活 うまうど
—錢 マチン
—鍬 まんが
—鞭旱 うまつづら
骨 コツ ほね
—合 コツあひ
—佛 コツほとけ
—柄 コツがら
—牌 カルタ
竜 リユウ おこ 龍の古文字

高 カウ たかし
—砂 たかごと たかすなご
—座 たかくら
—處 たかみ
—假廐 たかさじき
—御座 たかみくら
—貴人 あてびと
—麗 こま
—襟 ハイカラ
鬼 キ おに
—毛蕓 おにがらし
—五加木 おにうこぎ
—田平子 おにひらこ
—油麻 ひきよもぎ
—宿 おにほし
—野老 おにどころ
—督郵 はぐま
—綠 おにもび
—齒 いしづき
—蝦蟇 おにわくどう
—燈 ほほづきヤウチン

十一畫

乾 ケン いぬ かわく ほす
—女 からをんな

苔 あをのり ほしのり
—海鼠 ほしなまこ
—栗 かちぐり
—梅 うめぼし
—梅雨 からつゆ
—唾 かたづ
—飯 かれいひ ほしいひ
—稻 からね
—鯉 ごまめ
—鮭 からざけ
—麵包 ビスケツト
—鰯 ほしか
—鱧 でんぎり
—癬 はたけ
偃 エン ねぐらす たふる
偈 ゲツ すみやか たけし
假 カリ ケ タダ モシ
—令 たとひ
—名 かな かんな
—字 かな
—初 いさめ かりそめ
—庇 さしき
—臥 うたたね
—齒 いれば
—髮 つけがみ
—漆 ニス
—粧 シヤウ
—聲 こわいろ
偉 井 おほいなり さかんなり
偸 チユウ トウ ぬすむ
偏 ヘン たよる ひとへ ヒトヘニ
—日 めつかち
—盲 かためくら
—突 へンつき
偕 カイ ともに つよし トモニ
停 テイ チヤウ とどまる とどむ
健 ケン すこやか
—兒 こんでい
—氣 ケナゲ
傲 サ なす
側 ソク かたはら かたへ そば
—子 そばりこ
—見 あからめ
—柏 このてがしは
偶 グウ たまたま たまさか
—中 たぐれあたり
偵 テイ うかがふ さぐる
偖 シヤ さく さて
修 ゲン にせもの
兜 トウ かぶと
—羅綿 トロメン
冕 ベン かんむり
剪 セン きる はさむ
—刀 はさみ
—刀草 しろくわゐ
—刀股 はさにがな
—金瓜 たつグワンサウ
剩 ジヨウ あまつさへ
副 フク フ そふ すけ
—司 そふす
—車 ひとだまひ
—馬 うつし うつしうま
勒 ロク くつわ ほる
動 ドウ うごく うごき はたらく ヤヤモスレバ スナハチ
—搖 ゆさぶる
勘 カン かんがふ かんがへぶみ カモン
—文
—定盡 カンヂヤウヅク
—處 カンド カンどころ
—解由 カゲユ
務 ム つとめ つとむ
匙 シ ジ かひ さじ
匏 ハウ つぼ ふくべ ひさご
匭 キ はこ
—函 めやすはこ
匿 トク ヂヨク ふくる かくす
—路 にげみち くけぢ
區 ク まちまち さかひ しな わかち
—區 まちまち
匾 ヘン ひらたし ひらむ
卿 キヤウ ケイ あきらかに なんぢ
參 サン シン まゐる まじはる
—人 まうづ
—上 まうのぼる
—內傘 サンダイがさ
—來 まうく
—星 からすきぼし みつぼし
—音聲 まゐりオンジヤウ
商 シヤウ あきなふ あきなひ
—人 あきんど
—柏 あきがしは
—宮律 シヤギリ いはつき
—陸 ゐなごはう
問 モン とひ とふ
—荊 すぎな ごうな
啓 ケイ ひらく
啗 タン くらはす くむ
啌 うそ
嗜 サク アア さけぶ
唸 ゲン ゴン うなる
唯 ユイ 井 ただ なを
—一教 ユニテリアン
唱 シヤウ となへ となふ
—歌 ソウカ
唾 ダ つば つばき
—壺 はいよき
啖 タン くらふ
啄 タク ついばむ
—木鳥 てらつつき きつつき
啜 テツ セツ すする
—漢 すすはな
啞 アク おし アア
—鈴 ダンベル
唖 ガイ いがむ ゲ
唫 ギン どもる
圈 ケン なり ひとや
圉 ギヨ うまかひ ひとや うまや
國 コク くに
—中 くぬち
—平矛 くにむけのほこ
—忌 コキ
—栖 くず
—府 コフ
—麻 くにのぬさ
—造 くにつこ くにのろやつこ
—寬 くにまぎ
基 キ もと もとゐ もとづく
—督敎 キリストケウ
堂 ダウ ただし おもてむき
—司 ダウス
—童子 ちご
堅 ケン かたし

—人 かたジン
—香人 かたがた
—魚 かつを
—盤 かきは
—藏 かたザウ
埣 サイ しめ
埴 ショク はに へなつち
—生 はにふ はにへ
—瓶 はにへ
彗 スイ 井 はうき ははき
執 シフ とらふ とる
—翳 はさり
培 バイ つちかふ
—壞 つひぢ
堋 ホウ あづち
埼 キ きしのくま
堀 コツ クツ ほり ほる あな
堆 ツイ 井 タイ うづ うづだかし
婁 ル ロ ちりはひ ひく
婆 バ ハ はは しうとめ
—娑納 いぬのふぐり
娵 ソウ よつくしきをんな
娶 シユ よめ めとる よめいる
—合子 よめのガフシ
—御器 よめのゴキ
—菜 うはぎ よめな
婪 ラン むさぼる つつしまず
娼 シヤウ わざをぎ
婀 アク たをやか
—娜姿 なよびすがた
婿 シヨ むこ
婚 コン よばひ よばふ
婢 ヒ はしため
婥 シヤク うつくし
婦 フ よめ をんな
婉 エン したがふ しとやか
婬 イン たはく たのしむ
—行 そそり
宿 シユク スク やど やどり やどる
—下 やどり やどさがり
—世 スクセ
—直 とのゐ
—直寮 とのゐやつれ
—鳥 とまりどり
—彌 スクね
寂 ジヤク セキ さびし
寃 エン むじつ
寄 キ より よる よす
—生 やどりぎ ほや
—肉 こくみ
—居蟲 がうな やどかり
—席 よせ
寅 イン とら
密 ミツ ひそか みそか ヒソカニ
—密 ひそひそ
—篦子 すきぐし
寇 コウ あだ あだす
專 セン もはら もつぱら
—女 たうめ
將 シヤウ ひきゐる トキモツテ マサニ ハタ 井 じよう
尉 ヰ じよう
—面 どようのおもて
崒 シユツ みね あつまる
崇 シウ ソウ あがむ
崖 ガイ がけ
—稜 いさすげ
崔 サイ たかし おほいなり
崩 ホウ くづる くづす くゆ
嵶 クツ そばだつ たかし
崎 キ さき みさき
嶝 ソウ たかし けはし
巢 サウ すくふ
帳 チヤウ とばり
—元 チヤウもと
—奴掛 チヤウドがけ
帶 タイ おび
—刀 たちはき たてはき
—刀先生 たてはきセンジヤウ
—水母 おびくらげ
幗 エン ワン きれ たちあより
帷 イ 井 とばり
—子 かたびら
常 ジヤウ つね とこ とこしへ
—井 とこゐ
—少女 とこをとめ
—世 とこよ
—足 ひたし
—滑 とこなめ
—陰 とかげ
—緣樹 とこはぎ
—陸帶 ひたちおび
—磐 とこいは とこきは
—聲 とこは とこゑ
—體 つねテイ
庵 アン いは いぼり
—木瓜 いぼりモクコウ
—室 アンジツ
庶 シヨ もろもろ コヒ子がハグハ
康 カウ やすし
庸 ヨウ つね モツテ イヅクンゾ
—布 ちからぬの
張 チヤウ はり はる
—着 はつき
彫 テウ ほり ほる ゑり ゑる
得 トク うえ ラル
—錢子 トクセにこ
徘 ハイ たはむれ たちもとほる わざをぎ
—徊 おもとほる
術 ジユツ すべ
衒 ゲン てらふ てらはす
徇 シヤウ たちもとほる
從 ジウ ジユウ シヨウ したがふ ヨリ
—兄弟 いとこ
—者 ズサ ズンサ
—舅 ははかたのおほをぢ
—騎 ともの り
御 ゴ ギヨ おん おほん お み
—下若衆 おしたのわかシユ
—土產 おみやげ
—手洗 みたらし

—末衆 おずえシユウ
—首 みぐし
—代 みよ
—便 おやン
—仕置 おシおき
—乳人 おちのひと
—出座 おでまし
—乳母 おんば
—生 みあひ
—家人 ゴケニン
—石神 おシヤクジ
—茶子 おチヤのこ
—在 おはす
—強 おこは
—衣 おんぞ みけし
—酒 みき
—衣木 みそぎ
—頭 おつむ
—衣糧糠 みそひめ
—盃 みもひ
—冷 おひや
—修法 みジホ
—休暮 みやヤク
—休所 みやすどころ
—夜成 およんなる
—佩 みはかし
—伽 おとぎ
—席 みまし
—法 みのり
—侠 おきやん
—形 みあれ おギヤウ
—高祖頭巾 おコソヅキ
—匣 みくしげ
—執 みとらし みたらし
—幸 みゆき
—娠 おむず
—巫 みかんのこ みかんこ みかんなぎ
—華足 おケソク
—許 おもと
—拈 おひねり
—統 みすまる
—舍 みあらか
—持 おもたせ
—洗米 おくま
—番成 ゴバンなり
—食 みけ
—調 みつき
—座 おはします
—厨子 みヅシ
—座在 みまそがり
—搗餅 おかちん
—封 みプ
—紫 おむら

—厨 みくり
—溝 みかはのいけ
—溝水 みかはみづ
—書成 おひんなる
—勤格 ゴカクゴ
—幟冠 おサクのかむり
—影供 みエイグ
—靈 みたま
—髮 おぐし みぐし
—齋 おとぎ
—薪 みかまぎ
—饌 みあえ
—竈蟋蟀 おかまこ ぬろぎ
—蠶 おこ
—蠶邏 おかひこぐるみ
—籠 おこご
悉 シツ ことごとく つくす
—曇 シツタン
悠 イウ うれふ とほし
—紀 ユキ
患 グワン うれひ うれふ
惚 コツ ほく ぬる
—土 ぼけつち
—氣 のろケ
悴 ス井 やつる せがれ

悵 チヤウ いたむ なげく
悟 コン くし もだゆ
悸 キ おそる わななき
悼 タウ いたみ いたむ
惕 テキ うやまふ
悽 セイ いたむ うらむ
惻 ソク ナわつ マワ あはむ あきる
情 ジヤウ なさけ ことろ マコトニ
—張 ジヤウはり
—強 ジヤウごは
惆 チウ かなしむ
惜 セキ をしむ おシムラクハ あたらし
—分 をしいブン
惟 井 ただ コレ おもふ ひごり
捨 シヤ すつ
—臺詞 すてゼリフ
捫 モン ひねる もちよ もちゆ
捧 ホウ ささぐ
据 キヨ すう

捲 クン まくる めくる
—荷 にさは
捷 セウ かち かつ
挽 バン ひく
—入 ひきれ
—竹刺 ひきざらへ
—詩 いたみのし
掘 クツ ほく うがつ
—建 ほったて
捻 デフ つねる ひねる
—頭 むぢかた
掎 キ あしとる
捺 ダツ ナツ おす
授 ジユ さづける さづく さづかる
—テウ さづかり さづがる ふる
掉 レイ ねぢる もぐ
捩 ねぢる もぢる
—子 ねぢ
—擂 もぢすり
掊 ホウ ほじくる
採 サイ とる
—蘇羅 サソヲ

掛 クワイ ケ かけ かく かかり
—一本立 かけイツポンだち
—金 かさがね
—兒 かかりど
排 ハイ しりぞく おす
—草 かのこザウ
掖 エキ わき
掠 リヤク かすり かする かすむ
掀 キン あく そはだつ
探 タン あたぐる さぐる さくる
—湯 くがだち
—湯釜 くがへ
接 セツ つぐ はぐ
—子 はぎこ
—骨木 にはとこ みやこつき
控 カウ ひかへ ひかふ
推 ス井 おす
掩 エン おほふ
—韻 井ふたぎ 井ンふたぎ
措 サク さしおく
掬 キク むすぶ

掏 タウ えらぶ とる
—摸 サウ すり はらふ
掃 —除 サウヂ かにもり かもん
—部 かもり はいずみ
—墨
捥 ワン もぐ もぎる
—木 もぎき
掠 シユ
掟 タウ おきて
淫 ガイ はて みぎは
液 エキ つゆ
涵 カン しづむ ひたる
涸 コ かれ かる
—出田 かれた ほしあげた
—眼鏡 ほしめがね
淅 セキ とぐ かす
淋 リン さびし さむし
—滲 つつげ
淑 シユク ふかし すなほなり

—景舍 シゲイシヤ シゲイサ
淘 タウ よなぐ
—金 ゆりがね
淡 タン あはし
—竹 はチク
—竹葉 ささぐさ
—柿 さはしがき
—菜 いがひ
—縹 あさぎ
—鹽 あまじほ
淤 ヨオ どろ おり
淹 エン ひたす ナシ どどまる
淦 カン ゆ ふなゆ あか
—溜 あかま
淨 ジヤウ きよめ きよむ
—房 かはや
淪 リン しづむ
淫 イン みだら うるほす あふる
—羊藿 いかりさう
深 シン ふかし
—山石榴子 みやまとべち

—谷 みたに
—待月 ふけまちづき
—雪 みゆき
淵 エン ふち
淳 ジユン きよし すなほ
淮 ワイ
混 コン まじる あはす にごす
—堂 ゆや
—撥子 コンパス
—凝土 コンクリート
清 セイ シン きよし きよむ きよら
—水 シみづ
—白 すずしろ
—盲 あきめくら あきしひ
—清 すがすがし
—紋 すがモン すががき
—搔 すがき
—器 しのはて
淀 テン よど よどむ
淙 ソウ そそぐ
添 テン そへる そふ マスマス
涼 リヤウ うすし すずし

淺 セン あさし
—皿 あせりざら
—淺 あそそに
—葱 あさつき あさぎ
—甕 さらけ
涙 ルイ なみだ なんだ
涓 ケン
猝 ソツ あはただし だしぬけ ニハカニ
猖 シヤウ たけりくるふ
猗 イ よる アア うるはし
猛 マウ たけし
—者 モザ
猜 サイ そねみ そねむ
部 ブ ぺ つかさ こわけ ブわけ
—崎 へさき
—室 へや
—領 ことより ことり
孰 ジユク みのる タレカ イヅレカ
郭 クワク くるわ
—公 ゆとと ます
郵 イウ もゆくは あやまち

—便 イウビン
陬 ソウ あつまる すみ
陪 バイ くははる かさね
—臣 いやつこ
—堂 ホイダウ
—從 ベイジユウ
陰 イン かげ ヒソカニ
—上 ほかみ
—女 かげめ
—唆 かげしやくり
—壑形 をはせがた
—陽司 オミヤウジ
—陽頭 うらのかみ
—陽寮 うらのつかさ
—蹤 つぶとらみ
—膳 かげゼン
—魄 さまらえなこと
陳 チン のぶ ひね よるし
—倉米 ほんぼちこめ
陵 リヨウ ささぎ をか
—若 のうぜう
陶 タウ すえ やきもの

陷 カン おちいる おとしいる
—葬 おとしあな
陸 リク ロク くぬが くが
—引 おかひき おかひき
—目八目 をかめハチモク
—步 をかぶら
—奥 むつ みちのく むつのくに
—燒 をかやき
扈 コ したがふ ともひろし
敕 ケウ をしへ をしよ シム
敏 ビン さとし はしこし
—耳 さとみ
救 キウ すくひ すくふ
敕 チヨク みことのり
敖 ガウ おごる
敗 ハイ やぶれ やぶる
—天公 やぶれがさ
—醬 おみなへし
斛 コク なすめ
斜 シヤ なめ なのめ はす
—子 ななこ
—眼 やぶにらみ

戚（セキ）　憂のちぢむ　したしむ　ちかし
斬（ザン）　きる
旋（セン）　めぐる　カヘツテ　スナハチ　ヤヤ　ツイデ　シキリニ
　工（コウ）　ろくろし
　子（シ）　ねぢほり
　毛（モウ）　つむじ　つじ
　花（カ）　はだけあさがほ
　風（フウ）　つむじ
　條銃（ジウ）　らいふる
　頭獸（ジウ）　セトうた
　覆花（カ）　おぐるま
　盤（バン）　ろくろだい
旅（リヨ）　はた
族（ゾク）　ゾウ　からまけ
　父（フ）　おほち　おほそち
旌（セイ）　はた
欸（アイ）　なげく　アイ　ジカリ
既（キ）　スデニ　オヨンデ　コトゴトク
晝（チウ）　ひる
　御座（ザ）　ひるのおまし　ひのおまし
　裝（ソウ）　ひのよそほひ
　殿（デン）　ひのとの

晨（シン）　あした
晩（バン）　おそし　くる
　稻（トウ）　おくて　おしね　ひね
　蟬（セン）　ひぐらし
晦（クワイ）　つごもり　つもごり
曹（サウ）　ともがら
　逢（ホウ）　ソーダ
曼（マン）　ひろし　ながし　のぶ
晡（ホ）　ゆふべ
晤（ゴ）　あきらか　あふ　むかふ
脣（シン）　くちびる
朗（ラウ）　ほがらか
望（バウ）　もら　のぞむ　のぞみ　ひのみやぐら　ひのみ
　火樓（クワ）　ひのみやぐら　ひのみ
　降（カウ）　ふちくだち
條（デウ）　えだ　すぢ　おきて
梵（ボン）　けがれなきこと　つとめ
　論（ロン）　ボロ
梟（キウ）　ふくろふ
　帥（スイ）　たける

椰（ヤ）　やし
　榆（ユ）　あきにれ
桫（サ）　セ
　欏（ラ）　おにへご
栝（カツ）　さかづき
　棬（ケン）　わげもの
桴（フウ）　はち
桙（ボウ）　ふもと
埜（ヤ）　の
桶（トウ）　をけ　ヨウ
椈（カク）　すみぎ　たるき
梁（リヤウ）　うつばり　はりやな
　殿（デン）　かへりの
梂（キウ）　かさ　いが
梅（バイ）　うめ　むめ
　雨（ウ）　つゆ
　花皮（カ）　かつらぎ
　花雀（カ）　べにすずめ
　花鮫（カ）　かひらぎ
　擬（ギ）　うめもどき

梢（セウ）　こずゑ
梓（シ）　あづさ
梔（シ）　くちなし
　子（シ）　くちなし
椰（ヤ）　なぎ
梗（カウ）　やまにれ
桿（カン）　てこ
　杆（カン）　さかばかり
梨（リ）　なし
　糕（カウ）　かせいた
梢（セウ）　うら　こずゑ
彬（ヒン）　さどのふ　さかんなり
梭（シヨウ）　ひひ
　子（シ）　ひいど
　魚（ギヨ）　ひいを　かます
　魚子（ギヨシ）　いかなご
梫（シン）　かつら
梧（ゴ）　あをぎり
梯（テイ）　さだはし　わかき
　子（シ）　はしご

械（カイ）　あしかせ　ほだ　ほだし
梲（セツ）　うだち　うだつ
梳（ショ）　くしけづる　けづる
　齒魚（シ）　あはがら
梱（コン）　こうり　こり
梏（コク）　てかせ
梶（ビ）　かぢ
棚（ホウ）　しきび　しきみ
欲（ヨク）　ほつす　欲る
欷（キ）　むせぶ　すする　なげく
亳（ガウ）　にそぎ　ふで
毬（キウ）　ぎり
　杖（ジヤウ）　ボッチヤウ
　栗（リツ）　いがぐり
　棗（ソウ）　えが
焉（エン）　イヅクンゾ　ココニ　コレ
烹（ホウ）　ハウ　にる
烽（ホウ）　のろし
　火（クワ）　のろし
　烟（エン）　しるしのけぶり

　燧（スイ）　のろし
烱（ケイ）　のぼる
爽（ソウ）　さわやぐ　さわやか
　爽（ソウ）　さわやか　さわ
牽（ケン）　ひく
　牛子（ギウシ）　ケコゴシ
　牛花（ギウカ）　あさがほ
　牛星（ギウセイ）　いぬかひぼし
犁（リ）　うしぐは　からすき
　耒底（ライテイ）　からすきのねさ
　耒轅（ライエン）　からすきのとり　くびき
　底（テイ）　ねさりどこ
　弼（ヒツ）　さちがゆ
　槃（ハン）　からすきのしりかぜ
　鏡（キヤウ）　からすきのへら
牠（ボウ）　なだらうし　みだる
　手兒（シ）　げんのしようこ
現（ゲン）　うつつ　あらはす
　身（シン）　うつせみ
琅（ラウ）　うつくしきたま
球（キウ）　たま
理（リ）　ことわり　をさむ　きめ

琉（リウ）　るり　ル
脚（キヤク）　あし
　立（リツ）　キヤたつ　ケたつ
　牛（ギウ）　キヤハン
　氣（キ）　カケケ　カツケ　あしのケ
　帶（タイ）　あゆひ
　榻（トウ）　キヤたつ
　爐（ロ）　あしあぶり
脛（ケイ）　はぎ
　巾（キン）　はばき
　膝瘡（シツ）　はばきがき
胞（ホウ）　あふ
腴（ユ）　しぢ
脫（ダツ）　ぬく　はづる　まぬかる　のがる　タマタマ　モシ
　作（サク）　ぬけサク
豚（トン）　ぶた
　魚（ギヨ）　いるかうを
脯（ホ）　ほじし
脰（トウ）　うなじ
荷（カ）　に　になふ　はす
　前（ゼン）　のざき
　楔（ケツ）　にくさび　にくさい

荻（テキ）　をぎ
茶（ダ）　おほつち　おほどち
　毘（ビ）　ダビ
　蘼（ビ）　トビ　やまぶき
莊（サウ）　シヤウ　おごそか　しもやしき　ねなかや
莎（サ）　はますげ　すげ
　草（サウ）　かやつりぐさ
　繩（ジヨウ）　くぐなは
莓（バイ）　いちご
菌（キン）　はばぐり
　麻（マ）　いちび
荳（トウ）　まめ
莖（カウ）　くき　ギヤウ
　文字（モジ）　くモジ
　立（リツ）　くくだち
莖（サ）　まぐさ
莞（クワン）　あを　ねふとる　ねぐさ
　爾（ジ）　にこり　につこり
　筵（エン）　ござ
荅（カツ）　つぶみ　ふふむ　ふほむ
莠（ユウ）　たのみ　はぐさ
　竹（チク）　あし　ささ

莢（キヤウ）　さや
　蒿（コウ）　くろくさ
　蓯（ジウ）　かまずみ
莧（ケン）　ひ　ひゆ
萇（チヤウ）　ひやうあかざ
　若（ジヤク）　おはみろぐさ　ほめきぐさ
莩（フ）　ひより
莪（ガ）　よもぎ
莫（バク）　ナカレ　ナシ　ナカラシヤ
　大小（ダイシヤウ）　メリヤス
　比（ヒ）　モヒ
　告藻（コクソウ）　むのりそ
　鳴菜（メイサイ）　なのりそ
　迦（カ）　バカ
　爾比涅（ジヒネ）　モルヒ子
蒐（シウ）　ねなしかづら
逋（ホ）　にぐ　のがる
逍（セウ）　ぶらつく
透（トウ）　とほる　すかす　すく
　百合（ユリ）　すかしゆり
　垣（エン）　すいがき

　形（ケイ）　すぎしがた
　波（ハ）　すつぱ
　綾（リヤウ）　すきや
　蠶（サン）　すきこ
逐（チク）　やらふ　おふ
逕（ケイ）　こみち　ちかし
途（ト）　みち
逗（トウ）　とどまる
這（シヤ）　はふ
通（ツウ）　とほし　とほり　かよひ　かよふ　とほる　はけ
　文（ブン）　かよはせぶみ
　夜（ヤ）　ツヤ
　草（ソウ）　はたつかづら　あげび
逝（セイ）　ゆく　みまかる　ゴゴニ
　廻谷（カイコク）　ゆききのたに
逞（テイ）　たくましし
速（ソク）　すろやか　すみやけし
　香（コウ）　スカウ
造（ザウ）　つくる　みやつこ　ハジメテ　いたる
　酒司（シ）　さけのつかさ　みきのつかさ

　酒兒（ジ）　さかつこ
逡（シユン）　しりぞく
逢（ホウ）　あふ　ラルル
　期（キ）　あふご
連（レン）　つる　つれ　つらなる　むらじ　シキリニ　オヨソ
　尺（シヤク）　レンシヤク
　玉（ギヨク）　つれだま　レだま
　陰（イン）　しけ
　彈（ダン）　つれびき
　發（ハツ）　つるべうち
　錢草（セン）　つばぐさ
　餞葉（セン）　かきとをし
　翹（ケウ）　あはくる
率（ソツ）　ひきゐる　ゐる　あさむぶ　ホホム子
　川祭（セン）　いさがはまつり
瓶（ヘイ）　かめ　びん
瓷（シ）　ジ
甑（ソウ）　ほとぎ
甜（テン）　あまし　うまし
　瓜（カ）　まくはうり
　物（ブツ）　ためつもの
　酒（シユ）　たむざけ

舐（シ）　なむ　ねぶる
產（サン）　むす　うむ
　土（ド）　うぶすな
　女（ジヨ）　うぶめ
　衣（イ）　うぶぎ
　靈（レイ）　むすび
畢（ヒツ）　をはり　をはる　をふ　コトゴトク
異（イ）　こと　ことなり
畧（リヤク）　はぶく　ホボ
　書（シヨ）　やつしがき
畦（ケイ）　うね　あぜ
　目（モク）　うねめ
　手（シユ）　うなて
　吳綈（ゴ）　あぜゴロウ
痊（ゼン）　いゆ　いやす
瘁（スイ）　やつ　かやし
痔（ジ）　しもがさ
痕（コン）　あと
皐（カウ）　かぎり　たかし
　月（ゲツ）　さつき
皎（カウ）　きよし　あきらか

眷 ケン
眦 ねんごろ　やから　あぐみ　セイ　サイ　まなじり
眸 シ　たこめ
眺 テウ　ながめ　ながむ
眸 ボウ　ひとみ
眶 キヤウ　まかぶち　まぶし　まなかぶち
眼 ガン　まなこ
一 ガンち
一子栗 ひるおしろ
一泉 なみだ
一色 まびき
一部 ほくそづきん
一妙 まぐはし
一鏡 めがね
眴 ケン　めくはせ　めくはす
砦 サイ　つぶら　とりで
碵 タウ　ドウ
一砂 ドウシヤ
研 ケン　とぐ　とぐ　みがく
硃 シス　あかすな
一砂根 まんりやう
硅 カク　やぶる
票 ヘウ　とぶひ　はやし
祭 サイ　まつり　まつる
祥 シヤウ　さが
一瑞 シヨウズ井
秬 のこりしね
稂 はぐさ
移 イ　うつし　うつり　うつす　うつる
一菊 うつろひぎく
一轉 わたまし
窓 ソウ　まど
窒 チツ　ふさぐ
一扶斯 チフス
竟 キヤウ　をふ　つひに　コトゴトク
章 シヤウ　あや　しるし
一魚 たこ
一斷 しとだち
袷 カフ　あはせ
袱 フク　ふろしき
紝 ジン　おくび　おくみ
一下 おくみさがり
袈 カ　けさ
裙 ケツ　つまどる
裲 リヤウ　うちかけ
裡 ケイ　うちぎ
裄 ゆき
袴 コ　はかま
一行縢 はかまむかはき
笙 シヤウ　サウ　しやうのふえ
笛 テキ　ふえ
管 チ　むち　しもと
笨 ホン　あらし
笠 リフ　かさ
筒 シ　はこ　いしみ　うへ
符 フ　わりふ
一契 わりふ
一扈 をかしとき
笭 レイ　かご
笈 ドウ　とりかご
第 ダイ　ついで　やしき　しな
笳 サツ　サク　しがらみ
筏 ハイ　あがる
笹 ささ
一龍膽 ささりンダウ
粒 リフ　つぶ
粕 ハク　かす
一底羅 かすテエラ
粗 ソ　あらし　あら　ホボ
一仕餽 あらジコ
一垣 あらがき
一扱 あらしこ
一葉 いは
一砥 あらど
一鋩 あらやすり
一榧 へはがや
粘 ネン　ねばり　ねばる　ねばし
一糊菜 めなもみ
粧 キヨ
一敕 おこし
紫 サツ　からげ　からぐ
粤 エツ　ココニ　ココニオイテ　オヨンデ
累 ルイ　かさね　かさなり　かさなる　シキリニ
紬 チウ　つむぎ
細 サイ　こまやか　こまかし　ほそし　くはし
一人 ささやけびと
一子草 くそかづら
一分 こまけ
一切 そぼうきり
一戸 ささど
一矛千足國 くはしはこちたるのくに
一波 ささなみ
一枝 しもと
一杷 こまざらひ
一流 せせらぎ
一雨 ささめ
一幸 ひきのひたひぐき
一草 ささめ
一根草 へくそかづら
一射 まとき
一柴沙參 ひなぎきやう
一筒 ささえ
一雪 ささめゆき
一栗 ささぐり
一魚 うるりこ
一絨 フラチル　フラン子ル
一割子 はやし
一齒冬青 もちのき
一齒邪蒿 いぶきはうふう
一遣 こまづかひ
一蟹 ささがに
一螺 いしやがひ　しただみ　きさご
一贏 きさご
紲 セツ　きづな
紳 シン　おほおび
紹 セウ　たすく
紺 コン　こんいろ
一飛白 コンがすり
一蕓 てふこんぼ
絁 シ　あしきぬ
終 シユウ　つひに　をはる　をよ
一日 ひねもす　ひもすがら
一夜 よすがら　よつぴて　よだに　よもすがら
組 ソ　くみ　くむ

絆 ハン　きづな　ほだし
紘 グン　いと
羞 シウ　はづかし　はぢらふ　やさし　すすむ
一明 まばゆし　まぶし
羚 レイ　かもしか
翌 ヨク　あくるひ
聆 キン　とゝみ
聊 レウ　いささか
春 シヨウ　うすつく
舳 ジク　へさき
舵 ダ　かぢ
一子 かこ
舷 ゲン　ふなばた
舶 ハク　つぐぶね
船 セン　ふね　ふな
一小屋 ふなごや
一首 みよし　みおし
一茹 のみ　のめ
一梁 ふなばら
一蛆 ふなむし
一遊山 ふなユサン
處 シヨ　ところ
一女 をとめ
一分 ソウブン
蛋 タン　たまご
一黃 きみ
蚶 カン　きさ
蛁 テウ　むきわらせみ
一螓 つくつくぼうし　みんみんぜみ
蚰 イウ　げじげじ
一蜒 げじげじ
蛆 ダツ　うじ
一蛆 うじぐさ
蛇 ジヤ　ダ　くちなは　へび　へみ
一含草 きらんサウ
一床子 ひるむしろ　ひるも
一眼草 いぬがねサウ
一結 ジヤケツ
一菌草 いぬいたどり
蛄 ゼン　けむし
一蟬 けむし
蛄 コ　らし
一蠶 ふなむし　ふどむし
一蟬 いらむし
蛙 シユ　きくひむし
蚯 キウ　みみず
一蚓 みみず
蜒 エン　げじげじ
一蚰 げじげじ
蛇 サク　あさせみ
一蜢 いなごまろ
一蜩 あきせみ
一蟬 なはせみ
袋 タイ　ふくろ
衰 コン
覓 ベキ　まぐ
規 キ　ぶんなはし
一尼涅 キニイ子
觔 ぬた　ぬたはだ
訝 ガ　いぶかし　いぶかる
訣 ケツ　わかる
訥 トツ　どもる
訪 ハウ　とぶらひ　とふ
設 セツ　まうけ　まうく
許 キヨ　ゆるす　ゆるし　もと　バカリ
一多 あまた
一嫁 いひなづけ
訛 クワ　なまり　たまる　たぐ
豁 カツ　やまびこ
豉 シ　みそ　くき
一蟲 みづすまし
貧 ヒン　まづし
一乏搖 ピンボフゆすり
貨 クワ　たから
貫 クワン　つらぬく　ぬく
一入 ぬきれ
責 セキ　せめ　せむ
一丈高 ひめよもぎ
一呂松 のロま
一芝 いとしば
一阜 のづかさ
一苣 のぢさ
一猪 るのしし
一架 のほこ
一麻 をどりとさう
一蒜 ねびる
一蜀葵 みつば
一鷄 きじ
一鷺 かも
一蠶 やまゆ
釣 テウ　つる
一瓶 つるべ
一鐘 つりがね
一豪駝 あほのじゝこ
釧 セン　くしろ　ひぢまき
釭 カウ　かりも　かも
釷 バツ　ほこさき
釵 サイ　かんざし
鈁 コ　こて

鈌 クロン つく
閉 ヘイ とづ たつ
雀 ジヤク すずめ
—舌草 あみのめ
—麥 からすむぎ
—鷂 つみ
雪 セツ ゆき すすぐ
—花菜 きらず
—花菜鳥 からとり
—客 さぎ
—球花 こでまり
—洞 ほんぼり
—隱 セツチン
—踏 セツタ セキダ
—墜 しづり
雫 ダしづく
頂 チヤウ いただき うなじ たてくび
—頭掛 テウヅがけ
—瘤 うなこぶ
頃 ケイ ころ シバラク バカリ
—比 ころはひ

魚 ギヨ いを うを な さかな
—子 ななこ
—扠 やす なや
—屋 はりせんぼん しやちほこ
—虎 やす
—叔 やな
—泊 いをのふえ
—胞 きなぐひ
—咋 かはせみ
—狗 すはやり
—條 ふえ
—脬 簗 やな
—醬 なしるの いをのふね
—鰾
鳥 チウ とり
—回 とかへる
—自物 とり沙もの
—屋 とや
—栖 とぐら
—餌板 ところいた
鹵 ロ しほ
鹿 ロク かしか しし するが
—木 しかり
—火屋 かびや

—心柿 やまがき
—奴 しかね しかぬ
—角菜 ふのり
—尾菜 ひじきふのり ひじきひじきも
—兒島汁 かたしなしる
—杖 かせづ系 わさづの
—垣 しがき ししがき
—砦 ししあらひ ししやらひ
—菀草 ふなはら
—蹄草 きおもて いちやくそ
—藿 のまめ
—柵 かせぎ
麥 バク むぎ
—炒 こがし
—哈默敦 マホメットケウ
—酒 ビール
—魚 あだか
—葱 あさつき
麸 セウ はつたい むぎこがし
麻 マ あさ ふさ そ を
—杏 いはぐつ
—柱 あなひ
—倔混叟母 マグ子シ ソム
—疹 はしか
—筍 をこけ

—黃 かつねぐさ

十二畫

傘 サン からかさ かさ
傀 クワイ ものの け
—儡 くぐつ でくぐ
—儉 ケン したがふ
—倉 サウ いやし
—傑 ケツ すぐる すぐれびと
—傳 フ かしづく かしづく
—傍 バウ かたはら そば
—目 をかめ
—耳 かたみみ
—戀 をかはれ
—備 ビ そなへ そなふ ツブサニ コトゴトク
—長 ピンチヤウ
—僑 キヤウ つかひ
—傲 カウ ならふ
—凱 ガイ かちどき
—割 カツ わり われ わる さく
—羽織 さきはおり

—賦 サウ ぜじむ きす
創
剴 ガイ する きる
剩 ジヨウ あまつさへ あまさへ
勞 ラウ いたづき いたはり いたづく いたはし ねぎらふ つかる
—氣 ロウケ
勝 ショウ かち まさる かつ たふ すぐる アゲテ
—布 かちめ
博 ハク ひろし
—士 ハカセ
—打 バクち
厥 ケツ あはく ソノ
厨 チウ くりや
啻 シ ただ タダニ
善 ゼン よし
—知鳥 うとうどり うどり
—界草 キ よろこび よろこぶ よろこばし ヨクコソンデ
喜
鳩 そろ

喪 サウ おもひ も うしなふ
喬 ケウ たかし
單 タン ゼン ひとへ コトゴトク
—皮履 たび
啼 テイ なく
喉 コウ のど のんど
—紅鳥 のごり
喻 ユ たとへ たとふ
喋 テフ かまびすし
喇 ラツ はやくち
—叭 ラツパ
—嘛敦 ラマケウ
喘 セン ゼン あへぐ いきだはし
喙 カイ くちばし
—木鳥 けら
喚 クワン よぶ わめく をめく
唧 ソク シヨク なく
—筒 ポンプ
喝 アイ カツ しはがる かしましく かしまし かしがまし
喧 ケン かまびすし

嗾 ジア
喟 キ ためいき
啾 シウ なく
喑 イン くらます
喁 グウ あきどよ
喃 ナン ナフ くどくどし
喫 キツ ケキ くらふ のむ
—驚 びつくり
喰 ショク くふ くらふ
喊 カン さけぶ
喝 井 かこみ かこひ かこぶ かこむ かくもふ
圍
堡 ハウ つつみ とりで
—籃 たまよけ
堯 ゲウ たかし
堤 テイ つつみ
堪 カン たふ こらへ ジヤウ
—情 こらへ ジヤウ
堰 エン ゐ ゐせき

堵 ト かこひ かき
躰 タイ 體の俗字
場 ヂヤウ にはは
—歷 ぼうて
—騎 にはのり
堺 カイ さかひ
報 ハウ むくゆ
—强 ハウどは
壺 コ つぼ
堅 ゲン かたし たて
—磐 かきは
壹 イチ ひとつ
奥 オウ おく おくまる
奠 テン さだむ くま
奢 シヤ おごり おごる
嫇 ドン わかし
婿 セイ むこ
媒 バイ ばしかけ なかだち
媚 ビ こび こぶ へつらひ へつらふ

媛 エン ひめ
媚 ビ そねむ
媒 セツ けがす あなどる
寔 ジヨク マコトニ コレ コニニ
寐 ビ いぬ ねる
—又 ねたは
富 フ とみ とむ
—貴 フツキ
寒 カン さむし
—號蟲 おほかうむり
—螫 ひぐらし
—蟬 つくづくぼふし ひぐらし
尊 ソン みとこ たふとむ たふとぶ
尋 ジン ひろ たづね たづぬ もとむ なみ
—ツイデ
慮 シヨウ おめあし
就 ジウ つく モシ スナハチ タトヒ
—中 なかんづく
屠 ト ほふる
屑 セン よわし おとる

—付 こはづく
—御供 こはゴク
—盜 ガンドウ
—飯 こはひ こはいひ
—請 ねだる せびる
—顏 つれなし
彫 チウ くりや
—刻 ゆみかけ ゆがけ
彭 ハウ つづみのおと
徧 ヘン かたよる
復 フク かへる マタ タビ
—蝠 にしどち
循 ジユン めぐる
街 ガイ ちまた こほり
惰 ダ なとたる
惱 ナウ ひやみ なやむ
—ツイデ
—ツイデ
—ツイデ

揭 ケイ かかげ
—焉 ケチエン
揮 キ ふるふ
搏 ハク うつ
揑 子ツ つくねる こねる
揶 ヤ からかふ
援 エン たすく
揀 レン わかつ えらぶ
掂 ダク ふし ひく
減 ゲン へす へる
渚 ショ なぎさ
渠 キヨ みぞ カレ かしら
渡 トワタシ わたす わたり わたる
—子島 トこしま
—座 わたまし
—殿 わたどの
渟 テイ とどむ
測 ソク はかる

渦 クワ うづ
滋 ジ しげる
渭 井
渥 アク うるほふ あつし
港 カウ みなと
渴 カツ かわき かわく
—病 カチのやまひ
游 イウ およぐ
渾 コン にごる おほいなり スベテ
渺 ベウ ひろし
湊 ソウ みなと
湍 タン はやせ
渲 セン にじむ こみづ
溫 チン ウン ぬくし ぬる あたたかし
—突 チンドル
—鳥 ぬくどり
—菘 こほね
—飩 ウドン
湧 ヨウ わく

渤 ボツ
滑 ショ したむ
湖 コ みづうみ
湘 シヤウ にる
渣 サ
湛 タン たたふ
湟 クワウ おほる ひやみづ
湫 シウ くて
湮 イン しづむ
湯 タウ ゆ
—人 ゆゑ ゆゑびと
—女 ゆた
—文字 ゆモジ
—坐 ゆゑ
—卷 ゆまき いまき
—起請 ゆギジヤウ
—婆 タンポ
—桶讃 ゆトウよみ
—翻 ゆこぼし
猥 ワイ みだり

猨 エン さる
猩 セイ シヤウ しやうじやう
猪 チヨ ゐ ゐのしし
—口 チヨク
—口才 チヨコザイ
—牙 チヨキ
—不食 ししくはひ
—殃殃 かなむぐら
猯 タン まみだぬき
猫 メウ ねこ
—籬 ねこぶく
猴 コウ さる
猱 ダウ み みたぬき
—挺 また
猶 井 はりねずみ
猶 イウ なほ ゴトシ モシ
—太敎 ユダヤケウ
—豫 いよひ
都 トツ みやこ スベテ アア
陽 ヤウ あらはる ひなた

—炎 かぎろひ かげろふ
—鳥 くろづる
隅 グウ すみ
隆 リウ さかん
隈 ワイ くま
隊 タイ くみ わかち
隋 ズイ おこたる おつ
隄 テイ つつみ
隍 クワウ あらみづ からゐり
階 カイ しな はし きざはし
—香取 しながどり
悶 モン もだゆ
悲 ヒ かなしび かなしみ かなしむ
惑 ワク まどひ まどふ
惠 ケイ エ めぐみ めぐむ
—方 エホウ
惡 アク わるし イヅクンゾ アア
—木 あさぎ
—木刺木 あさぎのいろ

—作 わるサ
—巫山戯 わるフザケ
—疽 つはり
—御達 わるゴタチ
—蠅 あとしざり あとずさり
—戯兒 いたづらこ
掌 シヤウ たなぞこ つかさどる たなごころ
—前 たなさき
戞 カツ ほこ
戟 ゲキ ほこ
扉 ヒ とびら
掣 セイ ひく
—齒 とめば
敝 ヘイ やぶる
敢 カン あふ あへて
斐 ヒ あや うるはし
散 サン ちる
—子 はららご
—切 はふざり ザンざり
—毛 ほろげ
—太皷 ちらしダイコ

—羽 ほろは
—緒 はらを
—斑 はらふ
—樂 さるがく
—飯 さは
敦 トン あつし
—盛草 あつもりサウ
斑 ハン まだら ぶち むら
—入万年青 ふいりおもと
—枝花 はんや
—雪 ヒづれゆき
—黃牛 あめをだら
—鳩 いかるが
—節蝦 くるまえび
—葉 いさは
—蝥 みちしるべ
斯 シ かく コレ スナハチ コヽニ ノミ
—有 かかり
—許 かばかり
普 フ あまねし
—請 フシン
景 ケイ かげ
—天 ケイ ふきばし しふきばふう べんけいさう

—天草 べんけいさう いきくさ ふきは
—色 ケシキ
晶 シヤウ あきらか
晴 セイ はれ はる
晩 バン ゆうべ おそし
—稻 おしね ひね
智 チ さとる ちゑ
—慧辯舌 ちゑざきら
曾 ソウ カツテ スナハチ
—孫 ひひこ ひまご
—祖父 ひいぢ ひぢぢ
—祖母 ひいばば ひばば
替 テイ かへ かはる かはせ かふ
—匣 かけご
最 サイ もとも スベテ カヨソ
—中 もなか
—手 ほて
—早 もはや
—果 サイはて
—寄 もより
朝 デウ あさ
—氷魚 あした あさひを

—臣 あそん あそみ
—發 あさだち あさびらき
—堰堤 あさるで
—熊黃楊 めさかつげ
—熊龍膽 あさまりンダウ
—鮮球顏 テウセンあさがは
期 キ ゴ ときなり カナラズ
—物 キもの
棄 キ すつ
棗 サウ なつめ
棘 キヨク いばら とげ
—鰭魚 とげうを
—鬚 かすご
棋 キ 碁に同じ
棠 タウ やまなし
—梨樹 かたなし
—棣 キ コ こまこ ていし
森 シン もり
棒 ボウ つゑ ハウ
—手振 ホてふり
—火箭 ボウびや

—振 ボウぶら
—斷 ボウちぎり
棓 ハウ つかなぎ
棖 タウ ぢとだち はうだて
棍 コン たばね
棚 ハウ たな
棟 トウ くもみぐさ むね むな
椚 くぬぎ
棣 テイ ダイ とほる ならふ
—棠花 やまぶき
棧 サン たな
—留 サンとめ
—敷 さじき
—俵法師 サンたらボフシ
棲 セイ すむ
椀 リン おきせ まり
—飯 リハメン
棺 クワン ひつぎ
椢 コ ねずみおとし
椅 イ あづさ いひぎり こしかけいす

棉 メン わた
棹 タウ さを
棱 ロウ かど
—瓜 きうり
椋 リヤウ むく
植 ショク うゑ うう
椎 ツイ しひ
—之小枝 しひのこやご
椐 キヨ へみ へみのき
椒 セウ はじかみ
椓 タク うつ
椦 クワン さすえ まげもの
椙 すぎ
欺 キ あざむき あざむく
欵 クワン よろこぶ
殕 フウ ねかす
殖 ショク ふやす ふゆ
殘 ザン のこり のこす のこる のこん
殛 キヨク ころす

殼 カク から
—精草 ほしぐさ
毯 ダン けむしろ
毳 セイ けば むくげ
淼 ビウ ひろし
爲 井 ため なる なす し すをさむ ゆゑ シム タリ ラル
—替 かはせ
—種 しぐさ
—體 テイたらく
焚 フン たく
無 ム ブ なし ナカレ
—手 むずて
—手法 むてつポウ
—文鳥 あやなしどり
—花果 いちじく
—氣 なげ
—射 ブエキ
—垢 ムク
—智 みつなし
—患子 むくろうジ むく
—体 なめし
—飯鮨 いひなしずし

—慘 みじめ
—暗 むやみ
焦 セウ こげ こぐ こがす
—死 こがれしに
—香 こがれカウ
—桐 やき ぎり
然 ゼン しかり さしかり シカルニ シカレドモ
—無顔 しかながほ
焙 ハイ あぶる ハウず
—烙 ハウロク ふくろ
—爐 ホイロ
燃 ネン てらす やく
焠 スイ なます にらぐ
焰 エン ほむら ほのほ
牌 ハイ ふだ たて
犇 ホン ひしめき ひしめく はしる
—底 とこ
犀 サイ さね かたし
琵 ビ ひは
琴 キン こと
—柱 ことぢ
琢 タク みがく
琥 コ たまのうつは
腎 ジン むらと
棊 キ めぐる
膵 スイ もろし なう
腊 セキ きたひ
脾 ヒ よこし チヤウ はれ ふくれ ふくらむ ふくらか
脹 チヤウ はる
—煮 ふくらに
腋 エキ わき
胼 ヘン たこ
—胝 たこ
腔 カウ はら
腑 フ はらわた
腕 ワン かひな うで
—強 かひなたし
腓 ヒ こむら たわらつはぎ
菽 シユク まめ
莽 バウ マウ くさ くさむら
—草 しきみ
莉 シ いら
—蠟 さざえ
菅 クワン すげ すが
—薦 すがごも
菊 キク
萋 セイ しげし
菌 キン きのこ たけ
—陳蒿 ひきよもぎ
萍 ヘイ うきくさ
菎 コン かをりぐさ
—蒻 コンニヤク
菓 クワ くだもの
蕾 シ あらきはり
菖 シヤウ しやうぶ
—蒲 あやめ サウブ
菰 シユウ すすな たうな
菲 ヒ うすし いたむ
菜 サイ な
—園 サエン
—鳴菜 なりそ
莅 リ のぞむ
菁 セイ にらはな うるはし
菩 ハイ ブ ボ ほとけぐさ むしろ
—提 ボダイ
菫 キン すみれ
萃 スイ あつまる あつむ
華 クワ ケ はな はなやか
—表 とりる
—宮 げこ
—鬘 ケマン
葱 ソウ ねぎ ねぶか
菰 コ まこも こも ふしし
波 ハ ほうれんそう
—蔆草 ヘウレンソウ
菱 リヨウ ひし
—垣船 ひかきぶね
菴 アン いほり
萊 ライ あかざ
—草 しは
菹 ショ つけもの
萆 ヒ あまどころ
—薢 ところ
莽 ヘイ ひく シム
著 チヤク チヨ いちじるし あらはる あらはす
—羅絹 チヨロケン
蒲 ブ きふす めぐむ もゆ
—黄 もよぎ
—葱 もそぎ
萎 イ しなる しほる なゆ
—伏 のやよす
—竹 たゆたけ
—垂 しなたる
—雅 あまごころ
逝 セイ はとはしり とばしる ほとばしる
逮 タイ およぶ おふ オヨンデ
週 シウ まはり
進 シン すすみ すすむ まねらす
—士 シジ
逶 イ ゐ
逸 イツ イチ はやる そる はぐる
—物 イチモツ
—速 イチはやし
甥 ソ よみがへる
畫 クワク かぎる ふかく はかりごと
留 リウ とどまる とどとほる おくる
番 バン つがひ つがふ
—木鼈 まちん
—一安 バンかずやす
—歷青 ベンキ
—瀝青 ベンキ
異 イ ことなる コトニ
—口同音 イクドウオン
—物好 いかものずき
疏 ソ うとし とほす かどうがき
—瓦 をがはら つつみがはら

疎 ソ おろそか あらし うとし うとんず きはら うとむ
—疎 うとうとし
—籠 あらて
痛 ツウ いたみ いたし いたむ ハナハダ
痞 ヒ えかう
痘 トウ はうそう
—痕 みつちや
—痕面 いもがは あばたづら
—瘡 もがさ
痢 リ くだりやまひ
痙 サ えのご しこり にきび
痙 ケイ こはばる
痣 シ あざ
登 トウ のぼる スナハチ
發 ハツ ホツ おこる あばく
—心 ホツシン
—日 おこりび
—句 ホツク
—緒 ハチのを
皓 カウ ひかる しろし
盛 セイ さかり さかん
—場 さかりば
盜 タウ ぬすみ ぬすむ
—食 むさぼむ
—賊 どろぼう
睇 テイ よこめ
短 タン みじかし
—冊 タンザク
—艇 ボート
—銃 ピストル
确 カク そね
硯 ケン すずり
硫 リウ ゆのはな
—黄 ゆのあわ いワウ ゆワウ
硴 シヤ しやこ
—碟 シヤコ
硝 セウ
—子 ガラス ビードロ
—子絲 ガラス ビードロよま
—子壜 ふらすこ
硬 カウ かたし
稀 キ まれ
稅 ゼイ かかりちから かかりもの
—代 ちからしろ
稈 カン わら
—心 みご
稍 セウ やや ヤウヤク
程 テイ ほど
窖 カウ つちあな
窘 キン たしなむ くるしむ
窗 ソウ まど
寃 エン ねきどが
寓 グウ やどる かりずまひ
童 ドウ いわく わらは わらべ
—生 わらはおひ
—男 をぐな
—殿 わらはテンジヤウ
補 ホ おぎなひ おぎなふ
—陀落 フダラク
—骨脂 いちひぐさ ハゴシ
裡 リ うら うち
裙 クン すそ もすそ はだぎ
—帶 クタイ
—帶菜 わかな
裌 カフ ケフ わたいれ
裨 シ みごろ
筏 バツ いかだ
筆 ヒツ ふみて よんて ふで
—頭菜 つくづくし
等 トウ など ら ども ひとし
—閑 なほざり
筋 キン すぢ
—骨草 じぶにひとへ
—魚 いかなご
笄 ケイ かうがい
筌 セン うへ うゑや
筍 ジユン たかうな たけのこ
笄 ケイ かうがい
筐 キヤウ かたみ はこ
箴 セイ ゐさ
筑 チク ひらふ
—子 こきりこ
—登子 チクトシ
—紫 ツクシ
筒 トウ つつ
—卵 ドウラン
—袖 ちつつは
答 タフ こたへ こたふ
—布 タフ
—矢 タフのや
—拜 タツパイ
箸 チヨ はず
—刺 はんざし
策 サク むち はかりごと
覃 タン ひく およぶ
粟 ゾク あは
—粗粒 あはおこし
粢 シ しとぎもち しとぎつは
粥 シユク かゆ
粧 シヤウ つくり
絮 ジヨ わた ふれののめ
—衣 わたいれ
絲 シ いと
—瓜 へちま
紫 シ むらさき
—口 むらさき
—苑 シチン のし
—菘 あかな
—陽花 あぢさゐ
—參 ちちのはぐさ
—蔵 のぜう のうぜう
—蘩蔞 むらさきはたべ
紵 ケ くけ
結 ケツ ケチ むすび むすぶ ゆはへる ゆふ
—肌帶 ゆはたおび
—采 ゆひなよ
—毒 ほねがらみ よこね
—草蟲 みのむし
—菓 がぐなは
—政座 かたなし
—納 ゆひいれ ゆひナウ
—綿 いわた
—雁 むすびかりがね

—纏草 しば
絓 クワ しり ケイ すがい
—絲 しけ しけいと
絕 ゼツ たつ たゆ たえ カツテ ハナハダ
—句 ゼク
絖 クワウ ねめ まわた
條 タウ くみひも
絳 カウ こきあかいろ
絞 カウ しぼる ケウ しぼる
—股藍 あさちやづる
絡 ラク からまる からむ
—梁 たたり
—頭 おもづら
—新婦 ちよらうくも
給 キフ たまふ たぶ
絨 ジユウ ほそぬの
—毛 わたげ
統 トウ すぶ スベテ
紙 シン おる はたのいと

翕 キフ はねづくろひ トモニ
着 チヤク きる つく
—背長 きせなが
—裝 きソウ
—綿 きせわた
翼 ヨク
翔 シヤウ かける
辜 コ つみ はりつけ
舒 ジヨ のぶ テツ としより
耋 リヨ とりこ
虜 キヨ コ からそら うつ うろ むなし
—木綿 うつゆふ
—貝 うつせがひ
—無僧 コマソウ コモソウ
蜩 マウ すだま
蛙 アイ かはづ かへる
—手木 かへるで
蛛 チユ くも
—絲 くものい
蛟 カウ みづち

蛤 カフ はまぐり
—仔 あさり
—蜊 へりじろ
蛬 カン くも ひき
蛭 シツ ひる
—床子 ねるわしろ
蛞 クワツ ねめくぢら けら
—蝓 なめくぢ なめくぢら
蛸 クワイ さなだむし
蛔 クワイ さなだむし
衆 シユウ シユ おほし
—生 スジヤウ
聒 クワツ かまびすし
敲 キ はたたく
貳 ジニ ふたつ すけ サイ
裁 サイ たつ ワヅカニ
裂 レツ さく
—妙 さいて
視 シ みる
覘 テン のぞき のぞく

—機關 シ のぞく うかがふ
覘 シ のぞく うかがふ
訴 ソ うつたへ うつたふ
訶 カ せむ いかる
詖 ヒ かたよる へつらふ
詆 テイ そしる
詐 サ いつはり
詫 タ わび わぶ
詔 セウ みことのり のりごと
註 チユウ あきらかにす しるす
診 シン うらなふ みる
詛 ショ のろふ ソ ちかふ
詎 キヨ とどまる いたる ナンゾ ダレカ
詞 シ ことのは ことば
評 ヒヤウ たひらかにす はかる
詠 エイ ながむ よむ
—言 ながめごと
—歌 うたながめ
象 ゾウ きさ シヤウ かたどる

貂 テン
—皮 トツピ
—誇 テンほこり
貰 セイ もらふ
貴 キ たつとぶ たふとぶ たつとし たふとむ たつとむ あて
買 バイ かふ
—論 かひロン
賁 ヒ ホン やぶり おほいなり
貸 タイ かし かす
—獻侍 かしあげさむらひ
費 ヒ つひえ つヒゆ つひやす とりかふ
貿 ボウ かふ とりかふ
賀 ガ よろこひ
貯 チヨ たくはへ たくはふ
貶 ヘン おとす
貼 テフ はる
貽 イ おくる のこす
—鮪 イやし
趁 チン ゆきなやむ おふ
—跛 チンバ

超 チウ こゆ
越 エツ こし こえ こす こゆ オヨビ オヨンデ
—度 チド
—幾斯 エキス
—桃 くちなし
跋 バツ ふむ
跌 テツ あなひら
跑 ハウ だく もがく
跗 フ あなひら
跛 ハ ちんば あしなへぐ
距 キヨ ありづめ あつこえ へだたる さる
—懷 あとぶさころ
跡 カ ひざくむ あぐらかく
軫 シン よこぎ
軸 ジク よこがみ まきもの
酣 カン たけなは
酢 サク ソ すすし
—草魚 すだこ
—漿 かたはみ
酥 ソ ちち

釉 イウ やきものぐすり
量 リヤウ はかる はかり
鈎 コウ 鉤の俗字
釿 キン てをの
欽 キン うやまふ
鈍 ドン にぶし にはむ にぶる
—附布子 ドンつくねのこ
鈇 フ なの
鈔 セウ サウ とる うつす ぬきがきす きつて
—金羅 サウラ
鈕 チウ つまがね つまか
—釦 ボタン
鉦 ヘキ かながき けづる
開 カイ ひらく ひらけ ひいき ひらく
閔 ビン あはれむ いたむ
閏 ジユン うるう
閑 カン ひま
—居 わびずまひ
—野 しづや
—雅 しとやか

—話休題 さて
間 カン ケン あはひ あひ ま ママ カハルん コノゴロ シバラク
—夫 ホ
—尺 ミシヤク
—手 あひのて
—拔 まぬけ
—帶 まわたし
集 シフ あつまる あつむ つどふ すだく たかる シユウ セン こゆ
雋 シユン セン
雁 ガン かり
—皮 かにと
—來紅 はげいとう にちにちざり
—點 かりがねテン
雇 コ やとひ やとふ
—人 ゆひ
雄 イウ をす を
—叫 をたけび
雅 ガ みやび モトヨリ ツ子ニ
—樂寮 うたづかさ うたレウ
雰 フン きり しも
雲 ウン くも

—丹 ウに
—母 きら さらら ウンモ
—州橘 ウジユキツ
—珠 ウズ
—雀 ひはり
—脂 よけ
靭 ジン うつは ゆぎ
—貝 うつはがひ
—負 ゆげひ ゆぎへ
項 カウ うなじ
順 ジユン したがふ
—繰 ジユンどり
須 シユ ス もちゐる まつ スベカラクベシ
—瓢 シユ おろし こがらし
馭 ギヨ つかふ
馮 ヒヨウ しのぐ のぼる
黃 ワウ クワウ き
—牛 あめうし
—支子 きくちなし
—瓜 きうり
—瓜菜 うまごやし にがな
—吉 すもも
—金 こがね

—花菜 にはな
—花蕊 めなよもぎ
—枯茶 きかちチヤ
—草 かいな かりやす
—泉 よみぢ よみ
—泉國 よもつくに
—病 きぼむやまひ
—麻 いちび
—桃花毛 ときげ
—菫 きげまん
—書 やはらぐさ
—楊 つげ
—昏 たそがれ
—絹 ホツケン
—道眉 ほほじろ
—蜀葵 にべ とろろあふひ
—粉 きなこ
—精 なるこゆり ところ
—精葉鋼吻 なべわり
—瑞香 みつまた おほふみ
—銅 しんちゆうね
—樣 きつるはみ
—螺 はい
—鷄 かしは
—騮 あかくりげ
—鯑魚 ぎぎ
—鯛魚 わたか わたこ

—馬樂 サイバラ
—産 はやめ
—婦 ほととぎす
傲 ガウ おごり おごる
傴 ク かがむ せむし
—僂 せむし
債 サイ かり
傷 シヤウ きず いたみ いたむ
傳 デン つたひ つたへ つたふ
—馬船 テンマぶね
僂 ル せぐつ かがまる
—麻實斯 リウマチス
傾 ケイ かたむき かたむく
—城 ケイセイ
僅 キン わづか
勢 セイ むく
嫠 リ やもめ
剽 ヒヤウ おびやかす はぐ
—輕 ヘウげる
募 ボ つのり つのる

—盧 はぜ はじ はにし
僉 セン
黍 シヨ きみ きび
—魚子 きびなご
瘋 ヘイ かめ
黑 コク くろ くろし
—人 くろうと
—子 ほくろ ほはくそ
—坊 くろんボウ
—花蛇 からすへび
—酒 くろぎ
—染 くろやむ
—腐 わらびもち
—鯰 こぐま
—貂 ふるき

十三畫

亂 ラン みだり みだれ みだる
—杙 ランぐひ
僉 セン からさを ミナ コトゴトク
傭 ヨウ やとひ やとふ
催 サイ もよひ もよほし もよほす
—合 もやよ

勢 セイ いきほひ いきほふ
—一杯 セイイツパイ
—子 セこ
勤 キン ゴン いそしむ つとめ つとむ
勦 サウ いたはる ころす
耡 ジヨ うなゐ
働 ドウ はたらき はたらく
嗇 シヨク やぶさか
嗅 キウ かぐ
嗄 サ しやがれ からす かるし
嗔 テン いかり いかる
—物造 いかものづくり
嗜 シ たしみ たしなみ たしむ たしなむ
嗟 サ なげき なげく
—嗟 アア なげく
—嗟 アア あやにく
嗣 シ つぎ つぐ
嗤 シ わらふ
嗚 チ なげく アア
—呼 ああ
噫 イ アイ たげく アア
嗉 ソ ゑぶくろ
梟 サウ まさひ なく
園 エン その
圓 エン つぶら まるし まろし
—助 エンすけ
—居 まとゐ
—規 ぶんまわし
—圓 つぶつぶ
塗 ト ねり ねる まぶる まぶす
—師 ねシ
塞 サイ ソク さへ さふ ふさ ふさがる ふさぐ せく
—切 せきる
寢 シン ひたす ヤヤ マスマス
塊 クワイ くれ ほど
塋 エイ はか
塑 ソ でく
塒 シ ジ とぐら ねぐら
塔 タフ そとば
—頭 タツちゆう
塘 タウ つつみ
—蒿 ちさ
塚 チヨウ つか
塙 カウ はなは
塡 テン ハム はまる
—役 はまりやく
奧 アウ おく ふかし
嫋 デウ たをやか なよし かよわし
媽 ボ めうま
媵 ヨウ よめつかひ かつらめ
媾 コウ よしみ
嫁 カ よめ とつぐ
—敎鳥 とつぎをしへどり
嫂 ソウ あによめ
嫉 シツ そねみ そねむ ねたみ ねたむ
嫌 ケン きらひ きらふ きらはし きらふ
嫐 ダウ うはなか
孳 シ ジ さかる やしなふ ふゆ
—尾時 さかりどき
祿 ロク ふち さいはひ
寞 メク さびし
嵩 スウ かさ かさむ
嵯 サ いはほ
幌 クワウ とばり ほろ
肆 シ ほしいまま みせ ゆるし つらぬ カルガユニ ツヒニ イマ コゴニ
媥 ハン さだら
幹 カン から みき
廉 レン かど
廊 ラウ わたどの
麀 イウ いそ めじか
徵 チ すこし ヤウヤク ヒソカニ
—溫 ねるみ
—溫湯 ねるまゆ
—睡 まどろひ
愧 キ はづ
愼 シン しみ つつしむ つつしむ
慄 リツ ふるふ
慍 オン ウン いかる
痲 マ
—疹 はしか
痳 リン せんき
痴 チ しる をこがましし たわけ をこ
—者 しれもの
損 ソン そこなふ
搏 ハク あふぐ うつ
—飯 ねすび
搔 サウ かく
—上筥 かかげのはこ
—布 かいしき
—立杭 かきたてぐひ
—平 かいならし
—松魚 かきがつを
—卷 かいまき
—遣 かいやる
—藁 かいすむ
搖 エウ あゆぐ ゆれ ゆする ゆらぐ うごく いたぶる ゆる
—搖 ゆらゆら
—蕩 たゆたふ
搗 タウ つく かつ
—布 かちめ
—碓蟲 こめつきむし
—飯 かちん
—蝨盥 ひろつき
搨 タフ うつ うつす
搦 ヂヤク からむ
—手 からめて
搬 ハン はこぶ
搢 シン さしはさむ
搜 ソウ シウ さがす
携 ケイ たづさふ
搾 サク しぼる
—澤 しめかす
溜 リウ ため たまる たまり たむ
溟 メイ くらし こさめ
溝 コウ みぞ どぶ
—鼠 どぶねずみ
—鷸鶴 みそさざい
溯 サク さかのぼる
溶 ヨウ とく とかす

溺 デキ おぼる
溽 ジヨク むしあつし
澎 バウ ゆたか ひろし
滄 サウ うなはら
滅 メツ ほろぶ ほろぼす
—甲 めりかり
—多談 メツタはなし
—多矢鱈 メツダやたら
—金 メツキ
滊 キ しほいけ しはあひ
滌 デキ すすぐ
滑 クワツ すべり なめ なめらか ねめ すべる
—胡麻 ねめゴマ
—海藻 あらめ
—筧 すべりびゆ
—藻 あらめ
澤 シ なり かす
澁 ジユウ なぜらふ なぞふ みづはかり
—泝 タウ ひたたく
—泝 ジユウ なぜらふ なぞふ みづはかり
準 ジユン なぜらふ なぞふ みづはかり
源 ゲン みなもと
溪 ケイ たに
溲 シウ そそぐ
—瓶 シユビン
—疏 うつぎ
溢 イツ あふれ あふる こぼる
—者 あふれもの
—蚊 あふれが
溘 カフ いたる ニハカニ スミヤカニ
猾 クワツ みだる
猿 エン さる ましら
—子 ましこ
—滑 さるすべり さるなめり
—槐 いぬえんじゆ
獅 シ しし
爺 ヤ ぢぢ ちやん
鄕 ガウ ギヤウ さと
隕 ヰン おつ
隘 アイ せまし ふさぐ
隔 カク へだて へだたり へだつ へだたる
隙 ゲキ すき ひま
彙 ヰ はりねずみ たぐひ
想 サウ おもふ
惹 ジヤク ひく みだる
愁 シウ うれふ
—訴文 うれへぶみ
蔥 キ ねぎ
愈 ユ さる イヨイヨ
愍 ビン あはれむ かなしむ
意 イ こころ こころざし こころばへ オモヘラク
—地靈 イヂヅク
慈 ジ いつくしむ
—姑 くわる
—愛 いつくしむ
—善市 ズザー
愚 グ おろか
慈 シツ おほごと さと
愛 アイ めづ なしむ いとし いつくし うつくし
—子 めづこ
—兒 まなご
—哉 はしきよし はしけやし
愴 サウ いたむ かなしむ こころいたむ
感 カン かまく
愷 ガイ やすし みなみかぜ
敬 ケイ うやまひ うやまふ
新 シン あら あらた あたらし にひ
—田黑 につたぐろ
—走 あらはしり
—防人 にひさきもり
—發意 シボチ シンボチ
—嘗祭 にひなめまつり
—羅 しらぎ
—墾 にひはり あらきは
—饗 にへ
旒 リユウ はたあし ながれ
暘 ヤウ ひのて
暈 ウン ほかし ほかす めまひ
—取 くまどり
—繝 ウゲン
暑 ショ あつさ あづし
盟 メイ ちかふ
暇 カ いとま ひま
—狀 いとまジヤウ
暄 ケン あたたか
暗 アン くらし ヒソカニ
—謨尼亞 アンモニア
暖 ダン あたたかさ あたたかし あたたか
—房 わたまし
—簾 のレン ナウレン
犍 ケン コン
—吉支 ゴギシ
會 エ クワイ あふ カナラズ タマタマ
—下 エカ
—津塗 あひづぬり
—陰 こわたり
業 ゲフ ゴフ わざ なり スデニ
—力 ゴフリキ
—晒 ゴフざらし
—處 なりどころ
楕 ダ 橢の略字
楚 ソ ずわえ
椴 ダン とど むくげ
楪 エウ すのこ くさび
—子 チヤツ
椽 チン たいはうのき つばき
—桃 つばいも
—象 ほう
椿 ソウ しゆろ
—木 エン たるき けらつつき けら
楊 ヤウ やなぎ
—桐 さかき
—梅 やまもも
—篋 やなぎこり
—櫨木 やまうつぎ
楔 ジ きのこ
楔 セツ くさび
楓 フウ をかつら かへで
楊 クワ つみ
楠 ナン くすのき

棟 トウ あぶち むね
楡 ユ にれ
榣 エウ うごく
楢 イウ なら
楫 ビツ とかみ
楫 ビツ とさ のき はり
楫 エイ はしら
楂 サ うきき いかだ
—魚 うききさんぎょう
楫 シフ かぢ
—子 かぢ
—取 かんどり
楮 チヨ かうぞ かぢ
楥 ケン エン たらのき くつがた
楛 ジヤク しもと
楷 カイ たぢし わらしべ
椰 ヤ やし
楯 ジユン たて
楳 バイ 梅に同じ

械 ヰ いひ ひ
—匣 ひはこ
極 ゴク キヨク きはめ きはみ きめ きはまり きはむ きはまる
—尾 はつを
—素 ゴス
榊 さかき
楸 シウ ひさぎ
椹 チン さはら さはらぎ
檀 だん むろ
歉 サウ すする
歇 ケツ やむ
歲 サイ とし とせ
—德神 としトクジン
—暮 セイボ
殿 デン しんがり とのの とのの
—上 テンジヤウ
毀 キ こぼつ こはる こはす そしる
煎 セン いる にる

煙 エン けむ けむる けぶし けぶる
—草 たばこ
煮 シヨ に える にる にゆ
—御水 におゆ
—凍 にこをす
—麺 にうめん
—凝 にこごり
煖 ダン あたたか
煥 クワン ひかり あきらか
照 セウ てり てる てらす
—布 てりフ
煜 イク かがやく ほのほ
煌 クワウ かがやく きら
—烏帽子 きらめきエボシ
煨 ワイ うづみび
煊 ケン あたたかなり
煉 レン ねる
—堺 ねりベイ
煤 バイ すす すすぶ すすはる

煩 ハン ボン わづらひ わづらふ わづらはす あつかはし
煤 エフ いたむ ゆづ
牒 デツ テフ ふだ
—者 めあかし
瑕 カ きず
瑚 コ さんご
瑇 タイ たいまい
瑞 ズイ みづ
—西 スイ ツル スイツルランド
—籬 みづがき
腔 チツ
腠 ソウ しし わき きめ
腱 ケン すぢ
腎 ジン むらと
—肝 むらきも
腥 セン なまぐさし
腦 ナウ なづき
腫 シユ はれ はる つぢむ

膀 ハク あご
腰 エウ こし
—巾着 こしギンチヤク
—佩 こしさげ
—挿 こしはさ
腴 ユ つちすり
腸 チヤウ はらわた
—加答兒 チヤウカタル
腹 フク はら
—赤 はらか
—居 はらゐさ はらゐる
—消化 はらごなし
—帶 はるび
—愈 はらいさ
腺 セン
萩 シウ よもぎ はぎ
萬 バン マン よろづ
—引 マンびき
—年青 おもと
—劫石 マゴフのいし
—集樂 バンスラク
董 トウ ただす はすのね

萱 カン かや
—草 わすれぐさ クワンザウ
葆 ハウ あぢさゐ
葆 ハウ つつむ しげる
萹 ヘン うしくさ
—豆 あぶまめ
—蓄 にはや ねぎ
葩 ハ はな
落 ラク おつ おとす おちる おこす
—巾着 おとしギンチヤク
—閉 おとしだて
—霜紅 うめもどき
葢 ジヨ にらぎ
蒿 ワ ちさ
—苣 ちさ ちしや
葉 エフ はつは
—胡羅蔔 はにんじん
—蒐 はびやう
—椀 くはで
—斑 はそば
葬 ソウ はぶり

—草 かなひぐさ
蓂 メイ はなぶさ
葷 クン からきな からし
葛 カツ かづら くず つづら
—上亭長 まのはんめう
—注 くずかけ
—野童 かさのわらは
—籠 つづらこ つづら
菟 ト
—癸 トキ
—葵菪 いそぎんちやく
葷 クワウ みのの
葡 ブ だう
—萄 えび
—萄牙 ホルトガル
—萄染 えびぞめ
葑 ホウ かぶら
葦 イ あし よし
—毛 あしげぶち
—芽 あしわか

—鹿 あしかび あしか
—亂 よしみだれ もどき
藥 ヤク くすり
蓋 ガイ ふた おほむ 本ホム子 ひだし おほふ
—木 しきぎ かさぎ
葫 コ おほひる
—蒜 ひる
—蘆 へうたん
葬 ソウ はぶり はふる はうむる
葭 カ あし
葭 ダン むくげ
—羅 あしづつ
葯 ヤク よろひぐさのは ちとふ
葵 キ あよひ
—具 あがひ
蓚 シウ
葺 シフ ふく
蒡 ソウ しもと
逼 ヒツ せまる ヒヨク

遁 トン にぐ のがる
遂 スイ ついひ とぐ
遊 イウ あそび ユ あそぶ
—牧 つるび さかり
適 テキ あつぱれ
過 クワ すぎ すぐ よぎる あやまち あやまつ
—雨 むらさめ
—指 すぎさしのひれ
遐 カ はるか ナンゾ
遏 アツ やむ
運 ウン はこび はこぶ
—否天賦 ウンプテンプ
遍 ヘン すみやかなり スミヤカニ
遇 グウ あふ グル
遍 ヘン あまねし
—羅 ヘラ
道 ダウ みち ヨリ

—中獨兒 ダウチユウドツこ
—化 ダウ ける
—反玉 あがへしのたま
—具立 ダウグだて
—普請 みちブシン
—緒 みを
—祭 ちのへのまつり
—觸神 ちぶりのかみ
達 タツ タチ ダチ とほる いたる
—引 たてひく
—磨射干 ダルマひあふぎ
違 イ ちがひ たがひ ちがふ たがふ
—遣戸 ちがへやりど
甞 シヤウ なむ カツテ
献 ケン コン 獻の俗字
斟 シン はかる くむ とる
勘 セン すくなし
戴 タイ カン さす ころす
當 タウ あつ あたり あたる マサニ ベキニ ベシ
—肉 あたりみ

—狂言 あたりキヤウゲン
—鉢 あたりバチ
畫 グワ カク ゑ ゑがく
—燒青 ごす
畸 キ ことなり こわけ
畷 テツ なはて
痼 コ ながびくやまひ
痺 ヒ しびれ しぶる ひるむ
痙 ケイ おそし
痙 リウ つかれやむ
痿 ズイ なゆ
—痺 ひるむやまひ
痒 ヨウ かゆ つかる
瘀 オ ふるち
瘀 チヨク しもやけ
瘀 タン
瘍 ヤウ
—鍼 うまや まや
—羅 サン さかづき
盞 トク かみ
督

睪 エキ みる うむ
睟 スイ つやつやし
睚 ガイ まなじり
睡 スイ ねむり ねむる ねむし
睛 セイ ひとみ
睢 キ ス ス井 いかる そしる
睥 ヘイ にらむ
睥 ヘイ にらむ
睫 セフ まつげ
睦 ボク むつまじ むつる むつぶ
睨 ゲイ にらむ ねむ
矮 ワイ かくし
—栗 ちやぼぐり
—檜 はいびやくしん
—鷄 ちやぼ
碁 キ ゴ 棊に同じ
—笥 ごけ
碧 ヒ
碌 ロク すくなし
碎 サイ くだく

—米粟　けんげ
硼　ホウ
碑　ヒ　いしぶみ
碍　ガイ　ささはる　さまたぐ
碓　タイ　うす　からうす
—程　ほろし
碇　テイ　いかり
硜　ガイ
禁　キン　とどむ　ダユ
—色宣下　ギンジキセンゲ
禽　キン　とり
禀　リン　ヒン　うく
稔　ジン　ニン　みのる
稗　ハイ　ひえ
稜　リョウ　かど　そは
—威　いつ
稠　チウ　おそし　しげる
稚　チ　いとけなし　おさなし
—子　わくご
—見　たわらひ　チご
—松　うなゐまつ
稈　いねがは
罪　ザイ　つみ
罫　ケイ　どどこほる
置　チ　おき　おく
窟　クツ　いはや　あな　す
窠　クワ　あな
裨　ヒ　さす　たすけ
褂　うちぎ
稷　つま
裸　ラ　はだか
裾　ヘウ　ひれ
裾　キヨ　すそ　かいどり
筧　ケン　かけひ　とひ
筅　クワン　ささ
簡　トウ　たけざを
筥　キヨ　はこ
笠　ゼイ　うらなひ
筵　エン　むしろ
粮　ラウ　かて
粳　カウ　うるし　うる
粲　サン　しらげごめ　あざやか
絹　ケン　きぬ
—帷子　きぬかたびら
絺　チ　ほそぬの
綈　テイ　あしぎぬ　つむぎ
絽　ロ　ろ
綃　セウ　ほつな
綆　カウ　つるべなは
綛　ケフ　くるまのかざり
綏　スヰ　やすし
綱　ケイ
經　キヤウ　たて　わたり　ふ
—貝　キヤウがひ
—案　キヤウづくゑ
—廻　へめぐり
總　かすり
羨　セン　うらやみ　うらやむ
義　ギ　すぢみち　むね　よし
群　グン　むれ　むら　むらがる
—友駒　むらごもごま
聖　セイ　ひじり　ひじる
—無　わりなし
—靈會　シヤウリヤウエ
聘　ヘイ　やとぶ　まねく
肅　シユク　うやうやし　おごそか
舅　キウ　しうと　しうとを
艇　テイ　こぶね
舸　フ　はしけ　はしけぶね
虞　グ　おそれ　はかる　うれふ
虜　リヨ　とりこ
號　カウ　さけぶ　さなべ
蜃　シン　おほはまぐり
—刀禰　エン　あま　えびす
—刀禰　あまの下子
蜀　ショク　いもむし
—羊泉　ひとどりじやうど
—黍　せいたかきび　もろこしきび
—黍團子　もろこしダンご
—椒　はなあふひ　カラあふひ　なるはじかみ
—葵　たちあふひ　たちあふひ
—魂　ほとゝぎす
蝨　シツ　あしまつひ
蝟　セキ　たこ　あしたかぐも
—水母　たこくらげ
蛻　ゼイ　もぬけがは　から　もぬく　ぬけがら
蛺　カフ　あげはのてふ
蛹　ヨウ　いむき　さなぎ
蛾　ガ　ひびる
蜥　セキ　とかげ
—蜴　とかげ
蜈　ゴ　むかで
—蜈　むかで
蜊　リ　はまぐり
蜂　ホウ　はち
蜆　ケン　しじみ
蜉　フウ　おほあり　かげろふ
—蝣　かげろふ
蝣　ひる
蝶　ラツ
蝟　シウ　ひなむし
衞　ガ　やくしよ
裏　リ　うら
—白羊齒　うらじろしだ
—兜　うちかぶと
裔　エイ　すそ　すゑ
裏　イフ　まとふ　かうばし
—衣香　えび
裘　キウ　かはごろも
裲　リヤウ　うちかけ
—襠　うちかけ
裝　サウ　シヤウ　よそほひ　よそほふ　よそほふ

—布　スヰ　はし　くちばし
解　カイ　とく　ほどく
—木綿　はぎきモメン
—由　ゲユ
—部　ときべ
—夏　ゲゲ
—穗　ほどろ
詠　エイ　よむ
詫　タ　わび　かたつ　わぶ　わびし
詭　クワウ　ねごと
詣　ケイ　いたる　まうづ
誠　セイ　まこと　まことに
試　シ　こころむ　こころみ　ためし　ためす
詢　ジユン　とぶ　まこと　はかる
詩　シ　からうた　ふみ
詬　コウ　はぢ
訾　シ　そしる
詭　キ　あざむく
詮　セン　たひらか
詰　キツ　つまり　つむ　つめ　なじる　つまる
話　ワ　はなし　はなす
—上手　はなしジヤウズ
詳　シヤウ　つまびらか　コトゴトク
該　ガイ　みな　あたる　コトゴトク
詼　クワイ　たはむる
誂　テウ　あつらへ　あつらふ
誄　ルイ　しぬびごと　しのびごと
誅　チユウ　ころす
誇　コ　ほこる
貉　カク　うじな　むじな
貲　シ　たから
賃　チン　やとふ
資　シ　ゝる　たから
賈　コ　かふ　あきうど
賂　ロ　まひなひ
賄　ワイ　まひなひ　まかなひ　まかなふ
賊　ゾク　そこなふ
跡　セキ　あと
—見　とみ
—切　とぎる
—絶　とだゆ
跳　チウ　はだし
跨　コ　また　またぐ　またがる
跬　キ　かたあし
跟　コン　くびす
跪　キヨウ　あしおと
路　ロ　ちて　みち
跪　キ　ひざまづく
—守　ちもり
—墾　みちはり
跳　テウ　をどり　をどる　とぶ
—厄　はねヤク
—馬　あがりうま
酷　メイ　あまざけ　えふ
—舟　なりはひぶね
農　ノウ　たつくり
酬　シウ　むくゆ
酪　ラク　ほおとる　にうのかゆ
鈴　リン　すず　レイ
鈿　デン　かんざし
鉅　キヨ　おほいなり　つりはり
鉉　ケン　ゲン　つる
鉈　シヤ　なた
—豆烟管　なたまめぎせる
—豇　なたささげ
鉋　ハウ　かな　かんな
鉏　ショ　すき　さへ
鉑　ハク　はく
鉄　カウ　くらべ　くらぶ
—沸　ヘキ　ひらく　あす
—榛　さいはらひ
—由　ゲユ
—部　ときべ
—夏　ゲゲ
—穗　ほどろ
詠　エイ　よむ
詫　タ　わび　かたつ　わぶ　わびし
詭　クワウ　ねごと
詣　ケイ　いたる　まうづ
誠　セイ　まこと　まことに
試　シ　こころむ　こころみ　ためし　ためす
詢　ジユン　とぶ　まこと　はかる
詩　シ　からうた　ふみ
詬　コウ　はぢ
訾　シ　そしる
詭　キ　あざむく
詮　セン　たひらか
詰　キツ　つまり　つむ　つめ　なじる　つまる
話　ワ　はなし　はなす
—上手　はなしジヤウズ
詳　シヤウ　つまびらか　コトゴトク
該　ガイ　みな　あたる　コトゴトク
詼　クワイ　たはむる
誂　テウ　あつらへ　あつらふ
誄　ルイ　しぬびごと　しのびごと
誅　チユウ　ころす
誇　コ　ほこる
貉　カク　うじな　むじな
貲　シ　たから
賃　チン　やとふ
資　シ　ゝる　たから
賈　コ　かふ　あきうど
賂　ロ　まひなひ
賄　ワイ　まひなひ　まかなひ　まかなふ
賊　ゾク　そこなふ
跡　セキ　あと
—見　とみ
—切　とぎる
—絶　とだゆ
跳　チウ　はだし
跨　コ　また　またぐ　またがる
跬　キ　かたあし
跟　コン　くびす
跪　キヨウ　あしおと
路　ロ　ちて　みち
跪　キ　ひざまづく
—守　ちもり
—墾　みちはり
跳　テウ　をどり　をどる　とぶ
—厄　はねヤク
—馬　あがりうま
酷　メイ　あまざけ　えふ
—舟　なりはひぶね
農　ノウ　たつくり
酬　シウ　むくゆ
酪　ラク　ほおとる　にうのかゆ
鈴　リン　すず　レイ
鈿　デン　かんざし
鉅　キヨ　おほいなり　つりはり
鉉　ケン　ゲン　つる
鉈　シヤ　なた
—豆烟管　なたまめぎせる
—豇　なたささげ
鉋　ハウ　かな　かんな
鉏　ショ　すき　さへ
鉑　ハク　はく
鉄　カウ　くらべ　くらぶ
—沸　ヘキ　ひらく　あす
—榛　さいはらひ
鉉　ケン　ゲン　つる
鉈　シヤ　なた
—樟　くろたぶ
鉗　ケン　つぐぶ　つぐむ
鉞　エツ　まさかり
鉛　エン　なまり
鉗　フウ　おほくぎ
鉢　ハチ
—多羅　ハツダラ
—坊主　ハツチナバウズ
—割　ハチわる　ハチわれる
鉋　ハウ　けづる
鉤　コウ　かぎ　つめ
—鍵　からかぎ
鉦　シヤウ　かね　たたきがね
雉　チ　きじ　きぎす
零　レイ　のこりあめ　こぼす　こぼれ　おつ
—烏豆　がんくひまめ
—鳥豆　にちぶまめ
—落　おちぶる
—亂　ぼら
—餘子　ねかど　むかど
雷　ライ　いかづち　なるかみ　かみ
—魚　はたはた
—鳥　ヨイのとり
—藥　ぎんざる
電　デン　いなづま
靖　セイ　やすし
靴　クワ　くつ
—杳　クワのくつ
韮　キウ　にら　かみら　みら
頌　ショウ　ほむ　ほめうた
—偈　ジエグ
頑　グワン　かたくな　かたくなし
—狂　くなたぶれ
預　ヨ　あらかじめ　あづかり　あづかる　あづけ　あづく
頒　ハン　あかつ　わかつ
竭　ケツ　つくす　コトゴトク

頓 トン ひたぶる とみ やがて
—心 ニハカニ ひたぶるごころ
—丘 ひたを

飫 ヨ たまふ さかもり

飪 ジン にる

飲 イン のみ のむ
—殘 のみさし のみがけ

飯 ハン いひ めし
—事 せまとり
—匙 いひがひ さもじ
—匙倩 はよ
—綱使 いづなつかひ
—蘿 いひしたみ

馳 チ はす

馴 ジュン なれ なら ならす
—合姦 なれあひまをとこ
—寄 なよる
—染 なじみ
—鹿 となかい

髭 テイ えびかつら かもじ
—草 かもじぐさ

鮒 ブ ふり ふを

鳧 フ かも けり

鳩 キウ はと
—尾 みぞおち みづおち
—尾骨 むなぜね
—槃茶 クバンダ
—鶴 けら

鴉 かいつぶり にほ にほどり

颯 フ おほかぜ

鼈 ビン つとむ

聚 シウ あつむ

鼎 テイ かなへ

鼓 コ つづみ
—吹司 クス井シ
—旋子花 はやびとぐさ
—翼 はたたき はたたく はばたく
—蟲 まひまひむし まひまひ

鼠 ソ ねずみ
—茅花 ねずみつばな
—婦 おめむし
—婦蟲 とこむし

—頭魚 きす
—梓木 ねずみもち はばこぐさ
—麴梓 はかる ゴニニ ア

十四畫

像 ザウ ずがた

僕 ボク しもべ やつがれ

僑 ケウ たかし たびやどり

僑 セン シュン すぐる

僚 レウ とも

僞 ギ いつはり いつはる
—物師 にせ いかものし
—筒 はひも

僥 ゲウ いつはり ソウ

僧 ソウ

僦 シウ かる やとふ

僭 セン かる おごる いつはる

僊 セン 仙に同じ

僮 ドウ わらは

微 ビ ナシ アラズ ナカツセメ 微に同じ

兢 キヨウ つつしむ おそる
—兢 つつしむ おそる

劃 クワク さく わる

嘉 カ よし よしみ よみす
—魚 いはな

嗷 ガウ かなかすし

嗾 ソウ けしかく

嘆 タン なげき なげく

嗽 ソウ うがひ うがふ

嘩 ヒツ

嘌 ヘウ あぢさむ

嘈 サウ さわがし
—嘈 わやわや

噓 キヨ ふく ゆく うそ
—樂 ラク アア

嘔 オウ はき はく
—吐 ひ へど

嗹 レン かまびすし
—馬 デンマルク

嘖 サク よぶ さけぶ かまびすし

鳴 メイ なく なり なる

圖 ズト はかる
—拔 ぬけ ぬく

圍 ヰ かこ あつまり
—子 ダンシ
—居 きゐる
—扇 うちは
—栗 ドングリ
—亂旋 トラン トランでん
—頭 よしろ

賈 キ おほばこ

劚 ケツ ほりものとがたな ほる

厮 シ しもべ

厭 エン あき あく いとふ
—目 いとめ

塵 ジン ちり
—刷 ちりはたき

塾 ジュク へや いへ

塹 セン ほり ほりぎ

墓 ボ はか つか

墺 ロウ ありづか

墀 チ には

境 キヤウ ケイ さかひ

堰 ラ ひく もつこ

壽 ジュ ことぶき
—仙魚 かがみだひ
—詞 よごと

夐 ケイ とほし

夢 ム ゆめ
—直路 ゆめのただち

夥 クワ おびただし

奩 レン かうばこ

奪 ダツ うばふ

奬 シヤウ すすむ

嫖 ヘウ かろし みだりがはし

嫗 ウ おうな

嫡 チヤク むかひめ よつぎ

嫣 エン うつくし

嫦 ゴウ 恒に同じ

嫩 ドン わかし よわし
—葉 わかば

孵 フ かへる かへす うむ

夤 イン つつしむ すがる

察 サツ あきらかにす かんがふ

寡 クワ やもめ すくなし
—婦 やもめ

寢 シン ね いね
—入端 ねいりばな
—物 ねせもの
—浸 いびたり いびたれ
—粉 ねこ
—莚 いなむしろ

寤 ゴ さむ

寨 サイ とりで

寬 クワン くつろぐ ゆるやか ゆるし

寥 レウ さびし

賓 ヒン おらうど しづかなり
—白 せりふ

—頭盧 ビンロ

實 ジツ まこと さね しげみのり みのる
—布的里亞 ザフテリヤ
—法 ジホフ
—頭 ジンドウ

寧 ネイ やすし ムシロ イヅクンゾ

對 タイ ツイ むかふ
—屋 タイのや タイヤ
—面 タイメ
—馬祇 つしまど

屢 ル しばしば
—立 しばだつ

嶄 ザン けはし

嫚 マン まく

幕 バク なく

幗 クワク ちきりかんむり

廓 クワク くるわ

彰 シヤウ あきらか

徵 チヨウ めす

慓 ヘウ はやし
—戲 へうげる

慣 クワン なれ なる

慘 サン むごし
—粉 シン こ

慚 ザン はづ

慟 ドウ かなしむ

慢 マン おこたる ゆるし

慥 サウ たしか

慨 ガイ うれたし なげかはし

慴 セフ おそる

慵 ヨウ ものぐさし ものうし

慳 ケン をしむ

慷 カウ なげく

摶 フ ホ さらふ

摑 クワク つかみ つかむ

摘 テキ つむ
—取 つまさる

擢 サイ くだく

摸 バク さがす もとむ

捻 ジン いじ

摺 セフ する
—尺 たたみものさし てぶジヤグ
—形木 すりかたぎ

溯 ヘウ ホウ あせき

滾 コン たぎつ たぎる

漪 イ さざなみ

漾 ヤウ ただよふ

滯 タイ とどこほり とどこほる

滲 シン しむ

滷 ロ しほつち

滿 マン みつ みたす
—江紅 あかうきぐさ
—俺 マンガン

漁 ギヨ いさり すなどり すなどる
—炬 よぶり

漂 ヘウ ただよふ うかぶ
—白粉 さらしこ

漆 シツ うるし

漏 ロウ もり もれ もる
—斗 じやうご
—空鑼 すかしぼり
—蘆 くろくさ

漉 ロク こす すく
—水囊 みづぶくろ

漑 ガイ そそぐ

演 エン のぶ ひろむ

漕 ソウ こぐ

漢 カン あや から
—陶 カラだけ
—陶部 あやのすゑつくり
—椒 あさくらさんせう
—織 あやはとり

漬 シ つく ひづ
—柿 あをさ

漸 ゼン すすむ そむ ヤウヤク ヤヤ

漲 チヤウ みなぎる

漣 レン さざなみ
—漪 さざなみ

滴 テキ したたり したたる

漫 マン そぞろ すずろ みだり
—火 とろとろび とろび
—尾 そぞろを

獄 ゴク ひとや

獏 バク

獐 シヤウ
—牙 あげまのさう

鄙 ヒ ひな ひなぶ いやし

際 サイ きはだし
—疾 きはどし

隙 ゲキ すき ひま

障 シヤウ さふ さはり さはる
—子 サウシ
—泥 あふり
—眼 そこひ

愿 ゲン つつしむ すなほなり

慇 イン いたむ

慈 ジ いつくしみ いつくしむ
—魚 なまづ

態 タイ わざ
截 セツ きる
敲 コウ たたく
旗 キ はた
—紅 はたつり
—魚 かちきまぐろ
暢 チョウ のぶ
—氣 のんキ
榮 エイ さかえ さかゆ
—行 さかゆく
—映 さかはえ
—螺子 さざえ
—耀 エエウ
槫 タン くれ
榛 シン はぎ はんのき はり
—木 はんのき
榧 ヒ かや
榿 ス井 たるき はへぎ
楊 トウ もち
—車 しぢ
榼 カフ たる ふた もだま

—藤子 もだま
槖 タク
—吾 つはぶき
槇 テン シン まき
—皮 まいはだ
—絮 まきはだ まいはだ
槃 ハン たらひ どぶこはる
楊 トン
槁 カウ からす かれ
槎 サ いかだ
榕 アウ あこう
楯 セツ あらもと
槓 コウ
稾 カウ 稿に同じ
滕 ショウ たていとまき
榻 コツ ひらぎ
—柮 はた
構 コウ かまへ かまふ
楹 チン すぎ
—梓 まるめろ さろめろ

槌 ツ井 つち
槇 セイ くわりん
槍 サウ やり
槐 クワイ ゑにし ゑんじゆ
—葉蘋 さんせうも
榎 カ ええのき
—實胡椒 えのみゴセウ
榜 ハウ むち
—示杙 かんばん ハウジゞひ
—葛刺 ぜんガラ
—筌 しもと
榴 リウ ざくろ
棚 サク ほこ
楪 ショウ はしら ぬき
楮 シ いしずゑ
—柱 すけ
歌 カ うたふ うたふ
—女 みみず
—論議 うたロギ
歉 ケン あきたらず
熏 クン ふすぶ やく

熊 ユウ くま
—川 コモガイ
—谷草 くまがいサウ
熒 ケイ ともしび かがやく
—惑 わさわひぼし
—惑星 ひなつぼし
煽 セン あふり あふる
熅 ウン いきれ いきる
熄 そく きゆ やむ
熔 ヨウ とく とかす
犖 ラク まだらうし
爾 ジ ソノ ナンヂ シカリ シカグ
犒 カウ ねぎらふ ねぎ
犗 カイ
瑣 サ くづ こまかし
瑪 メ めなう
—瑙 メナウ
瑠 ル るり
瑤 エウ うつくしきたま
瑰 クワイ くわい めづらし

瑲 サウ たまのこゑ
膂 リヨ しし せぼね
—肉 そぶし
膏 カウ あぶら
睿 エイ さとし ふかし
腿 タイ はぎ
膀 ボウ ふくる わきばら
膃 チツ こえたるこゑ
—肭獸 チツトせい
—鉢羅 チンバチ
膈 カク かねのつりぎ
蒐 シウ あつむ
蒔 ジ まく
—蘿 ゐのんど
蒙 モウ かうむる ラル
蒜 サン にら ひる
—顆 ひるさき
蒟 ク こんにやく
—醬 きんま わたたび
—醬手 さんまて
蔌 たつ

蒭 スウ
—靈 くさひとがた
蒲 ホ かば がま
—公英 たんぽぽ
—柊 かはやなぎ
—筍 かまけ
—歷巾 がなはばき
—拾 ホウ
—葵 あぢまさ ぴらう
—團 フトン
蒸 ジョウ むし むす ふかし
—薯 ふかしいも
—藜銜 うはいぐつわ
—露鑵 ちんびき
—籠 セイロ セイロウ
蓁 シン しげし くさむら
蒴 サク そくづ
蓙 ござ
蒼 サウ あをし
—朮 あかをけら
—鷺 みさぎ
蒿 カウ よもぎ
—雀 あをし

蓄 チク たくはふ
蓊 チウ さかんなり
蓍 シ めど
蓐 ジョク しとね
蓑 サ みの
莎 サ
遘 コウ あふ
遙 エウ はるか
遜 ソン ゆづる
遞 テイ たがひ ダガヒニ
遠 エン ゑら どほし とはさく
—方 とほち
—江 どほつあふみ ごほたふみ
—志 ひめはぎ
—淺 ごあさ

遡 ソ さかのぼる
遣 ケン おくる つかはす やる シム
遑 たがひ うたがふ うたがはし

—無 うたし
瘍 ヤウ かさ きず
瘋 フウ づつう
瘧 ギヤク おこり わらはやみ
瘉 ユウ やむ いゆ
瘖 イン おし
瘕 カ チ
瘻 ロウ はみかへす
腐 フ くさる くされ くさり くたす
皺 クン あかがり あかぎれ
—裂 ひび ひみ
盡 ジン づく つくす
監 カン すぶ みる かんがみる
碧 ヘキ あを みどり
—魚 しび
碩 セキ おほいなり
碪 ガン きぬた
稽 ケイ わらしべ しべ わらみご

種 シュ たね
—姓 スジヤウ
稱 ショウ となへ となふ たたふ
窪 ワ くぼ くぼみ くぼむ くぼし
窩 ワ くら むろ あな
—主 かひす
竭 ケツ つくす
竢 シ まつ アト
端 タン はな はし つま
—女郎 はしヂヨラウ
—白 つまじろ
—折傘 つまをりがさ
—武者 はムシヤ
—端 はつはつ
—唄 はうた
—隱 つまごもる

罰 バツ ばち つみ とが
署 ショ しるし しるす
罷 アン エン あみ

複 フク また かへる
褊 ヘン せまし
褐 カツ けどろも カチン
褌 コン たふさぎ
襖 ケイ はらへ みそぎ みそぐ
禍 クワ わざはひ まが
福 フク たすけ さいはひ
—艮雀 フクラすずめ
—草 ささくさ
禎 テイ さいはひ かだし よきしるし
禋 イン まつる
箇 コ カ
箏 サウ シヤウ こと
箕 キ み
—踞 うづる
算 サン かぞふ
—盤 そろばん
箙 フク えびら やなぐひ
箝 カン やす くびかせ

箐 セイ こも
箟 サブ うちは
箍 コク たが
管 クワン くだ
—珊瑚 くだくらげ
箔 ハク すだれ
—物 ハウのもの
箜 コウ かご
—篌 クゴ
篦 ヒ へら
—入 のり
—模 のだめがた
箒 シウ ハウ はばき はうき
箒 あふだ
粽 ソウ ちまき
粮 チヤウ かて
糧 ロク はせ
粹 スイ まじりなきこと
精 セイ しらげ しらぐ
—兵 とつはもの

—進 サウジ シヤウジ
—進閲 としみ
粿 クワ こめのこな しらげよね
—米 かしよね
緊 キン きびし
綜 ゲン ねんごろ
綵 サイ まやぎぬ
紆 ウ かすり
綜 ソウ あせ へ へる すぶ
—足 へあし
綟 レイ もぢ ねづ
—木 はとのあし ねぢき
綠 リヨク ロク みどり
—門 アーチ
—袗 ロウサウ
—轡 ロウハ
—蠕蟲 あをうみがめ
綰 つはなかず
綢 チウ しげし まつはる
綫 セン すぢ
—帛 かかふ

綬 —帛鞋 かはわらうづ　ジユ　くみひも　いんのひも
—草 もぢすり
維 井つなぐ　コレ
—摩會 ユ井マエ
綯 タウ　なふ　よる
綰 ワン　たがね　わぐ　たぐむ
—物 わけもの
網 マウ　あみ　あ
—子 あびこ　あご
—引 あびき
—代 あびろ
—針 あばり
—麻 あみそ
—結 あみすき
—魚 あみえり
綱 カウ　つな
綴 テイ　とぢ　つづる　つづり
—五圍 よつめごろし
綸 リン　つりいと
綺 キ　かはた
綻 タン　ほころび　ほころぶ

綽 シヤク　しとやか　おほし　ゆるやか
—綱 おひまはし
—號 あだな
綾 リヨウ　あや
—子 りんず
綿 メン　わた
—天鵞絨 メンビロード
—筒 あめいきき　けいきき
—雲兒 さんだいがさ
—撒絲 はつしもめん
緞 ダン　あざやか
緇 シ　くろいろ　くろいろのこころも
緋 ヒ　あけ
—袍 あかぎね　あけごろも
綏 ズ井　あげを　おいかけ　ほほすけ
翠 ス井　みどり
翡 ヒ　かはせみ
—翠 かはせみ　しようびん　せうび
聟 セイ　ムコ
聢 しかと
聞 ブン　きき　きく　きこゆ

—召 きこしめす
—居鳥 ききず鳥どり
—食 きこしをす
—道 ききならく
聚 ジウ　あつむ
—樂第 ジユラクダイ
肇 テウ　はじむ　ハジメテ
臺 ダイ　うてな
—火斗 ダイヒのふ
—詞 せりぶ
亶 ダン　タダ　マコトニ
與 ヨ　あたへ　あたふ　あづかる　ヨリハ　タメニ　トモニ　シク
舞 ブ　まひ　まふ
—々螺 まひつぶろ
猛 バウ　たけし
蜜 ミツ　はちみつ　みつ
—甘 かんざう
—柑 ミカン
蜚 ヒ　つのむし　あぶら虫し
—蠊 つのむし
蜘 チ　くも

—蛛 くも
蜣 キヤウ　くそむし
—蜋 まつむし
蛤 カン　ゴン　けむし
—蟹 けむし
蜩 テウ　ひぐらし
蜷 ケン　にな　みな
—局 どぐるまく　どぐろ
蜺 ゲイ　にじ
蜻 セイ　とんぼ　こほろぎ
—蛉 あきつ　かげろふ　とんぼう　ゑむむは
蝮 クワ　じがはち
—蠍 ラ　ぶらむし
—蛄 ぎりぎす
蝸 エン　あがく
螢 ジヤウ　もはかる
褒 クワ　つつむ
製 セイ　したつ　つくる
覡 ケキ　をのこかむなぎ

誓 セイ　ちかひ　ちかふ
—文拂 セイモンはらひ
—言 ちかひごと
誌 シ　しるす
誚 セウ　せむ　しかる
誑 キヤウ　たぶらかす
誕 ダン　あざむく　うまる　オホイニ
認 ニン　みとめ　みとむ　したたむ
誘 イウ　さそひ　さそふ　いざなふ
—竿 をこづりざを
語 ゴ　たらひ　かたらふ　かたる
誠 セイ　まこと　マコトニ　モシ
誡 カイ　いましめ　いましむ
誤 ゴ　あやまり　あやまる
誣 フ　しふ
誦 ショウ　となふ　そらんずよむ
說 セツ　とく　ナラク
誨 クワイ　をしふ

豪 ガウ　つよき　つよきもの　たけし
—豬 やまあらし
豨 キ　ゐのこ
—薮 めなもみ
貍 リ　たぬき
貌 バウ　かたち
賒 シヤ　おそのる
賑 シン　にぎはひ　にぎはし　にぎはふ　にぎはす
—賑 にぎにぎ
赫 カク　かがやく
輕 テイ　あか
—粉 へた
趙 テウ　ひさし　おもむく
跼 キヨク　せぐくまる
疏 ソ　うとし　とほざかる　かぢうがき
疎 ソ　うとひ　うとし　うとんず
踉 ラウ　おどる
踊 ヨウ　をどり　をどる

甄 ケン　あらはす　あきらか
輙 テツ　すなはち　たちまち　たゞちに　ヤ・モスレバ
輓 バン　ひく
輔 ホフ　たすく
輕 ケイ　かろんず　かろし
—尻 からしり
—袗 かるサン
—粉 はらや
—羹 かるカン
斡 アツ　めぐる　めぐらす　つかさどる
辣 ラツ　からし
酷 コク　むごし　しひたぐ　ハナハダ
酵 カウ　しらがす
酸 サン　すし
—葉 すいば
—棗 さねぶとなつめ
—損 すし
—漿 ほほづき　かたばみ　かがち　すかんぽ
—樸 すいどう　すいば
酴 ド　ヤど

銘 メイ　しるす　いましめ
銜 ガン　くくむ　くはふ
銓 セン　はかり
鋸 セン　くしろ
鋸 セン　もり　やす
銛 セン　かすがひ
銚 エウ　なべ　わん
—子 さしなべ
—鼇 ちろり
閣 カク　くわんのき　やくしよ　かけはし　どてん
閤 カフ　くぐりど
閧 コウ　とき
閨 ケイ　ねや
閾 ヒキ　ミン
雌 シ　めす　めん
—總 めだら
霎 バイ　つゆのあめ
需 ジユ　もとめ　もとむ

鞄 ハウ　かばん
鞅 アウ　むながき　むながい
鞆 とも
韶 セウ　つぐ　うるはし
—陽魚 こまめ
—艷 ざくろ
頗 ハ　すこぶる　ヤヤ
—黎 ハリ
頒 ハン　わかつ
領 リヤウ　うしはく
—巾 ひれ
—骨 きはね
—脚 ねりあし
瓏 センナグラム　サンチグラム
颯 サフ　サツ　はやて　おほかぜ
飴 イ　あめ　たがね
—粽 あめちまき
飼 シ　かひ　かふ
—面 いろこおもて　そはかす
飽 ハウ　あき　あく

—迄 あくにや
—無氣 あくがなし
飾 ショク　かざり　かざる
—釦 かざりぼたん
—磨紺 シカマコン
—磨褐 シカマガウ
駁 ハク　ぶち
駄 タ　おほす　のす
—目 ダめ
—荷袋 ダンぶくろ
髣 ハウ
髦 バウ　かもじ
魁 クワイ　さきがけ
魂 コン　たましひ　たま
魟 コウ　をこじ
鳳 ホウ　おほとり
—子蝶 あげはのテフ
—尾草 うらじろ
—梨 あまなし　アナナス
—蝶 あげはのテフ
鳶 エン　とんび　とび
—尾 いちはつ

鼻 ビ　はな
—動 うそやぐ
—鑷 セイ　ととのふ　ひとし　トモニ
齊 セイ
—串 いくし
—杙 いぐひ
—墩果 ちさ
—墩樹 ちさのき

十五畫

價 カ　あたひ
僻 ヘキ　ひがみ　ひがむ　えぜ
—方人 えぜかたうど
—歌 えぜうた
—讀 かがよみ
儋 ダン　になふ　おふ
儇 ケン　さとし　はやし
僵 キヤウ　たぶる
儀 ギ　よるし　のり
—刀 あかりがち
億 オク　おほいなり　やすんず
儉 ケン　つまし　たまか

劈 ヘキ つんざく
劍 ケン つるぎ
—柄 たかひ
劇 ゲキ はげし ハナハダ
—草 かきつばた
劉 リウ ながさかり
嘴 シ くちばし はし
嘯 セウ うそぶく うそぶき
噬 キ つづしり つづしる
啕 テウ あさけり あざけり
—笑 あざわらふ
嘶 セイ いばゆ いななく
噂 ソン うはさ
噴 フン ふき ふく
嘽 ダン あはく いなく
嘹 レウ
噎 エツ むせぶ むせび
噫 キ たのしむ おどろく アヽ
嘸 ブ さぞや さぞかし さぞな

嘯 セウ かむ
嘩 クワ かまびすし
墜 ツイ はる おつ
墨 ボク すみ
—子 ぼくそ ぼくろ
—斗 すみつぼ やたな
—汁 インキ
—曲尺 すみがね
—柄 すそづか すみのつか
—魚 いか
墮 ダ おつ
增 ゾウ ますます マスマス
墳 フン つか
—墓 おくつき
嫺 カン みやびやか
嬉 キ うれし
嬋 セン たをやか
嬌 ケフ なまめかし
審 シン つまびらか モシ
寫 シヤ うつし うつす

寬 クワン ゆるやか くつろぐ ゆたか
寮 レウ ともがら つかさ
層 ソウ かさなる たかどの
履 リ くつ ふむ
屧 セツ しきわら くつ
—脊 なめ
幟 シ のぼり
幡 ハン はた
—蓮 バレン
幢 トウ はたほこ
幣 ヘイ にぎて ぬさ みてぐら
—使 みてぐらづかひ
厲 ライ レイ あらと みがく はげし
厨 チユウ くりや
—子 ヅシ
廛 チン みせ
廟 ベウ たまや やしろ
廡 ブ ひさし
廛 キ さしこねく

廢 ハイ すたり すたれ すたる
廣 クワウ ひろく ひろし
—布 ひろめ
廠 シヤウ かこひなきいへ
弊 ヘイ くるしむ つかる やぶる
—私的理 ヒステリー
彈 ダン はじく ひく
—正臺 ただすつかさ
—機 はね
彊 キヤウ はず
影 エイ かげ
徵 チヨウ めず しるす
—醉 ほろゑひ
德 トク をしへ めぐみ さいはひ みさを
衡 カウ はかり
徹 テツ とおる
憎 ゾウ にくみ にくむ にくし
—體 にくデイ
憐 レン あはれむ いつくしむ
憔 セウ やす かじく
憚 ダン はばかり はばかる

憤 フン いきどほる むづかる
憫 ビン あはれむ
憧 ドウ あくがる
憮 ブ いつくしむ
慳 ケン やぶさか をしむ
懈 カイ たゆし おこたる
摩 マ する
—豆腐汁 はららじる
撇 ヘツ かかぐ ヘイ うつ
撓 ダウ いたむ たわむ をゆる
—革 いためがは
—寄 とをよる
撼 カン ひねる
撞 ドウ つく
撤 テツ ひらく はらよ
撥 ハツ はね はねかす はぐる
—頭 バトウ
撫 ブ なづ
—子 なでしこ
—鰲 なでぶか

播 ハン ほどこす まく
—磨 ハリマ
撮 サツ つまみ つまむ
撲 ボク うつ
撈 ラウ とる
擔 タン かつぎ になよ
撩 レウ なぶる かすめとる
撰 セン えらび えらぶ
撒 サン まく
—曾 ざるそよ
潑 ハツ とばしる
潔 ケツ いさぎよし きよし
—齋 ケサイ
潛 セン かづく ひそむ くぐる むぐる ヒソカニ
—女 かづきひめ かづきめ
潺 セン
潴 チヨ ト
潭 タン ふち
澄 チヨウ すむ

潤 カン たにみづ
潟 セキ かた
潤 ジユン うるほふ ふやかす
—目鰯 うるめいわし
潦 ラウ たまりみづ にはたづみ
潮 デウ うしほ しほ
—八百會 しほのやほ ひ
—曲 しほわた
—來 いたこ
潰 クワイ つひゆ つゆ つぶす
澁 ジウ しぶ
—扇 しぶセン
—腹 しぶはら
澆 ダウ うすし そそぐ
潯 ジン きし みぎは
潛 サン
潢 クワウ いけ
澎 ハウ
鄭 テイ ねんごろ
隣 リン となり

隕 ダイ くづる
慕 ボ したふ
—葉 したひは
愁 ギン なまじひに
慫 ショウ おどろく すゝむ
慝 トク あし いつはる
慙 ザン はづ
慧 ケイ さとし ものしる
慮 リヨ おもんぱかる スベテ
慰 ヰ なぐさ なぐさめ なぐさむ
慶 ケイ よろこび よろこぶ アヽ
慾 ヨク むさぼる
憂 イウ うれひ うれへ うれふ うし うれはし うれたし
戮 リク ころす
臧 ザウ よし なさむ
毆 オウ たたく
敵 テキ かたき あだ
—對 テキたふ

敷 フ しき しく
—妙 しきたへ
數 スウ かず かぞふ シバシバ
—子 かずのこ
—多 あまた
—珠 ズズ
—珠緊 ズズつなぎ
—寄 スキ
暫 ザン しばらく しばし ニハカニ
暮 ボ くらし くらす くれ くる
—度聲 くれたしごゑ
暴 バク あばれ あばる ニハカニ
—丹前 あばれダンゼン
概 ガイ おほむね
槩 ガイ はかる オホム子 あらまし
槭 シン いぢ
槽 ソウ ふね
樂 ラク ガク たのし たのしむ
—車 だんじり
—府 ガフ

槻 キ つき こねりこ
槫 ダン くれ まどか
槐 クワイ かぬ ぎ
樓 クワン むくろじ むく
樣 かり
總 ソウ さとひ
椰 クワウ うはひつぎ
樊 ハン かご かこぶ さかき
樅 シヨウ もみ
樓 ロウ やかた たかどの
—子葱 てんじやうねぎ
—額 ぬかがき
樗 チヨ ごんする あらち
—蒲 かり かりうち
樛 キウ つが
樝 サ やまなし
—子 しどみ

樞 スウ とぼそ くるる くるろ
樑 ルイ かんじき
—子 わりご
模 ボ モ のり かた いかだ てほん
樣 ヤウ さま
—物 ヤウのもの
—體 ヤウダイ
樒 ミツ しきみ しきび ぜんかう
樟 シヤウ たぶのき つぐのき くすのき
—耳細 すはまさう
標 ヒヤウ しし しめ
樋 ヒ とひ とゆ
—洗 ひすまし
槿 キン むくげ つか
—花 むくげ
槭 ジユク もみぢ しぼむ
—樹 かへで もみぢ
槲 コク かしは
—寄生 やどりぎ
樫 カシ

歎 タン なげき なげく
歐 オウ はく
奩 レン かどみはこ
殤 シヤウ わかじに
漿 シヤウ つくりみづ
熬 ガウ いる
—海鼠 いりこ
熯 ゼン かわかす やく つしむ
熛 ヘウ ほくづ
熠 シフ あざやか かがやく
熱 ネツ あつし
—冷 子ツさまし
—飩 あつぎ
—燗 あつガン
熟 ジユク つくづく うむ ツラツラ
—寢 うまい
—蠶 ひきこ
熨 ヰ あたむ
—斗 のし
—梅 のしうめ
膚 ヒ はだへ

腦 カク コク よぼろ
膜 マク あまかは たなびし
膝 かな
腸 チヤウ はらわた わた
膩 ジニ あぶらぎる
膝 シツ ひざ
—甲 はいだて
—和郎 ひざワロ
—櫚 ひざのかはら
膠 カウ にかは
蓬 ホウ よもぎ えもぎ
—子 になへいちこ
—藁 いちご
蓮 レン はちす
—鑿花 さくらさう
蓴 ジユン ぬなは うきぬなは
—菜 ぬなはなは
蓼 レウ たて
—草 かしこぐさ
蔀 ホウ しとみ
蔑 ベツ なみす ナシ みさぐ ナケン

蔓 マン つら つる
—人參 つるニンジン
—延 はびこる
—椒 ほそき
蔔 フク だいこん
—子 あけび あけべ
蔕 テイ へた ほぞ
—落 ほぞち
蔚 ウツ かげ
蔕 ミツ はすのくきね
蔥 ソウ うつぼ なぎ ねぎ ひともじ
—鍋 ねぎま
蔕 ボモ ちらぶ のつとる
蔗 シヤ さたうきび
薑 ケウ いらか
蔦 テウ つた
蔬 ソ あをもの
蔭 イン かげ
適 テキ かなふ マサニ タマダマ
遨 ガウ ちとる

遭 サウ あふ ラル
遯 トン のがる
遮 シヤ さへぎる
—莫 さもあらはあれ
遲 チ おそし スナハチ コロホヒ ヤウヤク
—緩 もどかし
瑩 エイ ヤウ あきらか ひかり
畿 キ しきみ かぎり
瘡 サウ かさ
瘍 シヨウ ソウ あせりたるにく
—肉 あこしし こくみ
瘟 チン えやみ
瘦 シウ ソウ やす
瘠 セキ つひゆ やす
瘣 クワイ しこり
瘢 ハン かさぶた
瘤 リウ こぶ
瘧 ギヤク わらはやみ
嗃 カウ しろし しろし
皚

皺 シウ しわ さび ちぢむ
盤 バン さら
—木 バンキ
盥 カン ケン すぶ
盥 カン たらひ
瞑 メイ めくら くらし
瞎 カツ めしひ
瞋 シン いかる
磊 ライ
磐 バン いは
—若 ハンニヤ
—柳 くびかし くびがせ
—境 いはさか
磴 ガイ すりうす
磔 タク はりつけ はつけ
礫 テン ひく
—臼 ひきうす
磁 ジ ひきもの
磅 ハウ ポンド
確 クワク しか たしか

碼 バ ヤード
稷 シヨク いねきび ひえ
—秬 きび
稻 タウ しね いね
—拔 せんだこき せんこき
—荷 いなり
—堆 いたにほ
—熱病 いもちびやう
—蜉蝣 いなはつた
稼 カ かせぎ かせぐ
稺 チ わかし いさけなし
稾 カウ わら
穀 コク たなつもの
窠 カ かはらがま
窯 エウ いしま いしむ
窟 キユウ きはむ
窮 リウ かかる
罹 バツ はち
罰 ヒ えかる
罷 ヒ さかづ

罵 バ のしる のる
—嘗 メリ
褥 ジヨク しとね
褪 タイ おろす さむ
—袍 さてら
褫 チ はぐ うばふ
襁 ちはや
箭 セン や
—筒 やがら
—魚 えそ
—頭草 つはすみれ
箋 セン たけのこし
—輿 はんだ あんだ あみだ よつでかご
箱 シヤウ サウ はこ
箸 チヨ はし
節 セツ セチ ふし のつと
—下 セチゲ
—切 きり
—句 セク
—折命婦 よをりのミヤウブ
—折藏人 よをりのくらうど

—季候 セキぞろ
—搏 ふしくれ
—會 セチ ゑ
篁 クワウ たかむら
篋 ケフ かたみ はこ
箴 シン はり いましめ
範 ハン のり
篆 テン くびき
篇 ヘン むちうつ しともつ
箴 シン みぞかけ
篏 カン はめ
糂 サン ぬかみそ
糀 ヘン やきごめ ひらごめ やいごめ
—糠 ひめ
糎 ソウ ちゝき
糟 サンチメートル センチメートル
糅 ジウ かて
—米 ひめ ひめのり
精 ジヨ かて しらげよね
糊 コ のり

緒 シヨ を
—便金 をだよりのかね
線 セン すぢ
—駝 つむ
締 テイ しめ しむ しまり しまる
—棒 しんばりボウ
緡 ビン さし
緣 エン ヘリ ゆかり ヨシ ヨツテ
編 ヘン あむ
—土 あむづち
—木 ひんざさら
—代 あむしろ
—竹 ささら
緩 クワン ゆるやか ゆるらか
緯 ヰ ぬき ぬきいと よこ
練 レン ねり ねる
緞 ダン ドン
—子 ドンス
緝 シフ つむぐ
緤 セツ さづな つなぐ

緊 キン みしと
緜 メン わた
緘 カン をどし をどす
緘 カン とづ ふうをなす
羹 カン あつもの
羯 ケツ えびす ものの ふ
—磨 カツマ
貓 ベウ ねこ メウ
貔 ヒ
翥 ショ はぶき はぶく
翩 ヘン ひるがへる
翫 クワン もてあそぶ
—耳 みみだり みみだれ
艘 ソウ ふね

蝕 ショク はゆ にとむ むしくひ
—蟲 はえつく
餅 ヘイ もち もちひ
餐 シ しもら しとぎ
蝗 クワウ おほねむし
—蟲 いなむし

蝦 エン なつぜみ
—蜒 とかげ
蝙 ヘン かはほり かうもり
—蝠 かはほり かうもり
—蝠 ふる
蝌 ラツ
—蚪 さりかに
蜿 エン みみず
蝌 クワ おたまじやくし
—蚪 おたまじやくし
蝤 シウ すくもむし
—蛑 かざみ かざめ
蝨 シツ しらみ
蝦 カ えび
—夷 えぞ えびし
—夷黃菫 えぞきげさん
—虎魚 はぜ
—蛄 しやこ
—蛄茹 しやくなす
—蟇 たにぐく かへ
—蟇鹿 はさみはこ
蝮 フク はろ えむし
—蛇 はみ

—蝟 にしごち
蝟 ヰ はりねずみ
—鼠 くさぶ
蝨 バツ あぶ あむ
蝸 クワ かたつぶり
—牛 かいつぶり まひまひつぶり かたつぶり でむし でんでんむし
—螺 つめたがひ
—贏 にな
蝶 テフ てふてふ
—番 テフつがひ
蟒 ボウ たに だに
衝 シヨウ つく
—丈 ついたけ
—立 ついたて
—重 ついがさね
褒 ホウ ほむ
耦 グウ ともがら ならぶ
誰 ス ヰ タダツナガラ たれ
—哉行燈 たそやアンドン
—屋形 たそやかた

課 クワ おほす
誹 ヒ そしり そしる
調 テウ しらべ しらぶ ととのふ
—一 てつち
—子外 テウシはづれ
—食 テウはみ
—戲 からかひぶら
諂 テン へつらふ
談 ダン かたる
諄 ジユン くどし
—々 くどくし
諚 ヂヤウ
請 セイ うく こふ
諍 ソウ ジヤウ ザフ あらがふ いさかひ いさかな
諏 スハ はかる
—訪 スハ
諒 リヤウ まこと マコトニ
—闇 みものおもひ
論 ロン あげつらひ あげつらふ
瑠 リウ

嶙 リン たかし けはし
凜 リン りりし
諜 ダフ なむ ねぶる
豌 エン ワン ゑんどう
賣 バイ うれ うる
—子木 ちさのき あぢさ
—僧 マイス
質 シチ シツ ただす
賚 ライ たまよ たまもの
賞 シヤウ ほむ
賜 シ たぶ たはる たまよ
—物 たまもの
賠 バイ つぐのよ
賤 セン しづ いやし
—男染月 しづのをまつき
—染月 しづまのつき
賦 フ
趣 シユ おもむき スミヤカニ おもぶき
踏 タウ ふむ ふまぶ
—雪馬 ようじろ
踐 セン ふむ
—鞴 たたら
踠 エン もがく かがむ
踔 タク タク こゆ まさる
踝 ラ つぶなき くるぶし
—贏 さそり
—贏少女 すがるをとめ
踞 キヨ うづくまる うたゞ
踟 チ たちもとほる
踪 ゾウ
輩 ハイ とゞがら
輩 レン てぐるま
輛 リヤウ のる ならぶ
輜 シ ほろぐるま にぐるま
輪 リン わ
—子 りうど
—天 わなゲン
—後光 わゴクヅツ
—差 わさ
—皷 りうど
輩 クワ あぶらづつ まはす
輙 テフ たやすく
輓 バン ひく
輝 キ かがやく
靚 セイ かざる しとやか
醂 リン あはす さはす
—柿 さはしがき
醋 バイ もろみざけ
醃 エン つけもの しほを
醇 ジユン
醉 スイ ゑひ ゑぶ よひ よふ
—拂 よつぱらひ
醋 サク ず
—心 むしず
銳 エイ するどし
銹 シウ むび
銷 セウ とらかす けす
鋼 バイ けら くさり
鋏 ケフ やとこ やつとこ
—刀 はさみ
鋒 ホウ ほこ
鋤 ジヨ すき すく
鋲 ヒヤウ
鬩 リヨ さとのもん
閔 エツ けみす
鬧 コン しきみ
鬧 ダウ かまびすし
霄 セウ
霆 テイ はたたく
震 シン ふるひ ふるふ ふる
靠 カウ もたる
—椅 よりかかり
鞏 キヨウ かたし
鞋 カイ かはぐつ
—底魚 したびらめ
鞐 こはぜ
鞍 アン くら
—鞘 かれひつけ
頤 イ おとがひ
—骨 おとがひね
頌 アツ アン はなすぢ
頻 フ テウ うなだる まみゆ
養 ヤウ やしなひ やしなふ
餉 シヤウ かりひ かれひ
餌 ジ ゑは ゑさ ゑ
—食 ゑジキ
—核鉗 たねわり
鶩 ド にぶきうま にぶし
駕 カ かす
—籠 かご
駐 チユウ とどむ
駒 ク こま
駝 ダ らくだ
駈 ク かけ かく
駘 タイ のびやか にぶし
駙 フ そへうま
駛 シ はしる
駟 バ いくさのまつり
髫 テウ めさし
—髮 うなゐ
髮 ハツ くし かみ
—月代 かみさかやき
—容 かんざし
—剃 かうそり
—鋏 かうばさみ
髭 シ ひげ
髮 ヒ かづら
髯 セン ひげ
髱 ハウ つと たば
—笄 つとかうがひ
聹 テイ みみだれ
—耳 どろみみ
魄 ハク たましひ
魅 ミ はかす はかず
魯 ロ にぶし
魷 かまつか
魴 ハウ ゑしきうを
—鮏 ハウボウ
鮟 ケフ なさし よぢをさし
鮒 サ いるさ

飯 ハン はりさら
鮫 ブン とびうを
鮨 シ かます チン
鴆 チン
鴆 たふつき
鴉 ア からす
鴉 ゲキ
鴆 ひひなき
鴛 ヤウ すやめ
鴛 ハウ のがん さき
鵠 セウ はつたい
—石 はつたいいし
麩 フ ふずま
麪 メン むぎと
—包 ぱん
—條魚 しらうを
—棗 しらかし
麾 キ さしまねぐ
黎 レイ くつのり くろし たみ
齒 シ は よはい

十六畫

儐 ヒン みちびく すすむ
—從者 しごりべ
儒 ジユ やはらぐ よわし
—者 ずさ
儕 サイ セイ ともがら
儔 チウ ともがら たぐひ
儓 タイ しもべ
儘 ジン なま みな すべて
凝 ギヨウ こらす こる
—魚 こたり
—濁土器 ギヨウドウのかはらけ
劑 ザイ きりそろふ てがた
劒 ケン つるぎ
—片食 ケンかたはみ
—頭 たかみ
—蒸 はくざめ つのじ
勳 クン いさを
叡 エイ あきらか さとし
—山大蒜 エイザンにんにく
—山酸漿 エイザンかたはみ
—山鬼督郵 エイザンはくま
器 キ うつは
噫 イ なげく アア イイ
噬 ゼイ かむ くらふ コロニ アア
噬 あなかま
噴 フン ふく
噎 ケン
—噶 あぎとひ あぎとふ
噸 トン
噦 クワイ しやくり エツ なく
噤 キン つぐむ
噪 サウ かしがまし
噺 はなし
噭 ケウ よぶ さけぶ
壑 ヨウ ふさぐ
墾 コン ひらく
—道 はりみち
壁 ヘキ かべ
—見參 かべゲンザン
—虎 やもり
—著羅 かべチヨロ
壇 ダン まつりのには
墻 シヤウ くべ
塵 ジン ちり
奮 フン ふるふ
奬 ヘイ たふる やぶる
嬖 ヘイ きにいり
學 ガク まなび まなぶ まねぶ
導 ダウ みちびき みちびく
—火 みちび
嶮 ケン けはし さかし
廩 リン まろぐら よなぐら
廐 イウ ユ まど
疆 キヤウ つよし
—蠶 あがりかひこ かりこ
徽 キ むかはき
憶 オク おもふ
懈 ダイ なたる
憾 カン うらみ うらむ
—檢 ケン かんがふ
—見 ケンみ
擅 セン ほしいまま
擒 キン とりこ
擇 タク えらび えらぶ
操 サウ みさを あやつる
—人形 あやつりニンギヤウ
撼 カン うごかす
據 キヨ よんどころ よる
擐 クワン つらぬく つなぐ
擔 タン になひ になふ かたぐ かつぐ
—桶 たご
—旋毛 になひつむじ
擁 ヨウ おほふ
擂 ライ する
—鉢 すりバチ
—醬 すりびしほ
澤 タク さわ
—蒜 ねびる
—潟 おもだか なまゐ
—蘭 さはあらら
澱 デン よど よどみ よどむ
澳 イク みぎは おき
澹 タン しづか
激 ゲキ はげし
濁 ダク にごり にごる にごす
—醪 どぶろく
濃 ノウ こまやか こし
—水 こみづ
—村濃 こいむらご こむらご
—染紙 こセンシ
—紅葉 いりもみぢ
—淺藍 こいあさぎ
—緋 こきあげ
—漿 こみづ こんづ こくしやう
—縹 こいはなだ
澡 サウ あらふ
澣 クワン カン すすぐ

澪 レイ みよ
—標 みをぎ みをぐひ
獷 ノウ おくいね
獨 ドク ひとり
—子鳥 あつごり あごり
—乙 ドイツ
—子蒜 ひとつびる
—木舟 うろきぶね うつろぶね
—角仙 かぶとむし
—活 ししうど つちたら
—荷草 ひまわり
—鈷 とこ
—樂 つむくり こせ
—頭闌 はくり
—整蟹 デハウガに
獬 カイ うよし
—豸 カイチ
隧 スヰ はかみち あなみち
—道 とんねる
隨 ズヰ ながら さまに したがふ スナハチ ツヒデ
險 ケン けはし

愁 ギン なえじひ アヂ ナヤマ ジヒニ 子ガハグハ シヒテ ヒヨウ よる
憑 ヒウ よる
—子 たのもし
—體 よりがら
憇 ソウ いこふ
憲 ケン のつとる おきて
戰 セン そよぎ そよぐ たたかひ たたかふ
—戰 わだわだ
戲 キ ゲ じやれる たはく たはむる たわる
—言 たはごと
—事 たはこと
整 セイ ととのふ
—羽 はづくろひ
曇 ドン くもり くもる
—火屋 くもりほや
—硝子 くもりがらす
曆 レキ こよみ
—草 そぶき そぶき
歷 レキ ふ
—向 さなめとふ
—齒 はわがれ

曦 イ たなぎらひ たなぐもり ごのぐもり
暾 トン あさひ
曉 ゲウ あかつき あかとき
暸 レウ あきらか
曄 エフ イフ かがやく さかんなり
橐 タク うちがへ
—吾 つはよき
樵 セウ きこり
樹 ジユ き
—蜂 みかはち
橇 ケウ そり
橇 カン かんらん
—機樹 ほるとのき
橋 ケウ はし
橘 キツ たちばな
橙 トウ だいだい
標 ウン ささ もくめ
機 キ はた
—勢 はづみ
—繩 はたたね

—蹠 なねぎ
橦 トウ きぎれ さを
橫 ワウ よこ よこたはる よこたふ
橡 シヤウ どち つるはみ
樽 ソン たる
樺 クワ かには かんば かば
橅 モ ぶな
橢 ダ ほそながし こぼんがた
樸 ボク ハク きぢ むらがる
櫂 カイ ひよんのき まつやに
櫪 ケツ くひ
櫼 セフ かぢ シフ
歔 キヨ なく むせぶ
殪 エイ たおす
燕 エン つばくらめ つばくら つばめ
—子花 かきつばた
—脂 かたべに
—麥 からすむぎ
燃 ゼン もゆ もやす

熾 シ さかん おこる
—火 おこしび
燐 リン ゆすぼる
—寸 さつち さち
燎 レウ にはび かがりび
燒 セウ やき やけ やく
—鈇 やきフ
燔 ハン やく ひもろぎ
燈 トウ ともし とも す
—心 トウシミ
爛 カン
—冷 カンさまし
犇 エフ かがやく さかんなり
璿 ひだま
璞 ハク あらたま
璣 キ たま
膨 バウ ふくる
膩 ジ こゆ あぶらあか
膳 ゼン そなふ くらふ
膵 ス井

膰 ハン ひもろぎ ひもろぎ
蕺 シフ しぶき
—草 どくだみ
蔽 ヘイ おほふ
蕃 バン しげる
—杏 はまな つるな
—南瓜 カボチヤ
—椒 たらがらし
蕋 ズ井 しべ
蕎 ケウ そば
—麥 そば そばむぎ
蕙 ケイ かをりぐさ
蕚 ガク うてな
蓺 スイ つぐひも
蕨 ケツ わらび
蕩 ダウ ごろかす ごろく
蕪 ブ かぶら
—夷 ひきざくら
—菜 かぶな
—菁 かぶら かぶ
蕞 サイ ちひさし

蕗 ロ ふき ふふき
蔭 イン かげ
蕭 セウ ものさびし しづかなり
蕣 シユン むくげ あさがほ
遵 ジユン したがふ
遷 セン うつる うつす
選 セン えらみ えらむ える
邃 スヰ ふかくしてとほし
遺 ヰ のこす のこる
—腹子 レウ はるか わすれがたみ
遼 セン りの陰る
遲 レウ はるか
—羅 シヤムロ シヤモ シヤム
—羅鷄 シヤム シヤモ
瓢 ヘウ ひさご
皺 サツ もがさ しわ
—鼻 コグ たなつもの
穀 ズウ いらか むね
薑

瘭 ヘウ
瘰 ラ るゐれき
瘴 シヤウ あしき
癰 リユウ つかれやむ おゆ
盧 ロ くろいろ ひとみ
瞟 ヘウ みる
—眼 ヒガメ
瞞 マン くらます
瞳 ダウ みつむ
豎 シユ ジユ わらはのしもべ いやし
礪
—基 アミド
磨 マ みがく とぐ する
—臼 する
磬 キン ケイ うちならし
磴 カウ
礮 イン
磚 セン かはら
磯 ドウ

確 カク かたし たしかに たしかひ
碟 セキ かはら
—磊に同じ
磧 ヨ ふせぎ ふせぐ
禦 ベン わかつ わきまへ
辨
穎 エイ かひ いせゐ
積 セキ つもり つもる つむ
—丹竹 シヤコタンだけ
—雪草 かきとほし
穉 チ おくて
—子 わくご
稽 ケイ かんがへ
穆 わせあは
稠 ソウ ぜど
—密 あらもこ こめさき
窺 キ うかがふ
—見 うかみ
—狙 うがねらふ
窶 グ やつれ やつる やつす
—窶 やつ〜し

—躍 りよし せをね
羅 リ かかる
襁 キヤウ むつき
—褓 むつき
褶 デウ あはせ
褄 ケン かかぐ
褄 ちはや
褄 カウ をさ
篁 カウ かがり
篝 サン しの ささ すや
篠 ウ はふ
纂 トウ あつし
篤 ジ ふるひ ふるふ
—癡人 あつえびと
篩 チク きづく つく
築 ハ はご
篠 ヤ な
築 シ サイ とはし ふるひ
篩 ジヨウ かざり しげし
縟 シン こまか うみたるあさいと
縝 サイ スイ もふく
縗 チ くはし こまかし
緻

縣 ケン あがた かた
縈 エイ めぐる とりまく
縢 トウ かな ちきり かがる
興 キヨウ おこる おこす
翰 カン さぶ はね ふで ふみ
艙 サウ
—口 にごりぐち
艘 ソウ ふね
螢 ケイ ほたる
蟆
—蛄 はたはた はた はつた
蟒 うはばみ やまかがち
—蛇 やまかがち
蝣
—蜉 くひ
螟 ベイ くきむし
—蛉 あぜむし
螞
—蝗絆 かすがひ
融 ユウ とく

衛 エイ まもる
　矛 ほこゆみ
衡 カウ はかり
　木 かさぎ
　門 かぶきモン
徼 ケウ くにさかひ もとむ
親 シン おやしたしみ ちかしむ したし ミヅカラ マノアタリ
　文字 おやもじ
　荷星 おやになひぼし
　族 しぞく
　椀 おや ワン
　雲上 ぺいきん
諛 ユ へつらひ へつらふ
諜 チウ きはしもの
諦 テイ あきらか
諧 カイ あふ
　謔 おどけ
諠 ケン かまびすし
謚 シ おくりな
諫 カン いさめ いさむ

諭 ユ さとし さとす
諤 ガク ただしくいふ
諱 キ いみな
諳 アン そら そらんず
諷 フウ をしふ たとふ ほのめかす
諸 シヨ もろ コレ オヨソ モロモロ
　子鱗 もろこはえ
　點 もろテン
諺 ゲン ことわざ
　文 ゲンモン オンモン
諼 クワン わする
　草 わすれぐさ
諾 ダク うべなふ
　威 ノオルウエイ
謀 ボウ はかりごと はかる
謁 エツ まうす まみゆ
謂 イ いはれ いはく いひ
　爲 おもへらく
諮 シ はかる
豫 ヨ あらかじめ

豬 チヨ ゐ
猯 ミ
　狸 みたぬき
賭 ト かけ
　弓 のりゆみ
　物 のりもの
賵 ボウ おくる おくりもの
賴 ライ たのみ たのむ たのもし
　母子 たのもシ
赭 シヤ そほ
　白馬 つきげ
　魅 ゐのとどき
踵 ショウ あぎと くびす かかと きびす
踰 ユ こゆ
踊 ヘン ちどりあし
蹂 ジウ ふむ
蹄 テイ ひづめ
　跡 うまさくり
　躁 つまいり
輸 ユ おくる いたす
輭 ナン ゼン よわし やはらか

輯 シフ やはらぐ あつむ
輻 フク や
辨 ベン わきまへ わきまふ
　柄 ベンガラ
醍 ダイ すみさけ
醒 セイ さむ さます
鋸 キヨ のこぎり
　鋸 のこぎりざめ
鋺 エン まり はかり
鋼 コウ いかけ かたし
錨 ベウ いかり
錙 シ
錚 サウ かねのことゑ
鋼 カウ はがね
錄 ロク しるす きろく
錆 シヤウ さび
鉦 リ しころ
錐 スイ きり
　栗 ひよひよどり

鋸 ヨ もちり もぢ
鍾 ス井 いは おもり
鍼 ブリキ
錠 ヂヤウ たかつき
錢 ゼン セニ
　蒲 かうらいぜに
　藤 こぶぢ
　競 ぜにづく
錦 キン にしき
　荔枝 つるれいし
　帶花 はこねうつぎ
　穗子 かじかがへる
錫 シヤク すず
錯 サク やすり みだる こすり
　子 こすり
鈕 ニウ
鍄 カ すがひ
閻 エン ちまた
　浮 エンブ
閹 エン そはつかへ

閼 アツ よさぐ
　伽 アカ
閾 ヨク 井キ しきゐ しきみ
閻 コン くらし
隷 レイ つかふ しもべ
雕 テウ わし ほる
館 クワン たち たて
霍 クワク にはか さし
　公 ほとときす
　墨 あをずみ
霏 ヒ きり
霑 テン うるほふ
霓 ゲイ にじ
霖 リン ながめ
霈 ハイ おほあめ
霎 サフ こさめ セツ
靛 ヂン
　墨 あをずみ
靜 セイ しづかし しづか
　廼舍 しづのや
甌 オウ ちいさきはち

靦 テン はづ
鐘 ベウ 鞘 サウ 靫 ヂウ かはのたづな
　鞘 サウ さや
　靫 デウ ダン おびかは
輔 フ うつほ
鞍 アン くら
頭 トウ ヅ かしら かうべ
　歷 あたま とつばい
　槌 くぶづち くぶづつ
頰 ケフ ほほ
　車 ほほけた
　冠 ほつかぶり
頡 ケツ あかし
頷 ガン うなづく
頸 ケイ くび
頹 タイ なだる くづほる
頻 ヒン しきり
　吹 しぶき しぶく
　涙 しきなみ
颶 グ つむじ
　風 ケン かしこし かしく さかし さかしら
賢 ケン かしこし かしく さかし さかしら
　木 さかき

　聖障子 ケンシヤウのサウジ
齊 セイ ヒツ えびすぶえ
餐 サン あひのしよくじ
餒 ダイ うう
餓 ガ うゑ うう ひもじ
餘 ヨ あまり あまる あます
　戶 あまべ
　肉 あまじし
　所 ヨソ
　波病 などりやみ
餕 シユン おろし
餗 ソク こながき
餔 ホ くらふ ゆふげ
駢 ヘイ ヘン
骸 ガイ むくろ
駱 ラク かはらげ
骸 ガイ ほね からだ
髭 シ ひげ
髻 ケイ キツ もとどり たぶさ
　華 うず
鬆 キツ うるしぬる

鬚 キヨク わげ
鬣 ヒ たてがみ たてゆ ヒツ えびすぶえ
鮎 デン あゆ なまづ
　並 あゆなめ
　擬 あゆもどき
鮮 サン すし
　答 へいさらはさら
鮑 ハウ あはび
鮒 フ ふな
鮒 かすべ
鴛 エン をし
　鴦 をし
鵆 リフ せうびん せうびん
鴿 レイ せきれい
　鳥 ひめどり
鴨 カフ かも
　舌草 たぎ
　自物 かもジもの
　脚樹 いてふ
　酉草 つきぐさ
鴟 シ とび
　瓦 しやちがハヲ

　尾 とびのを
　鴉 ふくろふ
　鮹 このはづく
鵠 コク みさご
　鳩 ひしやこ みさご
鴉 ケウ ふくろ ふくろふ
鵡 ブ しぎ
鳴 ケン くろし
默 モク だまる もだ
龍 リユウ リヨウ たつ
　芽草 きんみづひき
　骨 まきりがハラ
　珠 あかごなすび
　葵 いぬほほ こなすび
　蝦 いせえび
　頭卷 リユウヅまき
　膽 とやみぐさ リンダウ リユウダウ
　鐘 よほよほ
龜 キ かめ
甲 かめのこざる
　正卜 かめのまする
　裂 かがる

　結 かめくしけ
　著維 かめチヨロ
　頭 かり
冀 ヤ こひねがふ コヒ子がハグハ
勵 レイ はげみ はげむ
齔 シン かはく

十七畫

儻 ジヤウ つぐのひ つぐのふ
優 イウ まさる やさし
　婆塞 ウバソク
　臺華 ウドンゲ
嚔 クワク よぶ アア かまびすし
嚇 カク おどし おどす おどかす おどかす
嚊 ヒ かか かぐ はないき
　文字 かもじ
噬 ゼイ チ はなひる ひる
嚥 カウ さけぶ
壓 アツ おす へす
　口 へしぐち をじめ
　枝 よりき
　面 へしみ

壔 アイ ちり
壕 カウ ほり
嬰 エイ みつど
　子 みどりご
嬲 デウ いびる なぶる
孃 デウ みだる
　歌 かよ
嬪 ヒン よめ
嬬 ジユ よわし
孺 ジユ をさなご
嶺 レイ みね ね
嶷 ギ ギヨク たかし さとし
嶽 カク たけ
彌 ヤ いや いよ イヨイヨ
　木 やくはえ
　立 よだつ
　生 やよひ
　世 やつよ
　次馬 やじうま
　帆 やほ
　長 よだけし
　針 みしん
　猛 やたけ

徽 キ おかはき
憯 センいたむ カツテ
懦 ダ にぶくよわし
幬 チウ とばり
擢 テキ ぬきいづ ぬきんづ
擣 タウ うつ
擡 タイ もたげ
擦 サツ する なする
擬 ギ なぞらふ たぞふ
擠 サイ セイ おとしいる おしのく
擯 ヒン しりぞく
擱 カク さしおく
濕 シツ うるほひ しめる しめりしめる
—地茸 しめぢだけ
—氣 しけ
—疹 くさ
—殿 しづめ
濟 サイ すむ なす わたる
—崩 なしくづし
濤 タウ なみ
濫 ラン みだり
—作 ゲサク
—草 たはれぐさ
—射 さいだて
—痴 たはしる
濡 ジユ ぬる ぬらす
濯 タク すすぐ
濱 ヒン はま
—萬年生 はまおもと
濛 モウ くらし こさめ
濠 カウ ほり
濚 エイ ケイ
獺 セン あきがり
獲 クワク ラル
隱 イン かくる かくす
—坊 かくれんぼう
—起請 かくしギヤウ
懇 コン ねんごろ
麋 ビ おほしか
應 オウ へ いらふ マサニ ヨウ ナルベシ ハナ ナルベシ アア
膺 ヨウ なね うつ いだきもつ
戲 ギ たはむれ たはむる
—句 ざれク
檢 ケン
—見 けみ
—非違使 けびゐし
—破子 ひわりご
—鬣 たりこ
鰕 すもり すもりこ
斂 レン をさむ をさまる
氈 セン かけ
—牛 かもうし そもか
—鹿 かもしか かもしし
營 エイ いとなみ いとなむ
燠 イク おき
—島 ねくめどり
燥 ソウ はやぐ
燦 サン きらか
燭 ショク とし しび
—剪 そくせん
燧 スイ きりび のろし
—金 ひうちがね
檣 ジヤウ
環 クワン たまき わ
—舞 どうどうめぐり どどめぐり
璫 タウ こじら みみかざり
臂 トン しり ねさらひ
—咕 こなめ
臂 ヒ ひぢ
膽 タン きも
—人樹 はばそ
謄 トウ うつす
—沸 うなわく
膾 クワイ むこす
膿 ノウ うみ
—沸 うなわく
膽 オク おね こころ
—蟲 おめむし
蔔 フク カツ
薩 サツ なぎ
—草 なぎ
蕺 シフ どくだみ
—草 どくだみ
—菜 しぶき
蕾 ライ つぼみ
薄 ハク すすき うすし シバラク イササカ イタル
—梔子 うすくちなし
—鈍 うすにび
—紫 うすげし むらさき
—痘痕 うずあばた
薇 ビ ぜんまい
蔔 ケイ あざみ
蕙 ヨク にほのなかみ
薑 キヤウ しやうが
薔 ショク みづたて
—薇 さうび ばら
薙 チ なぐ テイ
—刀 かぎなた
蔣 ヘキ やまぜり
蓉 ケン ふぐし
—辛 ふぐし
蔦 セン こも すすひ シキリニ カサ子ナ

薨 ウ みなかる
薪 シン たきぎ
蕗 ロ ふふき ふき
蕷 —籠 いもとみ
蕪 カイ おはみち
蕩 イツ したがふ ツ井ニ ココニ
蘆 キヨ にはか ニハカニ
避 ヒ さく よく
—憤蟲 みのむし
—嫌 さりさらひ
邂 カイ
—逅鳥 たなさかとり
還 クワン かへる スナハチ マタ カヘツテ
—立饗 かへりたちのあるじ
—本土 グエンホンド
—城樂 ケンジヤウラク
—樣 ゲンさま
—饗 かへりあるじ
邁 マイ ゆく すぐ つとむ
邀 エウ むかふ もとむ
甑 シヨウ こしき こそき
—鳥 フツ ひ かけ
—療 レウ いやす
—癃 リユウ せこど せこま
—癆 ラウ いたむ
—痼 カン てんかん
—癈 ハイ すたる
—癌 ガン
—癒 見 ゆしみ ゆつしみ
—虧 キ かく かけ
—盪 タウ とろかす とろく
—瞥 ヘツ ちらこみる ベツ
—瞬 シユン なはたき またたく
—瞭 レウ あきらか
—瞳 ドウ ひとみ
—瞰 カン にらむ
—磯 キ いそ
—同 いそま いそわ
—牡蠣 いそがき
—馴 そなれ
—鴉鷚 いそつゝみ
—邊 おしべ
—磷 リン ひがらぐ ひすろぐ
—磴 トウ さかみち いしはし
—磺 クワウ あらがね
—禪 ゼン ゆづる
—師 ゼシ
—蠟子 ゼンはやし
—穗 ス井 ほ
—俵 ほんだはら
—窺 トウ はたて
—竇 サク よしず す
—竹 たかすがき
—星 ははきぼし
—箏 ス井 ははき はうき
—遂 ホウ とな
—痺 やかたぶね
—篤 スイ すず
—篭 ロウ あまはこ すり
—筬 ベツ とり わりだけ
—篠 ケン ふるひ
—簇 ゾク むがる
—簽 ソク ふるひ
—簡 ゴ ふり
—簫 ささら
—戴 タイ いただき いただく
—糞 フン くそ
—蛆 かみさげむし
—堆 あくたぶ
—滯 フシヅまり
—糜 ビ ゆ たれる
—糙 サウ あらごめ
—葉樹 むく
—糝 シン こながけ こながけ
—粉 シンこ
—糟 サウ かす ソウ
—藏肉 かすもみ
—糠 カウ ぬか
—蝦 あみ
—粳 モ
—繁 ハン しげる しげし
—釧 しじぐしろ
—勢 チツ とらふ つなぐ チフ ほだす
—緘 ジユク しぐら ソク ちぐむ
—縫 ホウ ぬふ
—掖 ふつはしのうへの きぬ
—縮 シユク しぐむ ちぐむ
—帷子 ちぐろかたびら
—緬 チリメン
—絲 エウ ヨツテ
—續 エン ながし ひく
—縱 ジユウ よし たてしまま ゆるす タトヒ ほしいまま
—縲 ルイ つなぐ
—縵 マン むぢぎぬ
—面 なめ
—縷 ル いとすぢ
—縹 ヘウ はなだ
—縺 レン もつる
—總 ソウ ふさ すべて すぶ
—毛立 ソウげだつ
—名 すべな
角 あげまき つのまき
績 セキ うむ
—車 おほが
—車 おほか
—纏 サイ いさぐるま
—車 ぬきがぶり
—綢 ハウ むつき
—繩 キヨウ すき せにづら
—繰 —車 おほが
—縷 ル いとすぢ
—斗葉 をだまき
—罅 コ さく すきま
—騣 エイ さしは かさす
—輯 はさり
—聲 セイ こえ
—聲 ショウ そびゆ

聯 レン つちね
聰 ソウ さとし
聵 クワイ つんぼ
臨 リン のぞむ
頤 イ あご おとがひ
—骨 おとがひね
瘻 ロウ おほぶね
艱 カン なやまし なやます
鑿 サク はさみ
鑫 シユウ いなご
—斯 きりぎりす
蘇 ソウ はんめう
墓 バ ひきがへる
—目刻 ひきめくり
蝙 たに だに
蟄 チツ はり
蟆 バ ひきがへる
—子 ぶと ぶよ
螫 セキ シヤク さす はさみ

蜂 ホウ
—谷 こめかみ
螺 ラ さざり
—釘 ねぢくぎ
—旋 ねぢ
—螺 かぞりはち すがる
螭 チ みづち
蠕 テイ にじ
—蝀 にじ
螳 タウ
—螂 かまきり いもしり
螵 ヘウ
—蛸 あしなき あふちふぐり
蝼 ロウ けら かへる
—蛄 けら
蟋 シツ こほろぎ
—蟀 いとど こほろぎ きりぎりす
螂 チツ あなぐも
—螳 あなぐも
蟻 ヨウ ぎ あめがさち
蟇 しみ

褻 セツ なかぎ
—衣 なれぎぬ なれごろも けごろも
覯 コウ あふ ラル みる
覬 キ のぞむ
謎 メイ なぞ
謗 バウ そしる
謙 ケン へりくだる
—下 へりくだる
謚 シ おくりな
諂 テン へつらふ
講 カウ とく
—參 カウまゐり
謠 エウ うたひ
—講 うたひかう
謊 クワウ
謝 シヤ さる たつ
謇 ケン ども る アア まこと
谿 ケイ たに
豁 クワツ ほらが

賻 フ おくりもの おくる
賽 サイ れいまつり
購 コウ あがなふ
賺 タン レン すかす
趨 スウ はしる おもむく
蹇 ケン あしなへ なへぐ
蹶 テイ ひづめ
蹉 サ あしずり あしずる
—跎 あしずり あしずる
蹊 ケイ こみち
蹌 サウ うどく
蹈 タウ ふみ ふむ
—輔 たたら
蹙 ケイ
—轅車 チンリヤウシヤ
轄 カツ くさび

轅 エン ながえ
輾 テン きしる きしらふ
醜 シウ しこ みにくし
—屋 しきや
—假庵 しきかりいほ
醢 カイ ししびしほ
錬 レン ねる
鍋 クワ なべ
—鏑 さしなべ
鍾 かむしき
鍍 ト かなつき
—金 めつき
鍍 さがり
鋼 はがき
鍔 ガク つば
鍛 タン きたふ
—冶 かぢ
鍬 セウ くは
—丁 くはようろ
鍮 チウ しんちゅう

鍵 カン かぎ
鍼 シン はり
鎹 コ
—頭 じんどう
鐘 ショウ つりがね
鏘 かすがひ
隱 ヰン おんでん
—田 おんでん
闇 アン やみ
闇 こもん
関 ヤウ くさり
闊 クワツ とほし
闌 ラン おそし
雖 スイ いへども
霙 エイ みぞれ
霜 サウ しも
—線菊 しもつけ
霞 カ かすみ
—初月 かすみそめづき
鞠 キク ほおる

鞦 ヘイ たちや
鞜 タウ くつ
韓 カン から
韈 チヤウ ゆみぶくろ ゆぶくろ
癇 あらさき
顆 クワ つぶ
釐 リ なさむ
餛 コン むしもち
餞 セン はなむけ
餅 ヘイ もち
餡 ホウ こむぎもち
—餈 ふと
餡 カン あん
—轉 あんころ
餳 セイ かたあめ
館 クワン たち たて
餒 ダイ すゆ
餚 ショウ シキ かさり
駢 カン あらうま

駿 シユン すぐれたうま おほいに
駼 —馬 をじろのうま
駸 シン はしる
髦 バウ わななく
髮 ピン
鯔 ジ ぼらと
鮨 シ すし
鯛 —鱸魚 かつを
鮪 ヰ しび
鮫 カウ さめ
鮭 ケイ さけ
鮮 セン あざらか あざやか あざけし すくなし
—支 くちなし
鮠 クワイ
—魚 もだか
鮟 アン
—鱇 アンカウ

鯖 セイ さば
鯣 ユウ するめ
鯉 リ こい
鯒 ヒ こち
鯔 ボラ
—子 いかなご
鴻 コウ ひしくひ
鵠 シ しめ
鵜 カウ あをさぎ
鵠 カツ ふふどり
—鵠 ふふどり ふふどり
駕 ジヨ かやぐき
鵝 カウ ちどり
鴿 カウ はと
鵡 ヰ ぶく あち
鵜 とき
—鵡 いひとよ
鮎 ねば ねやす

黨 タイ さゆずみ
黝 イウ あをぐろし
黜 チユツ しりぞく
點 テン とぼす
—火 ともし
—頭 うなづく
鼾 カン いびき
齊 サイ ざい どき いもひ づいはふ ゆまはる
—串 いぐし
—桟 いぐひ
—衾 いつべ いはひべ
—居 いもる
—屋 ゆや
—部 いんべ
—福 ゆには
—種 ゆだね
—精進 いもひサウジン
—鋤 いはすき
—館 いみたち

十八畫

儲 チヨ まうく
—弓弦 たくはよ うさゆづる

儺 ロウ
叢 ソウ くさむら むら
—雨 むらさめ
—祠 ほこら
—濃 むらと
囂 ギン ひすかし
噬 テイ くさみ くさめ はなひる ひる
嚙 ガウ かむ
—立 かむたち
嚠 リウ
擲 テイ なぐ たげうつ
擺 ハイ
擴 クワク ひろぐ
擾 ゼウ
壙 クワウ
壘 ルイ
瀏 リウ まさかり
瀘 リヨ こす
瀑 バク たき さらす
瀛 ヱン

瀉 シヤ くだす くだる
—腹 くだりはら
獵 レフ かり
—人 かりうど
—矢 さつや
—男 さつを
—虎 ラツコ
戴 タイ いただく
廊 テン みせ たな
屬
—釘 たちはめ
擧 キヨ あぐ こぞる ミナ コトゴトク
—句 あげク
—母 ころも
—告 あげのり
斃 ヘイ たふす たふる
斷 ダン たつ サダメテ
—齒 はがみ はぎしり
瞶 バ
曙 しよ あけぼの
曠 クワウ ひろし むなし ひさし

曜 エウ かがやく
嚥 クン
檻 カン うしや をり
—倉 あがりざしき まがりや
檗 ヤまぐは
櫃 キ ひつ
櫂 タウ かい
檸 ダウ きのかは
—檬 レモン
檳 ヒン
—榔 あぢなさ びらう
歸 キ かへす かへる
—依 キエ
殯 ヒン かりもがり
—宮 あちき
燻 クン いぶす くすぶ ふすぶ
—腿 はむ
燿 エウ かがやく
燼 ジン たく
爵 シヤク サク さかつき

—床 いねかうじゆ
臍 セイ へそ ほぞ
臆 あはた あはたこ
髀 スネ ひだれ としり
朦 モウ ゆたかなり
臑 ダウ すね
薩 サツ すくよ
—婆訶 サバカ
薯 シヨ いも
—蕷 やまのいも
—蕷汁 とろろじる とろろ
薰 クン かをり かをる くゆる
—衣香 くのえかう
—蟲童 ひとりのわらは
莖 タイ すけ とう
薺 セイ なづな はちくさ
—苨 みのは さきくさな
藥 わら
—杏 わらうづ
—籠 つぶら
—履 わらんづ
藉 シヤ かる

藍 ラン あゐ
—水松茶 あゐみるチヤ
藎 ジン まつし かりやす
—草 こぶなぐさ かりやす かきな
藏 ザウ なさむ
—人 くらうど
藐 バウ むらさきさう
—姑射 ハコヤ
邈 バク はるか
邇 ジ
甕 チウ かめ もたひ みわ みか
痢 ベスト
痲 レイ えやみ
癖 ヘキ くせ
癒 ユ いゆ いやす
瘢 なまず
瞽 コ めしひ
—女坊 ごぜのバウ
瞿 ク おそる まち
—麥 なつかしやさ なぐしこ

瞻 セン
瞼 ケン まぶは まぶた まなぶた ライ
礒 ギ いそ いはほ
礎 ソ いしずゑ
礑 タツ にた はためく
穠 ジヨウ しげし
禮 レイ ゐや
—鼠 きねずみ
穢 エ けがれ けがる
—多 エタ きよめ
竄 ザン かくる
竊 ケン わな
穰 ジヤウ ふすま
—子 あるジ
襟 キン えり
襠 タウ さち
簟 タン たかけ
簀 キ あじか

簡 カン ふだ
簀 クワツ しだ
簪 シン かんざし
—振 かざより
簫 セウ ふえ
譚 したつき
—誕 したつき
糧 リヤウ かて
繒 ソウ はた
織 ショク おる
—部 ほとり
—蝮 ゐのあし
—鰍 おりしりがひ
繕 ゼン つくろひ つくろふ
繦 すき
綱 ケン にしきのあや
繡 シウ ぬしもの
—革 けしやうがは
—眼兒 めじろ
—線菊 しもつけ
繽 クワイ しねいと

繙 ヘン ひもとく
繧 ソン
—繝 ソウ
綴 チ つづれ くはし
鑄 ソン さかだる
翼 ヨク つばさ たすく
翹 ゲウ はね
翱 カウ かすきりは
翻 ホン ひるがへる カヘツテ マタ
—筋斗 もんどり
聶 デウ ささやく
職 ショク シキ しるす しごと くらゐ
舊 キウ ふるし モト ふるし
艟 ドウ いくさぶね
蟲 チユウ むし
蟋
—蛄 つくづくはふし
鬏 ハツ どろがに
—蛆 いなづき ぼに
—蝎 あしけらがに

蹣 たに ぢに
蟠 バン わだかまる
—車 ヒのは ヒは
蟒 バウ やまかがら
—蛇 うはばみ
蟣 キ ひる
蟫 タン しみ
蟬 セン せみ
—金 セミキン
—蜒 したつき
贏 ヨ
蹙 ケツ ねつみ
覆 フク おほひ くつがへる かへる
—盆子 いちご
—槽 うけ
罄 ケイ コトゴトク
警 ケイ しばぶき
謳 オウ
謬 ビウ
讒 セン

謹 キン つつしみ つつしむ
誦 タウ ゼム つみす
豐 ホウ ゆか ごよ
—槃昇 とよさかのぼる
—幣 とよみてぐら
—竈 とよへつい
貘 バク
贅 ゼイ ふやべ
—柳 こぶやなぎ
贊 シ にへ
—造 へつくり
蹙 シユク しじかむ しじかまる
跛 セキ あしうら あしのうら
蹋 テキ うづつく
蹣 ハン よろめく
—跚 よろける よろめく
蹤 ショウ ご
—血 はがり
軀 ク むくろ
轆 ロク なまえしはり

轢 サツ やぐらぐるま あぶら の
轉 テン ころぶ うたた
—柿 ころがき
—臥 ころぶす
—棒 くるりぼう
—寐 うたたね ごろね
—筋 からすなべり
—螺旋器 ねぢまはし
緊 キン ゆ ゆか
醫 イ いしや
醬 シヤウ ひしほ
醸 ジヨウ しる もろ
饌 コウ
釐 リン リ
—箋具 れいてんぐ
—筋具 れてぐ
鎌 ケン かま
—豆豉 かまさぎ
—鮮子 かまさすど
鎔 ヨウ ゆく
鎖 サ くさり ジヤウ とざす

—金 さすがね
鎗 サウ やり
鎧 ガイ カイ よろひ
鎚 ツイ つち
鏹 かすがひ
鎬 カウ しのぎ なべ
鎮 チン おもり しづめる しづむ トコシナヘニ
鍋 カフ はばき
鬧 とよら ナンゾセザル
闕 ケツ かけ かく
闖 チン うかがふ
閲 ケキ けみす しらべ
雙 サウ ふたつ
—六 スゴロク
—槻宮 たみつきのみや
—髮 からこわげ
—鬱菊 とりかぶと
雛 スウ ひな ひよこ
雜 ザフ ザツ まじり まじる まじふ

—巾 ザフキン
—色 ザフシキ
—具箱 からくたはこ
—魚 ザコ
雞 ケイ とり にはとり
—冠 とさか
—冠木 かへで
—脚菜 とさかのり
—腸草 はこべ
韂 ジウ なめす なめしがは
鞦 シウ しりがき
—韆 ぶらんこ ゆさぶり
鞠 キク かうぢ まり
鞫 キク きたむ
鞭 ベン むち むちうつ
鞨 バツ カツ かはぐつ
題 ダイ ひたひ かしら
額 ガク ぬか ひたひ
—紫陽花 ガクあぢさゐ
顎 ガク あご
顔 ガン かほ
—佳草 かほよぐさ

顱 ロ ロウ おろか
臨 リン のぞむ
—時 リウジ
壁 ヘキ たま
轍 ヒ
—畫 パノラマ
颶 ヤウ ぶきあら おとる
壅 ヨウ あへつき
—杯 あへつき
覆 フク かへす
雕 チウ ね みぶ
駢 ヘイ ならぶ
賠 ヒ めうま
騎 キ のる
騏 キ くろみどりのこま
—驎 あかやに
鬚 シウ
鬆 ショウ す
—糕 かすでら
鬪 ゲキ せめぐ

鬻 センかなと
魍 マツ
魏 タイおかぐま
魏 ギすかし
鮪 サウたこ　セウ
鯁 カツのぎ
鮟 ペンくちべに
鯊 さめ
鯇 ちめあめうを　あめのうを　あめをす
鯉 リごひ
鯉 むつ
鮖 めばる
鮒 ホいろか
—魚 なはさは　はりうひ
鯒 こち
鶿 がてう
—觀草 かもじぐさ
鵠 コツくぐひ　こふづ　はくてう
—鴣 つくろり

鵑 ケンーめ
鵐 グキもず
—草潛 もぐのくさぐき
鴉 ブしどど
—目 しどどみ
—雀 しどど
鶉 テイう
—子 つぶり
—自物 うぢもの
—鷸 がらんてう
鵶 いかるが
麿 マロ
黠 カツさとし
蓼 トウつづみのこえ
鼠 セキなかつぎ
—鼠 なかつぎ
鼬 イウいたち
—鼠 いたち

十九畫

譽 かひのふた　キヤウ　さき　よドヒ　モシ　サキニ
響

嚷 あめく
嚬 ひそむ
嚥 エン
壟 ロツつか　はか
壜 びん
壚 ロいろり
壞 グワイこはる　やぶる
壠 ロウ
嬾 ランおこたる
寵 チヨウめぐむ　いつくしむ
廬 ロいほり
懷 クワイふところ　おもふ　なつかし
懶 ランものぐさし　ものうし
—情 ものぐさ
摭 レキくすぐる
瀟 セツふかし　きよし
瀛 エイ

贏 ルイ井　やす　よわし　つかる
瀕 ヒン
潛 もぐり　もぐる
潴 チヨたまりみづ
瀧 ロウたき
瀨 ライせ
瀝 レキさらふ　そそぐ
—青 チヤン
獺 ダツなそ　うそ
懲 チヨウこらす
—戒 みせしめ
攀 ハンよぢ
曠 クワウむなし
曝 バクさらす
—布 さらし
—地 さらち
—松 されまつ
—首 しやれかうべ
—涼 むしほし
櫓 ロやぐら

櫑 ライ
櫛 セツくし
櫟 レキいちひ　いつしほ　くぬぎ
檻 カンなり　うなや
櫚 レイごち
變 セフやはらぐ
爆 バクはぜる
爛 セツほそくづ　ほそく　ドすひ　キヤウ
疆 キヤウ
爆 バク
犢 トクこうし
—鼻 ふんさし
—鼻稗 ふみごほし　ふごし　ふんどし
獸 ジウけだもの
瓊 ケイたま　にぬ
—矛 ねほこ
—音 ねなと
—脂 ところてん
—乾 ラフどし　もみは　ちかん

藕 グウはすつはひ　はすね
蔭 リヨいぬよもぎ
—茄 ねあざみ　にひまぐさ
綾 ケン
藜 レイあかざ
—蘆 やまうはら
藝 ゲイわざ　まこ
藷 ショいも
藤 トウふぢ
—天藝 またたび
—行李 ふちざり
—黃 きワウ
—繡球 つるあぢさゐ
藥 ヤクくすり　くす
—玉 くすだま
—研 くすりおろし　やげん
—煉 くすね
—籠 やろう
蘆 へびいちご
藩 ヘンさかひ　まがき
藪 ソウやぶ

—白眼 てつかり　やぶにらみ
—柑子 やぶカウジ
邊 ヘンあたり　わたり　ほとり
—藻 へつも
—邊 へつべ

邂 レイねり　ねる　おそし
璽 ジしるし
璽 ブンひび　ひびき　ひびく
黼 ホ
瓣 ベンうりのさね
疇 チウうね　たレカ　はたけ　タウ
癥 チヨウはらのやまひ
禰 ディかたしろ
—宜 ねぎ
穡 セイいなだは
穩 チンおだやか
罌 ベキおけひ　づきん
羅 ラとりあみ　とあみ
—馬 ローマ

—面 らべいか
—摩 かがいも
—漢柏 あすはひのき
羆 ヒしぐま
簸 ハりる
幹 からたけ
簾 レンすすだれ
簿 ボちやうめん　せまる
簷 エンのき
糝 すくも
糧 さがりもち
繫 ケイつなぐ　つながる　つなぐ　かかる　かく
—梅 やまちも　ゆすらもも
繭 ケンさよ　まゆ
繩 ジョウなは
—暖簾 なはノレン
繪 クワイ
—馬 ヱま　ゑんま
繰 サウからくり　くる
—身上 カウ　かちくりシンジ

繳 ジヤクいぐるみ　からむ
繹 エキ
繻 ヘキからうち
艙 タウふね
艤 ギふなよそひ　ふねよそひ
螽 ホツ
蟹 カイかに
—眼 ゆだま
—魚鰨 かにはんぺい
—蟾 がうな
蠊 あくたむし
蠆 タイはち　さそり
蟻 ギあり
—虱 きささ
—門渡 ありのとわたり
蠅 ヨウはへ
—虎 はへとりぐも
蟾 センひきがへる
—蜍 ひきがへる　ひき
蠍 ケツさそり

蟷 タウ
蟶 テイまて
—王樹 ハはたがしら　ジヤポチン　ジヤポテン
蹇 ヘキたたむ　ひだ
—積 ひだ
襦 ジユ
—袢 ジバン
證 ショウあかし　あかり
譜 フ
譎 ケツ
譏 キそしる
識 シキしる
譙 セツ
贊 サンたすく　ますむ
贋 ガンにせ
贈 ゾウおくる
蹔 タンさきさす
蹶 ケツ

蹲 ソンつくばひ
—向鯖 ソンカウのひれ
—居 うづゐ
—鴟 いもがしろ
蹴 シウける
—鞠 くまり　けまり
轍 テツわだち
轔 リンとどろく　きしる
轎 ケウ
辭 ジことば　いなぶ
—書 ジツ
饐 ヘまき
酸 ハツかもす
鹽 アツみどころし
鹽 ザンいしきりのみ　たがね
—菜 きせわたさう
鏤 ロウきざみ　ちりばむ
鑿 いりなべ
鐔 ゾウくさり　くさる
鏃 ゾクやさき　やじり

鑄 ハクさびつき
鏈 レンくさり
鏌 バクー
鏑 テキかぶら
—膝 かぶらトウ　シヤウ
鏝 マンあはた　こて
鏞 かね
鏟 サンかんな
鏡 キヤウかがみ
—鑑 かがみ
鏢 ヘウこじり
關 クワンせき
—木 クワンのき
—代 せきて
艦 へまき
隴 ロウうね
壺 あよ
礬 ヨ
鐵 セン

離 リ はなる かる
—孫女 さるむこひめ
難 ナン かたし
霧 ムム きり
靡 ビ なびく ナシ ナケン
癡 チ
轉 ハク とし しばり
輔 ふいがう ふいと
韜 タウ たちぶくろ
輔 たかだれき
韻 ヰン ねびき てうし
轔 リン とどろく きしる
願 グワン ねがひ ねぐ ねがふ
—解 グワンけどき
牘 トク ドク
顛 テン さろぶ ころぶ
類 ルヰ たぐ たぐふ ホホム子 キ
餼 —子 けど

饂 ウン
餽 キ
傅 ハク うんどん
—飪 ハウ ダウ
鍋 グワ
—駒 かば
騙 ヘン かたり かたる
鬐 すずしろ テウ たひ
鯛
鮲 どぜう
鰣 はす
鯛 ホリ すめうを
—魚 いさよぐ
鯢 ゲイ こさかな
—魚 はなにす はんにき
—鰹 めじ めじかつを
鯢 にべ
鯤 コン
鮴 かど
鯨 ゲイ くぢら

—波 ごき
鯖 セイ みなさば さば
鯖 リヨウ せんざんかふ
—鯉 せんざんかふ
鯱 しやち しやちほこ
鯡 ヒ にしん
鰌 セイ たのしろ
鰨 するめ
—烏賊 するめいか
鯣 シヤウ すきがつを
鰌 シ いとら
—瘠銀杏 いたせいてふ
鯊 ダイ あぶる
鯰 ダン なまづ なまだ
鯉 むつ
鵲 シヤク ジヤク かささぎ
—豆 せんどくまめ
鶏 タツ たどり

—鳩 さしは
鶚 いすか
鴉 わし
鶉 シユン うづら
鵯 ヒツ ひえどり ひよどり
鶺 ヒツ ひえどり ひよどり
鴆 ひめ
鵬 ホウ ふほどり
鵺 ヤ ぬえ
鷸 コウ ねえ
鵜 つぐみ
鷺 ロク ふもと
麒 キ
麗 レイ うらら うるはし
—春花 ひなげし
麕 くじか
麴 キク かうぢ
甑 ゴツ はーふがり
鮪 コツ にーいき

二十畫

勸 クワン すすめ すすむ
嚴 ゲン いかめし いつ おどそか
—武 いつべ
—眞屋 いつのまや
—御世 いかしみよ
—道別 いつのちわき
—穂 いかしほ
嗽 レン
嚶 アウ
嫦 サウ やもめ
孃 ヂヤウ ぢだる こゆ
寶 ヘウ たから
—螺 ホラ
懺 セン くゆ
—悔 ザンゲ
壤 ジヤウ
攘 ジヤウ はらふ
瀾 ラン
瀹 ヤク にる ゆびく はやし ゆがく

瀯 エイ
瀰 ビ
懸 ケン かかる かく
—念 ケチン
—相 ケサウ
—扰 さがりふすて
—魚 ゲギヨ
—緒亜 のどびこ
—壁瓶 かけはないけ
櫪 くぬぎ
—飼 いたがひ
櫨 ロ はにし はじ
櫧 シヨ かし
—子 ぶんぐり
櫓 ロウ ろり
爐 ロ ろろ
犧 ギ いけにへ
—牲 いけにへ
獻 ケン コン たてまつる
—上 さだず
獺
—猴桃 しらくち

獲 まみ
爐 ロ
騰 トウ たつ あがる
膽 エン のんど
—脳 べに
臚 ロ ちらす
藹 アイ ぢし
藻 サウ も
蘂 ズイ しべ
藺 リン あみ ゐ
藿 クワク かをりぐさ
蘆 ロ あし
—虎 かに
蘇 ソ よみがへる
—芳 スハウ
—門答剌 スモタラ
蘊 ウン たくはふ をさむ
蘋 ヒン ちかがみ
蘓 セツ かにば たこ

癢 ヤウ かゆし
變 クワク むどろく
—紅 べんがら
—水 どうさ
—酒 いちやざけ
醪 レイ ぬまざけ
醸 キヨ
醸 ゲン ぬぐし すし
—羊 ゐがらし
釋 シヤク とく
耀 エウ かかやく
轗 カン
鐇 ヘン たつげ
—紫陽花 あぢみあぢさゐ
—粗 みづを
鐙 トウ あぶみ
鑑 カン かがみ
鐘 シヤウ つりがね
—乳石 つづちいし
鏞 さび
鐃 ネウ どら
—鈸 子ウハチ
鐵 ヂツ いしづき
鬧 セン ばらく
鬪 タツ
霰 サン あられ
—石 つんぱい
—男 ひよつとこ
—頭 まんぢゆう
—頭 まんぢゆう
—餅 ヒツ こむぎもち
—鑼 ばちら
馨 ケイ かをり かうばし
騷 サウ さわぎ さわぐ
—立 さわがし
—騒 さわがつ
—騒 サウ ぐし

鱒 いしづき
—肌 きはひはだ
—賓 せりうり
襪 ベツ したぐつ したうづ
—襪 ラン ほろ
籃 ラン かご
籌 チウ かずとり はかりごと
籍 セキ ふの
糯 ダ もちなめ もち
繽 ヒン
辯 ベン まじふ くむ
—子 シユス うすぎぬ
繼 ケイ つぐ
—子 つぐ しねいと
纂 サン あつむ
—栗 けし
躁 サウ

壁 ヘキ ましなへ あなへぐ
艦 カン いくさぶね
艤 モウ いくさぶね
蟶 セイ すくもむし
—蟹 すくも すくもむし
蠕 ゼン うめく
蠖 グワク なでむし
蠑 エイ やもり
—螈 ゐもり
蠔 カウ ごウ かき
覺 カク おぼえ おぼゆ さむる
—東無 おぼつかなし
觸 ショク ふる
警 ケイ いましむ
譬 ヒ たとひ たとふ
譜 フ しるす
譯 ヤク わり
—語 をさ
議 ギ はかる

譫 セン たぐ
—言 うはこと
贏 エイ かつ
醴 レイ ぬまざけ
—酒 いちやざけ
釋 シヤク とく
—羊 ゐがらし
耀 エウ かかやく
轗 カン
鐇 ヘン たつげ
—紫陽花 あぢみあぢさゐ
—粗 みづを
鐙 トウ あぶみ
鑑 カン かがみ
鐘 シヤウ つりがね
—乳石 つづちいし
鏞 さび
鐃 ネウ どら
—鈸 子ウハチ
鐵 ヂツ いしづき
鬧 セン ばらく
鬪 タツ
霰 サン あられ
—石 つんぱい
—男 ひよつとこ
—頭 まんぢゆう
—頭 まんぢゆう
—餅 ヒツ こむぎもち
—鑼 ばちら
馨 ケイ かをり かうばし
騷 サウ さわぎ さわぐ
—立 さわがし
—騒 さわがつ
—騒 サウ ぐし

鬐 キ さらげ わななく
鬢 シン
鬪 タウ たたかひ たたかふ
—牛兒 げんのしようこ
顋 ソウ ひよめき
—門 ひよめき
麵 メン むぎこ
—子 メンズ
—麭 パン
鰍 シウ いなだ かじか
鯷 テイ ひしこ ひしこいわし
鰈 タウ かれひ
鯉 —魚 かつを
鯸 ふぐ
—鮞 シウ どちやう
鯰 ソウ いしもち
鰕 カ えび とど
鰆 シユン さはら
鰊 —子 かど かづのこ
鰒 あはび
鰐 ガク わに
鰓 サイ えら
鰰 はたはた
鰲 ボク あひる
鶚 カツ やなどり
鶴 —鶴 のせ
鶯 カク みさご
鹹 カン ほにゆし
—草 あしたぐさ
麟 ベイ かのこ
黨 タウ むら さと くみ とも
黥 ケイ めさく
鼸 ゴ むささび
—鼠 むささび ももが

二十一畫

鑿 ゼツ なかり をどる
轟 ガウ とどろく
鐫 セン ゑる のみ
鏢 ヘウ しのぎ
鏘 へら
鐵 テツ くろがね まがね
—刀木 たがやさん
—色揃 しびとはな
—砲草 ふなばな
—枷 かなほだし
—雪橇 かなかんじき
—棒 かすがひ
—葉 ぶりき ぶりつき
—鈕 かすがひ
—漿 はぐろめ はぐろ
—鋏 かなばさみ かなばし
鐶 クワン ゆびまき
鐸 タク ぬりご ぬで
鐺 こじり
霹 ヘキ ときいかづち
—靂 ヘキレキ
露 ロ ちらはる つゆ
—甲 ぜんちやうげ
—兜樹 たこのさ
霸 —王樹 サボテン
顧 コ かへりみる
カ かへつて
顥 カウ
飜 ハン ひろがへる
—車魚 まんぼう
—車鮫 まんはうざめ
—筋斗 とんぼがへり
饐 イ すゆ
饌 セン けい
饑 キ うう
饒 ジウ ゆたか
ダイ ゆたかへ
饋 キ
驀 バク こゆ のる
—地 まつしぐら
—直 まつしぐら
鷙 チ たり
驃 ヘウ しらかげ
驟 ラ はや
驂 サン そへうま
驄 ソウ あしげ
—馬 ふだらをうま
驅 ク かる かく
驂 サン シン
鬚 ボウ がづら
—工 かづらひねり
魑 チ すだま
—魅 すだま
魔 マ
魍 グワン やもめびと
魎 リヤウ ほそ へら
鰭 キ ひれ はた
—狹物 はたつさもの
鰧 ヒ みごひ
鰐 ガク つくら
鰤 シ ぶり
鰯 ジヤク いわし
鰰 チン
—魚 をこと をこぜ
鶯 アウ うぐひす いぐひす
鶫 シヤウ ひはり
鶴 セキ せきれい
—鴿 にはくなぶり にはたき いしだたき
鵠 コク はしたか はいたか
鶉 ゲキ
鶏 アン かやくぐり
鶲 ヒ ひたき
鶸 ジヤク ひわ
鶚 ウ つつどり
鷄 ケイ にはとり
鷹 ジヤ
—香 ザカウ
鼓 ヘイ めめづみ
鼈 セイ ぢれすみ
—鼈 のらねこ
齊 セイ もたちず
齬 ウ しらかげ

二十二畫

鑿 サク かむ
—付 かじりつく
儼 ゲン うやうやし おごそか
儻 タウ ひろし
ダ ダマ
モシ コヒ子がハクハ
ナウ ふくろ
囊 ノウ ふくろ
囈 ゲイ
孌 レン うつくし
巔 テン いただき
巒 ラン
彎 ワン ひく
攣 レン
攤 ダ もち
灑 レイ したむ
灘 ダ なだ
懿 イ うるはし あつし
欄 ラン
—干 カン ゴン はるか カリニ
權 ケン

—音 ヒ はじりカウ
—擢 ラフ まつち
—樹 ねずみもち
蟾 セン みから
蠧 ベツ ちさぶれ
覽 ラン みる
譽 ヨ ほまれ ほむ
辯 ベン わかつ
譴 ケン せむ
護 ゴ まもり まもる
—田鳥 おすめどり
—符 まもり
—誤 ゴム
贐 シン はなむけ
贔 ヒ おほがめ
—負 ひいき
贓 ゾウ
—贓司 あかりもののつかさ
躊 チウ ためらふ
躍 ヤク なかり をどる
轟 ガウ とどろく
鐫 セン ゑる のみ
鏢 ヘウ しのぎ
鐵 テツ くろがね まがね
—刀木 たがやさん
—色揃 しびとはな
—砲草 ふなばな
—枷 かなほだし
—雪橇 かなかんじき
—棒 かすがひ
—葉 ぶりき ぶりつき
—鈕 かすがひ
—漿 はぐろめ はぐろ
—鋏 かなばさみ かなばし
鐶 クワン ゆびまき
鐸 タク ぬりご ぬで
鐺 こじり
霹 ヘキ ときいかづち
—靂 ヘキレキ
露 ロ ちらはる つゆ
—甲 ぜんちやうげ
—兜樹 たこのさ
霸 —王樹 サボテン
顧 コ かへりみる
カ かへつて
顥 カウ
飜 ハン ひろがへる
—車魚 まんぼう
—車鮫 まんはうざめ
—筋斗 とんぼがへり
饐 イ すゆ
饌 セン けい
饑 キ うう
饒 ジウ ゆたか
ダイ ゆたかへ
饋 キ
驀 バク こゆ のる
—地 まつしぐら
—直 まつしぐら
鷙 チ たり
驃 ヘウ しらかげ
驟 ラ はや
驂 サン そへうま
驄 ソウ あしげ
—馬 ふだらをうま
驅 ク かる かく
驂 サン シン
鬚 ボウ がづら
—工 かづらひねり
魑 チ すだま
—魅 すだま
魔 マ
魍 グワン やもめびと
魎 リヤウ ほそ へら
鰭 キ ひれ はた
—狹物 はたつさもの
鰧 ヒ みごひ
鰐 ガク つくら
鰤 シ ぶり
鰯 ジヤク いわし
鰰 チン
—魚 をこと をこぜ
鶯 アウ うぐひす いぐひす
鶫 シヤウ ひはり
鶴 セキ せきれい
—鴿 にはくなぶり にはたき いしだたき
鵠 コク はしたか はいたか
鶉 ゲキ
鶏 アン かやくぐり
鶲 ヒ ひたき
鶸 ジヤク ひわ
鶚 ウ つつどり
鷄 ケイ にはとり
鷹 ジヤ
—香 ザカウ
鼓 ヘイ めめづみ
鼈 セイ ぢれすみ
—鼈 のらねこ
齊 セイ もたちず
齬 ウ しらかげ

二十二畫

鑿 サク かむ
—付 かじりつく
儼 ゲン うやうやし おごそか
儻 タウ ひろし
ダ ダマ
モシ コヒ子がハクハ
ナウ ふくろ
囊 ノウ ふくろ
囈 ゲイ
孌 レン うつくし
巔 テン いただき
巒 ラン
彎 ワン ひく
攣 レン
攤 ダ もち
灑 レイ したむ
灘 ダ なだ
懿 イ うるはし あつし
欄 ラン
—干 カン ゴン はるか カリニ
權 ケン

—柄付 ヘンペイづけ
穫 ジャク
歡 クワン よろこぶ
甕 ジャウ かめ
臟 ザウ
疊 デフ たゝみ たたむ シキリニ
—字 ぢどりじ
—紙 たたうがみ
—海布 たゝみめ
競 —ケイ
癮 —診 ちちく
癬 セン たむし
瘻 エイ こぶ
禰 らん なろつき
籠 クワワク ひし
籜 タク はかま
籜 ギヨ いけす
籟 ライ かなしきこゑ
籠 ロウ かご こがつぎ こもる

—手 ごて
—日 こめおり
縟 しいし しんし
羅 テキ かひよね
繘 ロ いと
—刷 さいさ
聾 ロウ つんぼ
聽 テイ チャウ きく ゆるす
—叫 チンケウ
艫 ロ とも
蠦 ロ
—蟹 つのわし
蠱 トウ むし むしくひ
—魚 きらむし しみ
蠡 レイ
襲 シフ おそひ かさひ おそふ
瞿 ク
贓 ザウ
贖 ショク かひひ あがなふ
—物 あがもの

讀 ドク トウ よみ よむ
讒 セン
覿 テキ あよ
躑 テキ ぶみ ぶみす あと
—躅 つゝじ
躐 ラフ
躔 チ ちがひ つまづく
轡 ヒ くつわ
轢 レキ きしめく
鑄 チウ いる
鑑 カン かがみ かんがみる
霽 セイ はる はらす
靂 パイ つちふる
羈 キ
響 キヤウ ひびき ひびく
—尾 ひ からからへび
—銅 サハリ
顱 セン ひひらかす
饗 キヤウ あへあるじ

—設 あるじ もうけ
—膃 もてなす
饐 かたがゆ
贏 ラ
驛 うかげ べにくりげ
—油馬 あかかすげ
驍 ゲウ
驕 ケウ おごり おごる
驀 あしぶち よつじろ
鬚 シユ ひげ
鬻 イク ひさぐ
鰹 ケン かつを
—干 かつをぶし
—破前 かつをハセ
—節 かつぶし
—煎汁 かつをいろり かつをづくり
鰻 バン うなぎ わなぎ
—垂 うなだれ
—飯 まんむし
鰆 ショウ うろこ ちかぶり

鰾 ヘウ ふえ ほばう
—膠 にべ
鰊 デウ にい はえ はや
鰯 チク おつ
—鮪 うるか
鰤 —魚 あら
鱆 タ
鰺 サウ あじ さくさね
鱈 タ たら
鰍 アイ
—鮎 アイキヤウ
鰤 ケン
鱘 シ しび
—魚 てよさめ
鬮 トウ
鷙 シ さとり
鴟 シ しゃこ
—初草 さくり
鷙 わし

鴎 オウ かもめ
鷂 キフ くろもず
鶴 カク つる たづ
鷺 シヤウ のろ くじか
鸕 イ つらぬすみ
鸞 ガン うく とる

二十三畫

鬣 ガン いかほ
攤 タン うつ とどむ
—網 すくひうみ たも
攪 カウ カク みだる
玃 クワク やまと
戀 レン こひ こふ こひし
欒 ルイ かじき かんじき
欒 ラン あらち
—樹 もくれんじ
攣 レン きづな
樗 サン つる

蘿 ラ つた
—摩 ちがめ かがいも かがんや ちくさ
—蔔 だいこん
邏 リ
邏 ラ めぐる みまはり
癰 ヨウ はれもの やす やせ
竊 セツ かそか ぬすむ
纓 エイ ひも むながひ
纔 サン わづか サイ
纖 セン こまかし うすぎぬ
蠱 ゴ むし
變 ヘン かはる かふ
—化 へんてこ
—挺 へんてこ
讖 うたげ
讐 セフ おなる いむ
讐 シウ あだ かたき
靈 クワウ まとがね
鑛 ライ
鑞 ラウ すず

鏃 シヤク わかづ さろく
鑪 リヨ やすり
鑣 ヘウ くくみ
曆 エフ あぐは
饜 エン
顯 ジユ
顯 ケン あらはる うつつ
—世 うつしよ
—身 うつそみ うつせみ
驚 キヤウ おどろく おどろき
—羊花 もちつつじ
驗 ケン しるし
驛 エキ うまや
—使 はゆまづかひ
髑 トク ドク されかうべ
—髏 されかうべ ひとがしら
髓 ズイ すね
體 タイ テイ からだ
鬚 クワン ひつも みづら
鮓 ジン えび

鰯 イツ さのはり とろめん
鱒 ソン ます
鰹 セン うつは
鰯 ケイ あさち
鱗 リン いろくづ うろこ
鱚 キス きす
鯊 サ さぎ
鯊 ベツ きんけいてう
鷲 シウ わし
鷺 ロ さぎ
鶴 イツ しぎ
—子 つぐり つぶり
—魚 しらすたつづくり しらすなど
鶴 セツ みそさざい
—鷄 ささぎ
鶴 バン
鱗 リン きりん
鶸 チ もち
—篠 はご はが
—鼠 はつかねずみ

徽 イ かび かぶ
齲 ウ はむる むる

二十四畫

囑 ゾク ショク たのむ
癲 テン てんかん
襷 キヨ たすき
襷 ハン こんものひも
襷 シ
—袴 ふくげ よくだげ
罐 クワン
羈 キ ほだし
—絡 おもがひ
靈 レイ のむし
—魚 しみ
蠶 サン かひこ こ
—豆 そらまめ
—簿 えひち えびし
艷 エン にほひ つや
衢 ク ちまた
讖 シン

讒 ザン そしり つげぐち
—言 サウゲン
讓 ジヤウ ゆづり ゆづる
軈 やがて
釀 ジヤウ もす
鑪 ロ ひどこ
靄 もや
靈 レイ たま ちはふ
—幸 たまちはふ
蟹 かぶとがに
—葬 たまはふり
—龍 おがみ
韈 ビン
—雀 ふなか
顰 ビン ひそみ しかむ ひそむ
—面 しかみづら
驟 シユウ こはし シバシバ ニハカニ
髓 ヒン ひんぢ ひんぴん
髮 ヒン
魔 エン おそはる うなされる

鰥 コイ かぶさがに
—魚 かぶとがに うみざうがめ
鰥 やもめ
—夫 やもを
鱈 デン うたら
鱈 ヘツ
鱧 レイ はも
—腸 うまきたし
鰻 いしもち
鰌 クワイ どぜう
鱔 あみ
鱔 しいら
鯛 たたはだ
鶯 アク うそ
鵬 ヘキ にはとり
—鷄 かひつぶり みほど
鶯 タク みそごあさぎ
—鳥 うすべ をすめがら
鷹 ヨウ オウ よか
鸇 セン すすめたか

鰳 ショク さやつきどり
鴆 ケイ をしどり
—鴆 をし
鹼 ゲン しほ　ケン しほみづ
—味 あく
塩 エン
—尻 からしり
—梅 アンアイ
—膚木 ねるで
—麩子 よし
鼇 ガウ おほすつぽん
鼈 ベツ すつぽん　こちがめ
—蟲 さんがめむし
鰟 キウ かぐ
齲 ク むしくひは
—齒 おそは むしかめは
齷 アク せまる　せまし
—齪 あくせく
—齷 あくせく
齶 ガク あぎ　あぎと　めご
齷 はねる　チグ
蠱

二十五畫

廳 チヤウ きつりどころ
灣 ワン いりうみ
欖 ラン
—木 かじや
欄 ハつか
樹 えぶり
簍 ヘン たかつき
籬 リ かき　まがき
羅 ラ したみ
讙 クワン
糶 デウ うりよね
—物 せりもの
纘
—蕈 しめぢたけ
纏 シ さで
觀 クワン みる
—縒 クワンゼより　クワンジンより
—星鏡 ほしめがね

觿 ケイ くしり
蘿 クワン あなぢり　あなぐま
蹋 セフ ふむ
鐵 セン
鑰 ヤク かぎ
儻 サン かなよくび　よぐし
鬚 アイ たなびく　くらし
鬟 キン ちねる
顱 ロ はち
鬣 レフ たつがみ　たてがみ
鬩 アイ
鷸 シ たかへ
鷗 ラン くわつこうどり
—鷗 ほとときす
鸞 クワン もものまなひごころ
—魚 うんきう　かぶとがに
纛 たう
黿 ダ うみへび
鬱 レン きりどし
蠻 メン えびす

二十六畫

蘚 ウツ ふさぐ
矚 ショク みる　ながむ　みつむ
矍 ワク わく　いとわく
讚 サン ほむ　たすく　あきらか
釃 シ こす
鑵 クワン かま
鐝 デク りねき
—子 りねき
韉 セン したぐら
靈 ホツ
驢 ロ うさぎうま
驥 キ
鯤 からずみ
鰤 たなだ
鱖 シン さより
鱶 シヤウ ふか
—鮫 ふかうるめ
鬆 エン
—子 ほくろ
齷 サ ショ はかみ　いめく　はにかむ

二十七畫

灑 エン
纜 ラン ともづな
觀 フツ
讜 タウ ただしきことば　よきことば
躪 リン にじる
鑿 サク のみ
鑽 サン とはしぎり　きる　もむ
變 ラン
顧 ゼウ みみたぶら
—顥 こめがみ
驤 ジヤウ あがる
—首 かなくび
鱷 わに
鱸 ロ すずき
鷓
—鴣 う

二十八畫

鬮 キウ くじ
鷄 アツ あうむ

—哥 いんこ
—羊 レイ おほひつじ　かもしか
—鼠 ルイ むささび
鑼 クワン くは
—金 サン かしぎ　かしぐ
鸞 ウツ
鬱
鶴 コフ

二十九畫

三十畫

驪 リ くろこま
鱺 レイ うなぎ
鬱 テン ほうわう
鸝 リレイ うぐひす

三十三畫

龘 ソ

字音假名遣表

括弧を施したるは俗字略字の類●印を附けたるは吳音たることを表せるなり

發音	假名	漢字
イ	い	伊・咿・咿・以・苡・倚・猗・椅・漪・怡・詒・貽・飴・夷・荑・痍・意・噫・憶・億・迤・逶・陀・已・弄・衣・依・頤(頤・顊)・醫・壓・矣・易・恚・移・異・彝・懿
	ゐ	韋・偉・圍・幃・葦・違・緯・瑋・諱・緯・魏・委・倭・萎・逶・諉・餧・胃・媚・渭・猬・蔚・謂・惟・帷・唯・維・尉・慰・熨・威・蝟・位・畏・爲・彙・遺
ン	いん	因・姻・茵・氤・裀・引・蚓・靭・淫・婬・霪・音・喑・瘖・堙・湮・陰・蔭・寅・夤・殷・慇・隱・隼・尹・允・印・胤・飲
	ゐん	員・殞・隕・韻・院・筠・韵
エ	え	衣・依
	ゑ	回・回・廻・會・繪・惠・慧・淮・穢・衛
エ	え	延・埏・莚・筵・蜒・奄・俺・掩・閹・偃・堰・蝘・蠒・焰(焔・閻)・炎・琰・焱・弇・揜・渰・燕・讌・醼・厭・饜・魘・沿・鉛・烟・煙・椽・緣・焉・嫣・櫞・簷・艶・艷・艷・捐・宴・鳶・演・衍・泅・鹽(塩)
	ゑ	宛・怨・苑・菀・婉・琬・蜿・蜿・袁・猿・遠・轅・園・爰・援・媛・湲・援・垣・洹・員・圓・冤
ツ	えつ	兌・悅・說・閱・噎・饐・咽・謁
	ゑつ	越・鉞・樾・曰・粤・嚶
イ	えい	瑩・榮・瑩・榮・營・嬰・瓔・攖・瓔・纓・永・咏・詠・曳・洩・拽・裔・影・鋭
	ゑい	衛(衛)
ン	えん	苑・怨・苑・菀・婉・琬・蜿・蜿・袁・猿・遠・轅・園・爰・援・媛・湲・援・垣・洹・員・圓・冤

オ	
お	於・飫・
を	烏・嗚・塢・汙・汚・惡・墨
ウオ	
あう	央・泱・殃・秧・盎・鴦・鞅・奥・墺・懊・燠・襖・嚶・櫻・嚶・鸚・罌・鶯・媼・塵・拗
あふ	凹・押・鴨
おう	嘔・歐・毆・甌・謳・應・
わう	王・汪・枉・往(往)・旺・尪・皇・凰・黄・横・
をう	翁・蓊・甕・甕・泓
オク	
おく	億・憶・臆・
をく	屋
オツ	
おつ	乙
をつ	鰮・越・
オン	
おん	音・喑・陰・蔭・隱・隱・恩
をん	温・瘟・蘊・苑・怨・遠・園・穩

カ (ガ)	
か (が)	可・何・呵・坷・河・柯・珂・苛・哥・軻・荷・歌・軻・加・伽・珈・架・茄・笳・迦・賀・嘉・駕・假・暇・瑕・遐・蝦・鍜・霞・鰕・我・俄・哦・峨・娥・蛾・餓・鵝・牙・芽・枒・迓・訝・雅・个(箇)・夏・廈・榎・賈・賈・下・佳・衙・椏
くわ (ぐわ)	果・菓・窠・夥・課・課・裏・顆・顆・堝・渦・鍋・過・禍・蝸・鍋・化・花・貨・靴・華・譁・華・驊・禾・和・科・蝌・夸・誇・火・戈・瓜・瓦・臥・畫・畫・寡
カイ (ガイ)	
かい (がい)	會・儈・劊・獪・檜・膾・繪・繪・傀・塊・嵬・隗・槐・魂・塊・魁・灰・恢・詼・回・囘・廻・徊・悔・晦・誨・潰・閼・壞・懷・乖・快・怪(怪)・快・外・各・咯・客・恪・格・格・絡・貉・閣・擱・骼・額・刻・愕・
くわい (ぐわい)	寰・圜・擐・環・還・鬟・鬟・勸・歡・灌・權・觀・讙・鑵・驩・官・宦・棺・菅・管・館(館)・奐・喚・渙・換・煥・元・阮・頑・翫・完・浣・莞・丸・紈・丸・卵・關・串・患・亘・桓・原・願・貫・慣・款(款)・湲・緩・卷・冠・寛・盥・鰥・

カク (ガク)	
かく (がく)	蒐・謂・鍔・顎・鶴・角・埆・桷・确・隔・膈・翮・確・鶴・赫・嚇・學・覺・岳・革・核・較・樂・殼・愨・虢・嶽・壑・鰐・
くわく (ぐわく)	獲・穫・蠖・鑊・嬰・攫・躍・鑊・郭・廓・槨・藿・劃・霍・擴・幗・擴・
カツ (ガツ)	
かつ	曷・渴・喝・葛・褐・歇・羯・蝎・鞨・鶡・割・轄・戛・
くわつ (ぐわつ)	活・括・括・筈・蛞・聒・闊(濶)・猾・滑・月・豁・
カン (ガン)	
かん (がん)	干・刊・奸・扞・汗・幹・旱・旰・肝・杆・罕・盻・岸・竿・悍・栞・奸・桿・幹・鼾・驊・甘・邯・坩・泔・柑・柑・疳・嵌・酣・閑・閒(間)・嫻・娴・涵・癇・簡・燗・咸・喊・感・緘・憾・撼・轗・鹹・監・檻・艦・鑑・含・莟・頷・勘・堪・戡・敢・橄・瞰・欠・坎・函(凾)・涵・陷・啖・啗(岩)・巖・雁・鴈・棗・諫・漢・艱・翰・瀚・澣・侃・看・眼・乾・姦・寒・銜・韓・顏・龕・

キウ (ギウ)	
きう (ぎう)	求・逑・救・毬・球・裘・賕・觩・休・咻・烋・休・鵂・久・灸・玖・柩・九・仇・究・鳩・嗅・糾・餌・嗅・糾・蚪・赳・臼・舊・丘・蚯・牛・朽・糾・告・畜・槃・(厩)
きふ (ぎふ)	及・仮・吸・汲・岌・笈・級・蓑・嗅・渝・泣・急・給・
きゅう	弓・穹・躬・窮・宮・窮・
キウ	
きょう (ぎょう)	兄・況・恍・貺・狂・誑・卿・鄉・嚮・饗・彊・疆・薑・竟・鏡・競・鏡・京・享・强・襁・行・
きょう (ぎょう)	凶・兇・匈・恟・洶・胸・胷・共・供・拱・恭・蛬・襲・恐・蛩・跫・蛩・輿・興(興)・矜・蛟・喝・凝・刑・形・匡・筐・仰・行・杏・

	姜 莖 鷲
けう（げう）	喬 僑 嬌 嶠 橋 蕎 矯 趫 轎 驕 蟯 僥 澆 嶢 曉 翹 蹺 蹺 叫 蚪 竅 皦 敎 梟
けふ（げふ）	夾 俠 峽 挾 狹 莢 筴 鋏 頰 慳 篋 協 脅 劫 怯 業

（ウ゛ギ）

	交 佼 教 効 咬 姣 狡 挍 校 郊 皎 蛟 絞 傲 較 鉸 鮫 高 槁 稿 蒿 皜 敲 膏 藁 毫 豪 濠
かう（がう）	亢 伉 抗 吭 抗 阬 航 頏 骯 敖 傲 嗷 熬 聱 鼇 更 哽 梗 硬 鞭 鯁 皐 皐 幸 倖 悻
	睾 岡 剛 綱 鋼 庚 康 慷 糠 孝 考 哮 酵 行 桁 衡 卬 仰 昂 肴 淆 殼 泽 降 絳 羔 糕 糕 号 號 巷 港 境 磽 講 膠 告 浩 巧 攷 顥 灝 鄉 嚮 畊 耕 向 好 亨 香 耗 耿 强 蕎 鏗 敷 嚣 江
かふ（がふ）	合 洽 恰 哈 袷 蛤 閤 鴿 甲 匣 岬 狎 壺 溢 闔 峽

（ウコ）

	黄 潢 簧 横 黌 廣 鑛 曠 礦 纊 鑛 皇 惶 徨
くわう（ぐわう）	湟 惶 喤 煌 蝗 篁 鍠 光 洸 恍 胱 晃 滉 幌
	穢 艦 宏 紘 鉉 閎 荒 慌 盲 蝗
	嶸 轟
こう（ごう）	工 扛 肛 紅 虹 紅 訌 功 攻 永 貢 槓 鴻 空 腔 控 控 口 叩 狗 拘 鉤 駒 后 垢 逗 扣 釦
	溝 媾 構 篝 購 觀 購 公 弘 勾 拘 肱 亙
	恆 恒 逝 絙 侯 候 喉 猴 洪 哄 烘 厚
	肯 肴 後 寇 與（與） 毫

（ウゴ）

じ	寺 侍 恃 峙 茲 孳 磁 慈 耳 珥 餌 爾
	璽 邇 次 瓷 似 娘 而 鯔 二 自
	字 兒 皃 事 辭（辭）
ぢ	痔 持 痔 峙 尼 怩 膩 治 除

ジ

しう（じう）	秋 啾 愀 愁 萩 鰍 鍬 州 洲 酬 秀 琇 銹
	脩 遒 鰌 柔 揉 蹂 囚 泅 收 修 脩
	岫 袖 就 蹴 鷲 聚 驟 周 週 蒐 醜
	讐 讎 繡 鏽 舟 狩 臭 祝 阪
	羞 溲 獸

シウ

しふ（じふ）	葺 楫 戢 輯 十 什 汁 習 襲 澀（渋） 濕
	拾 執 集 襲
じふ（しふ）	從 縱 戎 絨 宗 充 終 衆 蓋

（ウジ）

じき	食
ぢき	直

キジ

じく	孰
ぢく	軸 軸 粧 鯉 竺 鯉

クジ

じつ	日 昭 實
ぢつ	昵 暱

ツジ

じゃく	昔 惜 藉 籍 若 雀 寂 弱
ぢゃく	著（着） 笛 擲

クヤジ

じゅつ	述 術 恤 戌
ぢゅつ	朮 怵

ツュジ

じょ	汝 如 洳 恕 茹 絮 敍（叙） 藷 序 舒 助 鋤 徐

ジョ

ぢょ	女 除

ウョジ（ウョシ）

	尙 徜 敞 掌 裳 賞（賞） 賞 償 常 嫦 昌 倡 唱
	娼 菖 猖 晶 將 奬 漿 蔣 醬 襄 攘 攘
しゃう（じゃう）	孃 穰 讓 章 障 彰 樟 庠 祥 詳 翔 蔣 墻
	穡 牆 生・性・姓・窪・正・症・鉦 傷 瘍 觴
	相 湘 情 精・莊 裝 牀（床） 狀 上
	匠 省・城 淨 猩 象 聖・
しょう（じょう）	丞 拯 烝 蒸 從 慫 縱 蹤 衝 踵 鍾 鐘
	松 訟 頌 升 昇 乘 剩 悚 竦 宄（冗）
	仍 承 茸 勝 稱 誦 證 繩
せう（ぜう）	小 少 抄 鈔 肖 僧 峭 消 梢 稍 硝 蛸 銷 逍 宵
	霄 召 沼 招 昭 照 韶 紹 詔 焦 嘯 憔 蕉
	樵 譙 醮 鵰 蕭 簫 嘯 瀟 燒 鷄 饒
	笑 椒 擾
せふ	攝 囁 懾 捷 睫 妾 接 摺 慴 浹
	屑 渉 燮 囁

ジン

じん：壬・任・妊・荏・荏　壷・儘・燼・蘯・贐　刃(及)仞・靭・靭　尋・燖　人　仁　迅　甚　腎

ぢん：陣・陣　塵

ズ

ず：受・壽・

づ：豆・頭・途・塗・廚(厨)　杜・徒・渡・都・圖・

ウソ（ウゾ）

さう（ざう）：倉・創・蒼・滄・槍・瘡・蹌・鎗　相・想・箱・霜・廂・孀・操・藻・噪・燥・藻・躁　早・阜(皂)・草　曹・漕・糟・遭　爪・爭・掌・諍　壯・莊・粧・裝　臧・藏・贓・臟・贓　桑・顙　巢・勦　帚・掃　象・像　造・造・皂・爽・喪・槽・葬・雙・竈

さふ（ざふ）：甲・插(挿)　匝・雑

そう（ぞう）：曾・僧・增・層・憎・甑・贈・繒　宗・崇・淙・綜・踪　息(恕)・窗(窓・窓)・聰・聰　奏・湊・輳　叟・痩・搜・慈・漱・嗽

ウチ（ウジ）

ちう：嗰・惆・稠・綢・綢　儔・躊・疇・幬　宙・抽・紬・肘・紂・酎　丑・紐　胄・畫

ちゅう（ぢう）：中・仲・冲・沖・忡・忠・衷・蟲　住・注・註・駐　倫・鍮　廚(厨)・嘲　重

ウチ（ウジ）

ちう（ぢう）：徵・澂・懲　冢・塚　重・澄・寵・穠

ちゃう（ぢゃう）：丁・汀・打・疔・町・頂　長・帳・帳・張・脹・漲　丈・仗・杖　場(塲)・暢・腸(腸)　定・錠　聽・廳・鬯・娘・梃・釀

ウト

てう（でう）：凋・彫・蜩・調・雕　朝・嘲　鳥・蔦　弔・吊　刁・釣・趙・嬲・肇・條・躍

てふ（でふ）：喋・蝶・牒・諜・蝶　帖・貼・疊

たう（だう）：堂・瞳・螳・棠・當・黨・儻　唐・塘・糖　刀・叨・切・滔・蹈・稻・韜　湯・蕩・盪　濤・擣・禱　淘・陶・櫂・桃・逃　到・倒　悼・掉　道・導　宕・討・盜・挑・雙・悼・蠹

（ウド）

たふ（だふ）：沓・踏　答・塔　納

とう（どう）：豆・荳・痘・逗・頭・登・燈・橙・磴・鐙　同・洞・桐・胴・筒・銅　童・撞・幢・瞳　膝・藤・籐・謄・騰　東・凍・棟　冬・疼・蓼　偷・媮　動・慟　投・科・桶・形・統・董・兜・等・透・囊・鬪(鬪)

ニウ

にう：柔・

にふ：入・

にゅう：乳

ニョウ

れう：鐃・饒・繞・尿・

れふ：捻・

ノウ

なう：惱・腦・瑙・靈・

なふ：納・

のう：農・濃・膿・能・

ヒョウ

ひやう（びやう）：平・評・兵・鉋・病・屏・

ひょう（びょう）：氷(氷)　馮・憑

（ウビ）

へう（べう）：票・剽・標・漂・縹・飄・飄　抄・秒・眇・渺　苗・廟・猫・錨　表・俵・裱　彪・颷　藐・邈　森・豹・廟・謬

ウホ（ウボ）

はう（ばう）：方・仿・彷・坊・妨・防・訪・舫・放・芳・房・倣　亡・妄・忘・芒・邙・茫・氓　包・庖・泡・抱・胞・袍・鮑・飽・旁・滂・膀・榜・謗　保・堡・褒(褒)　彭・澎・膨・邦・報　尨・厖　寶(寶)　冒(冒)・帽(帽)・棚・萌・硼　卯・抱　茅　蚌　望　旄・烹・貌・鬼・暴・鞏

はふ（ばふ）：法　乏

ほう（ぼう）：峰・烽・逢・蜂・蓬・篷・鋒・縫・蠭　奉・俸・捧・棒・朋・崩・繃・鵬　封・幇　牟・眸　剖　貿・鳳・鵬　謀・豐

ほふ（ぼふ）：法・

ウモ

まう：罔・網・魍　妄・盲　孟・猛　莽・

もう：蒙・濛・朦・曚・艨・

ウヨ

由・油・柚・釉・鵬　酉・猶・楢・猷・蕩　有・侑・宥・

ユウ

いう：囮 右 佑 祐 尤 疣 肬 攸 悠 幽 游 遊 蝣 呦 幼 黝 憂 優 又 友 幽 郵 誘 釉 雄 熊

いふ：邑 浥 悒 唈 揖

ゆう：勇 裕 融

ヨウ

えう：搖 徭 瑤 遙 窰 夭 妖 殀 么 幼 拗 窈 要 腰 燿 濯 陶 窯 姚 邀

えふ：燁 曄 葉 厭

やう：羊 佯 洋 痒 恙 養 漾 樣 瘍 颺 瓔

よう：用 甬 勇 涌 蛹 踊 踴 庸 傭 容 溶 蓉 熔 鎔 癰 擁 饗 膺 應 甕 癰 傚 孕 蠅

ウリ

りう：流 梳 琉 硫 旒 留 瀏 騮 柳 劉

りふ：立 笠 粒

りゆう：龍

ウョリ

りゃう：兩 輛 魎 鋼 良 粮 量 糧 涼(凉) 諒 梁 粱 令 領 亮 喨 靈

りょう：凌 陵 稜 菱 綾 蔆 龍

れう：僚 寮 遼 燎 暸 鐐 鷚 憀 寥 蓼 料 聊

れふ：獵

ウロ

らう：涙 狼 琅 郎 廊 老 牢 勞 醪

らふ：膃 蠟 蠟 鑞 拉 蔦

ろう：聾 籠 聾 朧 朧 瓏 婁 樓 螻 髏 鏤 弄 陋 漏

辭海

あ

あ 左圖の如く口を廣く開き舌を自然の位置に平に置き氣息を聲帶に觸れしめて發する母音。五十音圖中「あ」行の第一に位し「あ」列音の韻となる。下に ウ 或は フ を受くる時は オ の如く轉呼するとあり、あうむ(鸚鵡)あふみ(近江)の如し。又上に撥音を受くる時は ナ の如く轉呼するとあり、ぜんあく(善惡)の如し

あ [畦]名 あぜに同じ。古事記「營田の—はなち」

あ [足]名 あしに同じ。萬葉集「—の音せず行かむ」「駒の—掻き」「—立」

あ [吾]代 われに同じ。古事記「—は天照大御神の弟なり」「—が君」「—妻」

—が-ほとけ [—佛]代 己の尊び敬ふ人をさしていふ。竹取物語「—何事思ひ給ふぞ」「ふ稱

—が-おもと [—御許]代 婦女を親みて呼

あ [彼]代 あれ。かれに同じ。萬葉集「—はと雲井に見し月の近き今夜は」「—といふ」

あ [唯]感 應答の聲。あい。はい。禁秘御抄「女房

あ [嗟]感 ああに同じ。盛衰記「—射たり射たり」

あ [亞]名 一 背の曲りて醜き姿。二 木のまた。樞。三 つぎ。第二位。蜀志「諸葛亮管蕭之—」「—聖」四 すくなし。化學上化合成分の割合の少きを表すに用ゐる語。「硫酸は硫酸に比し酸素の割合少し」五 アの音の借字。「露西細—」「—ケルト語」「英邦土の義」の借字。

あ [啞]名 おし。おふし。戰國策「豫讓呑炭爲—」六 惡・堊に通じ用ゐらるゝ時は音アグ。

あ [阿]名 一 なか。大陵。司馬相如「順—而下」—巒三其音」「—生」「盲—」二 くま。曲隅。禮記「採薇山—」「淵—」三 きし。水崖。穆天子傳「天子飲三河水之—」「水—」四 むね。のき。「四—」五 美なる貌。詩經「隰桑有—」「—」「—嬌」六 おもねる。「曲學—世」「—諛」七 依賴す。「—毋」「—保」八 人を呼び又親しみて言ふに冠らする語。「吳下—蒙」「—兄」九 アの音の借字。「—字觀」「—修羅」十 論理學上の全稱肯定命題の符號。十一 (佛) 悉曇十二韻の一。又五十字母中の一。無・非・不の三義あり。轉じて眞言宗にては一切諸法の本體とす。大日經疏「—字是一切法教之本」方丈記「額に—の字を書きて緣を結ばしむるわざをなむせられける」

あ [阿]接尾 アミ(阿彌)の略。「頓—法師」

あ [阿]支那の山東省泰安府東亞縣の地。戰國時代田齊の地に屬せり。

アーク-とう [—燈 Arc-lamp.]名 電燈の一。二本の炭素棒を對向せしめたる裝置の物にして此等の棒の兩尖端を平行に接觸せしめ之に強き電流を通じて後少しく其の兩尖端を引離す時は白色の火花は弧狀をなして間隙を飛び兩尖端は二千度以上に熱せらる。此強き光熱の爲に炭素棒の兩尖端は漸次消耗するを以て之に調整器を附し自働的に其間隙を適當に保たしむ。公園停車驛等に多く用ゐらる。弧光燈。弧燈。

(アークとう)

アーク-ライト [Arc-light]名 前に同じ。

アーチ [Arch.]名 一 煉瓦・石材・鐵材・木材等にて窗・入口・門等の上部を曲線形に積み立てたる構架の稱。せりもち(迫持)。二 祝賀歡迎の時などに建てらるゝアーチ型の門。絲葉にて包まれ花にて飾らる。綠門。

—がた [—型]名 半圓形。弓形。櫛形。

—リング [—ring.]名 土木學上アーチの迫持に屬する部分をいふ。拱輪。穹窿卷。

アード-ウルフ [Aard-wolf.]名 (動) 毛色・鬣(ハイエナ)狗に形狐に似て穴居するもの。南米に產す。

アート-タイプ [阿膠版 Arto-type.]名 寫眞

版の一。重クローム酸と膠との混合物を硝子板或は金屬板に引きて製したるもの。

アード・バーク〔Aard-vark.〕名(動)食蟻獸の一種。齒を有するもの。南アフリカに產す。

アートマン〔Atman.〕名(梵)心の本體卽ち靈魂の實體を呼びし語。佛敎の「我」是なり。

アーマチュア〔發電子 Armature.〕名軟鐵の針金の一束より成り、其周圍に數多のコイルを卷きたるものにして中央に軸あり、之を强き磁石の兩極間に置きて廻轉せしむれば感應電流を生ずるなり。

アームストロング・はう(ハウ)〔安式砲 Armstrong gun.〕名西曆千八百五十四年英國人アームストロングの創案に係る大砲。同名の會社は漸次改良を加へて盛に製造す。通常砲と速射砲との二種あり。

〔**アーメッド**〔阿合馬〕〕㊀元代の宰輔、回紇の人、至元年中平章政事と爲る。上を罔みし、下民の田宅を侵す。益都の千戶王著憤怨遂に之を殺し、身亦刑に死す。㊁キプチャク(欽察)の汗、公使の殺されしを憤り、千四百八十年露國(イヴァン三世)とオカ河に戰はんとして退き十六世紀の初に至り死す。

アーメン〔Amen.〕感基督敎にて祈禱の終りに唱ふる語。誠實、確實又甘諾の意義を有するヘブライ語なりといふ。

アール〔Are.〕名メートル法の地積の單位。十米平方卽ち我國の三十坪二合五勺。

アールヤ〔阿略(阿利耶)〕名(佛)(梵)四諦に通曉せる者に與へたる尊稱。聖又は尊者と譯す。

あーあ〔啞啞〕名副㊀鳥の啼く聲の形容。李白〔歸飛—枝上啼〕㊁小兒の語る貌。蘇軾〔小兒—語三繡帳〕又あくあくを見よ。

あーあ〔哇哇〕名副㊀小兒の聲の形容。歐陽修〔兒曹助ゝ噪聲—〕㊁笑ふ貌。元包恒〔言唯々笑—〕

ああ〔如彼〕副㊀あのやうに。あれの通りに。〔—言ふ人〕〔—する〕—言へばかう言ふ。㊁容易に人の言に從はずして彼是と抗辯するをいふ。㊂彼も是も不可なりの意にて、何れとも決定せざるをいふ。

ああ感歎美・悲哀・驚嘆・恐怖等の感情を表す時に發する聲。あ・あな・あはれ・あら等皆同じく同訓の漢字も又頗る多し。其意義の輕重、用法の異同等次條を見て推知すべし。〔嗚呼〕嗚は憂歎、呼は喚發の聲にしてもとは憂悲にのみ用ゐられしが今は歎美にも哀傷にも悲痛にも總べてに通じて用ゐらる。音調は平長。サテモサテモといふに當る。禮記〔—哀哉尼父〕〔—盛哉〕

—有吳延陵季子墓。(ヨウゴエンリクキシノハカ)春秋の代の吳の季札の墓碑、江蘇省丹陽縣にあり。楠公の墓碑此に本づくといふ。

—忠臣楠子之墓。(ナンシユウシンノハカ)元祿四年水戶侯德川光圀卿楠木正成の誠忠を追慕して建てられたる墓碑。表面の文字自筆にかゝる。神戶市湊川神社境內にあり。

—老矣是誰之愆。(レイノアヤマチゾレタ)句ああ我既に老いて得るところなし、是唯自己の勉めざるのあやまちなりと言ひて後悔したる意。

—是豈一朝一夕之故哉。(ヒコレイツテウイツセキノユエナランヤ)ああ眞に之は僅の間に成立つべきものに非ずの意

〔噫〕憤激の聲にして哀痛・悲痛の時に用ゐらる。音調は急切。エエ・ハッアといふに當る。論語〔—天喪ゝ予〕〔—悲哉〕

〔於戲〕歎美の時に發する聲にして今は主として莊嚴なる場合にのみ用ゐらるれども、古は必ずしも然らざりしなり。周書〔—前王不ゝ忘〕〔—惜哉〕嗚嗚於皇・猗與等も之に同じ。

〔於乎〕嘆息の聲。詩經〔—小子未ゝ知三臧否二〕於虖も之に同じ。

〔嗟〕感發の聲にしてコレハコレハといふに當る。喜賞にも悲嘆にも用ゐらる。詩經〔—我懷ゝ人〕嗟嗟・嗟乎・嗟夫・于嗟等も之に同じ。

〔嗟乎有ゝ故也〕〔嗟夫使三六國一各愛三其人一則足三以拒ゝ秦〕(發語にも用ゐらる)〔于嗟麟兮〕

〔嘆〕心肝に徹して腹の底より出る聲にして眞に悲む時に發するキイといふに當る。史記〔其妻曰—子毋三讀ゝ書遊說一安得三此辱一乎〕譜も同じ。莊子〔—善哉技蓋至ゝ此乎〕

〔咳〕怨恚の聲にして怒り罵る時に發するチーイといふに當る。史記〔—豎子不ゝ足三與謀二〕

〔吁〕心中に疑ひ怪むことある時發する聲。サリトハといふに當る。史記〔—君何見之晚也〕

〔啞〕何ともいふことのできぬほど呆れたる時に發する聲。アアといふに當る。韓非子〔—是非二君ゝ人者之言一也〕

〔咨〕人を呼びかけて依賴し相談するが如き心を持ちて發する聲。堯典〔—四岳士〕

〔惡〕驚嘆の時に用ゐられコレハシタリ何事ナゾといふに當る。莊子〔—惡可〕

ああしや・こしや感㊀人をあざけり笑ふ意の語。古事記〔—こはあざなふぞ〕〔る士司の名。

〔**アアン**〔阿安〕支那の四川省松潘廳附近にあ

ああら感㊀あらの延言にしてあらより强き意を表す。〔—怪しやな〕やあ。おや。

あい名土器の名。かはらけの小きもの。

あい〔鮎〕名(動)あゆの轉訛。

あい〔愛〕名㊀かはゆく思ふこと。いつくしむこと。情愛。戀愛。〔—に溺る〕〔慈—を垂る〕㊁したふこと。愛慕。㊂あはれむこと。〔憐—を加ふ〕㊃大切に思ふこと。恩愛。㊄めづること。をしく思ふこと。愛好。〔—を割く〕㊅(佛)卑しき意に用ゐらるゝ時は名譽・福利・酒色等を貪ること。〔貪—〕又十二因緣の一。其條を見よ。㊆基督敎にては神の基督を人間の贖罪主としたる大慈大悲をいふ。

—に愛持つ。(モ)(いずれも愛嬌ある意。李商隱〔—蓋堅〕—蓋三和一〕

〔はいはいと—女子ども〕「蓋堅」

十を割く。句めづる心をさきて去る意。劉〔—〕

十多則憎至。(ソウイケルバ)句〔可ゝ愛さ餘つて憎さが百倍〕といふ諺に同じ。

—及三屋烏一。(ヲクウ)后その人を愛するあまりその人の物をも愛する意。(ゾウ)後漢〔愛三其人一者愛三其餘背二僮僕一〕

屋上之烏憎三其人一者惡三其餘背二僮僕一〕

あい〔哀〕名㊀あはれみ。かなしみ。あはれみいたむこと。かなしみなげくこと。〔—を請ふ〕㊁喪。〔—に居る〕〔—衣〕

—を擧ぐ。句貴人の薨去を悲み聲をあげて泣くをいふ。繼日本紀〔慶雲四年六月辛巳、天皇崩。遣詔擧ゝ哀三日、凶服一月〕

あい〔埃〕名數學上塵の十分の一をいふ。

あい〔唯〕感㊀人に呼ばれたるに答ふる聲。はい。(コヽヤ)

—は紺屋に御座いやす。句前のあいをあぬ(藍)に掛けてかく言ひあいと返事せし人を欺く小兒の戲語なり。

あい・あい〔埃壒〕名ちりほこり。塵埃に同じ。西都賦〔軼三一之混濁一〕あいがい。

—之外。句浮世の外。世外に同じ。

あい・あい〔哀哀〕名副いとほしき貌。なげかはしき貌。詩經〔—父母〕〔—禁ぜず無情の涙〕

あい・あい〔藹藹〕名副㊀山林の盛に繁茂せるをいふ。轉じて盛多の貌。濟濟に同じ。詩經〔—王多吉士〕㊁香ふ貌。詩經〔懷三椒聊一之—〕〔—氣分のうちとけたる貌〕〔和氣—として〕

あい・あい〔靄靄〕名副㊀雲霞などの集りたなびく貌。陶潛明〔停雲—時雨濛濛〕㊁情緒のこまやかなること。〔—たる墓情〕

あい・あい〔曖曖〕名副暗き貌。晏子春秋〔星之昭昭不ゝ如三月之一〕

あい・あい〔皚皚〕名副雪の長くたなびく貌。雲のさかんなる貌。顧況〔—排三空青一〕

アイアイ〔Aye-Aye.〕名(動)擬猴類に屬する獸。容貌體軀共に猫に似たり。四肢皆手にして殊に前手の五指細長く蜘蛛の如きを奇なりとす。マダガスカルに產す。

あい・あし名(植)「小草。」うしのしっぺい屬の一種の

あい・いく〔愛育〕名かはゆがりてそだつること。北史〔宏七歲而孤、爲三兄泉之所一—一〕

あい・いん〔哀音〕名あはれを催すなげきの聲。力なき聲。悲鳴。李白〔垂羅霧鮫揚一—一〕又あいおん。

あい・えい〔欸曳〕名人の言ふに對へて、然り然りと應ずること。唯々諾々。又其の聲。

あい・えつ〔哀咽〕名かなしみむせぶこと。陶潛〔重三惟痛恨一言增一—一〕

あいえん・きえん〔愛緣機緣〕句(佛)愛の緣あれば愛し、機(活動心機)の緣あれば發するにて卽ち合ふも合はぬも緣によるといふ意。自然

の緣夫婦の緣・不思議の緣などをいふ。又一に合緣奇緣にも作る。

アイオーユー〔I. O. U.〕名(商) I owe you. の略にして借用金證書をいふ。

アイオンバーク名(植)ゆうかりの一種。木質堅牢にして建築に供せらる。濠洲に產す。

あい-か〔哀歌〕名 ㊀悲哀の心を詠じたる歌。哀傷歌。㊁舊約聖書中の書篇の名。

あい-か〔靄霞〕名はるがすみ。たなびけるもや

〔あい-が〕〔靉河〕遼東半島にある河。鴨綠江に入る。

〔あい-が〕〔埃雅〕江戸の俳人。通稱井上長兵衛

〔あい-がい〕〔靄崖〕文人畫家高久徵の號。

あい-がい〔隘害〕名 要害よきところ。東京賦「守レ位以レ仁不レ恃二一」

あい-かう(ワウ)〔隘巷〕名 せまき小路(コウヂ)。史記「棄二「之一」」

あい-かう(ワウ)〔愛好〕名 すきこのむこと。南史「郡有二名山水一靈運素所二一遂肆レ意遨遊」

あい-かう(ワウ)〔愛幸〕名 めでかはゆがること。寵愛すること。寵幸。史記「得二定陶戚姬一」

あい-かう(ワウ)〔哀硬〕名 かなしみのため其聲のむせぶこと。すゝりなきすること。南史「左右莫レ不二一」

あい-がう(ガウ)〔哀號〕名 かなしみて泣きさけぶこと。

あい-がう(ガウ)〔哀歗〕名 かなしみて泣きさわぐこと。手引「一墮弓矯」

あい-がく〔哀愕〕名 かなしみおどろくこと。魏志「臨レ時一莫レ不二傷痛一」

あいがくろく-ぶんこ〔愛岳麓文庫〕大久保西山翁(忠寄)の文庫。江戸愛宕山下にありしが故に此名あり。

〔あい-か-の-こほり(オリ)〕〔秋鹿郡〕出雲國の一郡。秋鹿日女命の鎭座あるにより郡の名とす明治二十九年八束郡に合せらる。

あい-かふ(カウ)〔愛狎〕名 このみしたしむこと。南史「上亦一二一之」

〔あい-かふ-の-こほり(アイコオリ)〕〔愛甲郡〕あゆかの。「はのこほりを見よ。

あい-かん〔愛看〕名 非常にかはゆがること。

あい-き〔愛姬〕名 貴人の寵愛する美人。

あい-き〔靉氣〕名 雲霧などに蔽はれ明かならざること。海賦「彷二彿其色一」二一其形一」

あい-きふ(キウ)〔哀泣〕名 かなしみなくこと。傷泣。後漢書「若二一之容一」

あい-ぎ〔愛吟〕名 平生好みて詩歌を吟誦すること。又其詩歌。愛詠。

あい-ぎ〔哀吟〕名 悲哀の情を詠じたる詩歌

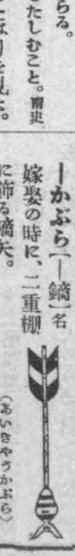
あい-きやう(キヤウ)〔鰹鄰〕名 ㊀產卵期の鮎の腸を拔取りよく洗ひて其中に鮎の卵に食鹽を混じたるものを詰めて[illegible]漬とし數日後洗ひて生干にしたるもの。其[illegible]食ふべし。近來又鮎粕漬の原料とす。㊁年を越はたる鮎。[illegible]

あい-きやう(キヤウ)〔愛鄕〕名 我鄕里を愛す[illegible]と。「一の念深し」「一心」

あい-きやう(キヤウ)〔愛嬌〕名 ㊀人[illegible]きのよきこと。かはゆげのあること。人の愛をひく容貌言語・擧動。「こぼるる程の一あり」「一をふりまく」㊁俳優が花道に出で中程に停まり看客の方へ向ひて睨むこと。「一をくれる」

一あばた〔一痘痕〕名 あばたのあるが爲に却て愛嬌のあるやうに見ゆること。

一かぶら〔一鏑〕名 嫁娶の時に、二重棚に飾る鏑矢。


(あいきやうかぶら)

一げ〔一毛〕名 顏に愛嬌を添ふる後れ毛。

一び〔一日〕名(商)手形の滿期日後支拂の猶豫をなす日數。恩惠日。

一べに〔一紅〕名 俳優の耳朶に塗りたる紅。

一ほくろ〔一黑子〕名 却て愛嬌ある樣に見ゆるほくろ。

一まもり〔一守〕名 婚禮の時、新婦の襟に掛くる守袋。古は胸にかけたり。けいあいまもり。

一もち〔一餅〕名 結婚後三日目に搗きて舅姑に贈る餅。みかのもちひ。

あい-きやう(キヤウ)〔愛敬〕名 ㊀あいきやうに同じ。枕草紙「一なしと言葉品めきなと言へば言はるる人も聞く人も笑ふ」

一あいぜん〔一愛染〕名(佛)愛染は眞言宗にて奉する明王の一。此明王に祈禱するものには其身に愛敬・柔軟の相貌を授くとあるより成語となれる也。

一さう(ソウ)〔一相〕名 ㊀愛敬ある相。㊁(佛)三十二相の一。柔軟なる心を容色に現し他の德を害することなく溫和なる惠を施す態度をいふ。榮華物語「一のさうは齒のひかりにあり」

一づく〔一付〕自動カ四 かはゆらしく見ゆ。人づきよくあり。名古屋物語「ふくらかに一きたまへり」

あい-きよう〔哀矜〕名 かなしみあはれむこと。論語「如得二其情一則一而勿レ喜」

あい-きよく〔愛玉〕名 他人の女を呼ぶ敬稱。類書纂要「稱二人女一曰二令愛一又曰二一」

アイク〔阿育〕名(佛)樹の名。無憂と譯す。教主釋尊此樹下に降誕せられしにより有名となる阿輸迦。

一わう(ワウ)〔一王〕アショカわうを見よ。

一タフ(ワウ)〔一塔〕名 阿育王の罪を償はんが爲に立てられし八萬四千の塔をいふ。

あい-く〔隘衢〕名 せまき道路。ろぢ。

〔あい-ぐん〕〔愛琿〕滿洲黑龍江の右岸にあり。清の咸豐八年(西曆一八五五年)此地にて露國と兩國境界條約を締結せり。黑龍江城

あい-くる-し〔愛苦〕形二(詩)最も愛らしくして其愛敬のこぼるゝばかりなるをいふ。

あい-くわつ(クワツ)〔愛活〕名 めぐみいかすこと。顏氏家訓「儲二積器用一二一黎民一」

あい-くわん(ンカ)〔娃鬟〕名 娃は美女、鬟は總髮、盛裝の美人をいふ。蘇仙畫「垂綺一更轉語」

あい-ぐわん(ンガ)〔愛玩〕名 めでもてあそぶこと。祕藏すること。愛翫。成公綏「鸚鵡小禽也以二其能言一解レ意故爲二人所一一」

あい-ぐわん(ンガ)〔哀願〕名 情實をうち明してあはれみを請ふ如き切なる願。なげきて願ふこと。哀請。哀訴。

あい-けい〔愛惠〕名 いつくしみめぐむこと。恩惠。徐陵「一以撫二孤貧一」

あい-けい〔愛敬〕名 いつくしみうやまひたふとぶこと。孝經「一盡二于事一親而德教加二于百姓一」

あい-けう(ケウ)〔愛嬌〕名 あいきやうに同じ。

あい-げう(ゲウ)〔愛樂〕名(佛)信愛樂欲の義。親しみ好む心なり。主として信仰上の心地をいひ現はすに用ゐる語。

一ぶっぽふ(ブツポウ)〔愛樂する意。

あいけふ(ヨウ)〔隘陋〕名 せまきこと。史記「迫二區中一」号舒節出一平北堰一」

あい-けん〔哀眷〕名 あはれに思ひてめぐむこと。杜甫「上天回一一」

あい-こ〔愛古〕名 古の道を愛すること。好古。北史「下レ帷讀レ書篤レ志一」

あい-こ〔愛顧〕名 なさけをかくること。ひきたて。ひいき。樂毅「豈一之隆、使二擊仰之情深一耶」御一を蒙る

あい-ご〔愛護〕名 ㊀大切にまもること。顏子家訓「借二人典籍一皆須二一一」㊁芝居にて用ゐる鬘の一種。愛護の若に扮せる場合に用ゐ始めしより名とす。

一のわか〔一の若〕名 御伽噺の一。二條藏人の子愛護の若といへる美少年繼母に戀慕せられしかば叡山に逃げ叔父を訪ふ、叔父怪みて會はず、遂に瀧に投じて死にたりといふ憐なる物語なり。

あい-ご〔註誤〕名 言葉巧みに言ひなして惑はすこと。史記「趙代吏人爲二稀所一一一刼略者皇帝一」敕レ之」

あい-こう〔隘口〕名 せまき入口。

〔あい-こう〕〔哀侯光〕春秋戰國晉第十三代の君にして、鄂侯の子なり。「定公の子なり。

〔あいこう〕〔哀公將〕春秋戰國の魯の君にして

あい-こく〔愛國〕名 自國を愛すること。自己の生國又は所屬國を大切に思ひて心を盡すこと。戰國策「明主愛二其國一」日本紀「朕嘉二厥尊レ朝一レ一寶レ己顯二忠心一」

一しん〔一心〕名 自國を大切に思ふ心。(心)國民を國家に連結し以て其存續と發展とを圖らしむる原動力となる情操。

〔あいこく〕〔愛國〕禪僧洞撥の號。

あい-こく〔哀哭〕名 かなしみて泣きさけぶこと。

あいこく-しや〔愛國社〕明治八年板垣退助同志の士と組織せし團隊、國會開設請願の爲に力を盡せり。

あいこく-ふじんくわい(シフジン)〔愛國婦人會〕明治三十七八年戰役の際、奧村五百子の組織せし婦人會、女子に勤儉を勸め國本を養ひ戰死者の遺族を救護するを目的とす。

あいこ-しゆぎ〔愛己主義〕Egoism〕名 利己主義に同じ。

あい-こん〔哀恨〕名 かなしみうらむこと。温睡「—自咎、五情摧隕」

あいころ名(動) はぜの類。「別號。

(あいごろ〔愛吾廬〕備前の儒者鴨井熊山の

あい-さ〔秋沙〕名(動) ㊀あきさに同じ。あいさ鴨ともいふ。㊁うぐひ〔石斑魚の異名。

あい-さ〔哀嗟〕名 かなしみなげくこと。唐書「—二—道路、涕二墓里隣二」

あい-さう〔愛想〕名 ㊀もてなしぶり又は應對ぶりのやさしくして人すきのすること。「—の好き人」㊁もてなし。饗應。「何の—もなく」㊂かはゆく思ふこと。よしみ。愛情。「—が盡きる」あいそ。

—づかし〔—盡〕名 ㊀人をもてなすに愛情を捨てゝすげなくすること。「—をする」㊁絶交。よしみを絶ちて其人を罵る言。「—をいふ」あいそづかし。

—なし〔—無〕名 人づきわるきをいふ。「る。

—が盡きる。句 かはゆげがなくなる。いやになる。

—を盡かす。句 愛情をなくす。あいさうづかしをなす。「皆—して對手にせず」

あい-さつ〔挨拶〕名 ㊀字書に挨、推也。拶、逼也。とありて多人數の互に推し合ふこと。晉長康〔登二封泰山一其時士庶相—〕㊁禪錄に一挨一拶とあるは問答の語機をいふなり。此より轉じて應對・應答・返辭・答禮・辭令・時儀などをいふ。「—をなす」「—に行く」㊂㊃兩人の間の關係。交際。長町女腹切〔かたりめが—はらりしやんと切つてしまひ〕㊃㊄仲裁。

—にん〔—人〕名 ㊀挨拶に出る人。㊁仲裁「人。

—は時の氏神。諺 喧嘩口論の際、仲裁人を氏神の如くありがたく思ひて萬事其意に從ふべしとの意。「する意。

—より闘札。諺 虛禮よりも實益を得んと欲

あい-さん〔愛餐〕名 古代基督教徒の會食の稱。聖餐式後貧者と共に供物を食するをいふ

あい-ざん〔愛山〕名 山を愛すること。蘇賦「—如レ愛レ色」

(あいざん〔愛山〕伊豫の儒者武知方獲の號。

あい-し〔哀詩〕名 ㊀悲しき事を詠じたる詩。㊁人の死を弔ふ詩。

あい-し〔哀史〕名 悲しき事實の歷史。かなしき身の上ばなし。「〔諸子中—最篤〕唐書

あい-し〔愛視〕名 いつくしみあしらふこと。

あい-し〔哀子〕名 親の喪中に在る子。

あい-し〔愛子〕名 かはゆき子。いとしご。宏禮物語「父母が—として一生ひとり子なり」

あい-じ〔愛兒〕名 前に同じ。

あい-じ〔挨次〕名 順序を立てゝ並ぶこと。

(あいしう〔愛州〕安南清華府の地。

あい-じつ〔愛日〕名 ㊀冬の日。左傳「趙衰冬日之日也」の註「冬日可レ愛」とあるに出づ。長日の對。柴華物語「—曖可レ謂二天地和合一」㊁光陰を惜むこと。大載禮「君子—以學」㊂孝子(日を愛みて孝養するが故なるべし)孝子法言「孝子—レ—」「の號。

(あいじつさい〔愛日齋〕熊本の儒者古屋鼎

—ずねひつ〔—隨筆〕愛日齋の論語の註釋書。寫本五冊。

あいじつせいろ-ざうしよし〔愛日精廬藏書志〕宋・元の舊槧及び鈔帙の實學に關するものを載せたる書。三十六卷あり。清の張金吾の撰。

(あいじつろう〔愛日樓〕佐藤一齋の號。

—ぶんし〔—文詩〕一齋の詩文集、四卷。

アイじ-てつ〔I字鐵〕名 鋼鐵又は錬鐵を展伸して作りたる鐵桁。其横斷面I字形をなす

あい-しふ〔愛執〕名(佛) 愛は貪愛の愛にして其の好むところに心の繫縛せられて自由ならざるをいふ。源氏物語「—の罪をはるかしきこえたまひて」

あい-しん〔愛心〕名 かはゆく思ふ心。禮記「其—感者其聲噍以殺」

あい-しん〔哀心〕名 かなしむ心。「感者其聲和以柔」

あい-しん〔愛親〕名 親を愛すること。孝經「—者不敢惡二于人一」

あい-しん〔挨枕〕名 うつこと。列子「攘拯—」

あい-じん〔喝人〕名 喝は心中の熱、心熱の人をいふ。「嚇ふ。

—柳下に陰を借る。句 人のおかげを受くるに

(アイ-シンギョロ-し〔愛親覺羅氏〕清國帝室の姓。通古斯種に屬すれば靺鞨の後裔にして宋代の金と同種族なり。世々寧古塔の南西に居りしが、十五世紀の半頃、興京に移りて部落盛となる。奴兒哈赤に至りて清朝を起す。(清太祖を見よ)

アイジン-グラス〔魚膠 Isin-glass〕名 魚類の浮囊の內側より製したる膠の一種。粘力弱く且高價なるを以て食用のほか葡萄酒などの飲料を澄明にする爲に用ゐらるゝのみ。

あい-しや〔隘舍〕名 せまきいへ。小屋。

あい-しやう〔愛奬〕名 人材を愛して取立つること。唐書「李華—二—士類一名隨以重」

あい-しやう〔哀傷〕名 ㊀人の死にたるをかなしみいたむこと。哀悼。哀痛。㊁歌の部類分けの名稱の一。「の歌。

—か〔—歌〕名 ㊀死を弔ひたる歌。㊁辭世

あい-じやう〔愛情〕名 ㊀かはゆく思ふ心。あはれに思ふなさけ。愛念。㊁(他)其對象となれるものゝ存在・快樂・幸福等を喜び其滅亡・苦痛・不幸等を悲む情。

あい-じやう〔哀情〕名 かなしきおもひ。議武帝「歡樂極兮—多」

あい-じやく〔哀惜〕名 人の死をかなしみ、をし「むこと。

(あいじやくけん〔愛雀軒〕柳亭種彥の號。

あい-しゆ〔愛酒〕名 酒を愛すること。孝白「天若不レ—レ—酒星不レ在レ天」

あい-じゆつ〔哀恤〕名 あはれみいたはること。

あい-じよ〔諂如〕名 多くして盛なる貌。和氣の充滿せる貌。

あい-しよう〔愛誦〕名 日頃好みて讀みそらんぜること。又其書。

あい-しよう〔哀拯〕名 あはれみて たすくること。

あい-す〔愛〕他動サ變 ㊀かはゆく思ふ。いつくしむ。「子を—」㊁大切に思ふ。大事になす。「國を—」㊂したふ。戀ふ。「百人—レ之百人之吏也」㊃ねたむ。「錢を—」㊄かくす。詩經「—而不レ見」㊅めづ。たのしむ。「花を—」「山水を—」㊆このむ。「酒を—」「旅行を—」

—して見れば畏缺も醫と見える。諺 深く愛する心より見れば如何なる醜き者にても唯美しとのみ思はるゝをいふ。

—而忘二其醜一。句 深く愛すればみにくきところには少しも氣付かざるをいふ。所謂目がなくなるをいふなり。呂氏春秋「陳侯謂二用醜人敦治一人評曰陳侯—」

—而知二其惡一。句 愛に溺るゝことなく其人の惡しきところを見わくるをいふ。

賞レ所レ—而罰レ所レ惡。(ニスルトコロヲシヤウシ)句 偏頗なる處置をなすことをいふ。史記「庸主—明主不レ然」

(あいす-かう〔愛子江〕佛領安南順化府

あいすかげ-りう〔愛洲陰流〕名 室町時代の末年愛洲惟孝移香)の創めたる劍術の流派

アイス-クリーム〔氷菓子 Ice-cream.〕名 一種の食品。製法はまづ牛乳四合に香料と砂糖(三十匁程)とを加へて沸しこれに鷄卵(五個)の黃身を混ぜ合せて冷水に浸し次に其汁を氷菓凝結罐內に移し之を桶の中に入れ桶と罐との間に氷片と食鹽とを詰め罐を急速に廻轉し時々罐內を篦にて攪きまぜて凝結せしむるなり。

(あいず-じやうし〔愛洲城址〕伊勢國度會郡にあり。愛洲氏の居城たりしが天正年中親房と戰ひて城陷り廢城に歸せしが天守臺壕壘等の跡尙歷然たり。

あい-せい〔哀請〕名 あいぐわんに同じ。

あい-せい〔愛婿〕名 かはゆきむこ。

あい-せき〔哀戚〕名 かなしみいたむこと。哀傷。

あい-せき〔哀惜〕名 あいじやくに同じ。

あい-せき〔愛惜〕名 ものをだいじにしてをしむこと。愛吝。杜甫「樹木猶爲レ人—」

(あいせき〔愛石〕畫僧なり。紀州の人。畫を野呂介石に學ぶ山水を畫くに水墨淡彩共に巧みなり。世に師の介石と長町竹石と竝び稱して三石といふ。

あい-せふ〔愛妾〕名 氣に入りのめかけ。おもひもの。

—馬に換ふ。後魏の曹彰美妾を馬主に與へて駿馬に換へたること獨異志に出づ。「の東北にあり。

あい-せん〔愛穿〕名 衣裝好みをすること。

あい-せん〔愛染〕名 ㊀(佛)愛染明王の略。㊁

愛染隈の略。

—ぐま〔—隈〕名 役者の顔の隈取の一。愛染明王に扮する時に用ゐしより此の名あり。

—ごくわう〔コウ—〕〔—後光〕名〔佛〕愛染明王に付くる後光。形圓く地赤く周圍に火焔あり。

—はうタフ〔ホウ—〕〔—寶塔〕名〔佛〕愛染明王を奉祀せる塔。

—ほふ〔ホウ—〕〔—法〕名〔佛〕眞言宗勤修寺派の極祕法にして愛染明王を本尊として息災・增益・調伏等を祈るもの。

—みやうわう〔ミヤウ—〕〔—明王〕名〔佛〕明王の一。もと印度の神。後眞言密教中の神となる其身は赤色にして頂には獅子冠を戴き其冠上に五鈷を飾る。三目を有せる顏面には威怒の相を示し六臂卽ち左右三雙の手には蓮華・弓・箭・寶鈴・五鈷等を把りて諸種の寶を吐出せる寶瓶上の赤蓮華に坐せり。

（うわうやみんぜいあ）

—ほふ〔ホウ—〕〔—法〕名〔佛〕愛染明王を祭る法。天台宗にては此法を以て六祕法の第四に數へ、眞言宗にては之を修して害毒消除の法となす。

あい・ぜん〔偃然〕名 彷彿たる貌。ほのかなる貌。〔謝靈運〕祭之日入レ室—必有レ見二乎其位一

あい・ぜん〔靄然〕名 樹木のしげれる貌。さかんなる貌。心氣のやはらぎたる貌。「和氣—」

あい・ぜん〔靄然〕名 雲のたなびく貌。もやなどのかゝれる貌。うすぐらき貌。

あいぜん・がら〔名動〕やまがらの類。雄は赤くして黃ばみ、雌は黑くして赤みあり。

あい・そ〔愛想〕名〔俗〕あいさうに同じ。

—づかし〔—靈〕名 あいさうづかしに同じ。

—もこそも靈きはてる。〔愛想の盡きる意にて「こそも」に別に意味なし、唯かく重ねて言ひ口調を好くせるなり。

あい・そ〔哀訴〕名 ㊀あいぐわんに同じ。〔杜甫〕「見レ人慘憺若二—一」㊁〔法〕舊治罪法の申立手續の方法。現行刑事訴訟法には無し。非常上告及び再審等に類似するもの。

あい・そ〔哀楚〕名 かなしみいたむこと。〔法苑珠林〕〔同志酸傷、交明—〕

（あいそう〔哀宗守緒〔寧甲速〕〕金九代の帝にして完顏氏宣宗の三子なり。もと守禮と云ひ又三大王と名く。帝性仁慈、學博く才に富み、銳意國安を圖りしと雖も、時既に金勢衰へて復た振はず、蒙古宋と連合して來り攻むるに及び大敗し帝は自縊して崩ず。在位十年

あい・ぞう〔愛憎〕名 いつくしむとにくむと。〔杜甫〕「群言或起二于—一」

—之至〔シ—〕變。〔禮記〕〔彌子之行、末レ變二於利一也〕

あい・そん〔愛孫〕名 特にかはゆがる孫。

あい・たい〔靉靆〕名 ㊀雲の盛なる貌。雲霞のたなびく貌。疊りて暗き貌。〔海獸〕「—雲布」「彩雲—」㊁老眼鏡をいふ。〔詞天清話〕「—老人不レ辨二細書一以レ此掩レ目則明」

あい・たい〔曖昧〕名 おほはれてくらきこと。〔芝蘭〕「—其隣莽兮」

あい・だい〔欸乃〕名 あいないに同じ。

あい・たう〔ウト〕〔哀悼〕名 死をいたみかなしむこと。〔蔡邕〕〔永懷二—一〕「—の意を表す」

あい・たか〔名動〕あじさしに同じ。

あい・たし・ゆき〔愛他主義 Altruism.〕名 他人の幸福を增進することを行爲の標準とする主義にして自己の快樂利益も他人の幸福の中に見出すべきものなりとす。利他主義。利己主義の對。

あいだち・なし〔間斷無〕形一㊁〔あひだちなしの音便〕〔俗〕わきまへなし。分別なし。〔源氏物語〕「—きものに思ひ給へるわりなしや」㊁わけへだてなし。差別なし。

あいだて・なし〔間斷無〕形一 前に同じ。

—い祖母そだち。〔靈〕あいだてないは無遠慮・無作法の意にして祖母の手に育ちし子の我儘に流るゝをいふ。「祖母育ちは三百文安い」といふも之に同じ。

あいたどころ〔朝所〕名 あいたんどころに同じ。

〔あいた・の・こほり〔オリ〕㊀〔秋田・飽田〕郡〕羽後國の一郡。明治十三年南北二郡とす。㊁〔英多〔英田〕郡〕美作國の一郡。

あいたん・どころ〔朝所〕名㊁中古太政官廳の中に在りし參議以上の者の食事をなせるところの名。朝食處。朝政所。〔延喜式〕「次參議以上着二朝食處一、少納言・辨・大夫等候レ之、廚家儲二酒饌一」

あい・だ・る〔愛垂〕自動ラ下二㊁〔俗〕あまゆに同じ。〔源氏物語〕〔なまめき—れてものしたまひし〕

あいたれ・をけ名 製鹽用の具。形體・用途共にあいをけに似たり。

〔あいち・けん〔愛知縣〕尾張・三河の兩國の全部を管轄す。縣廳は名古屋市にあり。

〔あいち・の・こほり〔カリ〕〔愛智〔愛知郡〕〕尾張國の一郡。「生無二賢愚一飄飄若二—一」

あい・ぢん〔埃塵〕名 ぢんあいに同じ。〔杜甫〕〔人

あい・ぢやく〔愛着〕名 かはゆしと深く思ひ込むこと。あいしふに同じ。〔維摩章〕「—の道其根深し」

—じひ〔—慈悲〕名〔佛〕他の境遇の悲しむべきを認め之を救はんとする慈悲の心の深くして厚きことをいふ。

—しやうじ〔ショウ—〕〔—生死〕名〔佛〕吾人の生活する境遇の生・老・病・死の免れ難きを悟らず常恆不易のものと思ひ無益の利を貪ること。

—の・あか〔—垢〕名 愛着心の爲に心汚れたるをいふ。〔墨水餘夏錄〕〔墨田の流水に—を洗ふ〕

—の・まよひ〔ヨイ—〕〔—迷〕名〔佛〕佛教にては萬有を解釋するに因緣假りに和合して物其形をなし因緣の盡きたるとき其形を存するとなければ生滅有爲無常となす、此理を知らざる凡夫はすべての物は常恆不變なりと思ひ此理に心を留めざるをいふ。

あい・ちよう〔愛重〕名 かはゆがり大事にすること。大切にすること。「〔漢書〕「—偏二于一人一」」

あい・ちよう〔愛寵〕名 いつくしみかはゆがること。

あ・いつ〔彼奴〕代㊁あのやつ。きゃつ。

あい・つう〔哀痛〕名 なげきいたむこと。〔哀辭之體以二—一爲レ主〕

あい・づかは・し〔ヅカ〕形二㊁あいきやうあり。おもしろみあり。〔禮記〕〔御笛の音も—く〕

アイッタ〔阿溪多〕名〔佛〕〔梵〕無能勝と譯す。彌勒菩薩の異稱。此菩薩の行力には能く超勝するものなきによりて此稱あり。

あい・つつじ〔山躑躅〕名 植。躑躅に似て小なるもの。四五月頃、淡紅色の花を開く。あきつゝじ。さつき。

（あいてい㊀〔哀帝欣〕前漢第十代の帝。劉氏定陶の恭王康の子。元帝の孫なり。㊁〔哀帝丕〕東晉第六代の帝。姓司馬氏。成帝の長子なり。㊂〔哀帝祝〕唐第二十代の帝卽ち最後の主。姓は李氏。昭宗の第九子なり。

あい・てき〔哀笛〕あはれに聞ゆる笛の音。〔蘇軾〕〔寒夜—曲、霜天斷雁聲〕

あい・てき〔愛溺〕名 愛に溺れて深入りをすること。

あい・どう〔哀慟〕名 かなしみなげくこと。〔梁書〕「思墓不三自堪一晝夜—」

あい・どく〔愛讀〕名 ㊀好みて讀むこと。「—の書」㊁常に座右に置きて讀む書。

アイドル・プレー〔Idle pulley.〕名 工場の機械の運轉中止中、機械に關係なく廻轉し得るしらへぐるま〔調車〕をいふ。あそびぐるま〔遊車〕。からぐるま。

あい・ない〔欸乃〕名 ㊀舟に棹さして相應ずる聲。㊁船歌の節をとる聲。㊂船歌。〔柳宗元〕「一聲山水綠」あいだい。㊃轉じてきこりの歌。〔白居易〕〔居士集〕「—認二歸樵一」

あいなうせう〔シヨウ〕〔蓋蘊鈔〕僧侶の故事及び和漢の事實五百三十六箇條を說明せる書にして僧行譽の著なり。

あいなえ名〔植〕小き草にして葉は對生し二三寸の莖の先に白き花を開くもの。

〔アイナガ〔愛納噶〕内蒙古杜爾伯特部の祖。

あい・な・し〔無間〕形一㊁あひなしの音便。〔枕草紙〕「書き集めたるを—く人のため便なきいひすぐしなどしつべき所々」

あい・な・し〔愛無〕形一㊁かはゆげなし。おもしろみなし。〔源氏物語〕〔上達部うへ人なども—く目をそばめつゝ〕

あいな・だのみ名㊁たのみがひなきたのみ。あてにならぬたのみ。〔源氏物語〕〔—はいと苦しくなんあるべけれど〕

あいな・の・さかえ〔敢無榮〕句〔敢無の榮の轉

か)はかなきさかえ。寸時の榮華などいふ意。

あいなめ[鮎並]名(動)あゆなめに同じ。

あい-にく[生憎]名(形)あやにくに同じ。「—留守なり」

アイヌ名 ㊀(アイヌ語)人類の義。㊁現今北海道及び樺太の邊境に部落をなせる土人の名稱。古昔蝦夷と稱し本州の北部に蔓延せし人種の後なり。髭鬚髯は多く且つ長く體毛の多きこと世界中稀に見る所とす。男女共に耳輪をつけ女子は口邊腕及び手の甲等に入墨をなす。アイノともいふ。「產する海藻。

—わかめ[—若布]名(植)北海道の沿岸に

—わさび[—山葵]名(植)北海道に產する草葉は羽狀の複葉をなし高さ一尺餘の莖の上端に四瓣の小白花を攢簇す。

あい-ねん[愛念]名 あいじやうに同じ。

あい-の-かた[愛の方](お相の方)家康の侍女。西鄕の局といふ。殊寵を受け秀忠・忠吉を生む。天正十七年歿す。年三十八。

あい-ば[愛馬]名きにいりのうま。

あいば-さう(ヤウ)名(植)あぶらがやに同じ。

あい-ばい[愛梅]名 梅を愛すること。王冕「平生—頗成ル僻踏ル雪行穿一雙展」

あい-ひ[靉靆]名 雲のさかんなる貌。雲のたなびく貌。木華「—雲布」「伏乞ニ—」

あい-びん[哀憫]名 かなしみあはれむこと。柳宗元

あい-ぶ[愛撫]名 なでさする如くかはゆがること。宋史「號令明白—ニ士卒ニ」

あい-ぶん[埃氛]名 ちりのたつこと。宋史「日甚—鬻ル空」

あい-べつ[鞋韈・鞵韈]名 鞋、鞵韈はたびにてくつしたをいふ。曆書「皆有ニ行膳—」

あい-べつ[哀別]名 わかれをかなしむこと。

あいべつ-りく[愛別離苦]名(佛)八苦の一。生死共に親み愛する人と別るゝ悲しさ苦しみ。榮華物語「—無去無來をはなれたまはず」

あい-ぼ[愛墓]名 親しき者に別れ其人をしたふこと。後漢書「故舊雖ニ行能與レ茂不ニ同、而皆—欣欣焉」

あい-ぼ[哀墓]名 かなしみしたふこと。南史「—禮レ盡」

あい-ぼく[埃墨]名 墨き色のほこり。油煙煤の如きもの。孔子家語「有ニ—ニ墮ニ甑中ニ」

[あいぼ-の-たき[秋保瀑]陸前國名取郡なる大瀑の別稱。

アイボリー[Ivory.]名 ㊀名刺などに用ゐる厚くして光澤ある西洋紙の名。㊁石鹼の名。

あい-まい[曖昧]名 ㊀薄暗きこと。明白ならざること。秦邕「觀ニ—之利一而忘ニ昭晳之害ニ」㊁事のはきとせぬこと。物のまぎらはしきこと。㊂うしろぐらきこと。「—をなす」㊃論推論に使用せらるゝ名辭或は命題の意義多樣にして明瞭ならざること。

—ど[—語]名 指す意義の漠として確定せざる語。

—にげんろん[—二元論]名(哲)通常人の有する世界觀にして物體と鐵魂との二元に由りて一切を說明せんとするもの。空漠二元論。

「題の意義を誤解するもの。

—の-びうろん[—謬論]名(論)論理學上命

—や[—屋]名㊃職業の明かならざる家。多くは祕密に賣淫婦をかゝへ置く家をいふ。ちごくや。だるまや。

あい-みん[哀愍]名 あはれみかなしむこと。あいびん。

「部の西北境の地。

[あいみん-けん[愛民縣]内蒙古阿嚕科爾沁

あい-む[靄靄]名 もや。きり。かすみ。

あい-む[埃霧]名 塵埃四方に立ちてもやの如く見ゆるもの。

あい-めい[哀鳴]名 かなしみなくこと。悲鳴。詩經

あい-めい[哀迷]名 かなしみまよふこと。「—擂レ(サイ)嬰」(かなしみ迷ひて心のちゞにくだけさくるをいふ。

「老子「—ニ—萬物一而不レ爲レ主」

あい-やう(ヨウ)[愛養]名 いつくしみやしなふこと。

あい-ゆう[隘勇]名 臺灣總督府の下にありて專ら生蕃を討つに備ふるもの。土民の壯丁を徵收して編成す。

—せん[—線]名 隘勇の生蕃を防禦するために張れる長距離に亙れる步哨線。

あい-よく[愛慾]名(佛)愛は事物に執着しその爲に心の羈絆せられて不自由となるをいひ、慾は貪りて飽くことを知らざる心をいふ。かはゆく

てはなれがたく思ふこと。今昔物語「たちまちに—の心發して」

—の-かは(ワ)[—河]名 愛慾は心の明を蔽ふこと深くして人を苦境に沈溺せしむるが故に之を河に喩へていふなり。又海に喩へて「—の海」ともいふ。文選の甘感傷世間沒ニ於—ニ—莫、甚ニ於色。(ハダシキハナシ)句 色は女色をいふ。愛慾中最も恐るべきは女色なりの意。

あい-らく[愛樂]名 いつくしみたのしむこと。詩經の註「—ニ—其賓客ニ」「喜怒—」

あい-らく[哀樂]名 かなしみとたのしみと。

あい-らし[愛]形ニ かはゆらし。いとし。可憐。和歌口傳「—くいたいけしたる體なり」

[あいりう-くわん(ヨウ)[隘留關]支那安南諒山府の北にあり。「喀。

あい-りん[愛吝]名 愛するあまりに惜むこと。愛

[あいりん-わん[愛倫灣]支那山東半島の東方、樹林角と其北東方三浬半なる馬他角との間にあり。水深くして船舶の碇繫に便なり。

あい-るゐ[哀誄]名 死者を悲みて生前の功德を稱述したるもの。晉書「尤善爲ニ—之文ニ」

あい-れん[愛蓮]名 蓮の花をめづること。

—せつ[—說]名 道學の宗師と稱せらるる周茂叔の作れるもの。其一節に「予獨愛ル蓮之出ニ淤泥一而不レ染、蓮花之君子者也」

あい-れん[愛憐]名 いつくしみあはれむこと。いとほしく思ふこと。史記「大夫亦—ニ—少子一乎」

あ-いろ[文色]名㊃㊀あやめに同じ。「—もわかず」㊁物のすがた。ありさま。朝顏日記「ものの—も水鳥の陸にさまよふかなしさは」

あい-ろ[隘路]名 ㊀狹き道。ほそき路。㊁(兵)橋梁谷道の如く兩側通過し難きもの。

あい-ろう[隘陋]名 せまくるしきこと。窮屈にしてきたなきこと。

あいろ-こいろ[彼此]名㊃こゝかしこ。こなたかなた。「常陸なる—の山越にて」

アイロン[Iron.]名 鐵製の火熨斗にして裁縫用具の一なり。訛りてアイヨンともいふ。主に羅紗類を伸し洗濯物を仕上ぐる時に用ゐる。

あい-ゐ[藹蔚]名 草木のしげりあふこと。張華「育ニ草木之—ニ」

あい-ゐん[哀婉]名 あはれなるさまを含みて優美なること。滑土和尚「—雅亮すぐれたり」

あい-ゐん(クモ)[哀猿]名 あはれなる猿。

—雲に叫ぶ。句 晉の桓溫蜀に入らんとして三峽に至る。部下某猿兒を捕ふ。其猿の母哀み叫び百餘里を往けども去らず。遂に船に入りて死す。腸皆寸斷せるを見て桓溫怒り某を斥けたりといふ。

あい-をけ名 揚濱鹽田にて使用する製鹽用の桶。砂に附着せる鹽分を濾したる液を受くるに用ゐる。たれをけ。

あ-う[鴉烏]名(動)大がらすと小がらすと。

あう-あう(オウ)[央央]名(副)廣き貌。文選「觀曲臺之—」やうやう。

あう-あう(オウ)[泱泱]名(副)㊀深くして廣き貌。詩經「維水—」㊁雲の盛に起る貌。杜牧「闌溪春盡碧—」㊂雲の盛に起る貌。左傳「—乎大風」㊃宏大なる貌。

あう-あう(オウ)[快快]名(副)心の樂まざる貌。滿足せざるにいふ語。鞅鞅。漢書「塞ニ其—之心ニ」「—として樂まず」

あう-あう(オウ)[鞅鞅]名(副)あうあう(快快)に同じ。史記「由レ此日怨望、居常—」

あう-あう(オウ)[益益]名(副)盛なる貌。杜牧「春之—不レ足レ爲ニ其和一也」

あう-あう(オウ)[懊懊]名(副)氣分のすぐれぬこと心配して苦む貌。「聲の形容。詩經「鳥鳴—」

あう-あう(オウ)[嚶嚶]名(副)鳥の相和して鳴く

(あうあう(オウ)[鶯鶯]唐の崔氏の女の名。李紳「綠窗嬌女字—、金雀鴛鴦年十七」

あうあう-しや(オウオウ)[嚶嚶社]大國隆正等の設立せし文社。社員の談話集を—筆話といふ。

あう-あく(オウ)[嚶噩]名(副)鳥の鳴く聲の形容。傳休奕「—聲正悲」

(あうあん(オウ)[奧處]筑後の儒者、柳川藩に仕へし笠間惟房の號。

あう-い(オウ)[襖衣]名 うはぎ。「風景開ニ—」

あう-いう(オウ)[怏怏]名(副)心の樂まざると。杜甫

あう-い-く(オウ)[奧行]自動カ四㊃人の後につきゆく。後より追ひ行く。枕冊紙「人目もしらず走

られつるを―かんこそすさまじけれ」

(アウイス 伊兒汗國の汗にして、旭烈兀の遠孫なり。西紀一三五〇年頃八吉達に據り、呼羅珊を恢復し國勢を挽回せり。

あう-う(オウ)**[嫗嫗]**名 ばば。「父老及―」

(あう-う(オウ)**[奥羽]**陸奥・出羽の總稱。卽ち今の磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥・羽前・羽後の七ヶ國にして、福島・宮城・岩手・青森・秋田・山形の六縣となす。

―えいけいぐんき[―永慶軍記]天文・永祿より慶長・元和に至るまでの間の奥羽の戰爭を記せるもの。戸部正直の撰。

―ぐんき[―軍記]後三年の合戰の有樣を詳しく記せる書。著者未詳。

[―さんくわん(カン)**]**[―三關]古へ陸奥出羽に入る三道を擁したる三處の關所を云ふ。卽ち東山道より入る白河關・濱街道より入る勿來關、北陸道より入る念珠關これなり。

[―さんみやく[―山脈]本州北半の縱軸線を成す山脈にして陸奥・北部半島の恐山に起り幽峻なる日光山麓に連り淺間嶽を經て信濃に入る。

―せいばつ[―征伐]名 明治維新の際德川氏の舊臣奥羽に逃げ走り官軍の之を追ひ白河城・若松城等を陷れたるをいふ。

[―せん[―線]奥州線福島驛より分岐し北行、羽前の山形・羽後の秋田・陸奥の弘前を經て青森市に於て奥州線に會する鐵道。

あう-うつ(オウ)**[泱鬱]**名 盛なる貌。漢書「玄靈―將二安歸一」

あううん-き(オウ)**[攖雲記]**後醍醐帝の卽位より南朝の皇統の亡ぶる迄の事を記せる書。著者系譜家小佐野氏なりといへど疑はし。

あう-ええ(オウ)**[奥窔]**名 屋隅の暗き處。荀子「―之間簟席之上」

あう-えつ(オウ)**[映咽]**名 ふさがりて流れざると。

アウエル-とう[―燈 Auer's Lamp.]名 白熱套にて覆ひ瓦斯の光を一層有效ならしむる燈。アウエル氏の創案に係る。白熱燈。

あう-おう(オウ)**[盎甌]**名 瓦の小鉢。雜俎「狗彘不レ擇二一而食一」

あう-か(オウ)**[鸚哥]**名 動 いんこ。本草「鸚鵡小者爲二一一」

―りよく[―綠]名 鸚鵡の羽毛の綠色に似たる色をいふ。

あう-か(オウ)**[鶯歌]**名 ㊀うぐひすの聲。李適「―一度曲繞二仙杯一」㊁鶯を讃美したる歌。

(あうかう(コウ)**[甕江]**文學博士川田剛の號。

あう-き(オウ)**[懊氣]**名 ㊀もだゆる時の氣持。㊁心のくるしみ。

あう-ぎ(オウ)**[奥義]**名 おくぎ。おくのて。祕密。深遠なる義理。奥祕。宋史「講二論諸經―一」を極む」

あうぎ-せう(オウギ-ショウ)**[奥義抄]**和歌式・萬葉古今集等の歌の奥義を詳述したるものにして藤原清輔の著なり。

あう-きう(オウ)**[懊休]**名 氣にて溫め安んずる義より人の苦悶をなだめ人の困窮を賑恤するをいふ。左傳「民人痛疾、或―二之一」懊咻。

あう-きう(オウ)**[殃咎]**名 わざはひとがめ。天のとがめ。災咎。左傳「哀樂失レ時―必至」

あう-ぎん(オウ)**[鶯吟]**うぐひすのなきこゑ。高啓「―上二喬木一」

あう-きやう(オウキヤウ)**[拗強]**名 ねぢけて强情なること。しぶときこと。李業「王臨川天資亦有二―處一」

あう-きゆう-らく(オウ)**[央宮樂]**名 雅樂の曲名。

あう-くわ(カオウ)**[殃禍]**名 わざはひ。「慢」

あう-くわ(カオウ)**[櫻花]**名 さくらのはな。「―爛」

あう-くわう(コウ)**[鶯簧]**名 ㊀うぐひすのなきごゑ。㊁美しき笛の音序。嵇康琴賦「燰入二一一舌漸調」

あう-くわ-の-うみ(オウクワノウミ)**[鶯花海]**名 百花盛に開き黃鶯飛び啼く春景色の十分なる處。陸游「錦城―、十里香不斷」

あう-けい(オウ)**[殃慶]**名 わざはひとさいは「ひと。

あう-けい(オウ)**[秧雞]**名(動)くひな。本草「―大如二小雞一」

あう-ご(オウ)**[鶯語]**名 ㊀うぐひすのなきごゑ。鶯聲。鶯哢。㊁美聲。孫綽「―吟二脩竹一」

あう-さ(オウ)**[鶯棧]**名 うぐひすの機の棧をやる如くに枝より枝へ飛びかふをいふ。張籍詩「柳岸―巧織レ藍」

あう-さい(オウ)**[殃災]**名 わざはひ。災難。

あう-さつ(オウ)**[鏖殺]**名 盡く殺すこと。みなごろし。

あう-し(オウ)**[奥旨]**名 あうぎに同じ。

あう-し(オウ)**[襖子]**名 こそで。「折予」

あう-し(オウ)**[拗矢]**名 矢を折ること。廚經子「―

あう-じ(オウ)**[鶯兒]**名 うぐひすのこゑ。黃鶯兒。鶯雛。隴都詞「―老去空二臺樹一」「みちのく。

[あう-しう(オウ)**[奥州]**我國本州の東北地方。

―あだち-が-はら[―安達原]名 淨瑠璃の曲名。竹田和泉・近松半二等の合作。安倍貞任の事を作れるもの。

―うま-ごらん[―馬御覽]名 江戸幕府年中行事の一。毎年十一月奥州より牽き來れる馬を吹上馬場にて將軍の觀覽に供するをいふ。

[―かいだう(ドウ)**[―街道]**江戸五街道の一。東京千住より北行、宇都宮・白河を經て福島に入り二派に別る。一は東北行して磐城に入りて濱街道に合し、一は西行して米澤・山形・秋田・弘前を經て青森市に達す。

―せいばつ[―征伐]名 文治三年源義經陸奥に下りて藤原秀衡に依る。頼朝、秀衡の子泰衡を誘ひて之を殺さしめ更に同五年速に義經を討たざりしを名とし大軍を率ゐて此の藤原氏を滅したるをいふ。

―そうぶぎやう(ソウブギヤウ)**[―總奉行]**名 鎌倉幕府の制度に奥州全部を取締るべき官職。

―たんだい[―探題]名 室町幕府の職名。陸奥國内を支配するもの。奥州管領。

―だんべい[薩摩どんがら。鹿南北兩地方特有の方言を連ねたるもの。だんべいはだらら。どんがらはだからの意。

―のべいべい語がやんだらば借りても三百つんだすべい。鹿方言の容易に改め難きものなるをいふ。

(あうしう(オウ)**[奥州]**㊀江戸芳原三浦屋の名妓。俳諧をよくす。元祿頃の人。㊁江戸芳原茗荷屋の名妓。和歌及び書に巧なりき。

アウシキナ名(アイヌ語(植)毛茛科に屬する多年草にして六七月頃二尺五寸許の莖の頂に小白花開く。

あうし-さう(オウシ-ソウ)**[櫻子瘡]**名(獸)馬の蹄に生ずる腫瘍。其形櫻の實に似たるが故に名く。

あう-じち(オウ)**[鶯實]**名 ㊀うぐひすの木の實異本枕草紙「―の木、やまなしの木、しひの木」

あう-しん(オウ)**[媼神]**名 地の神。

あう-しやう(オウシヤウ)**[鞅掌]**名 ㊀鞅は荷ふ掌は捧ぐるにて負荷捧持の義。卽ち公事に忙しくたづさはること。つかさどること。詩經「王事―」㊁煩多なる義。嵇康「心不レ耐レ煩而官事―」㊂自得の意。莊子「―之爲レ使」

あう-じやう(オウジヤウ)**[泱瀼]**名 水の流るゝ貌。

あう-じやう(オウジヤウ)**[秧穰]**名 禾穀密生せる貌。

あうしゆく-ばい(オウ)**[鶯宿梅]**名 ㊀(植)梅の一種。花輪大にして白く香殊に高く瓣八重なるも一重なるもあり。又紅白相交りて咲く梅なりともいふ。㊁村上天皇の時、紀貫之の女、父の歿後その愛せる梅の樹を朝廷に徵さるゝに際し「勅なればいとゞかしこし鶯の宿はと問はゞいかゞ答へん」と詠みければ、天皇大に感ぜられ給ひしとぞ。大鏡に見ゆ。今此樹相國寺中にありといふ。「付二嫣婷一」

あう-しよ(オウ)**[懊緒]**名 なやむ心のもと。徐庾「―

(あうしよ(オウ)**[鷗所]**幕末の政治家岩瀨忠震の號。向島に移住後蟾州をかく改む。

あう-せつ(オウ)**[鶯舌]**名 うぐひすのした。うぐひすのこゑ。沈興求「宿露園林―亂」

―の-さへづり(ノサヘヅリ)**[―囀]**名 言ひかたの美しきを譬へていふ。蘇曲「―は露を含める綠萩の」

「春景色のとゝのひしを意味す。

―調(トノ)ふ。句 鶯の鳴聲のほどよくとゝのひしこと

あう-せん(オウ)**[蹇戰]**名 敵をみなごろしにせんとて全力を盡して決戰すること。花厳大「勇往決二一一」

あう-せん(オウ)**[盎然]**名 盛なる貌。盛に見はるる貌。

あう-せん(オウ)**[鶯然]**名 文章などにあやある貌。

あう-そく(オウ)**[粟粟]**名(植)けし。米囊花。

(あうそん(オウ)**[鶯村]**畫家酒井抱一の號。

あう-たう(トウ)**[櫻桃]**名(植)㊀ゆすらうめ。㊁支那種のみざくら。花は紅色、實は甘酸多漿美味にして生食せらる。又糖菓・櫻桃酒

等を製す。甘果―酸果―等の種類あり。

あう-たう(オウ)[秋稻]名 いねのなへ。宋史「土宜二五穀一多種二一一」

あう-だう(オウ)[拗堂]名 堂のくぼみたる處。莊子「覆二杯水于―之上一則芥爲二之舟一」

あう-たん(オウ)[懊歎]名 うらみなげくこと。南史「綽―彌レ日」

アウチング-コート[Outing coat.]名 洋服の上着の一種。其丈は臀部下方に達し普通前後部に數條のプードを有す。特にヨークを附けたるものあり。專ら遊戯・散歩等に用ゐる。

アウチング-トラウザース[Outing trousers]名 夏期に用ゐる一種のズボン。裾口を一吋半位折返して作れるもの。

(あうてん)(オウ)[櫻顛]幕府の醫官池原雲山の「號。

アウト[Out.]名 ㊀そと。外方。㊁球戯のローンテニス、ベースボール、クリッケット等に用ゐる語。テニスにては球を場外に打出したる時にいひ、ベース及クリッケットにては戯伴の一人其なすべきことを誤りたるため遊戯を退かざるべからざる場合をいふ。

―カーブ[―curve.]名 ベースボールの魔球の一種。打手の棒を振りて打たんとする一刹那遠き方に曲るもの。インカーブの對。

―フィールダース[―fielders.]名 ベースボールにて略同じ業をなす三人の者にてライトフィールダー、センターフィールダーといひ其位置は左中・右の三方に分れて共に遠く所定の方野の外にホームベースと反對の方向にあり。インフィールダースの對。

―フィールド[―field.]名 ベースボールにて所定の方野の外なる遊戯場の部分をいふ。又アウトフィールダースを指していふことあり。インフィールドの對。

―プレーヤー[―player.]名 ローンテニスの競技に於て受手たる方を稱す。ストライカー、アウト或はレシーヴァーともいふ。インプレーヤーの對。

あう-なう(オウ)[懊惱]名 なやみくるしむこと。心のまゝならぬを悶ゆること。煩悶。懊憹。白居易「―何人怨咽多」

あう-な-し(オウ)[奥無]形一 ㊀深き考なし。思慮なし。淺慮。源氏物語「あやしく―く人の思はんところも知らぬ人にて」

(あう-の-みたち(オウ)[奥御館]藤原秀衡をいふ。

(あうばい-せうしやう(オウバイシヨウシヨウ)[櫻梅少將]平惟盛の異名。

あう-ひ(オウ)[奥祕]名 あうぎに同じ。會稽典錄「窮二陰陽之―一」

あう-ふ(オウ)[罌缶]名 かめ。もたひ。罌缾。

あう-べう(オウヤウ)[秋苗]名 稻のなへ。淮成大「―地青」

(あうほ(オウ)[鶯浦]畫家にして僧侶たりし酒井氏の號。

あう-まう(モウ)[泱漭]名 廣く大なる貌。淮南子「―無レ疆」

あう-むし(オウ)[鸚鵡]名 ㊀動 次の㊀に同じ。本草「鸚鵡大者爲二一一」㊁植 はりぎり・刺桐の花。彙編「露出二幾枝一紅―」

あう-むし(オウ)[鸚鵡]名 ㊀(動)鳥の名。熱帶地方の產。頭嘴共大く頂に冠毛あり。脚は攀緣に巧に、又物を握るに適す。羽色美麗性怜悧にしてよく人語をまね。[一能言不レ離二飛鳥一]枕草紙「―いと哀なり人の言ふらんことをまねぶらんよ」㊁能く他人の口まねをするを。

―がひ(イガ)[―貝]名(動)螺の類。形鸚鵡の嘴に似たり。介殼に美しき斑文あれば花瓶盃などに製し又螺鈿にも用ゐらる。うけつ。

―がへし(エガ)[―返]名 ㊀人より言ひかけられたる歌をいさゝか語を換へて直に返歌となすこと。小倉百景「やがて御返しを書き加へ給はりたりし―などいふは常のことなれど」㊁人より言ひかけられたる言語をその儘又はいさゝか改めて返答すること。學說議論等を聞きたるまゝに述ぶること。㊂人よりさゝれし杯を僅に飲みて直に返杯すること。今川大双紙「―の杯のこと是は七返まではすべし八返はせず」

―ぶんぶにだう(ブンニ)[―文武二道]黃表紙の名。戀川春町の作。

―からくさ[―唐草]名 模樣の名。鸚鵡の形をつけたるもの。

―こまち[―小町]名 謠曲の名。

―せき[―石]名 ㊀物の音を反響する性ある一種の石の名。響石。八犬傳「人語を傳ふる―」志摩國志摩郡逢阪山の麓にあり。高さ十七間、横七十間。能く音響を反射し石の言ふに似たり。俗にカケ石と云ふ。㊁孔雀石の一種にして薄き黃綠色を帶びたるもの。㊂俳優の假聲をならむ爲に臺詞を書拔きたるもの。今の筋書に似たり。

―の-つき[―杯]名 鸚鵡貝にて造れる盃。あうむのさかづき。さうむはい。和漢朗詠集「新豐酒色清二冷於―中一一單にあうむともいふ。隅曲「水に浮む―は水にさはりて」

―の-ひと(ヒトマネ)[人眞似]名 此鳥の如く能く人の言語を眞似るをいふ。

―能言。(ノウゲン)句 徒に言ふのみにて實行の伴はざるをいふ。禮記「―不レ離二飛鳥一、猩々能言不レ離二禽獸一今人而無レ禮雖二能言一不二亦禽獸之心一乎」

ア-ウン[阿吽]名 佛 阿は字母の初韻なるが故に元初の法界を義とし、吽は字母の終なるが故に法界の大終を義とす。又阿は本不生の現を表し吽は此理に契當せる絕待の智を表す。又阿は胎藏界現門靜色、吽は金剛界智門動心なりとの解あり。又氣息の出入。阿・吽。

―の-いき[―息]名(佛)呼氣を阿の息といひ吸氣を吽の息といふ。[阿吽の呼吸を合はす]

―の-にじ[―二字]名(佛)此二字は法界萬有を擧げて之を攝し而も法界の二面たる兩極の各一を示すものなり。

―の-にわう(ニワウ)[―二王]名(佛)阿吽の二字を寺門の左右に立てる二人の金剛力士に適用しての稱。

あう-めい(オウ)[嚶鳴]名 ㊀鳥の相和して鳴き囀ること。詩陽修「衆鳥皆―」㊁轉じて朋友の互に切磋するにいふ。「一會」

(あうもん(オウ)[澳門]マカオを見よ。

あう-よ-る(オウ)[奥寄]自動ラ四 ㊀奥の方へよる枕草紙「―りて三四人集ひて繪など見るもあり」

あう-ら[足占]名 上古の卜占の一法。足を踏み其跡にて吉凶を定むるもの。萬葉集「―をぞせしゆかまくをほり」

あう-りく(オウ)[硤戮]名 禍にかゝり殺さるゝこと。「と。讀書「六親―」

あう-りよく(オウ)[鸚綠]名 鸚鵡の羽毛の綠色なるをいふ。隨筆「―猩紅極二天巧一」

(あうりよく-かう(オウリヨクカウ)[鴨綠江]朝鮮第一の大河。白頭山の西麓に發源し西南流して渾河・瀑河等を合せ黃海に注ぐ。全長三十里、河口より四十里、昌城迄舟楫の便あり。本江一にアリナレと稱す。日清及日露戰役に於て彼我兩軍の爭點となり其名普く世人に知らる。今や鐵橋を架設して汽車を通ず。

アウロラ[極光 Aurora.]名 南北極に近き地方に時々出現する極めて壯麗なる光彩。北光に分ちいふ。

あう-ねん(オウ)[鶯韻]名 鶯の鳴聲。劇野王「風輕―緩」

(あえい-どし[阿永土司]支那青海にある土司の名。

あえか名 ㊀かよわきこと。源氏物語「―なるすきずきしさのみこそをかしくおぼさるらめ」

―に副 ㊀㊁かよわく。よわよわしく。孱弱。狹衣物語「―ほそりたまへる」㊂やはらかに。艷に。榮華物語「あてに―めでたくおはします」

あ-えつ[啞咽]名 しやくりなきをいふ。元稹「―。

あ-えふ(ウヒ)[蛙葉]名(植)かへるは。おほばこ。

あ-えん[亞鉛]名(化)帶青白色の金屬。閃亞鉛鑛・菱亞鉛鑛等となりて存在す。脆弱にして硬し。初め光澤閃明なれど時を經れば暗憂となる。强く熱すれば酸化亞鉛となり、適度に熱すれば展性を得、薄板となすべし。又眞鍮・洋銀等の合金を製するに用ゐられ其用途甚廣し。トタン。

―イオン名(化)二價にして無色なり。高等生物に對しては毒性あり。

―クローム[―格魯謨]名(化)クローム酸亞鉛に同じ。主に顏料に用ゐる黃色の粉末。

―くわ(クワ)[―華]名(化)酸化亞鉛の別名。顏料及醫藥(散布劑・塗擦劑)に用ゐらる。

―なんかう(ナンカウ)[―軟膏]名 藥 酸化亞鉛に脂肪を和したるもの。濕疹等に用ゐる。

―てつくわう(テツクワウ)[―鐵鑛]名(鑛)亞鉛・鐵及マンガンの酸化物。赤色の紅亞鉛鑛と

共生する黒き鑛物。

—とっぱん〔—凸版〕名 寫眞亞鉛版を見よ

—のすゐぎんづけ〔—水銀漬〕名 電池に用ゐる亞鉛の硫酸等に侵蝕せらるゝを防がんが爲に其表面に水銀を塗抹したるもの。

—ばん〔—版〕名 亞鉛を石に代用して石版印刷術を行ふ法。

—まつ〔—末〕名 亞鉛を粉末狀になしたるもの。酸類又はアルカリ類と共に用ゐて還元劑とす。

—めっき〔—鍍〕名 鐵線の錆蝕を防ぐために其表面に亞鉛の薄被を施すと。此種の鐵線は多く電信線又は電柱等の支線に用ゐらる

あ-えんくわりん〔—エン—〕〔亞鹽化燐〕名〔化〕揮發し易き無色の液體にて奪水劑等に用ゐらる。

あ-えんそさん〔亞鹽素酸〕名〔化〕ペンゼンと硫酸との混合液に鹽素酸カリウムの粉末を混じたるもの。烈しき腐蝕性を有す。

あえ-もの〔宵物〕名 あやかりものに同じ。大鏡〔やがて—にもと奉らせたまふ〕

〔あおん-とう〕〔阿恩岡〕支那四川省松潘附近にある土司の名。

あおり〔淡落〕名 ⑩ 船棚の下の處。

あお-る〔煽〕自動ラ四 あふるの訛。〔商〕取引所の用語にして大手筋の相場狂はせのため無暗に賣買するをいふ。〔買—〕〔賣—〕

あか〔赤〕名 ❶ 七色の一。血の如き色。くれなゐのいろ。❷ あかあづき〔赤小豆〕の略。〔—の餅網〕❸ あかがね〔銅〕の略。〔—の飯〕❹ あかがれ〔銅〕の略。❺ あかご〔赤兒〕の略。❻ はなかざ〔洟〕の略。❼ あかご〔赤兒〕の略。❽ はなあはせの手役の名。

—の-ごはう〔—ホウ〕〔赤御袍〕名 袞龍の御衣をいふ。

—の-まんま〔赤飯〕名 ❶ あづきめしに同じ。❷ 野蓼の一名。

あか〔垢〕名 ❶ 身體のあぶら・あせなどの塵とまじりて肌に付き居るもの。❷ 惡き事したる人の身のけがれ。五十年忌默念佛〔身の—脫いでわびことせば〕❸ 器物に附着せる液體の滓。〔水—〕〔湯—〕❹ 銅の製煉に於て眞吹の際からみ鍛及どふ〔銅歩〕を取去りたる後銅湯の上に浮び出づるもの。

—に食はれても死にはせぬ。諺 「厭ふ者の言。」

刮**—**磨光。〔カツチヤブリガク〕人の瑕疵をば刮り去りてその善行の光を發せしむる義にて人才を成就するをいふ。韓愈の進學解に見ゆ。

洗**—**求ニ其瘢痏一〔ハラアラヒテソノヒトツヲモトム〕我と我身の過を求め出す喩。漢書に見ゆ。

アカ〔閼伽〕名〔佛〕〔梵〕清淨水。香水器等と譯す佛に供ふる水又其水を盛る器。阿伽。遏伽。

—くわんぢやう〔—カン—〕〔—灌頂〕名〔佛〕香水を佛道修行者の頂に灌ぎて其修功を證明する作法をいふ。是もと國の太子の王位に卽く時の儀式なりしを佛教にも採用せしものなり。

—のぐ〔—具〕名〔佛〕アカを盛る器。

—の-はな〔—花〕名〔佛〕佛前に供ふる花。

—の-みづ〔—水〕名〔佛〕佛前に奉る清淨芳甘なる水。

—の-をしき〔—折敷〕名〔佛〕佛前に供ふる「物を載するをしき。」

アカ〔澁〕名 船の底に溜る汚き水。

あか〔赤〕接頭 ❶ あらはなる意。〔—恥〕〔—裸〕❷ 全くの意。〔—虛言〕〔—下手〕〔極めて技藝の拙きをいふ〕

—の-たにん〔—他人〕名 全く何等の血緣なき他人。

あか-あかと〔明明〕副 ⑩ 頗る明るく。讃岐典侍日記〔一日のさしいりて〕

あかあし-きん〔赤足金〕名 外國渡來貨幣の一。唐の金貨にて三十二雙半替の價ありといふ。本草綱目に〔金有ニ山金沙金二種一—以レ赤爲ニ足色一〕とあり。赤足は上金の意か。

あか-あしげ〔赤葦毛〕名 馬の毛色の名。葦毛に赤みを帶びたるもの。

あかあし-しぎ〔赤足鴫〕名〔動〕鴫の一種。脚の橙黃色又は赤色なるもの。あかがれしぎ。

あかあし-とんぼ〔赤足蜻蛉〕名〔動〕蜻蛉の一種。胸腹部は赤色なり。

あか-あづき〔赤小豆〕名〔植〕小豆の一種。色の赤きもの。白小豆の對。「帶びたるもの。」

あか-あは〔—ワア〕〔赤粟〕名〔植〕もちあはの赤みを帶びたるもの。

あか-あり〔赤蟻〕名〔動〕蟻の一種。赤くして黑みあり。いひあり。黃蟻。

あか-い〔赤〕形一 ⑩ あかしの轉。

—**しんによ**〔—信女〕名 未亡人。後家。〔人は死後は墓石の戒名を墨字とせども存命中は朱字にするが故にいふ〕黑い信士の對。

—**が子を孕む**。諺 次に同じ。

—**の木魚**〔モクギヨ〕〔諺〕木魚はふくらみたるものなれば寡婦の懷姙したるをかくいふなり。

—**着物を着る**。句 入牢の身となるをいふ。

—**は酒の**〔トガ〕**咎**。諺 顏色の赤くなれるは酒の業にて我が知るところにあらずの意にて、罪を酒に嫁したる戲言なり。

あか-いか〔赤柔魚〕名〔動〕いかの一種。常に群をなし日中は深海に在り夜間は上層を游泳す。大なるものは一尺五六寸に達す。味美なり。素乾にして二番鰯となす。

〔あかいけ-くわうざん〕〔—ザン〕〔赤池鑛山〕豐前國田川郡にあり。石炭を產出す。

あか-いし〔赤石〕名 赤色の石。佐渡の純赤色の物は赤玉と稱して珍重す。

〔あかいし-くわうざん〕〔—ザン〕〔赤石鑛山〕陸中國和賀郡にあり。金銀を產出す。

〔あかいし-さんみやく〕〔赤石山脈〕富士帶山脈の西仙丈山の邊より起り駒ヶ嶽山脈と共に赤石山系を成せり。

〔あかいし-やま〕〔赤石山〕駿河國阿倍郡と信濃國伊那郡とに跨れる高山にして高さ一萬二百尺餘あり。

あかいと-おどし〔赤絲絨〕名 あかおどしを見よ。源平盛衰記〔紺むらこの直垂に—の鎧着て〕

あか-いぬ〔赤犬〕名〔動〕毛色のあかき犬をいふ。

—**が狐を追ふ**。句 優劣のなき喩にいふ。

あか-いひ〔イイ〕〔赤飯〕名 あづきめしに同じ。

あか-いも〔キツネオ〕名 ❶〔赤薯〕さつまいもの一種。皮は赤く中は黃色を帶び味佳なるもの。赤甘藷。❷〔紫芋〕さといもの一種。葉柄紫赤色なるもの。たうのいも。

あか-いろ〔赤色〕名 ❶ あかいろ。くれなゐのいろ。❷ ⑩ 禁色の一。此色は上皇着御の御袍の色にて男女共着用することを禁制せらる。❸ 重衣の色目の名。表は蘇芳、裏は花田。あかばな。❹ 織物の色の名。經の紫にして緯の赤たるもの。

—**の-はう**〔ハウ〕〔—袍〕名 黃櫨と茜とにて染めたる袍。太上天皇の常服。時に天皇も着御し給ふ。臣下にては攝政關白の着るとあり。

あか-いわし〔赤鰯〕名 ❶ こぬかをまぶりたる鰯を乾したるもの又鰯漬にしたるもの。食用にも節ヅの夜の追儺の具にも供ず。こぬかの爲に赤鳶色となるが故に此名あり。❷ 赤く錆びたる刀を嘲りていふ語。

あか-う〔アカ〕〔赤魚〕名〔動〕めばるに似たる魚。全體紅色にして腹部大なり。あかば。鯰魚。

あ-かう〔カウ〕〔阿衡〕名 攝政又は宰相の別名。阿は倚、衡は平にて、天下人民倚りて平を保つ所。書經〔惟圖王不レ惠ニ于一—〕殷の伊尹に始まる。或は曰く—は伊尹の號たりと。

—**の-あらそひ**〔ソイ〕〔—爭〕宇多天皇の基經に下し給ひし詔勅の中に〔宜下以ニ阿衡之任一爲卿之任上〕と云ふ句ありしを、或る人、阿衡は官の名にして職の名にあらずと云ひしより基經大に怨みて病と稱し帝の御心を煩し奉りしことをいふ。「量あるをいふ。」

—**の-さい**〔—才〕名 宰相となるべき才智器

—**の-すけ**〔—佐〕名 其臣の輔佐をいふ。史記〔魏雖得ニ—一曷益乎〕

あ-かう〔カウ〕〔阿香〕名 雷の異名。〔—車〕法華經林〔向一更聞下外有ニ小兒一喚ニ—一聲上女應曰諾、尋云官喚レ汝推ニ雷車一、女乃辭行、夜遂大雷雨〕

あ-かう〔カウ〕〔阿縞〕名 齊國の東阿縣より產出する絹。されど多くは單に上等の絹をいふ。史記〔—之衣錦繡之飾〕

アカウ〔アカウ〕〔榕〕名〔植〕熱帶に產する常綠喬木。葉は革質にして長き葉柄を備ふ。花實共に無花果に似たり。檳上より氣根を垂下して遂に土中に入りてパンヤンの如き奇觀を呈す。其材は堅く木理錯綜し頗る美し。漆器製造の原料に用ゐらる。

あかうきくさ〔赤浮草〕名〔植〕湖沼池澤水田等の水面に夥しく繁生し全水面をして綠色又は紅色の觀を呈せしむる一種の隱花植物。

滿江紅。「㊁」〔赤鷺〕(動)てりうそに同じ。

あかうそ 名 ㊀〔赤嘘〕㊇全くのいつはりごと

あかうづらまめ〔赤鶉豆〕名 うづら豆の一種。色赤くして茶色を帶び白色の斑點あり。

あかうなぎ〔赤鰻〕名(動)鰻の一種。形うみどぢやうに似て體長一尺許。海に產す。めくらうなぎ。「ふ。

あかうま〔赤馬〕名 毛色の赤茶色なる馬をいふ。

あかうみがめ〔赤蠟龜〕名(動)龜の一種。色稍褐色を帶び海洋に產す。「へたるもの。

あかうるし〔赤漆〕名 漆に朱又は辰砂をまじ

あかえそ〔赤鯽〕名(動)鯽に似て背部に赤色の斑點、腹部に紅色の横條あるもの。

あかえぞまつ〔赤蝦夷松〕名(植)北海道に產する喬木。樹皮赤褐色にして枝條細く軟かなり。幼き枝には赤き細毛を生じ細き針葉は枝に直角をなして着生す。しんこまつ。

あかえひ(イエ)〔赤蝦〕名(動)形菱形にて圓く長き尾を有する魚。尾部の中央に劍狀の鋭き刺あり又背部は淡黃にして黑みあり腹部は白く大なるものは 尺に及ぶ。肉食せられ又乾製に適す。我國西南海に產す。

—つり〔—釣〕名 赤鱈の雌魚を絲に結びて海中に放てば雄魚之を追ひ交尾して浮上り來るを捕ふること。

あかえび〔赤海老〕名(動)海老の一種、赤褐色を帶び短毛を有するもの。

あかおとし〔垢落〕名 あかこすりに同じ。

あかおどし〔赤縅〕名 鎧の縅毛の名。茜にて染めたる赤絲又は赤革にて縅したるもの。其絲なるを赤絲縅といひ革なるを赤革縅といふ。

—かたじろ〔—片白〕名 鎧の縅毛の名。袖及草摺を革・絲何れにても赤と白とにて左右等分に縅し分けたるものをいふ。

—わだじろ〔—肩白〕名 鎧の縅毛の名。兩袖の肩上一段又は二段を白絲洗革などにて縅し下方を赤絲・赤革などにて縅したるもの。

あかおぼくち(ボチ)〔赤大口〕名 下袴の別名。儀式の時など上の袴の下に着用する緋色の袴。

(ちぎはおかあ)

あかおほな(オナ)〔赤大根〕名(植)あかだいこんに同じ。「記」〔室町殿より—始めてまゐる〕

あかおまな〔鮭〕名 ㊇動 さけの女語。御湯殿日

あがおもと〔吾御許〕代 あ(吾)を見よ。

あかかいけふ(カイヨウ)〔阿加海峽〕琉球國嶋尻郡に屬する阿賀嶋と座間味嶋との間を云ふ距離二十町、長さ一里。

あかがう(ウコ)〔赤香〕名 ㊇ 染色の名。香の如き色にして濃きもの。字治拾遺「—上下に簑笠を着て」

あかかうじ(カウジ)〔赤柑子〕名(植)橘の一種。色赤く、化粧力醱酵力共に弱ければ白麹を混用するを常とす。料理の時ゆでたまご等に色を着くるに用ゐるもの。

あかかうなう(カウナウ)〔赤行囊〕名 郵便行囊の一。書留若くは價格表記通常郵便物又は價格表記小包郵便物を納め各局に遞達する用に供す。甲乙の二種あり。

あかかうやく(コウヤク)〔赤膏藥〕名 切疵につくる「膏藥。

あかかがち〔赤酸漿〕名 ㊇(植)ほほづきに同じ。古事記「目は—なして」

(あかがき・げんざう(ゾウ)〔赤垣源藏〕あかばれしげかたを見よ。「赤みあるもの。赤驃。

あかかげ〔赤鹿毛〕名 馬の毛色の名。鹿毛に

あかかさ〔赤瘡〕名 ㊇ はしかに同じ。榮華物語「此頃—にて、いとふかくにて」

あかかし〔赤樫〕名(植)樫の一種。外皮粗にして色は翠黑なり。春小白花を開く。材は赤くして美しく木理緻密、堅くして折れ難し。船材・車材・櫓衡の製造用材又下駄の齒などに用ゐらる。赤檀。血檀。

あかかしは(シワ)〔赤柏〕名 ㊀(植)あかめがしはに同じ。㊁赤飯の別名。撰集「膳まはり外に物はなし—」

あかがしら〔赤頭〕名 ㊀(植)荒田などに生ずる毒草。葉の色赤ばめるもの。㊁あかがみ(赤髮)に同じ。㊂能具の一。頭に被る毛の赤色なるもの。「に赤みを帶びたるもの。驊・油馬。

あかかすげ〔赤糟毛〕名 馬の毛色の名。糟毛

(あかがた〔赤嶽〕信濃國にある高山。高さ九千六百七十六尺。

あかかたばみ〔赤酢漿〕名(植)かたばみの一種。莖葉花ともに赤みを帶ぶ。赤孫施。

あかガッパ〔赤合羽〕名 赤く染めたる桐油紙にて作れる合羽。德川時代の卑賤なる者の着用せしもの。今も葬送の際雨降れば棺をかつぐ者をして着用せしむる處あり。

あかがに〔赤蟹〕名(動)やまがにに同じ。

あがかに〔足搔〕副 ㊇ あしずりするさまにいふ。古事記「足も—ねたみたまふ」

あかがね〔銅〕名 鑛 赤金の義。色赤くして黑みある金屬。其彈力强くして鍛へ延ばすべく、鐵に次ぎて最も用途多し。尙どうを見よ。

—しぎ〔—鳴〕名(動)あかあししぎに同じ。

—をさむし 名(動)農家に有益なる小形の甲蟲。長さ五分ばかり、銅色を呈す。物に畏るゝ時は肛門腺より惡臭を放つ。好んで細かき動物を捕へ食ふ。

(あかがねくわうざん(ザンコウ)〔赤金鑛山〕陸中國江刺郡にあり。鐵を產出す。赤岩鑛山、間戸銅鑛山とも云ふ。

(あかがは(カワ)〔赤川〕羽前國東田川郡の大鳥池より發し最上川に入る。流域十里許。

あかがは(カワ)〔赤革〕名 赤き色に染めたる革。

—おどし〔—縅〕名 あかおどしを見よ。

—きいと・おどし〔—黃絲縅〕名 鎧の縅毛の名。赤革と黃絲とにて上下に分けて縅したるもの。

あかがは・だいぜん(アカガ)〔赤川大膳〕父は水戸の藩士。資性險惡、天一坊の謀士となりて陰謀を企つ。事成らずして享保十一年十一月江戸に於て誅せらる。

(—ふうけい〔—楓溪〕名は俊章、字は涼涼、通稱は熊太郎。文祿の頃有名なりし播磨國の畫家なり。

あかがひ(イガ)〔赤貝〕名(動)形はまぐりに似たる貝。表面に多くの龍あり。介殼の外面は淡褐色にして內面は白し。海底の泥中に棲息す多く東海に產し食用に供せらる。きさ。蚶。

あかがへる(エル)〔赤蛙〕名(動)かへるの一種。肌色薄赤、暗褐色の斑點あり。痔を癒すとて皮と腸とを去り炙りて小兒に食はす。あかひき。赤蛤。山蛤。

あかがま〔赤蝦蟇〕名 前に同じ。「かげ。

あかかみ〔赤髮〕名 かみのけの赤きもの。あ

あかかみきり〔赤天牛〕名(動)小形の甲蟲。頭部は殆三角形をなし濃赤色なり。杉の皮の裏に產卵す。十一月頃より幼蟲となり樹幹內に食ひ入る。翌年八月蛹化し次で成蟲となる。杉の害蟲なり。

あかがり〔鱺〕名 ㊇ あかぎれに同じ。源平盛衰記「足には—常に割れけれど」

—ぐさ 名(植)闌の一種。香なし。根はあかがりの藥となるが故に此名あり。

あかぎ〔赤木〕名 ㊀(植)熱帶に產する喬木。葉三出の複葉なり。花は細小にして數多攢簇す。材は堅く白色の木理を有し甚だ美なり。良好なる器具製造の原料に用ゐる。くわりん。㊁ひめしゃらの異名。㊂皮を削り取りたる木。黑木の對。源氏物語「—のませをゆひまぜつつ」㊃赤色の木。紫檀・梅樹・蘇芳木などをいふ。「—の數珠」

—づかのかたな〔—柄刀〕名 蘇芳木の類にて作り、木地のまゝにて漆を塗らざる柄の刀。赤柄の刀。

あかぎ〔足搔〕名 ㊀足にて地を搔くこと。萬葉集「我駒の—はやけば」㊁㊇動きはたらくこと。「—がつかぬ」

あかぎかん〔赤城艦〕軍艦の名。砲艦にして「噸數六百廿二。

(あかぎさん〔赤城山〕上野國前橋市の東北六里餘、南勢多郡にあり。休火山にして高さ五千七百餘尺。阪路頗る嶮なり。山上に赤城神社あり。

あかきじ〔赤雉〕名(動)きんけいてうに同じ。

(あかぎじんじや〔赤城神社〕上野國赤城山上にある縣社。大己貴神・豐城入彥神を祀る

あかきだひ(イタ)名(動)形鯛に似て赤く黃ばみたる筋の頭より尾まで通れる魚。

あかきぬ〔赤衣〕名 ㊀緋色の袍。昔五位の者の着たるもの。緋袍。㊁赤色の狩衣を着た

る檢非違使の下司。

—すがた〔—姿〕名 赤衣着たる五位の人の姿。源氏物語〔おどろおどろしき—いと清げなり〕

—の枕 赤衣は表裏其色の同じきよりひとうらにかけていふ。嘉樂集〔—ひとうらごろも〕

あか-きび〔赤黍〕名 植 もちきびの一種。和漢三才圖會に〔—穗熟色赤、皮亦赤、其米黄、唯可ㇾ爲ㇾ糜、不ㇾ堪ㇾ爲ㇾ飯、粘着難ㇾ解、或釀ㇾ酒作ㇾ糕、人家取ㇾ其莖穗、作ㇾ提拂一掃ㇾ地〕とあり。丹黍。麻黍。

あか-ぎり〔赤桐〕名 植 ひぎりに同じ。

あか-ぎれ〔皸〕名 赤切の義。寒さに傷められて手足の皮の裂け痛むもの。眞。あかがり。〔階〕

あ-かく〔阿閣〕名 三階の家をいふ。〔—三重

あ-がく〔足掻〕自動カ四 ㊀馬の前足にて地を掻くをいふ。蹄。嘉樂集〔あが駒の—そゝぎにぬれにけるかも〕 ㊁人の手足をはげしく動すをいふ。もがく。古事記〔西枕に倒れふして手足を—〕

あか-くさ〔赤草〕名 植 ㊀はばきぎに同じ。㊁蓼の一種。紅なる小き花穗のまはりに開く。小兒は之をこき取りて赤飯と見なして玩ぶ。葉は食用に供せられ莖は簾に作らる。野蓼。

あか-くさし〔垢臭〕形一 あかづきてくさし。

あか-ぐすり〔赤藥〕名 藥 赤色の丸藥。急病に用ゐて效あるもの。人參一匁と辰砂一匁とを混じて製す。尙いまがはのあかぐすり（今川赤藥）を見よ。

あか-ぐそく〔赤具足〕名 朱漆にて塗りたる甲冑。縅毛も多くは赤縅にす。

あか-くちなし〔赤梔子〕名 染色の名。くちなしとくれなゐとにて染めたるもの。

あか-くちば〔赤朽葉〕名 ㊀染色の名。朽葉に赤み勝なる色。秋着用する狩衣などを染むるに用ゐる。㊁重衣の色目の名。薄紅に黄を帶びたるもの。

〔あか-ぐに〕〔赤國〕朝鮮晉州の異稱。豐太閤朝鮮征伐の時彼の國々を五色八色に彩りわけて歷覽に安からしめしが晉州を赤色に彩りたるに出づ。

あか-ぐひな〔イナ〕〔赤水雞〕名 動 くひなの一種。雌 腹脚ともに赤く背と頸とは黄にして赤みを帶ぶ。

あか-ぐま〔赤熊〕名 動 熊の一種。毛茶褐色にして長く喉に月の輪なし。多く北海道に棲む。土人幼時より畜ひ祭事に供す。魋。羆。

〔あかぐま-くわうざん〕〔クワウ〕〔赤熊鑛山〕豐前國田川郡にあり。石炭を産出す。

アカ-くみ〔溢汲〕名 アカとりに同じ。

〔あかくら-やま〕〔赤倉山〕陸奥國上北郡八甲田山の西南に屹立し高さ五千尺餘あり。

〔あかくら-をんせん〕〔赤倉溫泉〕㊀羽前國最上郡にあり。泉質鹽類泉なり。享保六年の發見。㊁越後國中頸城郡にあり。赤倉湯・本湯の總稱。泉質硫黄泉なり。

あか-くりげ〔赤栗毛〕名 馬の毛色の名。栗毛に赤みあるもの。黄驃。

あか-げ〔赤毛〕名 ㊀かみのけの赤みあるもの。あかがしら。㊁馬の毛色の赤きものをいふ。驃。

—ひばり〔—雲雀〕名 馬の毛色の名。ひばりげの赤みを帶びたるもの。

あ-がけ〔網懸〕名 野原などにて網にかけてものを捕ふること。

あか-ゲット〔赤毛布〕名 ㊀赤き色の毛布。㊁田舍より都會見物に出でたる人をいふ。多くは赤毛布を身に纏ひしに起る。

あか-けむし〔赤毛蟲〕名 動 蛾類の幼蟲。五六月頃羽化す。桑の害蟲なり。

あか-げら〔赤啄木鳥〕名 動 きつゝきの一種。大さ椋鳥位にして雄は頭赤く、腹は茶色を帶び尾の方に至り赤し。背は黑く肩に白毛あり。

あか-こ〔赤子〕名 動 みゝずの如き細蟲にして溝などに群棲す。捕りて金魚の餌とす。小紅蟲

あか-ご〔赤子〕名 生れて程經ぬ小兒をいふ。あかんぼ。みどりこ。嬰兒。嬰孩。俗語〔—のむつきに包まれたる心地して〕

—の手を捩ぢるやう。㊟極めて容易なるの喩。又抵抗力の乏しき者をしへたくる喩。

—を裸體にしたやう。㊟少しも依るところなきにいふ。

あか-ごけ〔赤苔〕名 植 濕地に生ずる色の赤くして紫なる苔。紫衣。

あか-こげちや〔赤焦茶〕名 染色の名。赤みを帶びたるこげちや色。

あか-ごころ〔我心〕枕 あかす・あかし等にいひかく。

あか-こなすび〔龍珠〕名 植 形こなすびに似て秋の頃赤き實を結ぶもの。

あか-ごま〔赤駒〕名 毛色の赤き馬。

あが-こま〔我駒〕名 催馬樂の律の曲名。

あか-ごめ〔赤米〕名 ㊀うすあかき斑のある米。㊁古びて赤くなれる米。㊂植 稻の一種。だいたうまいに同じ。

あか-こめつき〔赤米搗〕名 動 米搗蟲の一種 體細長くして稍扁平なり。

あかざ〔藜〕名 植 葉は菱邊に缺刻を有し莖は三四尺あり。秋粒狀の花を開き後小き實を結ぶ。葉は食用に供せられ莖は乾して杖とせらる。あかあかざ。

—の-あつもの〔—羹〕名 粗末なる食物を形容していふ語。荀然草〔麻の衣、一鉢のまうけ、—いくばくか人の費をなさむ〕雜記子〔堯糲粢之飯藜之羹〕

—の-つゑ〔—杖〕名 藜の莖にて造りたる杖。

—で顔ぶと三年生きず。㊟藜の杖は極などと異りて弱きものなればころぶときには杖必ず折れ身體を害し易し。故に起き立ち難ければ斯くは云ふならん。

—をつく。㊟老いたる人を形容するにも其事の效なき意を表すにも用ゐる。

—の-はひ〔イハヒ〕〔—灰〕名 藜を燒きてつくりたる灰。染料に供す。

〔あか-さか〕〔雞冠〕名 ㊀とさかに同じ。

〔あかさか〕〔赤阪〕㊀河内國の地名。楠木正成の據りし所。㊁美濃國の地名。關原役に德川家康のたむろせし所。㊂東京市十五區の一。

〔—く〕〔—區〕東京市十五區の一。

〔—の-しろ〕〔赤阪城〕今城址は河内國南河內郡赤阪村卽ち金剛山の西麓に當る處に在り。元弘元年楠木正成の築きて北條氏の大軍を防ぎし處。

—やっこ〔—奴〕名 德川時代江戸赤阪などの山の手に居りし大名に仕へたる槍持・挾箱持などの奴。

〔—やま〕〔—山〕一に金生山と稱す。美濃國不破郡にあり。大理石の產出を以て其の名著はる。

〔—りきゆう〕〔—離宮〕東京市赤阪區紀伊國阪上にあり。舊紀州家の邸にして、地域頗る廣し。先年、皇城炎上の時假の皇居たりし處。每年秋季には觀菊の御宴を開かせられ外國公使・高等官等に拜觀を許さる。

あか-さぎ名 動 形いとよりだひに似てひたく色黄色にして赤みを帶びたる魚。

〔あか-ざき〕〔赤崎〕琉球國國頭郡の東海岸にあり。南北沿岸數里に涉り暗礁連續す。

あかざき-かいもん〔赤崎海門〕名 は楨翰、字は彦齡。昌平黌の教授たり。元薩摩の士。文化年中歿す。年六十。

あか-ざたう〔トウ〕〔赤砂糖〕名 精製せざる褐色の砂糖。

〔あかざ-なほのり〕〔ナホ〕〔赤座直則〕七郎左衞門と稱す。美濃國の人にして初め足利氏に仕へ後織田信長に仕ふ。本能寺の變に苦戰して死す。

〔あかざは〕〔ザワカ〕〔赤澤〕伊豆國賀茂郡にある村。山あり赤澤山といふ。

あかざは-の-をんせん〔ザワカ〕〔赤澤溫泉〕上野國利根郡にあり。泉質硫黄泉なり。

〔あかざは-じやうし〕〔ジヨウ・シ〕〔赤澤城址〕越後國岩船郡にあり。天文十六年、村上義清、武田信玄と戰ひて大敗し此城に退去せり。當時の城番は酒井彈正なりき。

あか-ざん〔赤殘〕名 簿記學上の用語。帳簿の性質上必ず貸方或は借方の殘高の顯れ出づべきに差引のつかぬ事あり。此時其差額を赤色にて顯し置くをいふ。

あか-さんご〔紅珊瑚〕名 動 珊瑚類の一種。骨骼は濃紅色にして甚だ緻密に皮質は薄く橙色なり。暖流の海底の岩礁に固着す。死後其骨骼を取りて裝飾品とす。最も美麗なり。

—じゆ〔—珠〕名 紅珊瑚にて作りたる珠。

あかし〔證〕名 明かにすること。たしかなるしるし。證據。—を立てゝいひわけする。

あかし〔燈明〕名 あかり。ともしび。燭。

あか-し形一 ㊀〔赤〕赤き色なり。くれなゐのいろなり。朱。紅。丹。緋。赭。拾遺和歌集〔しろ

たへの白き月をも紅の色をもなどか—といふらん」㊁〔明〕あきらかなり。あかるし。源氏物語「火の—き方に屏風をひろげて」㊂くもりなし。いつはりなし。いさぎよし。萬葉集「—き心をすめらべにきはめつくして」

—き・おもの〔—粥〕名㊥赤小豆をまぜて煮たるかゆ。四季物語「春來れば—のあつものも」

—き・かさ〔—瘡〕名㊥はしかに同じ。榮華物語「いと—の細なる出で來て」

—き・かゆ〔—粥〕名㊥あづきがゆに同じ。散木集「睦月の十五日—の見ゆるを」

—き・こころ〔—心〕名まことのこころ。まごころ。忠實なる精神。丹心。

—き・なは〔ワナ〕〔—縄〕名男女の間を結びて夫婦とならしむる縄。夫婦のえにし。

〔赤〕あか色の中にて濃からず薄からず中間の度をいふ。「—血」「—米」

〔朱〕赤より少しく色濃きものをいふ。「—衣」「冠」

〔紅〕赤に白の混じたるにて卽ち桃花の色の濃きもの。べにの色なり。「—梅」「—顏」

〔丹〕赤の內にて最も濃き色にして、少しく黑みを帶ぶる程なるをいふ。詩經「顏如—砂」

〔緋〕赤色の皺々しき色をいふ。もと衣服の染色より始りし字。「—の衣」「—の袴」「—山」

〔赭〕赤と黑との混合せしべにがら色をいふ。

〔**あかし**〕〔明石〕播磨國明石郡にある町。神戶を距る十二哩。北に丘陵を負ひ、南海に臨み明石川其西を流れ、中國街道の要地にして松平氏の舊藩地なり。

〔**—かいけふ**〔ミヨウカイ〕〔—海峽〕淡路國の北端と播磨國明石との間の瀨戶をいふ。距離二十八町餘、大阪灣の海門たり。岩屋海峽。

〔**—じやうし**〔ミヨウジヨウ〕〔—城址〕明石町の北に在り。元和三年小笠忠德の築く所にして、天和二年松平若狹守直明(德川秀康の孫)の入城以來世襲して明治維新に至る。其一部をさきて公園とせしが今や御料地となれり。

—だま〔—玉〕名明石より產する擬製の珊瑚珠。「絲と綿絲とにて織れる單衣地。松平氏の舊藩地より產する絹

—ちぢみ〔—縮〕名明石地方より產する絹

〔**—の・うら**〔—浦〕明石町前面の海濱の總稱にして一に明石潟とも云ふ。明石海峽を隔てて淡路島に對し風光其佳なり。古今集「ほのぼのと—の朝霧に島かくれゆく船をしぞ思ふ」

〔**あかし・かんざぶらう**〔フロウザ〕〔明石勘三郎〕名優二代猿若勘三郎なり。德川氏より明石といふ名を拜領して太夫元を勤む。

〔**—しがのすけ**〔—志賀之助〕寬永年中の相撲の名手。江戶勘進相撲の始祖なり。

〔**—じやうれう**〔ミヨウリヨウ〕〔—城了〕歌人なり後に覺一と改む。旅宿聞雨の一歌天聽に達し後小松天皇より雨夜の號及紫衣を賜はりし始めなり。應安四年歿す。

〔**—じらう**〔ジロウ〕〔—次郎〕本姓は堀氏。明石の士にして紡織の術に精し。寬文年中越後に至り越後縮布を發明し、延寶七年歿す。

〔**—もりしげ**〔—守重〕宇喜多秀家の臣。關原役に西軍の先鋒となりて勇戰せり。

〔**あかし・よじべゑ**〔赤石與次兵衛〕播州の船夫なり。征韓の役秀吉を害せんとし事露はれて殺さる。或は曰ふ、與次兵衛征韓を非とする將某の命を承けて陰謀を企てしなりと。

アカシア〔Acacia〕名植豆科に屬する喬木。枝の末端に白き蝶形の小花開き幹の高さ一二丈に及ぶ。材木とし或はアラビアゴムを製するに用ゐる。

あかし・くら・す〔明暮〕他動サ四夜をあかし日をくらす。月日を送る。源氏物語「繪物語のすさびにて—し給ふ」

あかし・だま〔赤石玉〕名㊥赤く輝く玉をいふ

あかし・つ・る〔明釣〕他動ラ四㊥かがりびをたき魚を寄せて釣ること。萬葉集「—魚」

あか・して〔赤垂柳〕名植喬木にして葉は互生し幹は高さ四五丈に及ぶ。器具の柄又は椎蕈を作るに用ゐらる。

あかし・びと〔證人〕名しようにんに同じ。

あかし・ぶみ〔證文〕名㊥神佛に祈り奉る願文。源氏物語「御—など書きたる心ばへ」

あか・しほ〔オシ〕〔赤潮〕名珪藻類又は微細なる生物の群集して赤くなれる海水。

〔**あか・しま**〔阿嘉嶋〕琉球國慶良列嶋の一にして周回二里半。

〔**あかしま・くわうせん**〔センコウ〕〔赤嶋鑛泉〕紀伊國東牟婁郡にあり。泉質硫黃泉。「かづく。

あか・じ・む〔垢染〕自動マ四垢に染みて汚る。あ

〔**あが・じんじや**〔阿賀神社〕一に英賀神社に作る。播磨國阿賀にある縣社。阿賀比女を祀る。三代實錄に元慶五年位を授くとあり。

あかしやこ〔赤蝦蛄〕名動海老の一種。車海老の如く大くして背面に稜形の紋あり。

あかしらが〔赤白髮〕名白髮の赤みを帶びたるもの。枕草紙「髮—にて」

あか・しらつるばみ〔赤白橡〕名㊀染色の名。薄赤くして少しく鼠ばみたる色。㊁重衣の色目の名。あかいろに同じ。

あかし・れいせん〔明石冷泉〕陸奧國三戶郡にあり。明治十三年の發見。泉質單純泉。

あかす〔明〕他動サ四㊀あきらかにす。源氏物語「精しき事—し申し侍らんも」㊁祕密をあらはにす。「心を—」㊂疑はしきをたしてあきらかにす。證明。㊃すごす。送る。「夜を—徹夜」「一年を—」

あかす〔開〕他動サ四㊥ひらく。あく。障碍物を除く。古事記「なつぐさのあひねの濱のかき貝に足ふますな—して通れ」

あか・すぐり名植灌木にして莖は高さ凡そ四尺、葉は三裂又は五裂す。花は小く總狀をなし淡綠色なり。實は漿果にして紅色なり。歐洲の原產。近時我國にも移植し其果實を食用に供す。

「沒して細に切りたるもの。

あか・すさ〔赤切〕名すさの一種。古綱を水に

あか・すぢ〔赤筋〕名動脈の俗稱。

あかすぢ・けむし〔赤筋毛蟲〕名動蛾類の幼蟲。背上に赤褐色の線あり。七月頃羽化す。

あかすぢ・ばち〔赤條蜂〕名動蜂の一種。前頭廣く複眼卵形にして翅の赤褐色なる黑色大形のもの。

あか・ずな〔赤砂〕名鑛こんがうしやに同じ。

あかずの・もん〔不開門〕名大內裡外郭北面の一門たる偉麗門の異稱。あけずのもんを略してあかずといふ。尾張津島の名物なり。

—ぐすり〔—藥〕名酒の異稱。

あか・すり〔垢擦〕名湯に入りて垢をすりおとすに用ゐるきれ。(多くは吳絽)

あか・せ・がたき〔赤瀨瀑〕大隅國にあり。高さ百九十八尺、幅百八十尺。小根占川に入る。

あか・ぜみ〔赤蟬〕名動あきぜみに同じ。

あか・せり〔赤芹〕名植芍藥に似たる草。葉は綠にして赤みを帶び花は紅なり。

あか・そ〔赤麻〕名植からむしの一種。山野に生ず。葉は對生し莖は高さ二三尺、多く枝を分ち皮色赤し。夏梢頭に細梗を抽き細花を綴る。越後にては此草の皮より絲をとり織りて足袋・頭巾等に製す。又打ちて綿とし布子の綿などに用ゐる。

あか・ぞなへ〔ナエ〕〔赤備〕名陣中にて具足・指物・鞍鐙・馬轡に至るまで悉皆赤色を用ゐたる備武田信玄之を始めたるが如し。「井伊の—」

〔**あかぞめ・ゑもん**〔赤染衛門〕赤染時用の女薩原道長の妻倫子に仕ふ。後大江匡衡に嫁す。和歌に巧みにして三十六歌仙の一人なり世に江侍從といふ。

—しふ〔ジウ〕〔—集〕赤染衛門の歌を集めたる「書。

アカダ〔阿伽陀〕名㊀佛〔梵〕眞言祕密の靈藥圓藥と譯す。華嚴經「—藥衆生見者、衆病悉除」㊁米團子を木槌子ほどにまるめ油にてあげたる菓子。其色赤ければ赤團子といふべきを略してあかだといふ。尾張津島の名物なり。

あがた〔縣〕名㊥㊀上古諸國にありし朝廷の御領地。㊁後に縣主の支配せる區域。㊂中古以後國司の任國。「佐日記」或人—の四とせ五とせ果て」㊃轉じて田舍をいふ。夫木抄「たづらなるわらやの軒のこもすだれこれや—のしるしなるらん」

〔**—の・みや**〔—宮〕山城國にある神社の名。

〔**—の・ゐど**〔—井戶〕山城國にある井戶にして蛙・山吹等の名所たり。後撰集「蛙なく—の山吹の花」

〔**あがた**〔縣〕日向國延岡の舊稱。

あがた・ありき〔縣行〕名㊥田舍に旅行すると

嬉鈔日記「いみたがんとて―のところに渡りたる」

あか-だいこん〔赤大根〕名植 大根の一種。葉は羽狀に分裂して根の赤きもの。紅菜蔔。

あか-だいじん〔赤大臣〕名 脇能にて赤色の狩衣を着るわきづれの異名。

〔あがたいぬかひ〕〔縣犬養〕神魂命八世の孫阿居太都命の後に出で諸國の縣に住し犬を以て鳥獸を獵し天皇の大食饌に備へしため其職掌に因つて氏とす。「見ゆ。

―いらつめ〔―娘子〕歌人なり。萬葉集に

―おほとも〔―オオトモ〕―大伴〕壬申の亂に天武天皇に從ひて大功あり。大寶元年卒す。

―ひとかみ〔―人上〕天平・寶龜年間和歌を以て其名を知られし人。萬葉集に見ゆ。

―ひろとじ〔―廣刀自〕桓武天皇の夫人にして、安積親王・井上內親王・不破內親王の御母なり。寶字六年十月薨ず。

―みちよ〔―三千代〕葛城王の御母。和歌に巧なるを以て其名最も顯る。天平五年薨ず

―もちき〔―持男〕和歌に巧なり。萬葉集に見ゆ。

〔あか-だき〕〔赤瀑〕㊀越後國二王子嶽にあり。高さ二百尺、幅百八十尺。㊁羽後國にあり。大栗川の水源にして高さ百六十尺、幅十二尺。又近傍に尙少しく大なるものあり。

〔あがたじんじや〕㊀〔縣神社〕但馬國豐岡町にある縣社。大己貴神を祀る。㊁〔阿賀多神社〕日向國にある縣社。天照大神を祀る。養老元年の創建なり。

〔あか-だて〕〔赤館〕陸中國紫波郡にあり。應永十七年、伊達政宗鎌倉にありて管領足利義滿に憾あり、蘆名滿盛と潛に亂を作さんと謀り逃れて陸奥に還り此地に據りて兵を擧げたりといふ。

アカ-たな〔閼伽棚〕名〔佛〕佛堂の傍に低く屋根を造り內に二三の棚架を施し下に簀子を設け佛に華水等を供する所。

（なだカア）

あか-だに〔赤壁蟲〕名〔動〕だにの一種。其體楕圓にして赤色。四對の脚を具へ植物の葉の液汁を吸收す。多く麥に寄生して害をなす。

あがた-ぬし〔縣主〕名㊥㊀上古縣を支配せし官人。㊁かばね姓の一。

あか-だひ〔イダ〕〔赤鯛〕名〔動〕たひの一種。色淡樺にして體側に濃き同色の斜線あり。味頗る美なるもの。

あか-だま〔赤玉〕名㊀色の赤き玉。㊁琥珀玉㊂庭石の一種。純赤色のものにして佐渡より產す。「今東」―に出で立たじやといひやりける」

あがた-みち〔縣見〕名㊥田舍を見物すること。古

あがた-みこ〔縣巫〕名㊥あづさみこに同じ。

あか-たん〔赤丹〕名はなあはせにて赤き短冊のつきたる札又は場役のすがはら卽ち梅・松櫻の短冊の揃ひたるものをいふ。「の隱語。

あか-だんご〔赤團子〕名 小兒に對していふ炙

あがた-めし〔縣召〕名㊥正月十一日より十三日までの間に諸國の司を召して任官せられし公事の名。又春の除目ともいふ。

―の-ぢもく〔―除目〕名 前に同じ。公事根源「正月十一日―外官をむねと任ぜらるゝなり」

あがた-もり〔縣守〕あがたを司る官人。

〔あがたもり〕〔縣守〕仁德帝の頃の人。勇敢にして膂力あり。吉備の川鳴川といふに大なる虬棲みけるを一劍の下に殺しきと日本紀に見たり。虬は蛇の屬。

あがた-ゐ〔縣居〕賀茂眞淵の住居の名。翁の先の賀茂縣主たりしに因みて名づけしもの。

―かしふ〔―カシフ〕〔―家集〕眞淵の和歌文章を集めたる書。

〔―うし-の-はか〕〔―大人墓〕眞淵の墓にして武藏國品川町東海寺中にあり。

あか-ぢ〔赤地〕名 織物の地の赤色なるもの。源本盛衰記「―の錦の直垂に」

あがち〔頻〕名㊥あがつこと。わかち。〔―田〕

〔あかぢ-くわうさん〕〔赤地鑛山〕筑前國鞍手郡にあり。石炭を產出す。

あが-ちご〔贖兒〕名㊥陰曆の六月と十二月との大祓に用ゐらるゝもの。あまがつの類。公事根源「一日より八日まで―持ちてまゐる、あさが

れひにて主上に奉る四つのかはらけを指して上にはりたる紙に穴をあけていきをいるるものなり」

あか-ぢき〔赤苣〕名植 ちさの變種。たうぢさに同じ。さんこじゆなともいふ。

あがち-だ〔頻田〕名㊥耕作の爲にとて人民一人ごとに分ち與へられし田。はんでん。

あが-つ〔頻〕他動タ四㊥分ちてくばる。榮華物語「多くの人を―ちて求め奉らせ給ふ」

あか-つき〔曉〕名 夜のあくる頃。ふあけ。あけがた。古今集「―ばかりうきものはなし」「春眠―を覺えず」あかとき。

―おき〔―起〕名㊥朝早く起くること。後撰集「おくしもの―を思はずば」

―がさ〔―傘〕名㊥昔江戸吉原の遊廓にて朝雨の降る時客に買はしめし傘。

―がた〔―方〕名㊥夜のあけとする頃。源氏物語「―などしのびがたし」

―ぐさ〔―草〕名㊥曉鐘の異名。吳竹集「船人の―に慣れねれば夢見ておかず」

―づくよ〔―月夜〕名㊥あけがたのいまだ月の殘れる頃。土佐日記「雲なくなりて―いともおもしろければ」あかへとときづくよ。

―づゆ〔―露〕名㊥曉に置く露。月讀集「―の袖になれぬる」あかときづゆ。

―もち〔―餅〕名 赤小豆の餡を付けたる餅。深更餅。又しんこの異稱。

―やみ〔―闇〕名㊥曉の月のたき頃。續日本後紀「うばたまの―の暗き夜に」あかときやみ。

アカ-つき〔閼伽杯〕名㊥〔佛〕佛に供物を盛りて奉る器。源氏物語「花奉るとてならす―の音」

あか-つきげ〔赤月毛〕馬の毛色の名。月毛に赤みを帶べるもの。緒黃馬。「かじむ。よごる。

あか-づ-く〔垢付〕自動カ四 垢の付きて汚る。あか-づ-く〔垢付〕他動カ下二 物に垢を付く。よごす。「下都賀郡にあり。滿俺を產出す。

〔あか-つ-わうざん〕〔赤津鑛山〕下野國

あか-つ-たん〔亞褐炭〕名 鑛 褐色にして泥炭より稍密なる燃料。亞炭。

あかったり 句 萬事休す。事終る。浮世風呂「なまけ出すと細工は―さ」

あか-つち〔赤土〕名㊀赤黃色を帶び粘氣ある土。壁に塗り又は煉瓦などに燒く。あかに。ばに。赭土。埴。㊁煙草の一種。葉色はあかつちに似て氣は强し。あかまひ。「の。

あか-つち〔代赭〕名 繪具の名。赤黑き色のも

〔あかつ-ひめ〕〔吾娥津姫〕大山祇神の御子。

あか-つゆぐさ〔名植〕多年草にして莖は地上に伏し三小葉合して小葉をなす。夏葉間に長き花軸を出して蝶形の紫紅色花數多攢簇し小頭檬をなす。牧草となし又肥料に充つ。

あか-づら〔赤面〕名㊀赤黑き顏色。赭顏。(多くは人を罵りていふ語)㊁芝居の敵役又は惡形をいふ。顏を赤く塗りて登場するが故なり)

―つぐみ〔赤頰鶫〕名〔動〕つぐみの一種。頰の赤みを帶びたるもの。

あか-てつ〔赤鐵〕名植 熱帶地方に產する常綠喬木。葉は長楕圓形にして厚く葉腋より小花開き漿果を結ぶ。其材は堅く淡赤褐色を帶ぶ。梁柱・船舶其他器財を作るに用ゐる。

アカデミー〔Academy.〕名 西洋諸國の高等なる學校又は學士會院の稱。希臘の哲學者プラトンのアテネに近きアカデムスの公園にて講筵を開き學術を說きしに起る。

あか-てる〔赤照〕名 舞羣にてソヂウムを燃し赤色の光を放たしむること。神佛の靈驗を示す場合などに用ゐる。

あかで-をする〔擦赤手〕句 兩手を擦りて哀願すること。

あか-とき〔明時〕名㊥あかつきに同じ。

あか-とび〔赤鳶〕名 染色の名。鳶色に赤みを帶びたるもの。

あか-とんぼ〔赤蜻蛉〕名㊀〔動〕とんぼの一種春出づるは大く秋なるは小し。身翅共に朱なり。あかゐんば。赤卒。㊁德川時代に鐵砲を負ひて運びし人足。

―羽〔ハネ〕**を取ったら唐辛子**〔タカラ〕。「をいふ。

アカ-とめ〔澁止〕名 船底に澁の入るを塞ぐと。

アカ-とり〔澁取〕名 船の底に溜れる澁をかい出す器。戽斗。

―じやく〔―杓〕名 あかとりに用ゐる杓。

あか-とり〔垢取〕名㊀繻絆の別稱。㊁婦人の用具。象牙にて造り櫛の齒の垢を取るもの。㊂

古昔女の馬に乘る時に鞍の後部を包み餘りを以て衣服の汚るゝを防ぐ爲に馬の尻の上を覆ひ左右の腹の下まで垂れたる赤き打敷。

あかとり-ぞめ〔赤取染〕名 赤色に細き筋を付けて絞染にしたるもの。

あか-な〔赤菜〕名(植) 菜の一種。形あぶらなに似て色紫なり。葉は食用に供せられ、種子より油を搾らる。紫菘。

〔**あかなぎ-さん**〕〔赤薙山〕下野國上都賀郡日光山中にあり。女體山と竝立す。高さ七千四百七十尺餘あり。

あか-なす〔赤茄子〕名(植) 茄科。一年生の草本。葉は羽狀にして小葉分裂し互生をなす。夏楮上に小枝を出して數花を綴る。花冠は黃色なり。果實は球形にして初め黃色なれども熟すれば深紅色となる。其味頗る美なり。生食せられ又ソースに製す。さんごじゅなすび。たうがき。トマトー。蕃茄。「の物。

あかなひ(アナイ)〔贖〕名 あがなふこと。あがなふため

あかな-ふ(アカナウ)〔贖〕他動ハ四 ㊀金錢又は物品を罪の代りに出し其罪を免る。贖罪。㊁代りとして物品を出す。贖物。うめあはせをなす。㊂質物などを請け出す。

あかな-ふ(アカナウ)〔購〕他動ハ四 ㊀買ひ求む。購求。購買。㊁賞を懸けて募る。

あかなべ〔銅鍋〕名 銅にて造れる鍋。

あか-なまづ〔赤鯰〕名(動) ㊀なまづの一種。色の赤きもの。㊁ぎぎの類。全體赤茶色にて長さ三寸許。鰭の刺にて人を螫す。あかれい。

あか-なめ〔赤痢〕名 せきりに同じ。

あか-に〔赤土〕名(俗) ㊀あかつちに同じ。㊁あかにの如き色。あか。

一の-ほ-に副(俗) 赤土の如く顏の美しくなるまでにの意。(語源)「きこしをすゆゑに」

あか-にし〔赤螺〕名(動) ㊀螺の一種。殼の形ささえに似て長く外面は暗褐色、內面は鮮紅色なり。其卵は革質の包被を以て覆はれ其形長刀に似たり。長刀酸漿といふもの是なり。肉は味美ならず。紅螺。

(一しにかーあ)

㊁極めて吝嗇なる人を罵りて呼ぶ語。金を握りて放たざること貝の蓋を緊く閉づるが如きに喩ふ。

あかにし-こばん〔赤西小判〕名 出羽國にて鑄造したる金貨の一種。

あかに-しようけん〔赤荷證券〕名(商) 船荷證券の一種。すべて朱字を以て印刷しあるが故に此名あり。普通のものと異るは運送契約と共に保險契約を併せ行ふにあり。

〔**あか-にふだろ**(ニフウ)〕〔赤入道〕山名 持豐を見よ。「き奇麗なる姿。

あか-ぬけ〔垢拔〕名(俗) 垢ぬけたること。ひんのよ

あか-ぬ-ける〔垢拔〕自動カ下一(俗) ㊀垢とれて清潔になる。㊁姿上品にしてしなやかになる。しろうとげがなくなる。㊂俗氣を離る。

あか-ね〔赤根〕名 ㊀(植) 蔓草にして春莖根より生ず。葉は齒の葉に似、花は白く實は山椒の如し。根は細條多く簇りて黃赤色なり。採りて染料又は藥劑となす。茜草。㊁染料の名。茜草の根を粉にしたるものにして暗赤色なり。蘇枋の舶來前多くこれを用ゐたりといふ。㊂あかれいろの略。「茜草の根にて染めたる色。

一いろ〔一色〕名 赤の少しく沈みたる染色。

一ぞめ〔一染〕名 茜色に染むること又其物。

一まく〔一幕〕名 劇場に用ゐる幕の一種。すべて地色の茜色なるものをいふ。

一もめん〔一木綿〕名 茜にて染めたる綿布。

あか-ねい〔赤鯰〕名(動) あかなまづに同じ。

あかね-かづら名(植) あかねに同じ。

あかね-さす枕 日・晝・君・紫等に冠するもの。「一日はかくろひ」「一晝はしみらに」「一紫野」

あかねすぢ-の-かは(ワ)〔赤根筋革〕名 茜を以て白地に赤く筋を染め出したる革。

あかねーすみれ〔茜菫〕名 小き草にして葉は卵形、花は紅紫色、花瓣の內部に毛あり。

〔**あかね-ぶじん**〕〔赤鷹武人〕周防の人。幹之丞と稱す。奇兵隊總督となり國事に奔走す。慶應二年捕はれて斬に處せらる。年二十八。

あか-ねぶり〔垢抵〕名(動) ㊀細蟲にして風呂場に生じ人の垢をねぶるもの。㊁ねもり。

〔**あかねやそうさ**〕〔茜屋宗佐〕和泉國の有名なる茶人なり。

一はんしち〔一半七〕京都五條新町の豆腐屋にて島原の歌妓美濃屋三勝と情死せるを以て有名なり。

あか-ねり〔赤練〕名 ねりぎぬの赤色なるもの。

〔**あが-の-かは**(カ)〕〔阿賀川 阿賀野川 揚の川〕源を岩代國猪苗代湖及び同國西南隅の諸山に發して松崎港に注ぐ。流程五十七里。舟楫の便あり。

〔**あがの-きざう**(ハウ)〕〔上野喜藏〕朝鮮人。名を尊階といへり。慶長五年細川忠興の命により豐前の上野村にて始めて瀨戸風の茶壺を製造せしを以て上野燒の祖とす。

〔**あが-の-こほり**(オホ)〕㊀〔英賀郡〕備中國にあり 阿賀郡。㊁〔阿我郡〕伊賀國 伊賀郡の一稱。

あがの-やき〔上野燒〕名 上野喜藏の造り始めし陶器の名。「古稱。

あか-は〔明衣〕名(俗) 天皇の召し給ふ湯帷子の

あか-ば〔赤葉〕名 枯れて赤くなれる葉。

あか-ばう(ハウ)〔赤帽〕名 ㊀赤色の帽子。㊁停車場にて乘客の依賴を受け荷物の持ち運びをするもの。皆赤帽を被るが故に此名あり。

あか-ばうず(ハウズ)〔赤坊主〕名(植) 小麥の一種。穗芒の色の赤きもの。あかぼふし。

あか-ばえ〔赤鮠〕名(動) おひかはに同じ。

〔**あがは-くわうゆう**(アガワコウ)〕〔阿川光裕〕伊勢孤野藩士。安井息軒の門に學び維新の際國事に奔走し後地方官となり從六位勳六等に敘せらる。爲人高潔、夙に安場保和に知られ後藤新平を薦陶せしめられたりといふ。三十九年十二月病歿。年六十二。

あか-はげ〔赤禿〕名 山又は人の頭の全く禿げて赤くなれること。又その山又は頭をもいふ。

あか-はじ〔赤櫨〕名 重衣の色目の名。表は赤はみたる黃に裏は蒲黃なるもの。

〔**あかはし-もりとき**〔赤橋守時〕〕相模守と稱す。北條高時に代つて執權たり。元弘三年新田義貞に攻められて自殺す。「旗。

あか-はた〔赤旗〕名 ㊀赤地の旗。㊁平家の軍

あか-はだ〔赤肌〕名 ㊀肌の皮の剝けて赤くなり居ること。㊁あかはだか。古今六帖「一の山は身をこそかくさゞりけれ」

あか-はだか〔赤裸〕名 ㊀まるはだか。すはだか。㊁はだかむぎの一名。

あかはだかとも〔赤裸伴〕名 上古の寶劍の名崇神天皇の時蒐祇の川上の宮にて一千口を鍛へたる中の一。

あかはだ-やき〔赤膚燒〕名 陶器の一種。正保年間大和國郡山にて野々村仁清の燒き始めたるもの。其器には赤膚又は赤膚山等の印を捺す。多く酒器に用ゐる。

〔**あかはだ-やま**〔赤膚山〕大和國生駒郡都跡村大字五條村の西にあり。赤土にして不毛なるより此名あり。

あか-はぢ〔赤恥〕名 明恥の義にて、おらはなるはぢをいふ。卽ち人の前にてうけし恥。

一なかく。句 人の前にて大恥辱を受く。其時滿面赤らむより赤恥と書くなり。

あか-ばち〔赤蜂〕名(動) 蜂の一種。土中に棲める翅黃赤にして身に黑と黃赤との斑あるもの。あかすぢばち。穉蜂。

あか-はつたけ〔赤初茸〕名(植) 菌の一種。初茸の頭部に赤色を帶びたるもの。食せらる。

あか-はとり〔明衣〕名 すべて祭式に用ゐらるゝ清き衣の總稱。

あか-はな〔赤鼻〕名 特に赤き鼻。さくろばな

あか-ばな〔赤花〕名(植) ㊀小き草。葉はうつぼぐさに似て對生し花は四瓣にして色紅なり。柳葉菜。㊁重衣の色目の名。あかいろに同じ。㊂べにばなにて染めたる色。

〔**あかはに-げんざう**(ゾウ)〕〔赤埴源藏〕次のあかばねしげかたを見よ。

〔**あかばね-しげかた**〕〔赤埴重賢〕赤穗四十七士の一。俗にいふ赤垣源藏の事なり。淺野長矩に仕へて馬廻たり。元祿十六年二月四日死を賜はる。年三十五。

〔**あかばね-しらう**(ロウ)〕〔赤羽四郎〕會津若松の藩士。幼にして洋學を學び外交官として辨理公使・特命全權公使となり、明治四十三年十二月薨ず。年五十六。「あり。吾河郡。

〔**あがは-の-こほり**(ワオホリノ)〕〔吾川郡〕土佐國に

あか-ばへ(ハヘ)〔扁前〕名(動) 飴色を帶びたる蠅。

翅に褐色の紋樣あり。好んで人糞に集まる。べっかふばへ。「らむ。

あかばむ〔赤〕自動マ四 次第に赤くなる。あかばむ。

あかはら〔赤腹〕名(動) ㊀つぐみに似たる鳥にして頭黑く胸と腹とは赤し。能く群をなす。㊁ゐもり。㊂うぐひ。

あかはら〔赤腹〕名㊃ 赤蜻に同じ。

あがひ(イガ)〔贈〕名㊃ あがなひに同じ。字治拾遺「酒果物など取出させて—せんといひかためて」

あかひき〔赤蟇〕名(動) ㊀ひきがへるの一種。赤色を帶びたるもの。赤蟾蜍。㊁あかがへる

あかびき〔赤引〕名(動) 蠶の一品種。上簇前に體の淡紅色に透き通るもの。

あかびきのいと〔赤引絲〕名㊃ 特に淸淨に作りたる青くして光ある絲。伊勢大神宮の六月十二月の月次祭の時神衣を織るに用ゐる。

あかひげ〔赤髭〕名 ㊀赤色の髭。㊁歐米人を嘲り呼ぶ語。㊂(動) 鴝鳥に似たる鳥。頭部より背にかけ上部は赤茶色、下部は雌は灰色なれど雄は喉より胸腹にかけて黑色なり。雄鳥は籠鳥として愛玩せらる。琉球鴝。朝鮮鴝。

—むし〔—蟲〕名(動) 小き蟲。長さ一二分、體色綠にして觸角は赤巴、頭は三角形なり。早春より現はれ麥の若葉を吸ひ次で苗代の幼稻に懸りて之を害す。「じ。

あかびすね〔赤翡翠〕名 みづこひどりに同

あかびそ〔紫蒐〕名(植) 蒐の一種。莖葉共に紫蘇の色に似たるもの。「櫃。

あかびつ〔明櫃〕名 すべて祭禮に用ゐる淸き

あかひとしふ(ヒトシ)〔赤人集〕山邊赤人の和歌を集めたる書。

あかひひな(ヒナヒ)名(植) すべりひゆに同じ。

あかひも〔赤紐〕名 ㊀赤色の紐。㊁小忌衣の肩に着くる飾紐。黑と紅との絹を帖み組合せて造り蝶鳥の紋を白く畫く。垂紐。

（あかひも 二）

—の枕 長きに冠す。貫之集「—ながくぞ我は神紫赤なるもの。昔染料に用ゐたり。しやうえんじ。「に仕へむ」

あかひる〔白晝〕名㊃ まひる。日中。落窪物語

あかふ〔赤斑〕名 赤き色のまだら。

あかぶ〔赤〕自動ハ四㊃ 赤らむ。赤くなる。字治拾遺「鬼は—びかへりぬ」

あがふ(アガ)〔贈〕他動ハ四㊃ あがなふに同じ。萬葉集「—命は妹が爲こそ」

あかぶくもち〔赤福餅〕名 餡をぬりたる餅に指におさへたるかたあるものにして伊勢宇治の名物なり。「れたる袋。

あかぶし名(植) あふさ。さうに同じ。

あかぶち〔赤斑〕名 獸類の赤色の斑紋。

アカふる〔振闕伽〕自動ラ四(佛) 眞言宗の語。水を頭に振り注ぐ。灌頂す。

あかべ〔赤目〕名 ㊀あかめの轉。あかめ。㊁を見よ。あかべい。㊂(植)あかめがしはの略。

あかべよろひ(ヨロイ)〔頸鎧〕名 上古の短甲胄に具したるもの。全體鐵にて作り肩より胸にかけて左右より合せ其上に更に襟形のものを着く

あかへりさしがめ名(動) 此蟲の體色黑く前胸の一部及腹部の周緣は赤色を呈し極めて美麗なり。「名。

〔あかほ(アコ)〕〔赤穗〕播磨國赤穗郡にある町の

〔—じやうし(ヂヤウシ)〕〔—城址〕赤穗町街の南端字上假屋に在り。天正年中備前の宇喜多直家此に城き、慶長五年池田輝政姫路の城主となりてこの地を領し、尋で淺野長矩此に居りしが、元祿十四年吉良義央を刃傷して沒收せられ、一度永井氏の領となりしが、寶永三年後は森氏累代の城主となり、明治維新に至る。

—ぎじんろく〔—義人錄〕赤穗義士復讐の顚末を漢文にて記述したる書。室鳩巢の著

—じほ(ヂオ)〔—鹽〕名 赤穗附近に產する鹽。にがり少くして品質最上なり。

—ねぶん〔—遺文〕赤穗義士の事に關し公私の事を記したるものにして著者詳らかず。

あかぼうふり〔赤子子〕名(動) ぼうふりむしの色の赤きもの。あかぼうふら。

あかぼし名 ㊀〔赤星〕赤色の星。㊁〔明星〕㊃金星。㊂神樂歌の曲名。「でゝくやしき」

—の枕 あかに冠す。古今六帖「—あかぬ心のい

〔あかぼしそうはん〔赤星宗範〕肥前國天草に住し鍼醫を業とす。幼より德川氏を怨み益田時貞を奉じて天草の亂をなし、寬永十五年正月敗死す。

〔あかほつじやうし(ヂヤウシ)〔赤穗津城址〕羽後國龜田町にあり。應仁元年赤穗津孫九郎の領する處にして、其子孫相繼ぎて住せしが、慶長五年最上義光のために滅さる。元和九年更に岩城吉隆の有となり、世々相繼ぎて以て維新に至る。龜田城ともいふ。

あがほとけ〔吾佛〕代 あ(吾)を見よ。

〔あかほねじま〔赤穗根島〕伊豫國越智郡に屬す。周回一里半餘。「に同じ。火燒麥。

あかぼふし(ホウシ)〔赤法師〕名(植) あかばうす

あかほん〔赤本〕名 ㊀くさざうし。享保頃江戸にて出版せられし小形の繪入本。表紙の色の赤かりしが故に此名あり。㊁西曆千七百九十三年ロイド組合に反對せる船主等同盟して刊行せる新船名錄をいふ。綠本の對。

〔あかぼりみねきち〔赤堀峰吉〕料理の名人なり。各女學校に料理法を敎授し其著青世に行はる。明治三十七年歿す。年八十九。

アカま〔澁間〕名 和船の大繪口下の繪內の稱。此邊より澁を汲出すにより此名あり。

あかま〔赤間〕名 あかまいしの略。

—いし〔—石〕名 長門國厚狹郡近傍より產する石の名。赤間關より四方へ送るが故に此名あり。色の紫赤なるを最上とす。硯材又は庭石とす。

—ぐさ〔—草〕名(植) さはあらゝぎに同じ。

〔あかまがせき〔赤間關〕しものせきを見よ

〔—かいけふ(カイケフ)〔—海峽〕赤間關と門司との間をいふ。距離二十五町餘。

〔あかまきこやま〔赤壓木古山〕加賀國にあり。高さ五千八十三尺。

あかます〔赤鱒〕名(動) ㊀鱒の一種。體は藍色にして肉は紅色を帶ぶ。べにます。㊁はたじろの類。赤き斑ある魚。

あかまだらか〔赤斑蚊〕名(動) 蚊の一種。普通の蚊より小く腹と脚とに褐色の輪紋あり。

あかまつ〔赤松〕名(植) 松の一種。葉質固かゝずして二葉一所より生じ樹皮赤褐色を帶ぶ。材は白質堅重久しきに堪へて朽ちず。家屋、船艦、器械、薪炭等に適し效用至て多し。又觀賞用として栽培せらる。

〔あかまつ〔赤松〕姓は村上源氏。世々播磨に住す。村上天皇の皇子具平親王の子師房始めて源姓を賜はる。其裔季利の時に至り赤松郷に白旗城を築く。依りて氏の名を赤松と稱す。

〔—いう〔—遊〕醫にして篆刻の名人。字は眉公、息斑、流石と號す。高梨擂皮、葛飾子琴に學ぶ。文化五年歿す。年五十二。

〔—うぢのり〔—氏範〕則村の子。勇敢にして膂力あり。初め南朝に從ひしが後叛して足利氏に附したるも幾もなくしてまた降る。元中三年足利氏と戰ひて播磨國の淸水に自殺す。年五十七。

〔—こさぶらう(アコサ)〔—小三郎〕宇宙堂と號す。信州上田の藩士。英蘭語に通じ兵法に精し。出でゝ薩藩に仕へしが慶應三年九月刺客の爲に殺さる。年三十七。譯書英國步兵練法は本邦の兵制の基く所なりといふ。

〔—さうしう(シウ)〔—滄洲〕播州の人。名は鴻、靜愚翁と號す。最も經史に通ず。赤穗侯森氏の儒員にて遂に家老に至る。享和元年歿す。年八十一。

〔—さおう〔—沙鷗〕名は舊邦、字は新甫、播磨國の人。江戸に出でて儒者たり。明和四年歿す。年一百。

〔—さだのり〔—貞範〕則村の子。筑前守と稱す。建武年中足利尊氏に屬せしが後離叛して世貞と稱せり。

〔—さだむら〔—貞村〕圓心の二男。足利義敎に重用せられしが其弑逆に會ふの日自ら抗する能はず、又殉する能はざるを以て傍人の嘲笑する處となり慚悔遂に病を得て歿す。

〔—しゆんあん〔—春庵〕本姓は越智氏。播

州の人にして儒醫を兼ね、道學者を以て自ら任ぜり。

—たいゆ〔—太度〕江戸の人。儒を以て松山侯に仕ふ。明和四年歿す。年五十九。著書頗る多し。就中九經逃の如きは百三十卷あり。識者嘆服す。

—のりすけ〔—範資〕則村の長子。叫村の義を起すや常に從ひて力戰す。後足利尊氏に降り楠木正行と四條畷に戰ふ。晩年薙髮して世範と稱す。世稱して七條赤松氏と云ふ。

—のりすけ〔—則祐〕則村の第三子。初め僧となりて妙善と號す。護良親王の義を起さるゝや令旨を奉じて父則村を說く。後叛して足利氏に降る。建德二年歿す。

—のりすけ〔—教祐〕滿祐の子。嘉吉の變父に從ひて白旗城に據り軍敗れて伊勢に奔る。後自殺す。

—のりむら〔—則村〕茂則の子。元弘建武の間に起り後醍醐天皇に忠誠を盡して軍功あり。後叛して數々朝敵となる。剃髮して圓心と號し、正平五年歿す。年七十四。

—みつすけ〔—滿祐〕則村の曾孫。義則の長子。薙髮の後性具と號す。足利義持の時一族持眞の爲に黜けられしが後許されて義教に仕ふ。永享元年自殺す。年六十一。

—みつのり〔—光範〕則村の孫。範實の子正平年中足利義詮に從ひて吉野を犯し歸りて後佐佐木高氏に陷れらる。

—よしのり〔—義則〕晩年入道して性松と號す。矮小なるを以て又三尺入道の稱あり。播磨備前兩國の守護たり。元中年中山名氏清を京師に敗る。後勅して鳳凰桐の章を賜はり、又幕府より二引兩の章を授けらる。應永三十四年歿す。年七十。

—よしむら〔—義村〕政村の長子。明應八年義村二郎と稱し、上總介に任じ下野守民部少輔播磨守を兼ぬ。後剃髮して常印と號す。大永二年刺客の爲に殺さる。

—らんたい〔—蘭臺〕滄洲の長子。赤穗の儒官たり。幼より詩文に長ず。天明年中歿す。年五十一。著書赤城風雅集外數種あり。

—ろさい〔—魯齋〕滄洲の第二子。赤穗の儒官たり。最も詩に長ず。二十三歲にして歿す。魯齋詩鈔等の著あり。

—ゑんしん〔—圓心〕あかまつのりむらの項に同じ。

あかま-ぬま〔赤間沼〕下野國下都賀郡赤間村にあり。周回四里餘。

あかま-の-みや〔赤間宮〕官幣中社。長門國下關市阿彌陀寺町にあり安德天皇を祀る。

あか-まひ〔イマ〕〔赤舞〕名 あかつち㊁を見よ。

あか-まへだれ〔ダレマエ〕〔赤前垂〕名 ㊀赤き前垂をかけたる飲食店などの女中。㊁㊃でたんなに同じ。丹波寛作〔泊り泊りの—にじやらくら致さないやうに〕

あか-まる〔赤丸〕名 赤く圓形を描きたるものをいふ。

あかまる-じやうし〔ウシヨ〕〔赤丸城址〕越中國西礪波郡にあり。天正年中朝山國松の居城にして上杉謙信に攻められて落城す。

あか-ま-る〔赤〕自動ラ四 赤くなる。あからむ。

あかまろ-やなは〔ナワ〕名 八手網の兩側に附する手繩。「にあり。泉質單純泉なり。

あかま-をんせん〔赤間溫泉〕伊豆國加茂郡

あか-み〔赤身〕名 ㊀肉の色の赤き部分。㊁材木の中心の色の赤きところ。周圍のしろみ又はしらたといはるゝところより堅牢なり。心材

あか-み〔赤味〕名 赤き色の度合。

—じやうご〔ウジヨ〕〔—上戸〕名 顏の赤き大酒家。酒飲謔 —の顏付は酒呑とこそ覺えたれ

—ばしる〔—走〕自動ラ四 あかばむに同じ。

—わたる〔—亙〕自動ラ四 すべて赤くなる。

あか-ミソ〔赤味噌〕名 味噌の一種。白大豆にて製し其色赤きもの。味鹹し。白味噌の對。

あか-み-どり〔朱鳥〕名 ㊃赤き色の鳥。

あかみむし-てふ〔ヨウチ名〕動 小き蛾にして頭胸は茶褐色、腹部は濃灰色なり。五六月羽化す。綿の害蟲なり。

あか-む〔赤〕自動マ四 あかばむに同じ。

あか-む〔赤〕他動マ下二 赤くなす。〔顏を—〕

あが-む〔崇〕他動マ下二 たふとぶ。あがめうやまふ。轟敬す。崇拜す。

あが-む〔贖〕他動マ下二 ㊃あがなふに同じ。

あか-むけ〔赤剝〕名 皮膚の赤くすりむけたること。

あか-むし〔赤蟲〕名(動) あかありまきに同じ。

あか-むつ〔赤鰹〕名(動) むつに似て赤褐色を帶び體長二尺餘、深き海底の岩礁内に棲息す。秋季は肉美味なれども春季は佳ならず。

あがむもの-の-つかさ〔アガンモノ〕〔贖贖司〕名 ㊃古昔刑部省に屬せし役所。罪人の資財・沒官物等を收むることをつかさどる。

あか-むらさき〔赤紫〕名 むらさき色の赤みあるもの。「椒房—青娥老」

あか-かん〔阿監〕名 宮女の長をいふ。監宮。長恨歌

あ-かん 句㊃ 成らず・見込なし・能力なし・卑怯なり等の意に用ゐらるゝ關西の語。

あかん-がは〔ワガ〕〔阿寒川〕釧路國にあり。源を阿寒湖に發し釧路川に合す。長さ三十里餘。

—くわうざん〔ワウザン〕〔—鑛山〕釧路國阿寒郡にあり。硫黃を產出す。

—くわうせん〔ワウセン〕〔—鑛泉〕釧路國阿寒沼の西岸にあり。「六合目にあり。

—こ〔—湖〕釧路國阿寒郡雄阿寒嶽の五

—だき〔—瀑〕釧路國阿寒郡雄阿寒嶽にあり。高さ五百尺、幅八十三尺餘。北海道第一の大瀑布たり。

—ぬま〔—沼〕釧路國にあり。周回四里半餘

アカンザス〔Acanthus.〕名 ㊀植 前世界に存せし南ヨーロッパ產の一種の植物にして葉は鋸齒狀なり。㊁アカンザスの葉を建築上に應用したる模樣。ギリシヤ人始めて之を應用し現今其應用益々盛なり。

（アカンザス）

あかん-ぼう〔ワウ〕〔赤坊〕名 ㊃あかんぼに同じ。あかんぼ。嬰兒。東京の語。

あかん-べい 名 あかめ㊁の轉。

あか-め〔赤女〕名(動) ㊀ぼらに似たる魚にして背は蒼色に赤色を帶び腹部は暗白色なり。西海地方に產す。此魚の卵巢を乾製したるものを、からすみと稱す。伊勢鯉。㊁鯛の古名。日本紀「海神召—口女問レ之」

あか-め〔赤目〕名 ㊀一種の眼病。眼球虹彩の色素先天的に缺乏し或は缺損せる症。此症に犯れるものは眼球虹彩赤色を呈す。㊁指にてしたまぶたを引きひろげ赤き裏を出して事をいなみ諾せざる意を示すことにて人を侮辱する行爲なり。あかんべい。

あかめ-がしは〔シワガ〕〔赤芽柏〕名 植 喬木にして山野に多し。芽の色赤きが故に此名あるなり。葉は掌狀に分裂し花は雌雄異株に生ず。古名をあづさ・梓といひ弓の材とす。支那にては版木の材とす。あかがしは。「焚きたる飯。

あか-めし〔赤飯〕名 小豆又は大角豆をまぜて

あかめ-だひ〔イダ〕〔赤目鯛〕名(動) めばるに似て全身に紅と綠との斑ある小魚。おきめばる。えびすだひ。

あか-もの 名 植 高山の石間に生じ高さ尺に過ぎざる小木。莖に褐色の毛を生じ葉は卵形にして厚く常綠なり。下垂せる鐘形の小花を開き實は圓くして紅熟すれば味甘し。いはぜ。

あが-もの〔贖物〕名 ㊃身の罪禍をあがなひ祓ふ爲に出す物。後拾遺集「御—の鍋を持ちて」

—やく〔—役〕名 なでものづかひに同じ。

あかやす-ざん〔赤安山〕㊀岩代上野の國境字長阪の山中にあり。其最大なるもの高さ百八十尺、幅十尺にして所謂赤目四十八瀑の勝景あり。阿彌陀瀑ともいふ。

あかめ-ふぐ〔赤目河豚〕名(動) ふぐの一種。目赤く背に雲の如き青黑色の斑點あり。空氣を吸入して體を膨脹せしむる性あり。肉美味なれども卵巢に毒を含有す。

あか-も〔赤裳〕名 赤き色の裳。女の紅袴。

あか-もがさ〔赤疱瘡〕名 ㊃はしかに同じ。柴

—今年は—といふもの出で來て上中下

疾みのゝしる

あか-もく 名 植 各地沿海の暗礁に生ずる海藻。其色暗褐色なるを以て此名あり。莖は五六尺より丈餘に及び細き枝を出して一寸ばかりの細き葉を付け、圓柱狀の氣胞を有す。肥料に用ゐる。なめたはら。

あか-もず〔赤百舌〕名(動) 百舌の一種。頭部より尾部に至る迄一樣に赤褐色を呈せるもの。

あか-もの 名 植 高山の石間に生じ高さ尺に過ぎざる小木。莖に褐色の毛を生じ葉は卵形にして厚く常綠なり。下垂せる鐘形の小花を開き實は圓くして紅熟すれば味甘し。いはぜ。

あかやす-ざん〔赤安山〕㊀岩代上野の國境

にあり。上野國にては北間田山と云ふ。高さ六千四百餘尺。㊁下野國上都賀郡にあり。上野國にては中間田山と稱す。

あか-やに【騏驎竭】名 植 唐木にして葉はゆすらに似て三角なり。根は藥用に供せらる。

あかゆ-をんせん【赤湯溫泉】㊀羽前國東置賜郡赤湯町にあり。泉質 硫黃泉なり。㊁陸前國玉造郡にあり。泉質鹽類泉なり。

あから【赤】名 ㊐ 酒の古名。之を飲めば顏赤らむに起れるなり。

あから【赤】接頭 色の赤きを表す爲に冠するもの。「—顏」

あから-か【赤】名 ㊐ 顏色などの赤みありて麗はしきこと。「しきにいふ。

あから-がしは(シガ)【赤柏】名 ㊐ ㊀うるはしく色づきたる柏の葉をいふ。萬葉集「いなみぬの—はときはあれど」㊁北野天神十一月朔の祭をいふ。赤柏に供御を盛りて奉るよりいふなるべし。紅柏。

あから-がほ(オガ)【赤顏】名 顏の赤みを帶びたるを いふ。

あから-け-し【赤】形一 赤らかなり。赤くあり。

あから-こ【贖兒】名 あかちごに同じ。

あからさま-に 副 ㊀うちあけて。つゝみかくすことなく。明白に。㊁たちまち。俄に。倏忽。宗種物語「いとま許させ給はぬをしひ申して—まかでぬ」㊂かりそめに。筑紫物語「火桶に火などおこし置きて夜居の僧の—出でたる跡と見ゆ」

—す 自動サ變 ㊐ にはかに死ぬるにいふ。天折

あからし【慇懃】形一 ㊐ ねんごろなるさま。

あからし-ぶ【慇懃】自動ハ四 ㊐ ねんごろにす。あはれむ。いつくしむ。

あからしまかぜ【暴風】名 ㊐ はやちに同じ。

あからたちばな【赤橘】名 ㊐ たちばなの實の赤く色づきたるもの。

あから-ひく【赤引】枕 日・朝・肌などに冠す。萬葉集「—日も暮るゝまで」「—朝行く君を待てば苦しも」「—肌も觸れずて寢たれども」

あから-ぶ【赤】自動ハ四 ㊐ あかばむに同じ。義調「赤玉の御—びまし」

あから-ぶ【赤】他動ハ下二 ㊐ 赤くなす。

あから-ぶ【明】自動ハ下二 ㊐ あきらむに同じ。昭察。繪日本紀「誰と共にかもみそなはし—べ給はむとなげきたまひおほしますと」

あから-む【赤】自動マ四 自然に赤く色づく。赤みを帶ぶ。赤くなる。赫。

あから-む【赤】他動マ下二 赤くなす。赤みを帶ばしむ。赫。

あから-め【側見】名 ㊐ 目的のものを見ずして他に目を外すこと。わきめ。よそめ。金葉集「岸の紅葉に—なせそ」

あからめ-さ-す 自動サ四 ㊐ 俄に變る。またたくうちにかはる。

あから-をとめ【紅顏孃子】名 ㊐ 顏の赤みを帶びて美しき少女。古軍記「—をいざさばよろしと」

あから-をぶね【赤小船】名 ㊐ 赤く塗りたる船あけのそほぶね。萬葉集「沖ゆくや—につとやらばけだしひとみてひらきみんかも」

あかり【明光】名 ㊀物の明に見ゆるひかり。「日の—」光線。「燈の—」燈火。㊁ 身に暗きことのなき證明。あかし。「—を立てる」

—が立つ。句 確實なる證據の出て來て嫌疑のはるゝをいふ。

あがり【上】名 ㊀あがること。のぼること。上昇。昇進。㊁學藝の上達。㊂物價の騰貴。㊃神佛などに供ふること。㊄事物の成就。結果。終局。㊅物を貸し又は賣りて得たる金高。收入。收益。㊆最終の點に達すること。決勝點。「雙六の—」㊇養蠶にて上簇に同じ。㊈蟲魚などの死ぬること。

あがり【上】接尾 他の語の下に付きて或階級の生活を終へし者なる意を添ふる語。「兵隊—」

あがり-うま【駻馬】名 ㊐ 躍り狂ふ馬。はねあがるうま。はねうま。跳馬。「昇降。

あがり-おり【上下】名 ㊐ のぼるとくだると。

あがり-がき【熟柿】名 よく熟したる柿。

あがり-かひこ(イカ)【殭蠶】名 病みて死にたる蠶。あがりこ。

あがり-かぶと【上胃】名 面頰に鬚あるかぶと。

あがり-がまち【上框】名 玄關などの上り口にある框。「建物の入口。

あがり-くち【上口】名 階段などに上るべき所。

あがり-こ【殭蠶】名 あがりかひこに同じ。

あがり-ざか【上阪】名 のぼりざかに同じ。

あがり-さがり【上下】名 ㊀たかきとひくきと。高低。㊁あがりおりに同じ。

あかり-さき【明先】名 ㊐ 明りのさしくる前の方「—にたちふさがる」

あがり-ざしき【揚座敷】名 あがりやの上等なる間。德川時代に旗本その他身分ある罪人を監禁せし所。

—いり【—入】名 揚座敷に拘禁するをいふ。

あがり-さわ-ぐ【驤】自動カ四 ㊐ はねまはる。枕草紙「馬の—ぎたるも怖しくおぼゆれば」

あかり-しな 名 ㊐ あがる時。

あかり-しやうじ(ショウ)【障子】名 細き桟を格子に組みて骨となし之に障子紙を貼りつけたるもの。今は風に障子といふ。古は今の襖唐紙を障子といひたりき。亮隔。

あかり-しやうじ(ショウ)【石藥 寶丹に似たる藥にして暑氣に犯されざる爲に服用するもの。

あかり-しよゐん【明書院】名 床の間の脇の窗付の文棚。つけしよゐん。出し文棚。

あがり-せん【上膳】名 食事を終りたるあとの膳

あかり-だち【明太刀】名 儀式に佩用する太刀。儀刀。「子の足をかくる處。

あがり-だん【上段】名 高き處に登る階段。梯

あがりたる-よ【上代】名 ㊐ おほむかし。上古 西氏物語「—にはありけり」

あがりて-の-ひと【上代人】名 ㊐ あがりたるよの人。上古の人。源氏物語「猫—にはあたるべくもあらじをや」

あがりて-の-よ【上代】名 ㊐ あがりたるよに同じ。大鏡「いと—は知り侍らず」

あがり-てんち【上田地】名 德川時代持主の逃げなどしたる時一時官に取り上げ置く田地をいふ。土地のみならば上り地。田畑のみならば上り田といふ。

あかり-どこ【明床】名 あかりしよゐんに同じ。

あかり-とり【明取】名 窗の如き日光をひき入るゝ處。仰窗。

あがり-なまづ【上鯰】名 ㊐ 放蕩して金錢を消費し蠹し蠹中の空しきこと。昔は衣裳たんどだてを蠹し遊所に立入るを鯰のぬめるといふ。遂にぬめる事ならず死にたる鯰のぬめりなくなりし如くになれるが故にいふ。巾着のいかのぼ

あがり-の-みや【殯宮】名 あらきに同じ。「り。

あがり-ば【上場】名 ㊀舟より岸に上る場所。㊁高處にのぼるべき入口。

あがり-ばな【上花】名 遊廓にて煎茶の隱語。

あがり-ばな【上端】名 家の入口。「—で立話」

あがり-ぶち【上藤】名 紋所の名。さがり藤の逆なる形のもの。

あかり-まど【明窗】名 あかりとりのまど。

あかり-んご【赤林檎】名 林檎の一種。全部紅色にして美なり。肉も亦赤くして味甜し。貯藏久しきに堪ふべにりんご。

あがり-め【上目】名 上の方へひきつりたる目。

—さがりめ【—下目】名 ㊀小兒の戲の一。兩方のひとさし指を左右の目の傍にあてゝ「あがり目さがり目ぐるつと廻つて猫の目」といひながら廻轉せしむるもの。㊁ 猫の目に因みて心の變り易きこと、又その人をいふ。

あがり-もの【上物】名 ㊀貴人の飲食物の敬稱。㊁參詣人の奉納せし神佛の供物を神社寺院にていふ稱。

あがり-もの【揚物】名 ㊀田畑より收め得たるもの。收穫。㊁物を貸し又は賣りなどして得たる收入。㊂古くなりたる物。不用になりたる物。廢物。

あがり-や【揚屋】名 德川時代の身分ある罪人を監禁せし牢獄。

—いり【—入】名 揚屋に拘禁するをいふ。

あがり-やしき【上屋敷】名 德川時代に官に沒收せられたる屋敷。

あか-る【明】自動ラ四 あかるくなる。夜明く。枕草紙「山ぎは少し—りて」「ひて顏—」。

あか-る【赤】自動ラ四 赤くなる。あからむ。「醉

あか-る【開】自動ラ四 自然に開く。

あか-る【別】自動ラ下二 ㊐ わかる。はなる。源氏物語「人々—けはひなどもするたり」

あが-る【上】自動ラ四 ㊀下より上へ行く。高きにのぼる。上昇す。揚。㊁官職などのぼりすゝむ。昇進す。「位が—」進。㊂價の高くなる。「米が—」騰貴。㊃技藝學術などの上達熟練す。「學問もうでも—」熟達。㊄事の成就す。できる。「仕事が—」㊅事の終る。たさまる。「雨が—」

㊐蟲魚の死ぬるにいふ。㊑馬のはねまはるにいふ。「驟」。㊒宮中・役所又は目上の人のところへ参る。㊓たさまる。收入になる。「家賃五百圓―」㊔とりあげらる。沒收せらる。「役が―」「扶持が―」㊕供へ物となる。「花が―」「燈明が―」㊖食ふの敬語。「召―」㊗見えのよくなる。「風采が―」㊘甚古くあり。「―りたる世」「上古」

[揚]高くあがる義。[蔣紀]「我武維―」「―言」

[昂]あふぬく又はのしあがるの義。[軍策]「不二自激―」「―軒―」「牛―馬」「―貴」

[騰]おしあがる義にて勢強き意なり。[韓紀]「累―首のあがること又はれまはる義。[三國志]「龍―虎視」「騰―」「言」

[颺]風に乘じてあがる義。「舟搖々以輕―」―

あがる[接尾]㊐動詞に添へて卑罵の意を表すに用ゐる語。やがる。くさる。[管原傳]「身が前へ出―らう」「猫が來―」

あがるくひ[ヰ]「麻柱」名㊐あししろに同じ。字治拾遺「―の中におちつまりて」

あかる・し[明]形一㊀光線によりて物の明かに見ゆ。「―き室」㊁其の道にくはしくして知らざるなし。通曉す。「法律に―」

―けりや月夜。[諺]人の推量していふことの誤れるを嘲るにいふ。

あかる・たへ[ヱ]「明妙」名㊐つやのある美し

あかる・み「明處」名あかるきところ。あかるき方―へ出で」

あかれ「別」名㊐わかるゝこと。

―**あかれ**・に「―別」副㊐べつべつに。わかれわかれに。[大鏡]「太政大臣爲光をのこ君達の御母皆―おはしき」

あかれ・もる「別散」自動ラ四 わかれてちりぢりになる。[源氏物語]「人々も皆ところ〳〵―りつゝ」

あかれ・ゆく「別行」自動カ四 わかれて行く。[源氏物語]「侍ふ人々もやう〳〵―きなどして」

あかゐ[赤猪]名(動)赤き色のゐのしし。

アカ・ゐ「閼伽井」名(佛)佛に供ふる水を汲みとる井戸。[新千載集]「たえずくむ―の水の」

あかゐ・あくゐもん「赤井惡右衛門」丹波の人。織田信長に仕へて屢々軍功あり。天正七年明智光秀に攻められて戰死せり。

あかゐ・しらべ「―調」名㊐律の調子。秋の時候にかたへるもの。[拾遺抄]「忍ぶるをねにたてよとやことひさは―の聲のかぎりを」

あかゐ・たのみ「―田實」名㊐稻をいふ。稻を田實といふこと古今集に「のちまきに濕れて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞきく」とあり

あかゐ・たむらさう[ヲ]「―田村草」名植山野に自生する草。冬季中も枯れず。下葉は地に就きて叢生す。霜雪の時背は紫色なるが暖に向へば綠色となる。花は淡紫色又は白色なり。鼠尾草。「垂るるもの。あきのたりほ。

あかゐ・たるほ「―垂穗」名㊐秋稻のみのりて秋期に行はれしもの。

あかゐ・ぢもく「―除目」名㊐京官の除目に

あかゐ・つかさめし「―司召」名㊐前に同じ。

あかゐ・となり「―隣」名㊐秋に接近せる季候卽ち夏又は冬をいふ。[後撰集]「垣根なる草もひとめもしもかれぬ―や遠ざかるらん」

あかゐ・とまり「―止」名㊐秋のなはり。[新拾遺集]「おちつもる紅葉を見れば一とせの―はあじろ

氣象學上にては九・十・十一の三ヶ月間を其季節とす。[太陰曆]にては七・八・九の三ヶ月なり。三秋。[長南]「秋之爲狀也、其色慘淡、煙霞雲霧、其容清明、天高日晶、其氣慄烈、砭二人肌骨一、其音蕭條、山川寂寥」

あかゐ・あふぎ[ヲ]「―扇」名婦人の寵愛の衰へたるを扇の秋の來りて捨てられたるに喩ふ。漢の班婕妤の故事に基く。[毛詩]「品集」「今はとて人はおくとも七夕の―の名をば忘れじ」[拾遺抄]「怨恨」「妾身似―君恩絶二履棄一」

あかゐ・いろ「―色」名㊐秋の景色。[拾遺集]「―なる星あひの空」

あかゐ・かぎり「―限」名㊐秋のなはり。[拾玉集]「―そ秋の夜の月」

あかゐ・かたみ「―形見」名㊐冬になりて秋のなごりを思ひ出づる種となるもの。[玉葉集]「うつろはで庭の白菊殘らなむ―と明日よりは見む」

あかゐ・きりんさう[ヰキヤウ]「―麒麟草」名植きりんさうの一種。葉はよめなに似て色濃し莖は紫黑にて二尺許。秋の末黃色の小頭花枝に滿ちて長穗をなす。

あかゐ・こころ「―心」名㊐㊀秋のものさびしき心。ものがなしき心。[千載集]「―を恋といひけん」㊁厭ふ心。心の變ること。

あかゐ・ごろ「―聲」名㊐秋風の落葉などを拂ふ音。又砧の響などをいふ。[夫木集]「荻の葉にかはりし風の―やがて野分の露くだくなり」

あかゐ・さかり「―盛」名㊐秋の景色のまさり

あかゐ・さぶ「―寒」名㊐秋の末に降る雨

あかゐ・しぐれ「―時雨」名㊐秋の末におく霜。[千載集]「すさか山もみぢせよとて神世より―やふりはじめけむ」

あかゐ・しも「―霜」名㊐㊀秋の末におく霜。[新古今集]「淺ちふや釉にぐちにし―」㊁劍の異名。

あかゐ・ぞ「―衣」名㊐秋の時候にかたへるもの。[後拾遺集]「忍ぶるをねにたてよとやことひさは―の聲のかぎりを」

あかゐ・たのみ「―田實」名㊐稻をいふ。稻を田實といふこと古今集に「のちまきに濕れて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞきく」とあり

あかゐ・たむらさう[ヲ]「―田村草」名植山野に自生する草。冬季中も枯れず。下葉は地に就きて叢生す。霜雪の時背は紫色なるが暖に向へば綠色となる。花は淡紫色又は白色なり。鼠尾草。

あかゐ・たるほ「―垂穗」名㊐秋稻のみのりて秋期に行はれしもの。

あかゐ・ぢもく「―除目」名㊐京官の除目に

あかゐ・つかさめし「―司召」名㊐前に同じ。

あかゐ・となり「―隣」名㊐秋に接近せる季候卽ち夏又は冬をいふ。[後撰集]「垣根なる草もひとめもしもかれぬ―や遠ざかるらん」

あかゐ・とまり「―止」名㊐秋のなはり。[新拾遺集]「おちつもる紅葉を見れば一とせの―はあじろ

あかゐ・ぬく「―抜」名㊐秋の頃に花咲く七つの草。萩、尾花、葛、女郎花、藤袴、撫子、朝顏の花をいふ。

「七夕。

あかゐ・なぬか「―七日」名㊐七月七日の稱。

あかゐ・なぬか「―七草」名㊐秋の草。

あかゐ・は「―葉」名㊐色づきたる秋の草木の葉。もみぢ葉。[拾遺抄]「神無月生田の森の―に松風すごく夕暮の空」

あかゐ・はな「―花」名㊐菊の異名。

あかゐ・はつづき「―初月」名㊐陰曆七月の稱。「異稱。

あかゐ・みや「―宮」名㊀皇后宮の御殿の稱。漢書百官表に皇后宮を長秋といふこと見ゆ。[後撰集]「雲の上遙に照す月影を―にて見るぞうれしき」㊁轉じて皇后宮を申す。

あかゐ・よ「―夜」名小唄の名。

あかゐ・を「―を」名㊐年年の秋毎に。[古今集]「思ふてふ言のみぞ―色も變らぬものにはあるらむ」

―財布に春袋。[諺]秋は財布を繼はぬものなれども春は袋を繼ぶべしの意。秋はあきがらに春は張るに通ずるが故なり。

あかゐ・の「鰍」魚と娘の缺點は見えぬ。[諺]我娘の不都合は目に付かざるをいふ。鰍魚は秋捕れぬもの。

―の木の葉のやう。[諺]物の散亂するをたとへ。

―の鹿は笛に寄る。[諺]夫を戀ふる情切なれば笛聲をも慕ひ寄るをいふ。

あかゐ・ぬく「抜」名㊐秋の頃に花咲く七つの草。萩、尾花、葛、女郎花、藤袴、撫子、朝顏の花をいふ。

あかゐ・ぬぬか「―七日」名㊐七月七日の稱

—の空は七度半變る。諺 秋の天氣の變り易きをいふ。
—の日と娘の子はくれぬやうでくれる。春の日と繼母はくれさうでくれぬ。諺 秋の日は短くして暮れ易く、娘の子は婚姻の申込に應ぜざるが如くにして案外承諾することの早きをいひ、又春の日は暮れたるが如くにして暮れず、繼母は繼子に物を與ふるが如くにして與ふることなきをいふ。
—の日は釣瓶落し。諺 暮るゝことの速なるをいふ。
—の夕やけは鎌を研いで待て。諺 秋の夕やけは翌日晴天の兆候なるが故に農家にては翌日の仕事の準備をなすべしの意。
—の夜と男の心は七度變る。諺 飛鳥川の淵瀬、秋の夜の空ほど變り易きものはあらじ。男の心も亦斯く變り易く今日は此方の花、明日は彼方の月と身を寄するを怨みわびつる少女の言葉なり。
—高馬肥。（チウマコヒ）秋氣澄み渡りて天も一しほ高く見えて馬も肥えて逞しくなるといふ。野戰の好時機なり。杜審言「雲靜妖星落、秋高塞馬肥」
あき〔商〕名 あきなひに同じ。
あき〔明〕名 ㊀あきてゐる處。すきま。間隙。㊁何もなさざる時。いとま。ひま。間暇。㊂何も入りて居らぬこと。から。空虛。—屋〔—地〕㊃方位の神のあらぬ方角。
—の-かた〔—方〕名 としとくじんを見よ。

ふさがりの方の對。
あき〔厭〕名 あくこと。倦んでいやになること。飽。「—が來る」
あき〔安岐〕豐後國の國東郡にあり。田原泰廣の城を築きし所。後秀吉の時熊谷直陳此に居りしが關原役に戰死し廢城となれり。
あき〔安藝〕㊀山陽道八國の一。廣島縣に屬し東は備後、西は周防、北は石見に界し南は瀬戸内海に臨み、土地多くは肥沃ならず。㊁土佐國安藝郡の西海岸にある町。高知市を距る十里。元郡領安藝氏累世の居住地にして其城址は今尚存せり。
—の-こふじ〔—小富士〕安藝國の南方の海中にある似島の別稱。
—の極楽 黒田の地獄。諺 德川時代江戸霞關に安藝・淺野・黒田二侯の邸ありしが、一は門衛寛大なりしも、一は嚴重にして出入容易ならざりしよりいふ。
あき-さだとし〔安藝貞俊〕天正中豐臣氏の召に應じ后宮の醫藥を掌りし有名なる女醫。
—〔さねみつ〕〔—實光〕通稱は太郎。力量あり。壽永二年源平屋島の合戰に平教經を捕へんとて相ひきて海に投じ共に溺死せり。
—〔さぶらうざえもん〕（サブロウ）〔—三郎左衛門〕土佐の人。家友と稱す。土佐國製紙家の祖。永祿年中山内一豐に自製の紙を獻じて賞せられ爾來將軍の御用紙となれり。
—〔だうじゅ〕（ジユドウ）〔—道受〕承應の頃德川幕府に仕へたる有名なる女醫。
—〔ちんぱう〕（ボウ）〔—椿坊〕幼時出家して椿坊と云ふ。力量衆に絶す。還俗して武士たらんと欲し十六歳の時尼子經久と安藝に戰ひて勝ち遂に還俗せり。
—〔もりさだ〕〔—守定〕有名なる產科醫。興國正平頃の人なり。
あぎ名 ㊀〔勝〕あぎと。あご。㊁〔鰓〕あぐに同じ。
あぎ〔阿魏〕名 ㊀植 中央亞細亞に產する草の名。其の根を截傷して流出せしめたる乳液は乾燥して一種の護謨樹脂様のものとなる。是れ即ち阿魏と稱する藥品なり。㊁〔藥〕阿魏は個々分離或は多少粘着したる粒狀或は不整の をなし、臭氣不快、大蒜様にして味惡し。ヒポコンデリー・腹部脹滿・月經不調・痼痛等に用ゐて效あり。
—チンキ〔—丁幾〕名 藥 阿魏の粗末に酒精を加へたる帶黃褐赤色の液。ヒステリー症・驅風及祛痰等に用ゐる。
あぎ〔吾君〕代 我子を愛して呼ぶ語。古事記〔いざ—ふるくまがいたておはずは〕
あき-あづき〔秋小豆〕名 赤小豆の一種。秋成熟するもの。
あき-あはせ（アハセ）〔秋袷〕名 秋に着る袷。新撰六帖
あき-あふひ（オウヒ）〔秋葵〕名 植 葉は掌狀に深く裂け、花は大形にして花瓣は黃色を呈し下部は紅色を帶ぶ。高さ六七尺あり。根は製紙の

糊料に用ゐらる。
あき-いへ（イエ）〔明家〕名 人の住まざる家。あきや。
あきう〔阿丘〕名 平くして高きなか。詩經〔陟彼—〕
あきうど〔商人〕名 あきひとの音便。商賣を生業とする人。あきんど。しやうにん。商賈。賈人。
—やど〔—宿〕名 行商人の泊るやどや。あきんどはたご。
—に系圖なし。諺 商人ははたらき次第にて出世するを得るの意。
—の子は算盤の音で目をさます。諺〔武士の子は轡の音で目をさます〕の類。
—は矢の下潛れ。諺 危險を冒して戰場に出づれば大利を得るの意。
〔あきうりう-じま〕〔秋通流島〕根室國に屬す。周回二里。
あき-がしは（シハ）〔秋柏〕枕 あきなひものの かしはといふ意なるよりうるにかけていふ。萬葉集〔—うるやかはべのしぬのめの〕
あき-かぜ〔秋風〕名 ㊀秋吹く風。詩經〔—兮蕭蕭〕〔二句孀兮—〕金風。㊁秋を飽の意に寄せて男女の情交冷かになるをいふ。〔—を吹かす〕
—づき〔—月〕名 ㊁陰曆八月の異稱。
—がたつ。諺 秋に飽の意を含ませて飽心地になるをいふ。「狂歌師なり。文政九年歿。
あきかぜ-の-にようばう（ニヨウボウ）〔秋風女房〕
あき-がた〔厭方〕名 あきはじむる時。いやになりたる氣味。伊勢物語〔やう〳〵—にや思ひけむ〕
あきかた-まけて 副 ㊁ 秋に向ひて。萬葉集〔又もあひ見む—〕
あき-がはり（ワリ）〔商變〕名 ㊁ 買ひとりたるものを心變りして返すこと。萬葉集〔—知らずとのみ のりあらばこそわがした衣かへしたまはめ〕
あき-がます〔秋鰤〕名 秋のかます。しゅんにて味美なり。
—は嫁に食はすな。諺〔秋茄子は嫁に食はたるもの。天の鹿島〔わたしが算筯は皆—〕
あき-から〔空殼〕名 物の無くなりてからとなり
あき-からまつさう（ツサウ）〔秋唐松草〕名 植 からまつさうの一種。葉は重複し莖は高さ二三尺に及ぶ。七八月の頃、枝頭に花開く。花瓣なし。
あき-ぎ〔秋蕙〕名 植 ひともじの一種。秋の頃
—の 枕 秋蕙の實は二個づゝこもれるものなるよりふたごもりにかけていふ。日本紀〔いやふたごもりを思へかし〕
あき-ぎみ〔厭氣味〕名 あきがたに同じ。
（あききよ〔口人〕㊀近藤勘兵衛と稱する丹波天田郡の刀匠。正德年間の人。㊁忠長といふ肥前佐賀の刀匠。寛文・元祿年間の人。
あき-ぎり〔秋刈〕名 植 葉は對生して鋸齒あり莖は稜ありて四角形をなす。其上端に四五寸の花穗を出し紫色の花を開く。
あき-ぎり〔秋霧〕名 秋に立つ霧。古今集〔—にのみたちかくるらむ〕
あき-ぐさ〔秋草〕名 ㊀すべて秋に花さく草。㊁書名。伊勢貞丈の著。
—の 枕 草を結びて後の紀念となす古風ありしよりむすぶにかけていふ。萬葉集〔—結びし紐を心に〕
—の-はな〔—花〕名 ㊁ 菊花の異稱。〔を〕
（あきぐち-じんじや〔開口神社〕古名三村社和泉國堺市にある府社。事解國勝長狹及び生國神・京國神・素盞嗚命を祀る。
（あきくに㊀〔秋國〕鎌倉の刀匠にして應安・康曆年間の人なり。㊁〔顯國〕長門の刀匠にして貞和年間の人なり。門人多し。
あき-ぐみ〔秋茱萸〕名 植 ぐみの一種。葉腋に數花を生じ秋に至り實熟す。大さなんてんの實の如くにして赤く白き點あり。味甘し。
あき-ぐるま〔空車〕名 からぐるまに同じ。
あき-こ〔秋鷄〕名 秋上簇する蠶。
（あきこ〔明子〕藤原良房の女にして文德天皇の后。清和天皇の母たり。昌泰三年五月崩ず。御年七十二。
（あきこ-ないしんわう（ノウシンワウ）〔顯子內親王〕後水尾天皇の皇女。母は東福門院。岩倉御所と稱す。延寶三年薨ず。年四十七。
あき-さ〔秋沙〕名 動 こがもに似たる鳥。頭と背とは灰色にして腹は白し。秋來り春去る。あいさ。あひがも。刀鴨の一種。
（あきさか-やま〔秋阪山〕播磨國にあり。紅葉時雨の名所として古來詠歌多し。

あき-さく〔秋作〕名 秋期栽培すべき作物。又秋に成熟するもの。特に稻をいふことあり。

あき-ざくね〔甘蔗〕名〔植〕にはそこに同じ。

あき-ざしき〔明座敷〕名 あきてある座敷。人の居らぬ座敷。

あきさ-す〔贋〕他動サ四 ㊀ 賣主に手付金を渡す。さきがれをなす。

〔あきさと-じやう〕〔秋里城〕因幡國氣高郡秋里にあり。元德の頃秋里支蕃頭師永の築きしもの。「て承元年間の番鍛冶たり。

〔あきざね〕〔章實〕有名なる備前國の刀匠にして承元年間の番鍛冶たり。

あきさば〔秋鯖〕名 秋の頃の鯖。しゅんにて味美なり。

—嫁に食はすな。諺〔秋茄子は嫁に食はす〕「たと同意。

あき-さま〔秋樣〕名 ㊀ 秋になりたる頃。秋季 ㊁ 秋のやうなる時候。玉葉集〔次の年の—より〕

あき-さめ〔秋雨〕名 秋降る雨。八雲御抄〔光忠が—たといへるたぐひはをかしきことなり〕

あき-さらば〔秋去者〕副 ㊀ 秋にならば。萬葉集〔—我船はてむ〕

あきさり-どろも〔秋去衣〕名 ㊀ 秋になりてきる着物。萬葉集〔七夕の五百機たてゝ織る布の—たれかとりみん〕

あき-さりて〔秋去而〕副 ㊀ 秋になりて。萬葉集〔—山邊を行けば〕

あきさり-ひめ〔秋去姫〕名 たなばたつめに同じ。

あき-されば〔秋去者〕副 ㊀ 秋になれば。萬葉集〔—おく白露に〕

あきしく-の-はな〔秋敷花〕名 ㊀〔植〕きくに同じ。萬葉集〔野に殘りけり—〕

〔あきしげ〕 ㊀〔明重〕陸奥の人。古刀の鍛工。㊁〔鑑重〕平姓。豐後高田派の刀匠。永祿頃の人。

あき-じこ-る〔他動ラ四〕㊀ 商に懲るゝ義にて商賣仕損ずるをいふ。萬葉集〔西の市に唯一人出でゝめたらばず歸りし衣の—りかも〕㊁ 單に商する義。〔—市の巷〕

〔あきしの-のさと〕〔秋篠里〕大和國にあり。

あき-じひ〔明首〕名 ㊀ よそ目には見ゆるが如くして見えぬ目。あきめくらの。清盲。

あき-しべ〔秋蕊〕名 ㊀〔植〕菊の異稱。

あき-しめり〔秋濕〕名 秋のころ雨の長くふりつづくこと。

あき-しやう〔飽性〕名 物事に飽き易き性質。〔—の人〕

あきしり-ぐさ〔秋知草〕名 ㊀〔植〕ねぎに同じ。

あき-しろ〔明白〕名 ㊀ 文字などの書くべき部分の外の白きところ。餘白。

あき-じろ〔明城〕名 人の居なくなれる城。空城

あき-す〔明巢〕名 ㊀ 鳥などの居なくなりたる巢 ㊁ 人の居らぬ住家。空巢。

—ねらひ〔—ネラヒ〕〔—狙〕名 人の不在を窺ひて忍び入り物を盜むこと。又その者。

〔あきすけ〕 ㊀〔顯亮〕長門の刀匠。天文年間の人。㊁〔羅祐〕豐後の刀匠。文祿年間の人。

あきすけ-しふ〔—シウ〕〔顯輔集〕藤原顯輔の和歌を集めたる書。

あきすゑ-しふ〔—シウ〕〔顯季集〕藤原顯季の和歌を集めたる書。

あき-せみ〔秋蟬〕名 動 せみの一種。形大くして赤褐色の翅あり。雄は腹部に鳴器を具へよく鳴く。我國の特産にして夏より秋にかけて出ず。あぶらぜみ。あぶらぜみ。蚱蜩。蟬蛄。

あきた〔秋田〕名 秋の田。稻の成熟せる頃の田。萬葉集〔植ゑていにし—刈るまで〕

〔あきた〕〔秋田〕羽後國南秋田郡の西南御物川の東岸にある大市街。秋田縣廳の所在地にして德川時代には佐竹氏常陸より移りて二十萬五千餘石を食み、關來世襲して明治維新に至る。

—おり〔—織〕名 秋田地方より產出する織物。

〔—けん〕〔—縣〕縣廳は秋田市にあり。羽後の內、南北秋田・山本・川邊・由利・仙北・平鹿・雄勝の八郡及陸中の鹿角郡を管轄す。

—ことばん〔—小判〕名 德川時代秋田にて鑄造したる銀貨。

〔—じんじや〕〔—神社〕秋田市にある縣社。「佐竹義宣を祀る。

〔—しんてん〕〔—新田〕羽後國岩崎の舊稱。

—しゆんけい〔—春慶〕名 能代塗に同じ。

〔—じやうし〕〔—ジヤウシ〕〔—城址〕秋田市の東北にあり。一名葛根城と云ふ。慶長九年佐竹義宣の築きし所。今は開きて公園地となせり。

—じやうのすけ〔—ジヤウノスケ〕〔—城介〕名 ㊀ 中古秋田城を守りし官。出羽介たる者之を兼ぬ。

—ぜに〔—錢〕名 德川時代秋田にて鑄造したる錢貨の一種。

—はちぢやう〔—ハチヂヤウ〕〔—八丈〕名 秋田市より產する絹織物の一種。染色の不鮮なると價額の低廉なるとによりて需要多し。

—ぶき〔—蕗〕名 秋田郡鹿角郡等に產する蕗。最も大くして高さ七八尺に及び、大なる葉の圍み丈餘ありて傘の如し。

〔あきた〕〔秋田〕本姓安倍氏。長髓彥の弟安日より出づ。安倍貞任の男高星の裔實季に至りて秋田城介となる。依て氏を秋田と稱す。

〔—さねすゑ〕〔—實季〕出羽檜山に城主たり愛季の子。初めて秋田氏を稱す。關原役に東軍に加はり戰功あり。秋田城介となる。後致仕し剃髮して凍蚓と稱す。伊勢朝熊山に居る。萬治二年卒す。

〔—としすゑ〕〔—俊季〕實季の子。初め安東太郎と云ふ。大阪の役に德川氏に從つて軍功あり。正保二年、封を三春城に賜ふ。

あき-だな名 ㊀〔明店〕人の居なくなれる店。あきみせ。あきや。空店。空舍。㊁〔明棚〕物を載せてなき棚。

—の惠比須さん見たやう。諺 一人寂ひて「笑ふをいふ。

—の惠比須に御供をあげたやう。諺 前に同じ。

〔あき-たね〕〔秋胤〕姓は服部氏。播州姫路の藩士。治刀をよくす。文久年間の人。

あき-たる〔嫌飽足〕自動ラ四 事物の十分にして飽くほどなるをいふ。滿足す。慊焉。

あき-ち〔明地〕名 ㊀ 建物のなき地所。何にも用ゐずしてある土地。空地。㊁ ㊀ はげあたま禿頭を冷評していふ。

あき-ちぐさ〔秋遲草〕名 ㊀〔植〕はぎ萩の異名。

あき-ちやうじ〔—チヤウジ〕〔香茶菜〕名〔植〕莖は方形にして高さ二三尺。葉は對生して其味苦し。花は唇形にて紫碧なり。葉及枝莖は驅蟲劑又は香料に供せらる。

あきつ〔秋津〕名 ㊀〔動〕とんぼに同じ。蜻蛉。

—ば〔—羽〕名 ㊀ ㊁ とんぼの羽。㊂ 蜻蛉の羽の如き綾羅などのうすもの。

—に〔枕〕あきつの羽の美しきよりにほふにかけていふ。

〔つしまに〕〔—ツシマニ〕〔—対國〕㊀ あきつの國に同じ。

—の-そで〔—袖〕名 ㊀ うすものの袖を「たとへていふ語。萬葉集〔—振る妹を〕

—むし〔—蟲〕名 動 とんぼに同じ。

あき-つ-かた〔秋方〕名 ㊀ 秋の頃。「こその—よりみだりごとちのあやしく」

あき-つ-かみ〔現神〕名 ㊀ 天皇の尊稱。あらひと神。(現在此世にまします神の意)

〔あきづき〕〔秋月〕筑前國にある小市街。黑田氏の藩藩地なり。

—の-らん〔—亂〕明治九年十月廿七日福岡縣士族宮崎庫之助・今井百太郎・益田政方等、舊秋月藩士四百餘人を率ゐて熊本の賊に應ず。幾もなく宮崎自刃し今井等捕へられ餘黨平ぐ。

〔あきづき〕〔秋月〕本姓大藏。後漢孝靈帝の後にして歸化族なり。鎌倉幕府の時大藏種雄筑前に秋月城を築き始めて族を秋月と稱す。

〔—たねき〕〔—種樹〕日向の人。文久三年將軍家茂の侍讀となり、維新の際勤王の事に斡旋し、明治八年元老院議官に任じ、廿七年貴族院議員に勅選せらる。卅七年卒す。

〔—たねざね〕〔—種實〕父を文種といふ。弘治年中大友氏の爲に攻められ父兄共に自殺す。種實家人に扶けられ山口に走りて毛利氏に投じ豐筑二州の間に轉戰す。後薩州の島津氏に通ず。天正十五年豐臣秀吉の西征に會ふ。種長薩師を援けて太隈城に據りしが終に免れざるを了り髮を削り子種長をして城を以て降らしむ。事平らぐに及びて秀吉其舊家なるを憐み種長に日向の財部に邑三萬石を與ふ。種實宗闇と號し久しからずして卒す。

〔—たねなが〕〔—胤永〕會津藩士。伏見鳥羽の戰後會津城に入り副軍事奉行となり、後太政官・東京帝國大學・高等學校に歷任し、明治卅三年卒す。年七十七。

〔あきつぐ〕 ㊀〔秋次〕肥後同田貫の人。古刀の鍛工。㊁〔見次〕筑後の人。古刀の鍛工。㊂〔日次〕藤原姓。山城西陣の人。新刀の鍛工

あき-づく〔秋付〕自動カ四㊀ 秋の時候となる。秋らしくなる。萬葉集「今よりは―きぬらし」

〔あきつ-くに〕〔秋津國〕あきつしまに同じ。

〔あきつ-しま〕〔蜻蛉洲〕日本國の古名。神武天皇大和にて國見し給ひて「あきつのとなめせるごとし」と宣ひしに起れること日本紀にあり。萬葉集「うましくにぞ―やまとのくには」秋津島。

―ね〔―根〕名 やまとしまねに同じ。

あきつしま-かん〔秋津洲艦〕軍艦の名。噸數三千百七十二。

〔あきつしま-の-みや〕〔秋津島宮〕大和國の室にありたりといふ。孝安天皇のおはせし宮。

あき-つつじ〔山櫛〕名 植 あいつゝじに同じ。

〔あきつ-の〕〔秋津野〕大和國にある野にして萩・呼子鳥の名所。

〔あきつ-の-うら〕〔秋津浦〕紀伊國にある浦。

〔あきつ-の-かは〕〔秋津川〕大和國にある川

〔あきつ-の-みや〕〔秋津宮〕秋津島宮に同じ。

あき-つばめ〔秋燕〕名 動 蛾の一種。前翅灰褐色にして細鱗密生し後翅黄褐色にして小し。緣色なる幼蟲の兩側に二條の白線を呈す

あき-つ-ぼい 形㊀ 飽き易し。心變り易し。

あき-つぼね〔明局〕名 人の居らぬつぼね。狭衣記「―にほこらかして置きたるを」 「同じ。

あき-つ-みかみ〔現御神〕名㊀ あきつかみに

〔あきてる〕㊀〔日照〕㊁ 伯者の刀匠。元暦年間の人。㊂ 同上、仁和年間の人㊃〔明輝〕落合氏。下總の刀匠。明和寛政年間の人。

あぎ-と〔鰓〕名 ㊀ あぎ。あご。㊁ 魚の鰓。

〔あきとし〕㊀〔秋利〕市橋氏。播州の刀匠。元治年間の人。㊁〔明壽〕京都の鍛工。豐臣秀吉に仕ふ。うめただみやうじゅを見よ。

あぎ-と-ふ〔―と〕自動ハ四㊀〔鰓を動す義〕㊀ 魚水面に浮びて呼吸して泡を吐く。叩喝。日本紀「水のまに〳〵―」㊁ 小兒かたことにても言ふ呪唱。蜻蛉日記「そこらの人の―やうにすれば」

〔あきとよ〕〔鑑豐〕平姓。豐後の刀匠。永祿年間の人。

〔あきなが〕㊀〔顯長〕長門の刀匠。初代顯國の孫。正長文安年間の人。㊁〔鑑長〕平姓。豐後高田の刀匠。元龜年間の人。

あきな-ぐさ〔秋無草〕名㊀ 植 きくの異名。

あきな-し 名 植 くわゐの一種。葉細長くして花の小き水草。「殘れる茄子。味美なり。

あきな-すび〔秋茄子〕名 秋の末の頃まで枝にる故に姑は嫁を憎みて喰はすたの意。㊁ 茄子は多食すれば腹痛下痢を起し子宮を傷ふものたりと安齋隨筆に見ゆ。嫁を愛し子宮を傷ふ事を憂ひて食はすたの意。

―は嫁に食はせて七里追ふ。謎 嫁は鼠の異名。秋茄子を食ひたるを惡みて追窮する意

―は嫁に食はすな。謎 ㊀ 秋茄子は佳味なり。

―は嫁を憎みて喰はすたの意。㊁ 茄子

―は門門。謎 相手を見て巧に賣りつくべし

―は正直が第一。謎 正直にして顧客の信用を得るが必要なりの意。

―は本にあり。謎 資本の多少により盛衰あり。

あきな-ふ〔―ナフ〕〔商〕他動ハ四 あきなひをなす。

あきな-ひ〔―ナイ〕〔商〕名 あきなふこと。物品と金錢との交換。商賣。商業。

―がたき〔―敵〕名 同商業者の互に仇敵の如く思ふこと。

―がみ〔―神〕名 わかえびすに同じ。

―はじめ〔―始〕名 ㊀ 商賣のはじめ。開業。開店。賣出し。㊁ 新年の初賣。

―ぶね〔―船〕名 商業を營むに用ゐる船。

―みせ〔―店〕名 商品を陳列して顧客に販賣する店。商鋪。

―みやうり〔―ミヤウリ〕〔―冥利〕名 「神佛の加護。商人に對する

―もの〔―物〕名 あきなふ品物。商品。

―三年。謎 商賣は始めより三年も經過せざれば利益を見難きをいふ。

―上手の仕入下手。謎 賣捌に巧なれども買入に拙なるをいふ。

―は牛の涎。謎 商業は氣を長くしてればり

―は鄭でこなせ。謎 利を薄くして商品を數多く賣るが得策なりの意。

―は門門。謎 「意。

―は正直が第一。謎 正直にして顧客の信用を得るが必要なりの意。

―は本にあり。謎 資本の多少により盛衰あり。

あきな-ひ〔―ナイ〕〔商〕名 あきなひをなす。

あきな-ひ〔―ナイ〕〔商〕他動ハ四 あきなひをなす。

あき-にれ〔秋楡〕名 植 葉は橢圓形にして周圍に鋸齒あり。花は九月末頃開きて莢の實を結ぶ。木材は種々の用に供せらる。

あき-の〔秋野〕名 秋の野邊。萬葉集「―には今こそ行かめ武士の男女の花にほひ見に」

〔あき-の〕〔阿紀野〕大和國宇陀郡にある野。

あきのねさめ〔秋寢覺〕諸國の名所を集め山野・川・海等の部類に分ち、それに關したる歌及び枕詞等を記したる書。有賀長伯の著。

〔あきの-の-うら〕〔秋野浦〕攝津國にある浦。

あき-の-のげし〔山苦菜〕名 植 けしの一種。葉は莖を抱き莖葉共に平滑なり。莖は直立三尺、秋淡黄色の小頭花を綴る。

〔あき-の-ぼう〔―ボウ〕〕〔秋坊〕加賀國金澤の人。風流を好み俳諧に名あり。

あき-の-ふた〔甲香〕名 あかにしの貝の蓋。たきものを合する時に用ゐる。

あきのよながものがたり〔秋夜長物語〕後堀河院の時の僧西山の贈西上人の事をかける書。一卷。著者未詳。

〔あきのり〕㊀〔顯則〕備前長船の刀匠。㊁〔日乘〕伯耆の刀匠。延喜頃の人。源義經帶車太刀の作者なりといふ。

あき-ば〔秋場〕名 秋の時。秋の天候の樣子。

―ゲ〔―ばゲ〕作。謎〔あきびよりはんさく〕に同じ。

あき-はぎ〔秋萩〕名 植 山野に自生するものにして葉は羽狀三出、花は紅紫色或は白色を呈し、莖は木質なり。果實は節莢にして、觀賞用として栽培し、或は牛馬の食料に供す。又葉を茶の代用に供す。胡枝子。

―の 枕 萩は香よくして移りやすきものなるよりにほふとうつるとにかけていふ。高藻集「―にほへる妹を」古今集「―うつり行くか人の心の」

あきはぎ-でふ〔―ヂフ〕〔安幾破起帖〕小野道風の書きたる假名手本。

〔あきは-さん〕〔秋葉山〕遠江國周智郡にある山。維新前には山上に秋葉寺あり。秋葉權現ともいひしが弓矢刀杖の難・火災燒亡の難・洪水沈沒の難などを免るとて世人の歸依厚く、諸國の信徒は秋葉講を組みて參詣し、其道中を秋葉道と稱せり。

〔あきは-じんじゃ〕〔秋葉神社〕秋葉山上にあり。縣社にして軻遇突神を祀る。和銅年中此山に鎭坐し鎭火を掌り給ふを以て世人鎭火禱として崇敬す。

あき-は-つ〔厭果〕自動タ下二 全く飽く。いやになりはつ。飽きてしまふ。倦厭。千載集「―てし世にたにのこるらん」

あきば-ていざん〔秋庭貞山〕舊柳生藩の人品川東海寺の住職。開山澤庵和尚の語錄雜著を公にし、又文庫を開きて公益に供したり。明治四十年三月遷化。年五十四。

あき-ひえ〔秋稗〕名 ひえの一種。毛多くして秋の末熟するもの。

〔あきひさ〕〔顯久〕長門の刀匠。嘉吉年間の人

山の舊稱。

あきなひ〔―ナイ〕〔商〕名 「とのあきなふこと。物品と金錢

―がたき〔―敵〕名 同商業者の互に仇敵の如く思ふこと。

―がみ〔―神〕名 わかえびすに同じ。

―はじめ〔―始〕名 ㊀ 商賣のはじめ。開業。開店。賣出し。㊁ 新年の初賣。

―ぶね〔―船〕名 商業を營むに用ゐる船。

―みせ〔―店〕名 商品を陳列して顧客に販賣する店。商鋪。

―みやうり〔―ミヤウリ〕〔―冥利〕名 「神佛の加護。商人に對する

―もの〔―物〕名 あきなふ品物。商品。

―三年。謎 商賣は始めより三年も經過せざれば利益を見難きをいふ。

―上手の仕入下手。謎 賣捌に巧なれども買入に拙なるをいふ。

―は牛の涎。謎 商業は氣を長くしてればり

―は鄭でこなせ。謎 利を薄くして商品を數多く賣るが得策なりの意。

―は門門。謎 「意。

―は正直が第一。謎 相手を見て巧に賣りつくべし

―は正直にして顧客の信用を得るが必要なりの意。

―は本にあり。謎 資本の多少により盛衰あり。

あきなひ-をなす〔―ヲナス〕 商賣する。

あき-ひと〔商人〕名 あきうどに同じ。

―うま〔―馬〕名 商人の商品などを運搬せしむる馬。

〔あきひと-しんわう〕〔彰仁親王〕初め東伏見宮と稱し後小松宮と改む。仁孝天皇御養子、伏見宮一品邦家親王の第八子、明治元年軍事總裁となり、尋いで征東大將軍に拜せらる。三年英國に留學、七年佐賀の亂を平ぐ。廿三年陸軍大將に任じ、廿八年參謀總長に補す。卅一年元帥府に列せられ特に元帥の稱號を賜ふ。卅六年一月薨ず。年五十八。

〔あき-びめ〕〔秋姫〕「田畑のものを守りたまふ神。はやまどの神の御子にして

あき-びより〔秋日和〕名 秋の天候。秋の晴天

―ヒヨリ〕作。謎 秋の天候如何は米の豐凶に五分の影響を與ふるをいふ。

〔あきひろ〕〔秋廣〕相模の刀匠。初代行光の子

あき-ふたげ〔秋二毛〕名 鹿の毛色の秋に至りて二色になりたるもの。長き古毛を去り短き新毛を殘したるによる。むかばきに用ゐる。

あき-べや〔明部屋〕名 人の居らぬ部屋。あき

あき-ぼ〔秋穂〕名 秋の稻の穗。しま。空部屋。

〔あきほ-の-をんせん〕〔秋保溫泉〕陸前國名取郡にあり。御湯・瀧湯・澤の湯の總稱にして泉質各鹽類泉なり。就中御湯は往古欽明天皇小瘡を患ひ給ひし時此溫泉を召し奉りしに龍體平癒ましませられ、「おほつかた雲の上ま

でみてしがなとりのみ往けばあとかたもなし」との御製を賜ふと云ふ。八雲御抄の所謂名取の御湯にして日本三御湯の一なりとぞ。

あき-ま〔明間〕名 ㊀ひま。すきま。㊁人の居らぬ部屋。あきてある座敷。空房。空室。

あきまつ-くさ〔秋待草〕名〔植〕夏の田の稻の異名。裏得抄〔水かけて—のよな〳〵に光るは露かまたは螢か〕

あき-まめ〔秋豆〕名 秋熟する大豆。粒大くして味噌を製するに用ゐる。ミソまめ。半夏黄。

あき-みせ〔明店〕名 あきだな㊀に同じ。

(あきみつ) ㊀〔顯光〕猪前長船の刀匠。文明年間の人。㊁〔日光〕大和の刀匠。長德年間の人。㊂同上、嘉元・康永年間の人。

あき-み-つ〔飽滿〕自動タ四 ㊃あくほどにみつ。みちみちて飽くばかりになる。土佐日記〔—ちて舟子どもはらづゝみをうちて〕

あき-むし〔秋蟲〕名 秋鳴く蟲の總稱。

あき-んど〔商人〕名 あきびとに同じ。

〔—かたぎ〕〔氣質〕名 金錢を疎略にせず何事も算盤取りて決するが如き商人のならはし。〔—に一文の利をも爭ふ〕

〔—しよくにん〕〔—職人〕名 軍屋の如き販賣製造を業ぬる者。

〔—ぶね〕〔—船〕名 あきなひぶねに同じ。

〔—や〕〔—屋〕名 商賣人の住家。商賣を營める家。商店。

〔—やど〕〔—宿〕名 あきうどやどに同じ。

〔—と屏風〕〔屏風は直では立たぬ。諺 商人は己の情を矯めて勘忍せざれば世に處するを得ずとの意。

〔—と屏風は曲られば世に立たず。諺 前に同じ。

〔—の空譽文〕諺 商人が相互に規約を設け或は正札付現金懸値なしと稱するも猶懸引して商賣するをいふ。狂歌現代〔—や僞のかうべにやどる神もありけり〕

〔—の虛賀〕諺 商品の値段に懸引の多きをいふ。

〔—の元賀〕諺 商人の元賀がきれるといふと多きをいふ。

〔—のよき衣着たるやう〕諺 姿美しけれども「氣品の卑しきをいふ。

〔—は損していつか倉が建つ〕諺 商人は儲からぬと口癖にいへども いつしか倉を建つるに至るをいふ。

〔—は腹を賣り客は下より這ふ〕諺 商人は賣價を次第に引下げ買客は買價を次第に買ひ上ぐるをいふ。

あき-めく 自動カ四 秋らしくなる。秋らしく見ゆ。清輔集〔蟬の鳴く音も—きにけり〕

あき-めくら〔明盲〕名 ㊀あきじひ。清盲。白昼。㊁文字を知らぬものを卑めていふ語。文盲。沒字漢。

(あきもと)〔秋元〕本姓は藤原。宇都宮賴綱の男泰業より出づ。嘉祿年中泰業上總國秋元庄を領す。依つて氏となす。

〔—しすゑ〕〔—子師〕名 以正。喜内を稱す。三河國岡崎藩の文學者。

〔—しやういちらう〔—郎〕〔—正一郎〕國學者なり。姫路の藩士にして六邦西洋形船舶製造の創めをなす。又諸藩の志士と交り王事に奔走す。文久二年八月歿す。年四十。著書多く就中宇宙起源・神議・話語範・大伴遠祖傳・空室雜考は其最たるものなり。

〔—たかとも〕〔—爲朝〕初め甚九郎と稱す。德川幕府の老職たり。正德四年八月歿す。年六十八。四世忠朝上州館林に封ぜらる。

〔—まさただ〕〔—正忠〕有名なる羽後國秋田の鍛冶。明治十年六月歿す。年四十九。

あき-もの〔商物〕名 あきなひものに同じ。

あき-もの〔明物〕名 ㊀物を入れてあらぬ器。㊁不用なる物。

「のを利用して入れよの意。

〔—は入物〕諺 入用なる時は何にてもあきも

あき-も〔秋桃〕名 桃の一種。秋熟する桃實夏の桃より大くして味美なり。

あき-や〔明家〕名 人の住みて居らぬ家。空屋。

〔—で聲嘆らす〕諺 不在なることを知らずして大聲して呼びたるを勞して效なかりしに喩ふ。

あぎやう〔阿行〕文法上の語。五十連音圖中の第一の行即ちあいうえおの稱。

あき-やしき〔明屋敷〕名 ㊀宅地にして建物のなきところ。空邸。㊁人の住まぬ邸宅。

〔—あづかり〕〔—預〕名 次に同じ。

〔—ばん〕〔—番〕名 德川幕府の職名。諸所の明御殿及び屋敷等の事を預り掌るもの。

あき-やま〔秋山〕名 秋の山。萬葉集〔—の木の葉をみてはもみち葉をとりてぞしのぶ〕

〔—の枕 秋の山には木の葉色づきしたび落つるよりしたぶにかけていふ。萬葉集〔—したべる妹〕

(あきやま-いづ)〔秋山伊豆〕史家たり。讃州の人。多年史料を蒐集し西讃雜志六十卷を編す。其他續新論・帝統譜・求等著書多し。文久三年四月歿す。年五十七。

〔—ぎよくさん〕〔—玉山〕字は子羽。詩及文章に長ず。寶曆十三年歿す。年六十二。

〔—くわうへう〕〔—光彪〕豐前國小倉の藩士。有名なる古學者なり。

〔—ふさじらう〕〔—房次郎〕福島縣の人。明治二十九年威海衛占領軍騎兵隊長として今聞あり。後騎兵大佐に任じ騎兵學校長に補す。四十五年六月歿す。年四十九。

〔—よしとき〕〔—義時〕通稱は四郎左衛門。肥前國長崎の人。揚心流柔術の祖なり。

〔—ふなん〕〔—富南〕名は章。伊豆韮山の儒者。文化五年歿す。年八十五。豆州志稿十三卷の著者。

あき-ゆけば〔秋行者〕副 ㊁ あきさればに同じ。萬葉集〔春されば春霞立ち—くれなゐにほふ〕

(あきよし) ㊀〔秋義〕相模の刀匠。應安年間の人。彫鐵甚美なりと。㊁〔顯義〕長門の刀匠。初代顯國の子。應永年間の人。

あきらか〔明〕名 ㊀あかるきこと。あざやかなるさま。分明。明白。瞭然。炳焉。昭昭。歷歷。

〔明〕晦・暝・昏・暗闇・昧などの反對にて意義廣く何にても用ゐらる。〔—樂〕〔—德〕〔—失〕〔—昭〕明より意義狹くして、多く道德上に用ゐらる。〔—明德〕〔—顯〕〔—照〕〔—灼〕火の燃たつ如く明かなる義。〔文理〕〔—煥〕はなやかに明かなる義。論語〔—乎有ニ文章ニ〕〔—昭〕「文—也」〔—ニ煥史牒ニ〕〔—皎〕明に潔白の意を帶ぶ。詩經〔月出—兮〕〔—晰〕たゞ明かなる義。詩經〔庭燎—〕〔—明〕〔—諦〕詳明の義。莊子〔—ニ毫末ニ者不ル見ニ天地之大ニ〕〔—視〕〔—數〕入りくみたる事又は紛はしく錯れたる事を穿鑿して其實證を見出す義。〔—ニ玄ヲ於道流ニ〕〔—檢〕

〔—甄〕みわけのつくこと。文選聖心豈徒—〕〔—別〕

〔—白〕白色の轉。あきらかの義。荀子〔仁人之所ル務—也〕〔—明〕〕

あきらかに〔明〕副 ㊀くもりなく。あかるく。あざやかに。はきと。判然。〔—見ゆ〕㊁疑なく。善く解し得て。〔—知らる〕

あきらけ-し〔明〕形ク ㊀あきらかなり。はきとしたり。選擇集〔—く名におほものを心つとめよ〕㊁思ひ迷ふことなし。善く解せらる。〔此書にかくあるにて—〕

(あきらけ-のみや)〔明宮〕「天皇のおはせし宮。

あきらむ〔明〕他動マ下二 あきらかに事の由を究め知る。〔理を—〕辨。審理。詳諦。

あきらむ〔諦〕自動マ下二 思を絶つ。思ひ切る。斷念す。〔入學を—〕

「斷念。

あきらめ〔諦〕名 あきらむること。おもひきり。

〔—は心の養生〕諺 過去の失策に未練執着するなかれ潔く斷念すれば徒に精神を勞せず心の爲によしとの意。

あきらめる〔諦〕自動マ下一 ㊁ あきらむの轉。

あぎり-はふ〔—法〕名 みつまた(三極)を栽培する爲に森林を整地する一法。

あ-きる〔厭〕自動カ上一 ㊁ あくの轉。

あき-る〔呆〕自動ラ下二 物事の意外なるに驚きて心奪はれたるところを知らず。呆然たり。惘。〔—れてものが言はれぬ〕

〔—れ-いたし〕〔—痛〕形ク ㊁ あきるゝこと甚し。選擇集〔夢の心地して—く覺ゆれど〕惘痛

〔—れ-いる〕〔—入〕自動ラ四 次に同じ。

〔—れ-かへる〕〔—返〕自動ラ四 ㊁ 甚しくあきる。あきれまどふ。

〔—れ-がほ〕〔—顏〕名 あきれたる顏付。

〔—れ-きる〕〔—切〕自動ラ四 ㊁ 呆返るに同じ。

〔—れ-まど-ふ〕〔—惑〕自動ハ四 ㊁ あきれ

てまどふ。[栄華物語]「おさましういみじき女を見て—ひて」惘惑。

あきれ[呆]名 あきるゝこと。瞠若。
—が禮に來るやう。[謡]あきれかへるといふほどの意にてあきるゝばかりの所爲ある者を嘲りていふ。

あぎれ[足切]名 ⑱ あかぎれに同じ。

あきれる[呆]自動ラ下一 ⑱ あきるの轉。

あき-をさ[商長]名 ⑱ 一 安閑天皇の朝、帝都の互市場に置かれし官吏。二 氏の名。

あき-をさめ[秋收]名 ⑮ 秋になりて田のものを刈りをさむること。收穫。[夫木集]「しぐれせぬ吉田の村の—かりほす稻のはかりたきかた」

あく[灰汁]名 一 灰を水に浸し置き日を經て取りたる其うはずみ。灰を水或は湯に入れ直に漉して取りたる汁。物を染め布帛の垢などを洗ひ去るに用ゐる。二 灰又は石灰。三 轉じて植物類より出づる澀味ある液。「蕨の—」「茶の—」四 ゑぐき味。鹼味。

あく[堊]名 一 種々の色を帶びたる土。いろつち。二 白き土。壁を塗るに用ゐる。三 石灰。しつくひ。四 塗り飾りたる壁又墻。[禮記]「丹—炳煥」五 塗らざる壁又墻。[禮記]「三年之喪廬—室之中」

あく[幄]名 あげばり。たれぬの。幕。[宮和物語]「右近の—よりくさくを出す」
—の-ざ[—座]名 あくしやに同じ。

あく[惡]名 一 あしきこと。わるきこと。善からぬ物

「善と—とを分つ」二 よこしまなること。不道德なること。あしき行爲。罪過。[左傳]「諱二國之—禮也」「—をたくらむ」三 あしきおこなひある人。わる者。[詩]「誅二其首—」四 よこれ。あか。くそ。[管子]「好澣二人之—」[呉越春秋]「越王勾踐爲二吳王嘗レ—」五 芝居にて惡人に扮つること。かたきやく。
—に強ければ善にも強し。[謡]惡道を惡むこと強ければ善道を好むことも強しとの意。[晏子]「惡二惡道一不レ能レ甚則其好二善道一亦不レ能レ甚」
「反し惡事の行ひ易きをいふ。
—には染まり易し。[謡]善事の行ひがたきに—の報は針の先。[謡]針の尖端をめぐる如く速に報の來るをいふ。
「報あるをいふ。
—や好めば妖あり。[謡]惡事をなせば必其勿下以二—小一而爲レ之。[コレヲナスヲモツテナカレ]惡事は小きことなりともなすべからざるをいふ。[論語]「—勿下以二善小一而不レ爲」
惡くなることの速かなるをいふ。[諺]「諺曰從善如レ登—」
—不レ積不レ足二以滅一身。[ツモツテアレバモツテタラズ]大惡能く我身を滅すの意。易の繫辭に見ゆ。
爲レ—入レ淵。[ナラナキバ]惡事をなせば遂に浮ぶ瀾なきをいふ。法苑珠林「爲レ善生レ天—作レ—降二之百殃。[ナクアウクタダス]惡事をなせば必報あるをいふ。尚書に見ゆ。
見レ—如二農夫之務去二草焉。[ハヲヤクヤウナノコトヲ]小き惡事にても再なさゝるやうになすをいふ左傳に見ゆ。
「禁二邪於冥々一—」絶二—於未萌。[ハヲヤクサ]惡心の豫防をいふ。[王言]

あく[明]自動カ四 一 自然に開く。「月が—」開。二 隔たる。「間が—」三 內の物無くなる。空虛になる。「匣が—」「家が—」四 暇になる。する事なくなる。「手が—」「役目が—」五 始まる。「商の口が—」「芝居が—」開。「たる時にいふ。
—いた口あんぐり。[謡]甚しくあきれて茫然
—いた口が塞がらぬ。[謡]前に同じ。
—いた口へ團子。[謡]次に同じ。
—いた口へ牡丹餅。[謡]物事に運好く求めずして幸福の來るをいふ。

あく[明]他動カ下二 一 押し開く。開く。「戸を—」「口を—」開。二 隔つ。「間を—」三 內の物を無くなす。空虛にす。「匣を—」「家を—」四 穿つ。「穴を—」五 暇になす。する事をなくなす。「手を—」「仕事を—」六 始む。「商の口を—」「芝居を—」開。
—けて悔しき玉手箱。[謡]浦島太郎の故事を引けるものにして豫想したる事のはづれて失望に終るをいふ。
—けて見れば鳥の糞。[謡]前に同じ。

あく[明]自動カ下二 一 經過す。たつ。滿つ。「年期—」二 改り始る。「年—」「—る年」三 明かになる。朝になる。「夜—」

あく[飽]自動カ四 一 十分に足る。滿足す。腹に滿つ。饜。飫。
—まで食べて寢れば牛になる。[謡]小兒を諭して食後直ちに寢に就かしめざるが爲に斯く云ふ。
—を知らぬ鷹は爪が割く。[謡]慾深ければ「却て禍を招く意。
[飽]欲する思ひに足り滿つることにて厭ひ嫌ふ程には至らぬをいふ。不足なく充分に足れること。故に德に飽き仁義に飽くなどといふ。[論語]「君子食無レ求レ—」
[饜]厭に音義相通じ大食して飽き滿ちたる意飲食に就いていふ。[孟子]「二酒肉一而後反」
[飫]饜に同じ。氣に就きていふ。[詩經]「飲酒之—」

あく[厭]自動カ四 十分に過ぎていとふ心になる。いやになる。あぐむ。[古今集]「人の心に—かれやはする」[讓書]「—ニト帝之心ニ無レ—。」[ナシ]句 慾深くして足るを知らざるにいふ。左傳「又求二其寶劍一叔曰是—也」

あく[惡]接頭 一 惡事ある人の名に冠す。「—源太」二 剛強なる人の名に冠す。「室町時代「赤井—右衛門」

あぐ[鑿]名 釣鉤の尖りの下部に突起せる逆鉤。曲りの內方にあるを普通とすれど其反對なるもあり。あげ。あぎ。あら。あぎと。

あぐ[上]他動カ下二 一 高くのぼす。上へ送る。揚。二 手に持ちて高くす。捧ぐ。「盃を—」擧。三 官職に用ゐる。登用。四 價を高くす。「價を—」騰。五 調子を高くす。「聲を—」揚。六 弘む。あらはす。「名を—」揚。七 沒收す。とりあぐ。めしあぐ。「役目を—」扶持を—」黜。八 轉じて動詞と熟語になりて敬語とする語。「申し—」「聞え—」十 結ぶの敬語。「髮を—」十一 掲載す。「左に—」擧。十二 成す。遂ぐ。終へ果たす。「爲—」「作り—」成功。十三 胃より物をかへす。吐く。嘔吐。十四 藝妓などを宴席に呼ぶ。
—げたり下げたり。人を毀譽褒貶することげもおろしもならぬ。[謡]進退きはまりて如何ともなし難きをいふ。「之賞賜—」
不レ可二勝道。[カチガタシ]甚多きをいふ。史記「愛」
擧如二鴻毛一取若レ拾レ遺。[トルコトヲモノノゴトクトリ]極めて容易き事にたとへいふ。前漢書にも

あぐ[擧]秦如二鴻毛一取楚如拾レ遺」とあり。

あぐ[揚]勢よく上に打ちあぐる意。「旗を揚ぐ」「抑

あぐ[颺]風に乘じてあがること。揚に通ず。「—」

あぐ[擧]下より物を取りあぐること。揚よりは穩に物をあぐる意あり。又他に取行ふの意を含む。「—手一投足」「推—」「—行」

あぐ[扛]重き物を力を入れて擔ぎあぐる意。戰國策「—龍文之鼎」

あく-あく[啞啞]名 副 からからと笑ふ聲の形容。[易經]「笑言—」

あく-あく[喔喔]名 副 雞の鳴く聲の形容。白居易「—雞下レ樹」

あく-あく-し[惡惡]形二 わるさうなり。兇惡ら

あく-い[惡意]名 一 惡を爲さむとする心。害を加へんとする心。わるき心。二 [法] 或行爲を爲すに當りて其法律上の效力に影響を及ぼすべき事實の存在せることを知りながら實行せんとする心的狀態をいふ。善意の對。

あく-い[惡衣]名 粗末なる着物。[論語]「士志レ於レ道而恥—惡食者未レ足二與議一也」

あく-い[—咿]名 つくり笑ひ。せゝらわらひ。[詩]「—嘻呪以事婦人乎」「誘はる」

あく-いう[惡友]名 あしき友。わるき友。「—に

あく-うち[灰汁打]名 あくうちがみの略。あくをひきて打ちたる紙。

あく-うん[惡運]名 一 わるさうん。非運。二 惡事をなしながら却て一身の榮ゆる運命。「—がつよし」

あく-えき[惡疫]名 あしきはやり病。「—流行」

あく-えん[惡緣]名 一 佛 惡業を資助して惡果を招かしむるものをいふ。二 男女相慕ひて思ふまゝにならぬ緣。又運の惡き緣をいふ。
—契深し。[謡]不良なる緣の絕ち難きをいふ。

あく-えん[搤咽]名 のどをつかむ。急所をおさふるにいふ。

あく-おん[渥恩]名 あつきめぐみ。「蒙—」[書經]「雄數

あく-か[幄下]名 あげばりのもと。周圍を幕にて張りまはしたる處。「—の座」

あく-かう[アクカウ][搤吭]名 のどをしめつく。要害の地に據りて敵を制する義。

あく-かく〔惡客〕名 ㊀酒を飲まぬ人。げこ。㊁亂暴なる客。

あく-がた〔惡形〕名 あくにんがたに同じ。

あく-かふ〔惡洽〕名 めぐみ。

「無賴漢。君之一一」

あく-かん〔惡漢〕名 わるき男。わるもの。

あく-かんじやう〔惡感情〕名 感情を害すること。不愉快に思ふこと。惡感。

あく-がらす〔憧〕他動サ四 あこがらすに同じ。

あく-がる〔憧〕自動ラ下二 あこがるに同じ。

あく-がれ-すごす〔憧過〕自動サ四 ㊀あくがれて月日を過す。

「深くあくがる。」

あく-がれ-まどふ〔憧惑〕自動ハ四 ㊀深くあくがる。

「鬼は時に其の形を現はすも常には人の耳目に觸れざる一種の精氣にして其の所業の人事を害するものをいふ。祟りをなす鬼。怨靈。」

あく-き〔惡鬼〕名 いたづら。わるふざけ。

あく-き-がひ〔惡鬼貝〕名 動 形蠣に似て一方に延長し殼に鋭利なる刺あり。印度洋に產す。古ローマ族の衣服を染むるに用ゐたる鮮紫色の顏料は此類の體內より取りたりといふ。

あく-きけい〔握奇經〕支那の兵書。風后の撰。

あく-きじん〔惡鬼神〕名 あくきに同じ。

あく-きん〔惡金〕名 ㊀黃金の實の惡しきもの。㊁にせがね。㊂道ならぬ事をして得たる金錢。

「行。」

あく-ぎやう〔惡行〕名 あしきおこなひ。不品行をなすこと。

あく-ぎやく〔惡逆〕名 ㊀人の道に逆ひて極めて惡事をなすこと。

「古の刑名、八虐の一。祖父母父母・夫・夫の父母を殺すもの。姑兄・姉・祖父母・夫・夫の父母を殺すもの。」

あく-きよ〔惡魚〕名 あしき魚。

あく-く〔惡口〕名 あっくを見よ。

あく-くわ〔惡果〕名 あしき果報。

あく-くわつ〔惡聒〕名 口あしくしてかまびすしきこと。

あく-くわへい〔惡貨幣〕名 摩損消耗せる貨幣。其他地金の價の額面價格より劣れるもの若くは二種以上の本位貨幣流通せる時、地金の市價低き方の貨幣をいふ。惡貨。

あく-けい〔惡溪〕名 怪しきものの出づる溪流。

「虞州麗水東十里有二一多水怪」

あく-けい〔惡計〕名 わるだくみ。惡きはかりごと。「一をめぐらす」

あく-げつ〔惡月〕名 ㊀支那にて五月の異稱。

「惡性の腫物。」

あく-けなし〔無灰汁氣〕形二 ㊁運の惡き月。

「あくの氣なきを飽くまでなきに喩へていふ。無鹹氣。あっけなし。」

あく-げん〔惡言〕名 わるくち。惡口。

「孔子曰自二晉得二由、一不聞二子耳一」

一の玉磨き難し。

「惡言を吐く者は其德を損ふこと甚しくしてよき人と成り難きをいふ。」

あく-げんだ〔惡源太〕源義平の異名。祿父帶刀先生義賢を殺しゝによりかくいふ。

あく-ご〔惡語〕名 わるくち。

「門前一一誰傳士、醉後狂歌自不知」

あく-こう〔惡口〕名 わるくち。人を罵ること。惡言。

「惡言。罵言。」

あく-ごふ〔惡業〕名 佛 過去の惡事。惡心より發生せる所業の報。惡刼。

一の-みやうくわ〔一猛火〕名 佛 惡心より發生せる作業の結果は必ず本來純潔なる心を毀傷すること恰も猛火の草木を燬きて其形だに存せしめざるが如くなるよりいふ。

あく-さ〔惡作〕名 佛 惡しき行を懺悔すること。

あく-さい〔惡妻〕名 婦德の缺けたる妻。惡婦。

一は一生の不作。

「惡妻を娶るは一生涯の損の意。」

「惡妻は六十年の不作」ともいふ。

あく-さう〔惡相〕名 人相の惡しきこと。兇惡なる人相。

「惡性の腫物。」

あく-さう〔惡瘡〕名 ㊀しやうの惡しきかさ。

あく-さく〔惡促〕名 心せばしくして胸の狹き形容。こせつぐこと。齷齪。

あく-ざけ〔灰酒〕名 山茶花の灰を入れて醸したる酒。強き風味ありて腐敗變味等の憂なし。

（あく-さだいじん〔惡左大臣〕藤原賴長の異名。

「謙稱。」

あく-さつ〔惡札〕名 文字の拙き書付。自筆の

（あく-さふ〔惡左府〕藤原賴長の異名。

あく-し〔惡詩〕名 ㊀拙劣なる詩。㊁己の作れる詩の謙稱。

「年一一」

あく-し〔惡子〕名 惡事をなすもの。

「輕薄少一一身にかへる。」

あく-じ〔惡事〕名 わるき事。惡しきしわざ。

「爲したる惡事の後に己に還り來るをいふ。」

一身にとまる。

「惡事を爲さば我身の瑾となりて消にくきをいふ。」

「善に善長、惡に惡短、惡に惡止に其身に善及子孫」

一傳千里。

「其文類聚に「好事不出門」とありて、よき事は人これを忌みて傳へず、惡事は條忽に傳播するをいふ。俗に「惡事千里」」

「不出門」

一行千里。

「啞然。」

「笑ふ貌。」

「前に同じ。」

あく-じ〔惡臭〕名 あしきにほひ。「一鼻をつく」

一びろう〔一一鼻漏〕名 病の名。膿漏ともいふ。鼻腔粘膜は蒼白となり肥厚し血管は擴張し分泌物膿結核等の人に多し。

あく-じう〔惡獸〕名 性質猛惡にして人畜に害をなす獸類。

「ふ淸あるをいふ。」

一も猶其類を思ふ。

「猛獸猶其同類を思ふ。」

あく-じき〔惡食〕名 極めて粗末なる物、或は衛生に害ある物を食ふこと。

（あく-しじま〔惡石島〕寶七島の一にして薩摩國の南方海中にあり。周回二里半餘。

（あく-しちびやうゑ〔惡七兵衛〕七男にて兵衛の官にありし平景淸の異名。

あく-しつ〔惡疾〕名 あしきやまひ。惡性の病氣。癩病。

あく-しつ〔惡質〕名 あしき性質。わるきたち。

あく-しば〔石蕃〕名 石南科に屬する水の名。葉は卵形にして其緣に鋸齒あり。莖は直立し單生の紅花を開く。實は小き漿果にして紅熟す。味甘し。

「き習慣。」

あく-しふ〔惡習〕名 わるきならはし。あしき

あく-しん〔惡心〕名 惡しき心。ねぢけたる心。惡事をたくむ心。

「國語「忘レ善則一生」」

あく-じん〔惡神〕名 佛 人に禍し世を亂し諸物を染汚し善事を破壞する神をいふ。

あく-しや〔輕舍〕名 神事など行ふ時庭上に設くるあげばりを引き廻したる假屋。

あく-しや〔渥赭〕名 あかう顏の形容。

「赫赫如一一」

あく-じや〔惡蛇〕名 毒ありて人を害する蛇。

あく-しやう〔惡性〕名 ㊀わるきうまれつき。不良の性質。㊁いたづら。淫奔。「一の妻」

（あくしや）

あく-じやう〔惡酒〕名 味の惡き酒。まぜ物など多き酒。

「一一惡人一相攻鬪二刀箭二」

あく-しゆ〔惡趣〕名 佛 あくだうに同じ。

一に回向す。

「旬佛」惡願を立てゝ自己が修めたる功德善根等をふり向けて惡道に生れ惡事を行ふ原因種子と爲さんと求むること。

あく-しゆ〔握手〕名 ㊀握りたる手。にぎりこぶし。㊁西洋の禮式上相會うて互に手を握りあふこと。

「一の禮」

㊂交りを結ぶこと。よしみを通ずること。

「後漢書「與語移レ日一極レ歡」」

あく-じゆ〔啞嗽〕名 嗚き聲のかまびすしきこと。

「島林「雀行求レ粒暮歸」」

あく-しよ〔惡所〕名 ㊀險岨なる所。あしき場所㊁いろざと。遊里。遊廓。あくじよ。

一おち〔一落〕名 遊廓に行くこと。

一がね〔一金〕名 あくしやうがれに同じ。

一がよひ〔一通〕名 遊廓にかよふこと。くるわがよひ。

一ぐるひ〔一狂〕名 遊廓の遊びにふけること。放蕩。

一は〔一場〕名 あくしよに同じ。

あく-じよう〔惡尉〕名 能に用ゐる面の名。尉の恐ろしき顏に作れるものをいふ。

あく-しる〔灰汁〕名 あく〔灰汁〕に同じ。

〔アクス〕〔阿古蘇〕支那天山南路の西北ムーザルド越の南口にある城邑。漢代の溫宿。

あく-すゐ〔惡水〕名 飲料にすべからざる水。

—ろ[—路]名 田畑灌漑用水の冗餘及濕地の排水等を疏通せしむる爲の溝渠。用水路を築ぬることもあり。げすねだう。

あく-せ[悪世]名(佛)人類の所行、末代に到るに從ひて漸く邪曲に傾き善事をなすこと少き時代をいふ。又末世と同意義に用ゐるとあり。

あく-せい[悪性]名 わるきたち。あくしやう病氣の性質の悪きこと。

—カタルねつ[—加答兒熱]名 牛・水牛にのみ發する熱性傳染病。「見る疾病。

—すねしゅ[—水腫]名 人及び動物に稀に

—のうはう[—膿疱]名 一種の觸接傳染病。初め皮膚に小隆起を生じ膿疱と化し後發熱し衰弱に因りて斃る。

—ひんけつ[—貧血]名 身神の過勞・不攝生・失血等の後、又藥毒・マラリアの如き高度の衰弱に原因して起る病。

あく-せい[悪聲]名 ㊀悪きうはさ。わるきことば。孟子「—至必反之」㊁人を罵る聲。

—を放つ。句 他人の事をわるくいひふらす。

あく-せう[悪少]名 性質のよからぬ少年。悪少年。荀子「無廉恥而嗜乎飲食」可謂—者矣」

あく-せく[齷齪]名 心せまくして物事にこせつく貌。事にかゝはりて暇なきさまにいふ語。動詞「小人自—安知曠士懷」「駟難追」

あく-せつ[悪舌]名 わるくち。罵詈由來—

あく-せん[悪錢]名 ㊀質の悪き錢。㊁不正の事をなして得たる金錢。

—身につかず。諺 不正の方法によりて得たる金錢は忽ち消費して我手に留まらざるべきをいふ。大學「貨悖而入者亦悖而出」

あく-せん[悪戰]名 互に殺し合ふ接戰。苦戰。「—苦闘」

あく-せん[渥前]名 古代の事を重んずること。

論語「俗儒好長ゝ古而短ゝ今言ゝ瑞—而薄後」

あく-せん[渥然]名 顏色の美しき貌。「ていふ語。

—丹青爲ニ槁木ニ」

あく-せん[啞然]名 笑ふ貌。笑ふ聲を形容し

あく-せん[偓佺]名 古仙術を得たりといふ支那人。列仙傳「—槐里採藥人也食ニ松實ニ形體生ゝ毛四寸能飛行」疏步」

あく-せんじ[悪禪師]源義朝の子阿野全成の異名。

アクセント[Accent]名 ㊀一語詞中殊に某の一綴を著しく發音するために加へらるゝ音の調。㊁發音の標準を示すために文字に附加する符號の一。㊂或音節に力を與ふること。

あく-ソウ[悪僧]名 わるき僧。悪行をなす僧。

あく-そく[齷促]名 あくさくに同じ。

あく-ぞ-もくぞ[芥藻屑]名 何の役にも立たぬもの。ちりづか。ごみため。糞堆。

—を言ふ。句 人のあらをいふ語。

あくた[芥]名 敗れ腐りなどして捨てられたる雜物。ごみ。塵芥。

あくた[動]名動 胎中に生ずる白くして長き蟲「名は旻。

かい。

(アグダ[阿骨打]金の太祖の名。姓は完顏、漢

あく-たい[悪對]名 悪口を言ひかくること。罵ること。悪罵。悪態。「—をつく」「同じ。

—もくたい[—もくたい]

あく-たう[悪黨]名 ㊀わるもののなかま。悪人の會合。㊁わるもの。悪人。悪徒。

あく-だう[悪道]名 ㊀佛 苦多くして樂少き境遇及び苦のみにして少しも樂なき境界をいふ。又阿修羅道をいふ。いづれも悪業を爲し者の墮ちて苦を受くる所なり。「—に回向す」㊁わるき道。難路。

—もの[—者]名 わるもの。すれっからし。

(あくたがは[芥川]攝津國三島郡にある川の名。又同郡にある村の名。

(あくたがは-たんきう[芥川丹丘]名は爽、字は彦章、養軒と號す。有名なる京都の儒者。

あく-たく[渥澤]名 あつきめぐみ。「遇休明多逢—」

あくたび[芥火]名 あくたを燃したる火。

あくたふ[芥丑]名 ちりづか。ごみため。糞堆。

あくたぶね[芥舟]名 塵芥を積み運ぶ船。

あく-だま[悪玉]名 ㊀草雙紙の繪に人の顏に悪の字を書きて悪人たることを表せるもの。善玉の對。轉じて悪人・わるものをいふ。

あく-たん[渥丹]名 ㊀美しき丹砂。うるはしき赤き色。㊁顏色の赤く美しきをいふ。詩經「顏如ニ—其君哉」

あく-たむし[癬]名動 あぶらむしに同じ。

あく-たもくた[芥藻屑]名 あくぞもくぞに同じ。「—をいふ」「いたづらっこ。

あく-たらう[悪太郎]名 いたづらもの。

—じだい[—時代]名 兒童のいたづら盛りの時代。

あく-たれ名 ㊀あくたれること。㊁あくたれぐちもの。

—ぐち[—口]名 あくたい。わるぐち。

—もの[—者]名 悪しき所業をなすもの。あばれもの。悪漢。

あく-たれる自動ラ下一 ㊀悪しき所業をなす。悪行を恣にす。悪戯。暴行。「毒を含める血。

あく-ち[悪血]名 病の爲に質を變じたる血。病

あく-ち[口頭瘡]名 口の邊に生ずる小き瘡。

—が切れる。句 あくちの口吻に出るをいふ。

—も切れぬ。諺 乳臭黄口などいふに同じ。

あくち[匿]名 きびすに同じ。

アクチノミコーゼ[放線菌病]名 放線狀菌の侵入に由りて起る病。

あく-ぢよ[悪女]名 ㊀心悪しき女。毒婦。㊁醜き女。醜婦。史記「美女入ゝ室—之仇也」

—の掌者振。諺 表面をつくらふをいふ。

—の深情。諺 悪女のしつこきをいふ。

—は鏡を疎む。諺 清き鏡は容の其儘を寫し醜貌は醜なり悪行悪きものは良心の明鏡に對しても亦然り、されば鏡を好まざるなりとの意なり。三程全書「明鏡爲ニ醜婦寃」

あく-ちよう[悪徴]名 あしきしるし。左傳「皆以ニ—爲ゝ祥」

あく-ちよく[悪直]名 正しきものを嫌ふこと。

あくと[踵]名 きびす。かかと。あくち。

あく-と[悪徒]名 わるもの。あくたう。悪漢兇徒。「と。書經「爵罔ゝ及ニ—惟其賢」

あく-とく[悪德]名 悪しき德。道德に反したる

—きしや[—記者]名 世人の弱點に乘じて威嚇し金錢などを強請する新聞記者。

あく-どし形一 ㊀濃きに過ぎて嫌はし。「—き色」㊁くだくし。うるさし。しつこし。「ひ廻るをいふ。

執拗。

あく-な-ふ[ウ]ナ[沛艾]自動ハ四 ㊀馬のはねて狂

(あく-に-じま[粟國島]琉球國渡名木島の北方にあり。周回二里半。

あく-にん[悪人]名 ㊀心の悪き人。悪事をなす人。善人の對。㊁容貌の悪き人。醜き人。孟子「雖ゝ有ニ—齊戒沐浴可ニ以供ゝ神」あくじん。

—がた[—形]名 芝居にて悪人の役をする者。かたきやく。

—には友多し。諺 省心錄要「小人詐而巧、似是而非、故人悅ゝ之者多」 同悪相黨

—の友を棄てて善人の敵を招け。諺 善人は敵なりとも悪人に優るが故に之を招けとの意。「人を試し斬りにたしゝに起る。

—は刀のためしもの。諺 武家時代には悪人の仇。諺 相容れざるものなるが故にいふ。

—の死に遂ぐべきものなるをいふ。

—は墓の上では死なれぬ。諺 墓には非命

あく-によ[悪女]名 あくぢよに同じ。

あぐ-ぬ[倦勞]自動ナ下二 あぐむに同じ。

あくね-せうちう[ウチウ][阿久根燒酎]名 薩摩國出水郡中阿久根の邊より産する燒酎の稱。芳烈を以て名あり。

あく-ねん[悪念]名 悪事を心にたくらみ居ること。

あぐ-ねる[倦勞]自動ナ下一 あぐむに同じ。

あく-ば[悪婆]名 ㊀心のわるきばば。㊁心の善からぬ老女を罵る語。

あく-ば[悪馬]名 わるき馬。人にくひつく馬。

あく-ば[悪罵]名 くちぎたなくのゝしること。

(あくはんぼう[ウ][悪阪坊]僧公曉に仕ふ。

—無ニ復高卑ニ」

公曉實朝を弑し北條氏來り攻むるに及びて苦戰して死す。

あく-ばく[幄幕]名 軍隊のとばり。左傳「子產以ニ—九張ニ行」「四合象ニ宮室ニ曰ゝ幄在ゝ上曰ゝ幕」

あくび[欠]名 呼吸の變態。あくぶこと。倦み疲れ、或はねむたき時などに廣く開口し續いて呼氣をなすこと。吹呿。欠噓。欠伸。呵欠。呵。

—は人にうつる。諺 京智三重「うつすべきあく
びに秋の友もなし」

あく-び〔渥美〕名 極めて美しきこと。

あくび-がた〔欠形〕名 竹製花器の名。掛花生に用ゐる。丈凡そ一尺六寸許の一重切なり。

あく-ひつ〔悪筆〕名 ㊀製法の粗なる筆。㊁文字を書くわざの拙きこと。㊂拙き手跡。

あく-びやう〔ヨビ〕〔悪病〕名 ㊀性の悪しき病。悪疾。㊁えやみ。疫病。傳染病。

あく-ふ〔悪婦〕名 あくさいに同じ。易繹〔蹟馬破レ車、—破レ家〕

あく-ぶ〔欠〕自動ハ四 ㊃ あくびをたす。榮華物語〔俄に—はせ給ひて御けしきいと苦しげなれば〕

あく-ふう〔悪風〕名 ㊀草木・人家などに害をなす大風。暴風。㊁悪しき風俗。「—に染む」

あく-ふ-の-そん〔握符尊〕名 天子の御位。九五の尊。文選〔握ニ乾符ニ闢ニ坤珍ニ〕

あく-へい〔悪弊〕名 悪しきならはし。悪習。

あく-へき〔悪癖〕名 わるきくせ。「くること。

あく-べん〔渥眄〕名 ひきたて。てあつく目をか

あく-ぼく〔悪僕〕名 性質の悪き下男。

あく-ぼく〔悪木〕名 用材にならぬ木。管子〔夫士懷ニ耿介之心一不レ蔭ニ—之枝一〕

あく-ま〔悪魔〕名 人に害をなす妖怪。人の心を亂す悪靈。尚魔を見よ。

—がうぶく〔ブクゴウ〕〔—降伏〕名 佛 悪魔即ち有形無形の障害を破滅し以て再び生起する

ことなからしむるをいふ。

—ばらひ〔ハライ〕〔—拂〕名 ㊀悪魔を追ひ拂ふこと。㊁徳川時代に婚禮の行列に加はれるおそろしげなる女。

あく-まで〔飽迄〕副 どのつまりまで。はてのはてまで。十分に。「—やるべし」あくまでも。

—に 副 前に同じ。易繹〔—あひ見て行かな〕

あく-み〔渥味〕名 あぶら強き味。うまき物。易繹〔甘香—之物、蟲生常多〕

あぐ-み〔足組〕名 ㊃ あぐむこと。あぐら。趺。

あぐ-み〔倦勞〕名 あぐむこと。うむこと。

あぐ-みづ〔灰汁水〕名 あく(灰汁)に同じ。

あぐ-み-の-こほり〔オリ〕〔飽海郡〕出羽國にあり。しが今羽後國に屬す。

あぐ-みやう〔ミヤウ〕〔悪名〕名 わるき名。汚れたる

あぐ-み-ね〔足組居〕名 ㊃ 兩足を組みて坐ること。

あぐ-む〔悪夢〕名 わるきゆめ。恐しき夢。

あぐ-む〔足組〕自動マ四 ㊃ 兩の脛を打ちちがへに組みて坐る。あぐら。趺坐す。結跏趺

「あく。もてあます。厭。

あぐ-む〔倦勞〕自動マ四 うみつかる。つかれ

あぐ-め〔悪馬〕名 あくば(悪馬)に同じ。

あぐ-や〔幄屋〕名 幕にて周圍をかこひたる假屋

(あぐら-のぶたね〔飽浦信胤〕三郎と稱す。左衛門尉・備前守に歴任す。建武の始め足利尊氏に應じ京師を攻む。高師秋と藤原衆季の侍女を得んと爭ひ、延元四年南朝に歸順す。

あ-ぐら〔足坐〕名 ㊀胡床・床机・椅子等の如き腰をかけて憩ふものゝ古稱。㊁胡床には趺にて坐るより轉じてあぐみ即ち脛を打ちちがへて坐ること。趺。安坐。胡坐。

—をかく。句 ㊀あぐみをなすこと。盤坐。箕居。㊁人の鼻のひらきて大なるを嘲りていふ語

あぐら-なべ〔胡床鍋〕名 あぐらかきて物を鍋にて煮ながら食ふこと。

あぐら-ばな〔胡床鼻〕名 扁くして大なる鼻。

あくらん-の-しよく〔握蘭職〕名 辨官の唐名 職原抄〔口含ニ雞舌香一手握レ蘭故此云ニ—〕

「ること。㊁あぐらに同じ。

あぐら-ね〔安坐居〕名 ㊃ ㊀あぐらの上にすわ

あぐり〔阿久利〕名 女兒のみ生れて男兒なき時又は生るゝ子の次次に死にて育たざる時に末子に名付くる名。かくする時は男兒生れ又夭死を免るといふ。

あぐり-あみ〔揚繰網〕名 施網の一。鰹鰹等を漁するに用ゐる。

「二艘を用ゐる。

—ぶね〔—船〕名 揚繰網を使用する船。通常

(あくり-がは〔ワガ〕〔阿久利川〕阿武隈川の別稱。

「船。

あぐり-ぶね〔網繰船〕名 網の繩をたぐりよする

あく-りやう〔リヨウ〕〔悪靈〕怨などのありて祟をなす死靈。怨靈。鬼祟。あくらう。源氏物語〔—はしふねきやうなれど〕

(—さふ〔—左府〕藤原顯光の異名。

(—みんぶきやう〔ヨミヤウブ〕—民部卿〕藤原忠文の異名。

あくりよく-けい〔握力計〕名 握力の強さを檢する器。鋼鐵にて橢圓形の輪をつくり、輪の内にある尺度によりて握力の強弱を檢す。

あくる-あさ〔明朝〕名 夜明けての朝。翌朝。

あくる-あした〔明朝〕名 前に同じ。

あくる-けふ〔キヨウ〕〔明今日〕名 ㊃ 夜あけたる其日。翌日。榮華物語〔—は心のどかに〕

あくる-つとめて〔翌朝〕副 ㊃ あくる朝はやく。榮華物語〔大宮—なかのおとゝに渡らせ給ふ〕

あくる-とし〔明年〕名 つぎの年。翌年。

あくる-ひ〔明日〕名 つぎの日。翌日。

あくる-ゐね〔悪戾〕名 心悪しくして道にそむきたる事をなすこと。史記〔駟鈞—虎而冠者也〕

あく-れい〔悪癘〕名 悪しき流行病。悪疫・疫癘

あく-ろ〔渥露〕名 しげきつゆ。和漢朗詠〔—沾ニ我裳ニ〕

「こうに同じ。

あ-クロールこう〔亞クロール汞〕名 藥 かんアクロレイン〔Acrolein.〕名 グリセリンを強く熱する時に生ずる無色にして刺戟性の臭氣を有する液體。

(あくろ-わう〔ワオ〕〔悪路王〕陸奥の賊首。延暦廿年征夷將軍阪上田村麿に誅斬せらる。

あく-わい〔ワイ〕〔亞槐〕名 大納言の異稱。三公を三槐といふより大納言は三公に亞ぐ官なるを以てかくいふ。亞相。

—わかしふ〔ワカウシ〕—和歌集〕大納言飛鳥井雅親の和歌を集めたる書。

あく-わうじ〔ワウジ〕〔悪王子〕名 演劇にて惡なる王子の役。又それに用ゐる鬘。

あく-わん〔ワン〕〔丫鬟〕名 年少き侍女をいふ。類書纂要〔—少女、垂鬟小婢也〕「奮激の親。

あく-わん〔掘腕〕名 うでをかたくにぎること。

あく-わんぼく〔ボクカン〕〔亞灌木〕名 すべて灌木より稍草に近き小き植物の總稱。即ち萩の如きものゝ類をいふ。

あく-ゐ〔幄帷〕名 たれぬの。魏志 坐則侍ニ—ニ

あく-ゑ〔悪繪〕名 人々集りて題を出し筆數少なく判物の如き繪を書き合ひて優劣を分つこと。

あく-ゑもんのかみ〔悪右衛門督〕藤原信頼の異名。

あく-をけ〔灰汁桶〕名 あくをしぼるをけ。

あけ〔朱〕名 赤きこと。赤き色。「—に染む」

—の-かは〔ワガ〕〔—革〕名 紅を以て染めたる緋色のもみ革。赤革とは別にして火縅鎧に用ゐる。

「緋の服を着るより名づく。

—の-きぬ〔—衣〕名 五位をいふ。五位は淺

—の-そほぶね〔—土船〕名 ㊃ 赤き色の土にて塗りたる船。

「朱塗の垣。

—の-たまがき〔—玉垣〕名 神社等にある

—を奪ふ紫。諺 朱は正色にして紫色は間色なり。正しき者の位置を奪ふ不正者をいふ。論語〔子曰惡ニ紫之奪ニ朱也〕

あけ 名 こたつやぐらに同じ。

あけ〔明〕名 ㊀明くること。㊁夜の明くること、あかつき。晨。天明。㊂蚊蚊などの客に乞ひ中途に座敷をあけて暇をもらふこと。

—の-かね〔—鐘〕名 あけがた寺院にてたらす鐘の音。曉鐘。

—の-みやうじやう〔ミヤウジヤウ〕〔—明星〕名 金星のあけがた東の空に見ゆる時の稱。宵の明星の對。曉明星。

あけ〔筌〕名 魚を捕ふる具。どに同じ。

あけ〔上〕名 ㊀上ぐること。㊁小兒の着物の肩と腰とにあたる部分を縫ひ上げて襞をつけおくこと。體の成長に備ふ。「肩—」「—をたす」

あけ〔揚〕名 ㊀油にてあげたる物の總稱。㊁あげどうふ、又はあぶらあげの略。

あけ〔上田〕名 ㊃ あげたの略。「醋き」

あけ-あし〔舉足〕名 ㊀身體地を離れ足の宙にあがること。柔術相撲などにいふ。㊁片足を上にあげて腰かくること。丹後國風土記〔緣さきに—して〕

—を取る。諺 我を蹴らんとて擧げたる足を取りて相手を打ち倒すことより、轉じて人の言ひ誤りにつけこみて言ひふせること。

あけ-あぶら〔揚油〕名 あげものに用ゐる油。即ち水油・ごまの油・菜種油の類。

あ-けい〔亞卿〕名 九卿に亞げる官をいふ。

あ-けい〔阿兄〕名 己の兄をしたしみていふ語。

(あけい〔阿桂〕清の名將。字は廣廷、雲崖と號

す。謀略あり又能く士卒の心を得たり。喜慶二年薨ず。上悼惜し太保を贈り文成と謚す

あげ-いし〔上石〕名 圍碁にて對手の石を圍みて取上げたるもの。はま。死子。

〔**あけいしじ**〔明石寺〕伊豫國東宇和郡にあり。四國遍路第四十三番の札所。

あげ-いた〔揚板〕名 ㊀板の間の板を取り外し得るやう置渡したるもの。あげぶた。㊁舞臺の前面と花道と合する點の左右の板敷を蝶番にて開閉自在にせるもの。

あ-けう〔ヨウ〕〔阿膠〕名 膠の精製したるものにして藥用に供す。すきにかはを見よ。

—ばん〔—版〕名 アートタイプを見よ。

あ-けう〔ヨウ〕〔阿嬌〕名 なまめかしき姿。

あ-けう〔ヨウ〕〔阿嬌〕名 ㊀美しき女兒。輟耕錄〔關中以二兒女一爲二—一〕㊁美人。女の名字。讓武故事〔若得二—一當下作二金屋一貯之〕

あげ-うた名 ㊀〔擧歌〕古の雅樂の名。日本紀〔此贈二首曰二—一〕㊁〔上歌〕上の調子にて謠ふ謠曲中の一節。

あげ-うま〔上馬〕名 神社に奉納する馬。

あげ-うら〔上裏〕名 ㊀建築にて上方に在るもの。下より見ゆる裏。〔軒先—〕㊁掛物の表具に最後に打つ裏の稱。そううら。

あげおとしさる〔揚落猿〕名 雨戸などの締りのため其上下に取附けたる小さき木にして自由に昇降せしめ得るもの。

あげ-おとり〔結劣〕名 ㊞ 元服して髮をあげ、姿の却つて以前より劣りて見ゆること。上劣。源氏物語〔いとかうきびはなるほどは—やと疑はしうおぼされつるを〕

あげ-おろし〔上下〕名 ㊀あぐるとさぐると。㊁荷物のつみおろし。揚卸。㊂肩揚。腰揚をおろすこと。

—かなもの〔—金物〕名 扉又は開障子の「締り金物。

—しやうじ〔ショウジ〕〔—障子〕名 垂直なる溝に沿ひて上下せしめ得べき障子。

—まど〔—窓〕名 揚卸障子を有する窗。あげさげまど。

あげ-おろす〔開下〕他動サ四 ㊞ 「山家集」庵の窗を—べき」

あげ-かす〔揚滓〕名 あげものをなしたる油にたまるかす。

あげ-かすがひ〔カイ〕〔擧鎹〕名 「かすがひ。あげ戸を止むるつき。天明。昧爽。

あげ-がま〔上鎌〕名 貫頭を柱などに取附くる一法。貫の端を鳩尾形となし柱に穿てる孔に差込みたる後上にいさらせて下に楔を打ち固むるなり。

あげ-がらす〔明烏〕名 ㊀あけがたに啼く烏。曉烏。㊁俗曲の名。浦里と時次郎との事を記せるもの。

あげ-く〔擧句〕名 ㊀連歌の下の七七の二句。發句の對。㊁㊞ 轉じて物事のなほり。すゑ。とどのつまり。

—の-はて〔—果〕名 前の㊁に同じ。結局。最終。最後。

あげ-くだし〔上下〕名 ㊞ 酒に醉ひ或は病氣に罹りてはきくだしをすること。としや。吐瀉。

あげ-くらす〔明暮〕他動サ四 ㊞ 夜をあかし日をくらす。年月をすごす。宗祇物語〔春は花を眺め秋は紅葉を眺めて—に〕

あげ-く-る〔明暮〕自動ラ下二 ㊞ 夜あけ日くる。月日たつ。金葉集〔何事をまつとはなしに—れて今年も今日になりにけるかな〕

あげ-くれ〔明暮〕名 日の明くる時と暮るる時。あさばん。朝夕。日夜。〔—のつとめ〕

—なし〔—無〕形一 ㊞ ㊀日夜忘るゝ時なし。㊁二つとなし。此上なし。宇治物語〔己は又二たき人の唯—きものとかしづきぐさにこれひとりを思ひて〕

あけ-くれ〔明暮〕副 朝に夕に。日日に。常に。

あけ-くれ〔明暗〕名 ㊞ 夜明がたのまだ少しうすぐらきこと。又其時。あさまだき。未明。〔—の程に出で給ふ〕

あけくれば〔明來者〕副 ㊞ 夜あけて晝になれば。萬葉集〔滋賀の浦にいさりする海人—浦まこぐらし〕

あげ-ごし〔上奥〕名 肩にてかつぐ奥。「平肩奥。下奥の對

あげ-ごと〔獻事〕名 ㊞ 神佛に物を供ふること。獻事。巢竹集〔七夕にかさむと思ふ—に〕

あけ-ごろも〔緋袍〕名 緋色のうはぎ。古五位の人の着用せしもの。

あげ-さげ〔上下〕名 ㊀上ぐると下ぐると。進退。黜陟。抑揚。㊁褒むると誘ると。褒貶。㊂質物をうけ出して又入るゝこと。

〔**あげささは-の**〔上小竹葉野〕「野の名。攝津國にある

あげざまに副 ㊞ 上の方にあぐるやうにして。保元物語〔刀を拔きて爲次が草摺を捕へて—つかむとす〕

あけ-さ-る〔明去〕自動ラ四 ㊞ 「ぎ了る。〔夜—〕〔年—〕過了。

あけ-されば〔明去者〕副 ㊞ 夜全く明く。過萬葉集〔夕されば汐をみたしむ—潮をひしむ〕夜が明けて來れば。

あげ-じとみ〔上蔀〕名 蔀格子の上部にてふつがひ（蝶番）を打ち軒裏より吊金具を下して突き開きを障へしむるもの。

あげ-しほ〔オ〕〔上潮〕名 海水の高く漲溢すること。さししほ。ひきしほの對。うしほを見よ

あげ-しやうじ〔ショウジ〕〔揚障子〕名 舞臺裝飾の名。三方より垂れたる障子を柝聲と共に上の方へ卷き揚ぐるやうに仕掛けたるもの。

あげ-しようもん〔上證文〕名 德川時代の訴訟上の文書の名。原告被告ともに裁判の宣告に服する時上げる證文にして請證文より詳細なるもの。

あげ-すけ〔明透〕名 「祕密を守る能はざる人。おくそこの見えすく人。

あけ-すけ副 無遠慮に。露骨に。〔—言ふ〕

あげ-すど〔揚簀戸〕名 茶道にて數寄屋二つありて露地二つに分れたる所に用ゐる簀戸。

あげずに〔不擧〕副 あひだを置かずに。やすみなく。〔三日と—通ふ〕

あげず-の-ま〔不明間〕名 「たる室。開くことを禁ぜられたる室。

あげず-の-もん〔不明門〕名 ㊀開くことを禁ぜられたる門。㊁偉鑒門の別稱。花山天皇遁世せられし時此門より出でられしを以て不祥の例として以後あけざるに起る。

あげ-せん〔上錢〕名 ㊀物を貸し又は賣りて得たる錢。㊁人を勞せる報酬にやる錢。㊂あげだいに同じ。浮世物語〔—につまりて桶伏せとなり〕㊃日がけ又は月がけのかけせん。揚錢。

あげ-そこて〔擧底手〕名 瀨戸燒の茶入の名。其土は淡紅色、上釉は淡黑色にして腰卷の釉は濃黑色に黃飴色の混じたるもの。

あげ-た〔上田〕名 ㊞ あがりたる田。水なき田。

あげ-だい〔揚代〕名 遊女を招ぐ代。遊興費。

あげ-だか〔揚高〕名 うりあげ高。うりだか。

あげ-だし〔揚出〕名 豆腐茄子などを衣をつけずして油にてあげたるもの。

あげ-だたみ〔上疊〕名 疊の兩面共に表と緣とをつけたるもの。これを二枚ほど座敷の疊の上にしきて貴人の座とす。之を御座といふ。御座疊

〔**あけたつ-の-みこと**〔阿居太都命〕「たちかならなのみことに同じ。

あけ-たて〔開閉〕名 戶障子を明くると閉づる「と。

あけ-たて〔明立者〕副 ㊞ あけさればに同じ。古今集〔—せみのうちはへ鳴きくらし夜は螢の

〔**あけたどるみこはた-くわうざん**〔ザンコウ〕〔明迦神子畑鑛山〕もえこそわたれ〕但馬國養父郡にあり。金・銀・銅・鉛を產出す。

あげ-だま〔上玉〕名 かぶとの臺座のかざり。又其いきだしの穴のまはりをいふ。揚玉。

あげ-だま〔揚毬〕名 中古武家の間に行はれし打毬の用語。紅白何れか一方の組豫定數の毬を毬門に投げ入れたるとき其組に對し審判官より更に一個の金色の毬を與ふ。即ちこの毬をいふなり。

あげたり-さげたり〔上下〕句 あげさげに同じ。

〔**あけち**〔明智〕美濃國にある小市街。

〔**あけち**〔明智〕本姓は清和源氏。美濃の土岐氏の支族なり。

〔**—みつただ**〔—光忠〕次郎右衛門と稱し、光秀の從父弟なり。後薙髮して長閑齋と號す。光秀に從ひて二條城を攻め傷を擊りて後光春と共に阪本城に自殺す。年四十三。

〔**—みちはる**〔—光春〕左馬介と稱す。明智光秀の從弟なり。天正十年光秀の叛を起すや其先鋒となりて織田信長を本能寺に攻む。其年六月近江國阪本城に自殺す。

〔**—みつひで**〔—光秀〕美濃の人。近江の佐佐木氏に仕へて明智十兵衛と稱す。後信長に愛せられて其臣となり戰功あり。然るに光秀信長を怨むことあり。遽に叛きて信長を本能

寺に弑し信長の子信忠を二條城に弑す。時に天正十年六月二日なり。秀吉之を聞き織田信孝・丹羽長秀と合して京師に向ふ。光秀之を山崎に迎へ戰ふ。然れども軍大に破られて殺さる。時に光秀年五十七。旗を擧げて僅に十三日。世之を稱して十三日公方、又三日天下と云ふ。光秀また和歌を善くす。

(一みつよし〔一光慶〕光秀の子。十兵衛と稱す。英才にして孝德あり。父の惡逆を知り屢諫むれども聽かれず遂に憤死す。時に年十四。

あけつげ-どり〔明告鳥〕名 雞の異名。

あげ-つち〔揚土〕名 高き處に積上げたる土。太平記 ―壁と共に崩れて掘は平地になりにけり」

あげつち-もん〔上土門〕名 ㊀屋根の上を平らにし其上に土をあげ石灰にて塗りたる門。㊁二本の圓柱の上に冠木を渡し其上に土をもりたる門。あづちもん安土門)

(一んもちつげる)

あげ-づめ〔揚詰〕名 ㊀物を常にあげをること。㊁藝妓などをよびつゞくること、又買ひきること。今世風語 「此―よしなきことなり」

あげつらひ〔アゲツライ〕〔論〕名 ㊃ あげつらふこと。辯論。

あげつら-ふ〔アゲツラフ〕〔論〕他動ハ四 ㊃ 道理をあげて戰く。よしあしをいひ爭ふ。論ず。論議す。古事記 「まづつばらかに黃泉神と―はむ」

あげ-て〔擧〕副 のこらず。ことごとく。皆。

あげ-と〔揚戸〕名 下の方よりおし上げてたつる戸。蝶番などにて柱に其戸を着く。

あげ-どうふ〔揚豆腐〕名 豆腐を胡麻の油、又は菜種油にてあげたるもの。あぶらあげ。あぶらげ。

「に釣り上ぐる燈籠。

あげ-どろろ〔揚燈籠〕名 軒又は竿の先などに用ゐるなべ。

あげ-なべ〔揚鍋〕名 油あげ・天麩羅などを製す

あげ-に〔明荷〕名 ㊀竹葛籠(ツヅラ)の一種。外をこざにて被ひ角角又は押緣に割竹をつゞりつけたるもの。旅行の具とし、假に細引にて束ねて時時明くることあり、故にいふ。㊁いまだ包裝せざる荷物。

「ず星など殘ること。「空の星」

あけ-のこ-る〔明殘〕自動ラ四 夜未だ全く明けず。

あげ-のり〔擧告〕名 ㊃ 申し上ぐること。

あげ-は〔揚羽〕名 動 あげはのてふの略。

あげ-ば〔揚場〕名 船より荷物を陸にあぐる處。にあげば。埠頭。

―せん〔―錢〕名 あげばにて拂ふ手數料。

あげ-ぼし〔上帽子〕名 婚禮の時花嫁の被る帽子。

「㊁しまりたき人を嘲りいふ語。

あけ-はなし〔明放〕名 ㊀あけはなすこと。開放。

あけ-はな-す〔明放〕他動サ四 ㊀戸障子などを殘りなく皆開く。㊁開きたるまゝにて閉ぢず。

あけ-はな-つ〔開放〕他動タ四 前に同じ。

あけ-はな-る〔明離〕自動ラ下二 夜全くあく。源氏物語 「―るゝまゝに霧のたちみちたる空をかしきに」

あけ-はなれ〔明離〕名 夜のあけはなるゝこと。夜

あけは-の-てふ〔ヨウチフ〕〔揚羽蝶〕名 ㊀(動)蝶の一種。形大く翅の色薄茶色にして黑き縱條、小き輪などの斑紋あるもの。物に止る時は翅を揚げ合はす。さんせうむしの羽化せるもの。鳳蝶。㊁此蝶の物にとまれる狀を畫げる紋所。

(一ふてのはげあ)

あけ-ばん〔明番〕名 ㊀宿直を終へて退出すること。宿直せし次の日の休。㊁夜あけがたの番。

あげは-やどりばち〔揚羽宿蜂〕名(動)揚羽蝶に寄生する蜂、翅は黃色、脛脚は赤褐色なり。

あけ-はら-ふ〔ヨウハラフ〕〔明拂〕他動ハ四 ㊀戸障子など悉くあけはなす。㊁あけわたすに同じ。

あげ-ばり〔幄〕名 四方と上とを圍ひて假屋とするに用ゐる幕にして今の天幕・テントの如きもの。帷幕。揚張。平張の對。

あけび〔木通〕名 植 あけびかづらの略。蔓草にして山野に多し。葉は掌狀複葉にして、五葉一處に集りて生ず。夏の初め若葉の間に細き枝を垂れて花を開く、色は薄紫と白との二種あり。實の形瓜の如く長さ二寸餘、熟すれば縱裂す。味甘く食ふべし。黑色の種子より油を搾る。食用・燈用共に適す。播州にては其葉を茶に代用す。又若葉は木芽漬に入れ、蔓は籠に造る。山女。通草。丁翁。

あけび-かづら〔木通蔓〕名 植 前に同じ。

あげ-びさし〔上庇〕名 つきあげびさしに同じ

あけび-てふ〔ヨウ〕〔木通蝶〕名 動 木通に居る尺蠖蟲に似たる蛾。前翅は黑褐にして木葉に擬し後翅は美麗なる黃色地に黑紋あり。

(あけひなど-の-みこと〔明日名門命〕たちからなのみことに同じ。

あけ-ひばり〔明雲雀〕名 夜の明け方に鳴くひばり。「ぢり。

あげ-びんづら〔上鬢〕名 ㊃ あげみづらに同じ。「くす。

あけ-ひろ-ぐ〔開擴〕他動カ下二 おしあけてひろ

あげ-ぶた〔上蓋〕名 廚などの板間の床に釘付けにせず蓋の如く上げて開くやうに作りしもの。下に物を貯ふ。あげいた。「用する機の名。

あげ-ぶね〔揚槽〕名 醪を最初に壓搾するに使

あげ-ほだし〔揚槭〕名 罪人の手足を上の方へつるし上げて置く爲のほだし。

あけぼの〔曙〕名 曉より朝までの間にて空未だ少し暗き頃の稱。あかつき。しのゝめ。枕草紙 「春は―山ぎは少しあかりて」「出せるもの。

―じま〔―縞〕名 あけぼのぞめにて縞を染

―ぞめ〔―染〕名 染色の名。紅又紫などにて處々をくまどり曙の空の色の如く下を濃く上を淡くぼかしたる染模。「の號。

(あけぼの-あん〔曙庵〕三河の俳人中島秋擧

あけぼの-ぐさ〔曙草〕名 ㊃ 植 さくらの異名

あけぼの-さう〔ソウ〕〔曙草〕名 植 草の名。葉は

おほばこに似て尖る。秋帶黃白色の花を開く。ほたるさう。獐芽菜。

あけぼの-さくら〔曙櫻〕名 山城國京都鞍馬口の閑臥庵にある櫻樹。後水尾院の詠歌によりて名高し。

あげ-まい〔上米〕名 享保年間に德川八代將軍吉宗が諸侯に課せし制度。卽ち萬石以上の諸侯に祿一萬石に付米百石の割合にて春秋二季に半額宛の上納をなさしめたるをいふ。

あげ-まき〔揚卷〕名 ㊀少兒の髮の結ひ樣の名。ふりわけ髮を卷き上げて左右に雙角の如く結べるもの。總角。㊁あげまきに結びたる兒童の稱。源氏物語 「―の心さへそめぎまし」き」㊂婦人に扮する俳優の用ゐる一種の鬘。㊃あげまきむすびの略。㊄神樂歌の曲名。㊅催馬樂の呂の曲名。

―づけ〔―附〕名 鎧の後の總角を付くる部

―づつみ〔―包〕名 實物に似たる樣につゝみ封じたるつゝみ。御伽名代草紙 「腰の包は―とてそなたを移した包おや」

―の-いた〔―板〕名 さかいたに同じ。太平記 「鎧の弦走より總角付の板まで」

―むすび〔―結〕名 紐の結び樣の名。左右に輪を出し中をいしだたみに結べるもの。御簾・鎧などの飾とす。

あげ-まき〔總角〕名(動)までの類の貝の名。介殼はやゝ長方形をなして前後に開き外面は淡茶褐色にして內面は白色なり。頭より紐の如きもの二すぢを出しあげまきむすびに似たれば此名あり。あふぎがひ。

(あげまき〔總角〕元和頃の京都島原の娼妓。容姿技藝共に人に秀づ。情客助六のために其仇陶要人を殺して後尼となれり。

あげ-まき〔揚蒔〕名 稻種を浸種後に發芽せしむるやう播種する法。芽出蒔の對。

あげ-まく〔揚幕〕名 ㊀芝居にて舞臺より進みて花道の行きどまりにかくる幕。はな色にして座元の定紋を染め出す。㊁轉じて此幕をかけたる處卽ち下棧敷の後にある役者の花道への出入口をいふ。㊂能舞臺の橋掛りの出入口に垂下せる幕。

あげ-まさり〔結髮〕名 ㊃ 兒童の元服して髮をあげ髮の以前にまさりて美しくなれること。元服ばえ。狹衣物語 「一の宮の御―のゆゝしきは」

あげ-また〔擧股〕名 あふのけに寢ねて兩足の膝を折り曲げて高くすること。繪勝負毛 「大道に―つて高いびき」「つきだしまど。吊窗。

あげ-まど〔上窗〕名 つきあげ戸の造りの窗。

あげ-まんぢゅう〔揚饅頭〕名 油にて揚げたる饅頭。「げたる水。

あげ-みづ〔揚水〕名 高き處に通ふやうに仕掛

あげ-みづら〔上鬢〕名 ㊃ 古に行はれし幼者の髮の形。頭髮を耳の邊にて結ぶ故に此名あり。

(あけみ-れいせん〔明見冷泉〕甲斐國南都

留郡にあり。泉質單純泉なり。

あ-けん〔亞獻〕名 祭祀又は賓客ある時初獻に攤ぎて飲食物を獻ずること。儀禮「主婦洗二爵于房一酌—尸」

あけ-むつ〔明六〕名 「今の午前六時。暮六の對 曉の六つ時。卯の時、卽ち

あげ-もち〔揚餅〕名 油にてあげたる餅。油餡。

あげ-もち-ゐる〔擧用〕他動ワ上一 人を採用して官職に就かしむ。登庸。擢用。

あげ-もの〔揚物〕名 ㊀料理の一種。蔬菜魚介等に水にて溶したるうどん粉をまぶし、それを油にてあげたるもの。別ちて蔬菜なるをしやうじんあげといひ、魚介なるをテンプラといふ。㊁ひそかに盜みたる品物。「等を賣る家。

—や〔—屋〕名 あぶらげ-しやうじんあげ

あげ-もの〔上物〕名 さしあげ物。獻上物。矢日渡「かちいくさの祝儀と心のついた—」

あげ-や〔揚屋〕名 ㊀遊廓にて遊女をあげて遊ぶ家。貸座敷。㊁ひとや。牢獄。

—ざけ〔—酒〕名 揚屋にて飲む酒。茶屋酒。

—さしがみ〔—差紙〕名 揚屋より娼妓を呼びにやるふみ。「次なる下等なる女郎。

—ぢよらう〔—ジョロウ〕〔—女郎〕名 梅茶女郎の

—ばらひ〔—ライ〕〔—拂〕名 揚屋に遊興費を仕拂ふこと。「も三絃に名を得し人。

(あげや-きさい〔揚屋喜齋〕慶安・明暦の頃最

あげ-ゆ-く〔明行〕自動カ四 ㊀夜次第に明く。源氏物語「—空はいたうかすみて」㊁次第に過ぎ行く「年—」

あけら-かんかん-と 副 ぼんやりに同じ。「然。忙

(あけら-くわんかう〔—カン—コウ〕〔朱樂管江〕名 は景貫、通稱山崎鄉之助、江戸の人。蜀山人と共に狂歌に名あり。寛政十二年歿。年六十三

あ-ける〔開〕他動カ下一 ひらく。あく。

—目も無し。句 ㊀ひらく時なし。こもりがちなり。「松の戸をさして歸りし夕より—くものをこそおもへ」

あ-げる〔揚〕他動カ下一 ㊀「女をよびて遊ぶ。㊁油にて煮る。㊂遊

(あげろ-の-やま〔上路山〕越後國西頸城郡にあり。上道下道あげろ越とて有名なる難所にて多くの山谷、繩を以て橋とす。又昔此山に住める山姥里に出でゝ人を誑したりといふ。

あけ-わたし〔明渡〕名 あけわたすこと。「家の—」

あけ-わた-す〔明渡〕他動サ四 家又は城を明けて人手に渡す。

あげ-わた-す〔揚渡〕他動サ四 ㊀殘りなくあぐ。狹衣物語「たしかに見よとのたまへばはじとみ—して」

あけ-わた-る〔明渡〕自動ラ四 夜全く明けて一

あげ-を〔上緒〕名 冠の緒。上緒。緌。おいかけ

(あげ-を〔上尾〕武藏國北足立郡にある市街。

あ-こ〔下火〕名 字の宋音。佛 禪宗にて火葬の時、火をつくる役目の僧又は其作法をいふ。今は偈文を唱へ點火の態をなすのみ。下炬。

あこ〔赤魚〕名 動 あかうに同じ。

あこ 名 ㊀みづしどころをつとむる宮女。おんなかぬ。

あ-こ〔蛙鼓〕名 蛙のむらがり鳴く聲をいふ。

あ-こ〔吾子〕代 ㊀我子又は人の子を親み呼ぶ語。吾兒。あご。蜻蛉集「此の—をからくにへやる」

あ-こ〔彼處〕代 ㊀あそこ。あしこ。

あご〔顎〕名 ㊀顎部の俗稱。上顎と下顎とより成り發音と食物の咀嚼とを營む機關。あぎ。あぎと。脣。㊁事ち下顎の外面。したあご。おとがひ。下脣。頤。㊂魚のえら。

—の-しづく〔—雫〕名 我口に入らぬをいふ。

—が落ちる。句 味のうまきことを誇張していふ語。

—が干上る。句 生活の道を失ふ。

—で蠅を追ふ。句 身體非常に痩せ衰へて顎骨露れ元氣の鎖亡せるにいふ語。

—で人を使ふ。句 己高ぶり人を見下げて使役す。顧使す。

—を吊す。句 何も食はずに居る。「まきにいふ。

—を脫す。句 ㊀大に笑ふ。㊁食物の味の甚う

あ-ご〔網子〕名 ㊀あびきする人。網を引く人。蜻蛉集「あびきすと—とゝのふるあまのよびこゑ」

あご-あみ 名 とびうをを流するに用ゐる漁網

あこう〔赤魚〕名 動 あかうに同じ。「閣の名。

あこう 名 植 まつだけに似て香氣を有せざる

(あこう-かい〔阿猴街〕臺灣の臺南縣に屬し阿猴廳の所在地にして總督府へ百十八里。

(あこう-てん〔阿公店〕臺灣島臺南市の南方七里にある小市街。

(あこうてん-がい〔阿公店街〕播磨國赤穗郡の南方有年川畔にあり。古來赤穗鹽の名產地として名あり。此町に大石良雄以下四十七士の遺址あり。

アコウ-の-き〔榕〕名 植 アカウに同じ。

あこえ〔距〕名 ㊀けづめに同じ。

(あご-がは〔—ワ〕〔安居川〕越前國にあり。日野川・足羽川の合流にして阪井港に注ぐ。

あこがら-す〔憧〕他動サ四 ㊀あこがるやうになす。源氏物語「我身をさしもあるまじきさまに—し給ふ」

あこが-る〔憧〕自動ラ下二 ㊀思ひあまり心落付かずして浮かる。魂身にそはず。あくがる。㊁思ひこがる。胸をこがす。懷。

あこぎ〔阿漕〕名 「逢ふことを—の島に引く網のたびかさならば人も知りなむ」といふ古歌に出づ。㊀事の度かさなること。同じ事をくりかへすこと。㊁轉じてあくまでも貪ること。法外。㊂謠曲の曲名。

(あこぎ-が-うら〔阿漕浦〕伊勢國安濃・一志兩郡の東方雲出川注口より塔世川注口に至る間の海濱を云ふ。白砂青松相映じて風景絕佳なり。此阿漕とは安濃をば詠歌者流の句調のために異樣に詠めるに起るなりと。阿古木草紙に、平盛の子に次盛と云ふ者あり、神宮御贄の禁を犯して此に網引し遂にあらはれて殺され始末を記す。古き物語にして近世之を淨瑠璃曲に演ず。卽ち阿漕の平次の事なり。此地にある明神は彼を祀るといふ。

(あこく-そ〔阿古久曾〕紀貫之の幼名。「り。

あこし-か-り〔可〕自動ラ變 ㊀よくあり。よろしくあ

あこだ〔阿古陀〕名 ㊀あこだ-うり(紅南瓜)の略。㊁あこだがた南瓜形)の略。

—うり〔—瓜〕名 植 蔓草。ほうぶらの類。果實小くして形圓く皮赤くして表面に條なし。

—がた〔—形〕名 ㊀あこだ-うりの形をなせる青磁・交趾等の總稱。㊁兜の鉢の名。其形あこだ-うりの如くにして前後高く頂上少しく凹み多くは黑塗にて鍍金の總覆輪なり。十代目宗安の作り始めしものといふ。

(アコタイ〔阿呼岳〕阿忽台)元の成宗の大德七年左丞相となる。十一年成宗崩じ嗣なきに當り、安西王安南達を擁立せんとせし爲、哈喇哈斯等の迎へ立てし阿裕爾巴里巴特喇の大都に入るに及び誅せらる。

あご-だいりき〔顎大力〕名 俗 口のみにて大なることをいふもの。

あこ-たち〔我子達〕名 ㊀こどもたち。蜻蛉集「さらば此—はけふもいさかし」

あご-つき〔顎付〕名 俗 賄付にて雇はるゝをいふ。

あご-なし〔無顎〕名 ㊀おとがひの短きこと。又其人。㊁(動)上顎大くして下顎極めて薄き魚にして體は黃金色、其他は灰色なり。

—ぢざう〔—ジゾウ〕〔—地藏〕名 ㊀前の㊀に同じ。㊁隱岐國にある石地藏。

アコニット〔鳥頭 Aconite.〕名 ㊀(植)とりかぶとに同じ。㊁(藥)とりかぶとの根より抽出せる有毒質をいふ。尙とりかぶとを見よ。

—エキス〔—越 斯〕名 藥 アコニット根中末に酒精を注ぎて壓漉し更に蒸發せしめたるもの。レウマチス・神經痛・耳痛等に體溫を下降せしむる藥劑とす。

—こん〔—根〕名 藥 アコニットの球根を花時の終に採集して乾燥せるもの。味苦辣なり。丁幾としてレウマチス及神經痛等に應用せらる。「末を稀酒精に溶して製したるもの。

—チンキ〔—丁幾〕名 藥 アコニット根粗

(あこ-の-うみ〔阿胡海〕長門國にある海の名。

(あこ-の-うら〔阿古浦〕志摩國志摩郡にあり今の鳥羽浦ならん。

(あこ-の-ことほり〔—オリ〕〔英虞郡〕志摩國にあり。

あこ-の-たき〔阿古瀑〕大和國吉野郡にあり。高さ三百尺、幅三十尺。天川に注ぐ。

(あこのをかのうへ-の-みささぎ〔安古岡上陵〕大和國高市郡にある文武天皇の御陵。

あご-ひげ〔顎鬚〕名 ㊀したあごに生ずるひげ。したひげ。口鬚・頰鬚の對。㊁芝居にて役者の用ゐる鬘の一種。

あご-ふり〔頤振〕名 あごを左右にふること。
—三年。句 尺八の稽古にはあごふりのみにても三年を要すとの義。

あご-ぼね〔顎骨〕名 おとがひのほね。「說。
—の張り出た者は狡猾。人相に關する俗

アゴン〔阿含〕名(佛) ㊀阿含經の略。㊁特に小乘教をさしていふことあり。
—**きやう**(ヨウ)〔—經〕釋尊所說の經典の名稱。長阿含・中阿含・雜阿含・增阿含等諸部の經典を總稱す。

〔アゴン-の-たき〕〔阿含瀑〕「る裏見瀑の別稱。

あこ-め〔吾子女〕名 ㊟ 女兒を親みていふ語。賤婦。(俚言集)「田中の井月に光れる田葱つめつめ

あこめ〔袙〕名 ㊟ ㊀ 古代の禮服の一。男子の裝束の下に着る服。又婦人童女の肩に近く着る服。㊁ 眞言宗にて用ゐる衣體。

(一 あこめ)

—**あふぎ**(オオ)〔—扇〕名 扇の一種。三十九枚の薄き檜板を彩絲(イロイト)にて綴りたるもの。兩端を鰒結にし長く垂らしめて造花の飾りをつく。あこめを着る時に貴婦人の持つもの。
—**ぎぬ**〔—衣〕名 あこめに同じ。
—**すがた**〔—姿〕名 あこめを着たるすがた(源氏物語)
—**ばかま**〔—袴〕名 中古女の着けたる袴。多くあこめを着る時に用ゐる。

あこめ-の-はな名(植)すすきの異名。

あこや〔阿古屋〕あこやだまの略。(山家集)「—とるいがひのからをつみおきて」
—**がひ**(イガ)〔—貝〕名(動)介の名。形四角形をなし、外面は暗褐色にてさらつきあること蠣殼の如し。裏は白くして青紫を帶び、殼の緣は薄きこと紙の如し。眞珠は此貝の病的產物にして、肉はしら共に食ふべく味美なり。しんじゆがひ。そでがひ。たまがひ。珠母。
—**だま**〔—珠〕名 あこやがひより出づる珠。眞珠。あこやのたまともいふ。「阿兒耶。

(あこや〔阿古屋〕景淸の愛妓。五條阪の遊君

〔—づか〕〔—塚〕山城國京都六波羅蜜寺の境內にある塚。前のあこやを葬る。又一說に牛若丸の愛女牛王姬を葬るともいふ。
—**まひ**(イマヒ)〔—舞〕名 越後國刈羽郡にてあこやと名づくる歌に合せたる歌舞。

あさ〔朝〕名 夜明けの後正午の前の時。あした。
—**の-おこなひ**(オオコ)〔—行〕名(佛)晨朝の勤行。本尊に向ひ讀經又は修法を行ふをいふ。
—**の-もの**〔—物〕名 ㊟ あさぶち ㊀に同じ。
—**の-よる**〔—夜〕名 眞夜中より夜明けまでの稱。「度ある」
—ある事は晚にある。(諺)「一度ある事は二
—の一時は晚の二時に當る。(諺)「朝は何事をなすもはかどるが故にいふ。(俗編)「早起朝當二一工一」
—右夕左。(諺)朝は右の耳夕は左の耳痒ければ吉事を聞くといふ。
—紫に夕紅。(諺)遠山の景色の朝夕に異りて見ゆるを云ふ。紫匂ふ筑波山、夕日輝く富士の雪」などいふもあり。
—より夕まで兩國橋の上に槍の三筋絕ゆることなし。(句)江戸の繁昌をいへるもの。

あさ〔麻〕名(植) ㊀ 春種子を蒔きて秋刈取る草葉は形かへての葉に似、複葉にして對生す。莖はやゝ方形にして直立し高さ六七尺に至る。其皮の纖維を績ぎて絲を製す。其用途甚だ多し。此草に雌雄あり。なあさは薄緣なる細かき花を開きて實なく、めあさは之に反し花なくして細かき粒の如き實を結ぶ。之をあさのみと言ひて食用又は藥用とす。㊁ あさいとの略。其條を見よ。「—にて織る」㊂ あさぬのの略。其條を見よ。「—の衣」
—**の-かみ**〔—紙〕名 紙の一種。麻布を以て作るものと布を截り碎きて製せしものとの二種あり。(角記式)「凡書二位記料—者」
—**の-ころも**〔—衣〕名(佛) 麻布を以て仕立てたる法衣。僧衣中最も質素なるもの。
—**の-ざうむし**(ムシ)〔—象蟲〕名(動) 麻及甘菜を食害する極小形の甲蟲。に用ゐるもの。
—**の-たちえ**〔—立枝〕名 ㊟ 麻の莖。祓の時
—**の-は**〔—葉〕名 あさのはがたの略。
—**がた**〔—形〕名 ㊀ 模樣の名。麻の葉の形にかたどれるもの。㊁ 紋所の名。數種あり。
—**かへて**(エデ)〔—楓〕名(植) 喬木にして葉には稍圓きあり、又は倒卵狀圓形のものあり。いづれも四月頃淡黃の總狀花を着く。雌雄異株なり。みやまもみぢ。
—**がめ**〔—龜〕名(動) 瑇瑁(タイマイ)の類。大さ常の龜の如くにして甲に麻の葉の紋あるもの。南洋諸島に產す。
—**の-ほほぐろ**(グロ)〔—頰黑〕名(動) 麻を害する中形の蛾。一年に二回發生す。越年せし蛹は春を待ちて羽化し、直に大麻の葉につきて產卵す。卵は忽ち幼蟲に化し、七月繭を造りて蛹となり、一旬を出でずして蛾となる。
—**の-み**〔—實〕名 めあさの種子。小き粒にして黑く光る。食用・藥用及香料に供し又油をも搾る。なのみ。麻實。
—**の-むし**〔—蟲〕名(動) 麻の葉を食ふ小形の甲蟲。體は楕圓形にして光澤ある帶黑綠色を有す。頭は小く滑なり。硬翅には不規律なる點刻列あり。「ぬさ。
—**の-をぬさ**(ヲモギ)〔—幣〕名 ㊟ 麻にてつくりたる
—と蓬は世態につるる。(諺)蓬も麻の中に生ずれば直きが如く、世間外圍につれて萬事遷り變りゆくことに云ふ。
—につるゝ蓬。(諺)次に同じ。
—の中の蓬。(諺)善人に交れば其感化を受け自然に染習するをいふ。荀子「蓬生麻中不扶而直」(論衡)「蓬生三麻間一自直」
—は跡なくなる。(諺)曲れる蓬のみはびこりて正しき麻は跡もなくなる意にて、惡人勢を得て善人跡を絕つをいふ。(新勸懲集)「世の中の麻は跡なくなりにけり心まゝの蓬のみして」
—を荷うて舍を捨つ。(諺)善き物を棄てゝ惡しき物を取るをいふ。

あさ〔淺〕接頭 或語に冠して淺き薄きなどの意を表す語。「—瀨」「—黃」

あざ〔痣〕名 瘡打傷などの痕にて皮膚に異常の色を表しとゞむる部分。色素の病的增加、或は充血によりて生ず。黶。傷痕。

あざ〔字〕名 一村或は一町の中にて一部分の異稱。

あさ-あきなひ(ナイ)〔—朝商〕名 朝の商賣。「うり。ひ。

あさ-あけ〔淺緋〕名 ㊟ 染色の名。淺き赤色。緋色の薄きもの。(類集)「深みどり松にもあらぬ—の衣さへにぞしづみそめけむ」

あさ-あけ〔朝開〕名 ㊟ ㊀ あけがた。早朝。(雜古今集)「—の霞の衣ほしそめて」㊁ まばゆき朝日の影。「障子まばゆき—に」

あさ-あけ〔朝紅〕名 あさやけに同じ。
—は雨・夕紅は日和。(諺)天候を卜する諺。

あさ-あさ〔淺淺〕名 ㊟ ㊀ あさづけに同じ。宮女の語。㊁ あさつきに同じ。女の語。

あさ-あさ〔朝朝〕副 ㊟ まいあさ。朝毎に。毎朝。毎晨。

あさ-あさ-し〔淺淺—形二〕深からず。あさはかなり。「なり。淺薄。

あざ-あざ-し〔鮮鮮—形二〕はっきりしたり。あざやかなり。たしかなり。

あざ-あざ-と〔鮮鮮—副〕あざやかに。はっきりと。(源氏物語)「あまりにほひ多く—おはせしさかりは」(平家物語)「—してこそ見にたりけれ」

あさ-あめ〔朝雨〕名 朝のほどふるあめ。
—に傘いらず。(諺)直にはゝものなればいふ。
—に簑を卷け。(諺)前に同じ。
—は女の腕まくり。(諺)朝雨は大雨とならず女の腕まくりと同じく恐るゝに足らざるをいふ。

あさ-あらし〔朝嵐〕名 朝のほどに山より吹きおろす風。

あさ-あゐ〔淺藍〕名 ㊟ 染色の名。あゐ色のうすきもの。

あさ-い〔朝寢〕名 ㊟ あさねに同じ。(萬葉集)「ほとときすけさのあさけになきつるは君聞きけんか—かぬらん」

あ-さい〔亞歲〕名 冬至の異稱。(宋書)「魏晉冬至之日、受二萬國及百僚之稱賀一、因小會、其儀亞二歲朝一」とあるに本づく。

あさ-いと〔麻絲〕名 麻より作れる絲。秋莖を蒸して外皮を剝ぎ、其纖維を水に浸したる後、細に裂きて絲とす。布に織り、繩にたふ。

あさ-いひ(イイ)〔朝飯〕名 あさめし。朝の食事。

あさ-うたひ(クイ)〔朝謠〕名 朝うたひをうたふこと
—は貧乏(ビンボウ)の相。(諺)「乞食の朝謠」ともいひて

朝よりうたふはよろしからずとの意。

あさうつ 名(植) あけびに同じ。

あさ-うら〔麻裏〕名 あさうらざうりの略。

—ざうり(カリ)〔—草履〕名 麻苧を三組に編みひらうちにしたるを裏に縫ひつけ裏皮に代用したる草履。

あさ-うり〔淺瓜〕名 ㊀しろうりの一名。㊁へちまの一名。

あさ-おき〔朝起〕名 朝早く起くること。又其人。晨起。夙起。朝寢の對。

—三兩始末五兩。諺 早起と節儉との利益〔多きをいふ。

—千兩。諺 前に同じ。

—に三文の徳あり。諺 前に同じ。

—の家には福來る。諺 朝早く起きて働く家は繁榮し、晩く起くる家は衰亡すとの意。

—は高貴の基(モト)。諺 前に同じ。

—は七の徳あり。諺 朝夕の早晏を觀て人家の興替を識る。傳家寶〔早起三光遲起三慌〕

—貧乏寢福(フク)の神。諺 正月元日の早起は貧苦を招き遲起は福を招くといふ俗習に起る。

(あさか-きうけい〔淺加久敬〕加賀國金澤の有名なる國學者。貞享年間の人。著書多し。

(あさか-きさい〔安積希齋〕名は貞吉、介之丞と稱す。常陸國水戸の人。最も詩に長ず。寛文六年七月歿す。年三十七。

(—どんさい〔—長齋〕名は重信、字は子明、通稱祐助、見山樓とも號す。奥州二本松の人。幼より學を好み奇才あり。最も文章に通ず。德川氏に仕へて儒臣たり。萬延元年十一月歿す。年七十一。

(—ごらう(ロウ)〔—五郎〕勤王の士。江戸の人。東海と號す。文久三年、中山侍從に從ひ大和に義兵を擧ぐ、利あらず生擒せられ、翌年二月獄中に殺さる。年三十七。明治三十五年從四位を贈らる。

(—たんぱく〔—潛泊〕名は寛、字は子先、覺兵衛と稱す。水戸藩の碩儒にして最も史學に通ず。大日本史編修の總裁たり。元文二年歿す年八十二。明治卅六年正五位を贈らる。

(あさか-がた〔淺香潟〕あさかのうらに同じ。

あさ-がき〔朝搔〕名 醬醪又は濁酒などの攪拌操作の午前に行ふもの、稱。かきさげ。

あさ-かげ 名㊀ ㊀〔朝陰〕㊁あさすがに同じ。㊂朝日の照らさぬ處。㊃〔朝影〕朝日にうつる影の如く痩せたる姿。萬葉集〔—に我身はなりぬ〕

あさ-がけ〔朝驅〕名 ㊀(兵)朝早く不意に敵陣を襲ふこと。盛衰記〔一の谷—の事〕㊁早朝外出すること。〔—に友達の家に寄る〕㊂朝馬に乘りてかくること。

—の駄賃(ダチン)。諺 朝は馬の勢よければ少量の荷物は苦にならざるより容易なることに喩ふ。

(あさか-じんじや〔阿射加神社〕伊勢國一志郡阿坂村にあり。

(あさか-しんわう(ノウ)〔安積親王〕聖武天皇の皇子。御母は縣犬養廣刀自。天平十六年正月天皇に從ひて難波の宮に行く途中病に罹りて薨ず。年十七。

あさか-しや〔淺香社〕落合直文の東京市本郷區駒込淺嘉町に設けたる歌文の會。轉じて同氏の家の稱。

(あさか-じやう(ヨウ)〔安阪城〕伊勢國一志郡大阿阪村にあり。俗に白米城といふ。北畠氏の臣大宮尾張守此に居す。

あさ-がすみ〔朝霞〕名 朝のほど立つ霞。

あさ-がすみ〔朝霞〕枕 かすみはほのかにかをるが如きものなればかにかけていふ。萬葉集〔—かびやかしたになく蛙〕

あさ-かぜ〔朝風〕名 ㊀朝吹く風。新拾遺集〔—はやみ花ちりぬべし〕㊁〔地〕日出後海岸及山谷にかて陸地より海上へ、又は山頂より溪谷へ向つて吹く風。㊂ほやぶさの異名。

あさ-がた〔朝方〕名 朝のころ。朝のあひだ。

あさ-がたち〔朝形〕名 朝のすがた。續政集〔今朝は花の—見む〕

(あさか-の-うら〔淺香浦〕古和泉國泉北郡

あさか-の-みや〔朝香宮〕宮家の一。明治三十九年三月久邇宮朝彦親王の御子鳩彦(ヤスヒコ)王の新に一家を立て給ひしもの。此名は父親王の伊勢の齋主にてましましたりしによる。

(あさか-ぬま〔安積沼〕岩代國安積郡山の井村大字和田東勝寺の後にあり。昔時は安積山と共に有名なる處なりしが、今は水涸れて水田となれり。

あさ-がは(カハ)名 ㊀〔淺川〕水のあさき川。轉じて男女の緣のあさきにたとへていふ語。萬葉〔人ごとをしげみこちたみおのもよにいまだ渡らぬ—わたる〕㊁〔朝川〕朝の川。夕川の對。

(あさがは-せんあん(アサガ)〔朝川善庵〕名は鼎、字は五鼎、江戸の人、世々松浦侯に仕ふ。最も經史に精し。嘉永二年二月歿す。年八十二。

(—どうさい〔—同齋〕字は士修、晉四郎と稱す。松浦侯に仕へて儒官たり。最も書に巧たり。安政四年十月歿す。年四十四。

あざ-がひ(イガ)〔阿座貝〕名(動) はまぐりの變種にして大なるは一二尺、殼は薄赤く、肉は白くして味美なり。琉球の近海に產す。

あざ-がへ-す(エスガ)〔糾返〕他動サ四㊀ くり返す。たびたびす。心を入れて見る。熟閱。〔文を—〕

あさ-がへり(エリガ)〔朝歸〕名 ㊀朝のほど外より家にかへること。㊁特に朝遊廓より歸るをいふ。

あさ-がほ(オガ)〔朝顏〕名 ㊀(植)蔓草にして葉は互生し、三尖或は五尖にして微毛あり。花の形、漏斗の如くにして瓣五尖に分る。夏の末を盛りとし、朝早く開き日中に至りて萎む。花の色紅白紫碧雜色等形色種類極めて多し。人家に植ゑて花を賞す。牽牛花。㊁(植)桔梗の古名。㊂(植)木槿の古名。㊃(動)かげろふに同じ。㊄斷頭四角錐。をなせるものの稱〔小便所の—〕㊅古渡り青磁の釉香爐の名。㊆謠曲の曲名。㊇かされの色目の名。つきくさに同じ。㊈朝臥床より起き出でたる時の顏。枕草紙〔ねくたれがみの—も時ならずや御覽ぜむとて〕

—あはせ(ワセ)〔—合〕名 各種の牽牛花を持寄りて、其優劣を論評するあそび。德川時代の末年に行はれたり。

—がひ(イガ)〔—貝〕名(動) 介殼の形狀稍蝸牛に似て厚く紫色にしてつややかなること牽牛花の花の如し。深海に棲息し和歌浦・小笠原島等に產す。

—ざし〔—指〕名 すべて朝顏形なるものに關する差日のすみがれ(規矩)をいふ。「笹。

—ざる〔—笹〕名 あさがほなりに造りたる

—ぞめ〔—染〕名 紺又は紫などにて大形に染めたる模樣。元祿の頃行はる。書屬俗〔—の大赤袖、ぬきぞめの大小〕

—なり〔—形〕名 すべて器物の牽牛花の形に似て上方開き下方窄みたるもの。「の戲曲。

—につき〔—日記〕近松德三の著、世話物。

—ひめ〔—姫〕名 七夕の七姫の一。

—やき〔—燒〕名 牽牛花の形に燒きたる陶器。男の小便所などに用ゐる。

—に釣瓶(ツルベ)取られて貰ひ水。句 夏の朝水汲まむとて井戸に立寄りしに、牽牛花の蔓延びて釣瓶にまつはり一輪の花咲きたる美しさに、むざと取り捨つるに忍びず、他に行きて貰ひ水をするの意。加賀千代女の句。

—の花一時(イツトキ)。諺 榮華の短きをいふ。

—の一日の榮(サカエ)。諺 前に同じ。自居易〔松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮〕

あさ-がみ〔朝髮〕名 朝起きたるまゝのねみだれがみ。あされがみ。

—の 枕 朝髮はみだれをるものなればみだるにかけていふ。萬葉集〔—おもひみだれて〕

あさ-がみしも〔麻上下〕名 麻布にて仕立てたる上下。德川時代儀式の時に着たるもの。

あさ-がみなり〔朝雷〕名 朝のほど鳴る雷。

—に川渡りすな。諺 朝雷は暴風雨の前兆

—に戸開けず。諺 前に同じ。〔—なればいふ。

— 隣歩きをするな。諺 前に同じ。

(あさか-やま㊀〔淺香山〕伊勢國にあり。紅葉螢・松などの名所。㊁〔安積山〕岩代國安積郡山の井村にあり。一に額取山ともいふ。同國の名所にして古歌によまる。淺香山。

—の言(コト)の葉。昔小兒の手習の始に習ひし歌〔あさか山かげさへみゆる山の井の淺くは君をわが思はなくに〕をいふ。こは葛城王の陸奥に遣はされし時采女のよみたるなり。下の句、萬葉集には「淺き心をわがもたなくに」とあり。

あさ-がら〔麻幹〕名 麻の莖の皮を剝ぎ取りたるもの。聖靈祭に箸とし、畫工は燒筆とす。をがら。あさぎ。麻木。麻殼。

あさ-がら〔名植〕灌木にして葉は圓し。春の末白き花を開く。垂れて藤花の如し。實より油を採る。白辛樹。

あさ-がらす〔朝烏〕名 朝のほどに鳴くからす あけがらす。玉角「七草やあとにうかるゝ—」

あさ-がり〔朝狩〕名 朝早く行ふ狩。夕狩の對。

あさ-がれひ〔レイヒ〕〔朝餉〕名 ㊐ ㊀朝の食事。あさめし。㊁天皇の朝きこしめす供御。㊂朝餉の間の略。本朝食語「又—の方に人音のし」

—の-ま〔—間〕名 清涼殿の内にあり。御膳所にて天皇朝餉をきこしめす所。

—の-つぼ〔—壺〕名 朝餉の間の御庭をいふ。大鏡「舞人の馬を清涼殿の北の馬道より通させ給ひて—にしきおろさせ給ひて」

あさ-ぎ〔淺黄〕名 ㊀黄の淡き色。かりやす草にて染めたるもの。㊁又藍の薄き色。水色の濃きもの。淡縹。淺葱。㊂裏の色目の名。表裏ともに薄き藍色。

—の-はう〔ウホ〕〔—袍〕名 無位親王の着する「袍、又黄衣と稱す。

あさ-ぎ〔惡木〕名 ㊐ 麤惡なる木材。ふしのある木材。千載集「あづまやの—の柱」

—の-いろぎ〔—刺木〕名 ㊐ 多きもの。

あさ-ぎ〔淺氣〕名 ㊐ あさぎのとげ いふ。「然もいゝかげん—がいゝ」

あさ-ぎく〔朝菊〕名植 莖は蔓の如き草にして高さ五尺ばかり、夏の始め葉の間に赤紫色の花を開く。此花は朝開きて夕にしぼむ。

あさぎ-かたびら〔淺葱帷子〕名 淺葱色に染めたる帷子。

—黒小袖。㊐ 上品なる服裝を形容したる語。

あさぎ-ざくら〔淺葱櫻〕名植 櫻の一種。花一重にして白けれども、蕚崩葱なるにより瓣に映りて青く見ゆ。

あさ-ぎた〔朝北〕名 ㊐ 朝吹く北風。十佐日記「—のいでこねさきに綱手はやひけ」

あさぎ-つつじ〔淺葱躑躅〕名植 つゝじの一種。花の淺葱色にして一重なるもの。

あさぎ-てふ〔ヂヤウ〕〔淺葱蝶〕名動 大形の蝶。前翅の外緣は黑色に水色の斑紋あり、後翅の外緣は暗赤色。蛹は逆に懸垂す。

あさ-ぎぬ〔麻衣〕名 麻布の衣服。あさごろも 喪服に用ゐる。

あさぎ-まく〔淺葱幕〕名 劇場に用ゐる淺葱「色の幕。

あさ-きよめ〔朝淨〕名 ㊐ 庭などを朝掃除すること。拾遺集「此春ばかり—すた」

あさ-ぎり〔朝霧〕名 朝たつきり。

—ごもり〔—隱〕名 ㊐ 朝霧のたなびける中。萬葉集「かりがねぞ啼く」あさぎりがくれ。

—の枕 朝霧は深く立つものなればまどふにかけていふ。萬葉集「—おもひまどひて」

—雨-夕霧晴、句 霧の朝降るは雨天の前兆、夕に降るは晴天の前兆なりとの意。

—空より晴れば天氣よく、地より晴るれば雨。卜候の俗說。

あさぎり-さう〔ウ〕〔朝霧草〕名植 かはらよもぎに似て細く小く、葉は細長し。七八月頃花を開く。其全體に白毛あり。

〔あざきり-だき〕〔痣切瀑〕越後國西頸城郡にあり。高さ百八十尺、幅六十尺。姫川に入る。

あさぎ-わん〔淺葱椀〕名 青き漆にて塗りたる椀。德川時代の始め世に行はれしもの。

あさ-くさ〔淺草〕名 ㊐ 淺くはえたるくさ。夫木集「ふる川の岸のあたりの—に」

〔あさくさ〕〔淺草〕東京市十五區の一。東は隅田川に瀕し西は下谷區、南は日本橋區、北は北豐島郡に接す。

—がみ〔—紙〕名 紙の一種。すきがへしがみの下品なるものにしてくろほしろほの二種あり。多くおとしがみに用ゐらる。東京淺草の邊地にて製するが故に此名あり。返魂紙。

—ぐら〔—倉〕淺草にありし德川幕府の倉廩。隅田川に臨み南北約三百二十間、東西八九十間、坪數三萬六千六百餘。南北西の三方に渠をめぐらし積荷に便ならしめたり。全國の貢米を納れ置き庶士の俸祿とす。

—くらばん〔—藏番〕名 淺草倉廩の米穀渡方などの事を掌る職名。

〔—くわんおん〕〔カンノン〕〔—觀音〕淺草公園にあり。金龍山淺草寺と稱す。十八間四面の堂にして本尊は一寸八分の觀音菩薩たり。推古天皇の御宇土師臣濱成、武成の二人、宮

戸川にて得たるものなりと。天台宗にして阪東巡禮第十三番の札所たり。

〔—こうゑん〕〔—公園〕淺草區にあり。元淺草神社の境内たりしを後淺草寺のものとなり明治六年初めて公園地と定めたり。園内に淺草神社及淺草觀音〔淺草寺〕辨天祠花屋敷、凌雲閣、國技館、小劇場、活動寫眞館、飲食店等無數ありて、日々數萬の群集雜沓す。其繁華なること實に東都第一となす。

〔—じ〕〔—寺〕淺草觀音に同じ。

—じま〔—縞〕名 元祿の頃役者などの着たる濃物の縞柄の名。一代女「—に紫つくれば見る人驚き此上又もあるまじき沙汰すると」

—ぜに〔—錢〕名 寛永通寶錢の一。寛永十三年以降江戸淺草橋場にて鑄たりしもの。

〔—たんぼ〕〔—田圃〕東京吉原遊廓の後にありし一帶の田圃。吉原田圃。

—にんぎやう〔ニンギヨウ〕〔—人形〕名 東京淺草より製出せる人形。木彫に着色せしものにして其形狀奈良人形に似たり。

—のり〔—海苔〕名 ㊀〔植〕海藻の一種。あまのり。むらさきのり。しばのり。紫菜。㊁あまのりを紙の如く漉きて乾したるもの。香氣あるをよしとす。炙りて食ふ。品川・大森の濱より產す。此名の由來に三說あり。一、淺草區の海濱なりし頃製し始めしによる。二、武藏國淺草川邊に產せしによる。三、淺草雷神門前永樂屋といふ海苔屋歷代德川氏に海苔調進のことを勤めしに起る。

—ぶんこ〔—文庫〕㊀ 德川時代の初めに幕府の醫板橋卜齋の興しゝ文庫。和漢の書を藏し諸人の縱覽を許せり。㊁淺草諏訪町の北裏、堀田加賀守正盛の邸内にありし文庫。㊂德川幕府の御家人木村重助が淺草阿部川町の邸に創設せし文庫。㊃東京淺草に在りし官立圖書館。明治七年淺草舊米廩八番堀に開き公私の閱覽を許せり。其の書は元昌平阪書籍館の藏書なり。㊄大槻如電氏が其住所淺草區北富阪町に設けし文庫。

—もち〔—餅〕名 もと東京淺草觀音の仁王門前俚俗一つ家といふ邊にて製せし餅。

—もん〔—門〕名 江戸城外郭門の一。日本橋より淺草への出口にあるを以て名づく。今の淺草橋の所にありしもの。

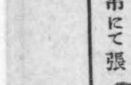
〔あさくさ-たうげ〕〔ダウゲ〕〔淺草嶺〕岩代國南會津郡にあり。高さ二千五百尺。

あさくさ-まぬ名 猫の異名なりといふ。與竹話「小夜ふけて—に逢ひぬるか」あさくさまぬ。

〔あさくさ-やま〕〔淺草山〕越後國北魚沼郡の東端に位す。高さ五千二百十一尺。「きもの。

あさ-くちなし〔淺梔子〕名 くちなし色の薄

あさ-ぐつ名 ㊀〔淺沓〕裝束着用の時にはく沓。桐にて造り外を黑漆にて塗り內を白き布帛にて張りたるもの。深沓の對。㊁〔淺靴〕西洋形の靴の淺きもの。長靴の對。


（一つぐさあさ）

あさ-ぐも〔朝雲〕名 朝のほど空にたつ雲。

あさ-ぐも〔朝蜘蛛〕名 朝いづる蜘蛛。俗に之を見る時は緣起よしといひ、特に商家にては之を殺すとお客をにがすといふなり。あさのくも。

—は仇と思うても殺すな。㊐ 前に記したる俗說に基く。

—は金。㊐ 金儲の前兆なりとの意。

あさ-ぐもり〔朝曇〕名 朝のほどのくもり。

—に驚く者は所帶持が惡い。㊐ 朝曇りたりとて其日の仕事を躊躇すべからざるをいふ。

あさ-くら〔鮮座〕名 ㊐ うるはしき座所をいふ。

あさ-くら〔朝倉〕名 神樂歌の曲名。

〔あさくら〕〔朝倉〕㊀ 筑前國にあり。㊁ 但馬國養父郡にあり。

—ざんせう〔ショウ〕〔—山椒〕名 山椒の一種。葉實ともに大くして木に刺なく辛味香氣ともに多し。但馬國より多く產せしより此名ありなるはじかみ。ふさはじかみ。蜀椒。漢椒

〔あさくら〕〔朝倉〕本姓は日下部。孝德天皇の齋日下部宗高より出づ。宗高の子高清始めて朝倉氏を稱す。

〔—げんたらう〕〔ゲンタロウ〕〔—源太郎〕勤王の士。水戸の人。維新の際、藩主慶篤に從ひ日夜國事に奔走す。慶應元年四月敦賀にて殺さる。年三十。明治四十年正五位を贈らる。

（—としかげ〔—敏景〕斯波氏三老臣の一。後足利氏に仕ふ。剃髪して宗雄居士と號す。久しからずして歿す。

（—のぶまさ〔—宣政〕幼名藤十郎。初め秀吉に仕へ後徳川氏に仕ふ。數々軍功あり。封を掛川に賜ひ後郡山に流さる。寛永十四年二月歿す。年六十五。

（—のりかげ〔—教景〕敏景の子。小太郎と稱す。兄孫五郎景綱妾腹なるが故に坐次常に教景に下る。文明十五年七月、景綱、教景を殺さんと謀る。教景遁れて髪を削り宗滴と稱す。教景の母大に怒り景綱を逐ふ。後景綱等宗家を滅さんとするに當り之を討つ。天文二十一年歿す。年二十一。

（—よしかげ〔—義景〕越前の領主。孝景の子。初名を延景といふ。天文十一年織田信長、義昭を奉じて京に入り義景を召す。義景應ぜず。天正元年七月信長、淺井氏を伐つ。義景、淺井氏を援く。淺井氏亡びて義景越前に敗走す。信長之を追ひて一乘谷に圍む。義景終に自殺す。年四十一。

〔あさくら-の-みや〕〔朝倉宮〕㊀雄略天皇の都せられし泊瀬の宮の稱。大和國磯城郡朝倉村大字黒崎にあり。㊁齊明天皇の行宮。遺址は筑前國朝倉郡宮野村須川の地なりといふ。他にも説あり。

あさ-くわんおん〔—カン—〕〔朝觀音〕名 朝觀音をまつれる寺に參詣する者多きをいふ。

—に夕藥師。諺 朝には觀音に、夕には藥師に參詣する者多きをいふ。

あさ-け〔朝明〕名 ㊀ あさあけの略。早朝。萬葉集「此頃の—に聞けば」

—の-かぜ〔—風〕名 朝早く吹くかぜ。

—の-すがた〔—姿〕名 あさすがたに同じ。

あさ-げ〔朝食〕名 ㊀ あさがれひ。朝飯。

—の-けぶり〔—煙〕名 朝飯を炊ぐ時の煙。

あさけし-むらさき〔淺消紫〕名 染色の名。濃き紫色を薄くして光澤を消したるもの。

あさ-けぶり〔朝煙〕名 朝飯をかしぎ又瓦炭など燒くより起ちのぼる煙。「人の—を受く」

あざ-け-る〔嘲〕名 あざけること。そしり笑ふこと。

あざけり〔嘲〕他動ラ四 ㊀ さげしみいふ。そしり笑ふこと。㊁ 轉じて思ひのまゝを述べて氣をはらす。「月に—風に嘯く」

〔あさこ-がは〕〔朝來川〕但馬國にあり。生野銀山に發源し豐岡町を過ぎて海に入る。一に岡山川・蓼川・城崎川とも稱す。流程十六里。

あさ-こぎ〔朝漕〕名 ㊀ 朝船をこぐこと。萬葉集「—しつゝうたふ船人」

あさ-こじき〔朝乞食〕名 朝ものもらひに來る乞食。「緣起よしといふ意。

—夕坊主。諺 朝乞食にあひ夕坊主にあへば不吉。

あさ-ごち〔朝東風〕名 朝吹くこちの風にたぐひて此處に散り來ね」

あさこ-づな 名 賣の穗にて造りたる綱。

あさ-ごと〔淺事〕名 ㊀ あさきこと。いさゝかのこと。十訓抄「彼が—どもを申しければ」

あさ-ごほり〔—オリ〕〔朝氷〕名 朝はるこほり。

あさ-ごほり〔—オリ〕〔朝氷〕枕 氷は解くものなればとくにかけていふ。拾遺集「しもの上にふる初雪の—とけずものを思ふころかな」

あさ-ごみ〔朝込〕名 遊女の前夜揚屋よりもどりたるを待ちをりて早朝呼び寄すること。

〔あさこ-やま〕〔朝來山〕但馬國朝來郡にあり。高さ三千五十五尺。

あさ-ごろも〔麻衣〕名 あさぎぬに同じ。

あさざ〔荇菜〕名 植 池澤の中に生ずる水草。葉は水面に浮び莖は水底にありてじゅんさいに似たり。夏五瓣の黄花を水面に開く。其大さ錢の如し。ばなじゅんさい。埤雅。蒐葵

あさ-さ〔淺名〕淺くある樣をいふ。「—の知れぬ川」

あさ-ざ〔朝座〕名 ㊀ 佛 法華八講などのとき朝につとむる法座をいふ。夕座の對。枕草紙「—の講師せいはん光りかゞやくや」

「曲の名。

あさ-ざくら〔朝櫻〕名 ㊀ 朝のさくら花。㊁ 俗

あさ-ざけ〔朝酒〕名 ㊀ 朝飲むさけ。㊁ 朝酒を飲むこと。卯飲。長飲。

—門田を賣って飲め。諺 朝の酒は味よきよりいふ。「五割の金を借りても朝酒は飲め」といふも之に同じ。

〔あさざは-をぬ〕〔淺澤小野〕攝津國にある野の名。古來杜若の名所として詠歌多し。

あさ-さぶらひ〔—サブライ〕〔朝侍〕名 ㊀ 朝に至りても尚禁中に伺候してあること。家長日記「とみにもおりずゐあひたれば—日たけて」

あさ-さむ〔朝寒〕名 朝膚のうすさむく感ずること。源氏物語「けさの—なる」晨涼。曉寒。

あさ-さらず〔朝不去〕副 ㊀ あさごとに。毎朝。萬葉集「—來なきとよもす鶯の聲」

あさ-さ-る〔朝去〕自動ラ四 ㊀ 夜のあけはなれて朝となる。夕さるの對。

あさ-されば〔朝去者〕副 ㊀ 朝になれば。萬葉集「—妹が手にまくかゞみなすみつのはまびに」

あさ-し〔淺〕形一 ㊀ 深くなし。底近し。奥近し。「山—」㊁ 薄し。少し。「智—」「交り—」㊂ 淡し濃からず。「色—」㊃ いやし。「—き根性」

—き-ゆめ〔—夢〕名 生死輪廻の淺はかなる迷を離れぬを夢の覺めぬに喩へていへる語。いろは歌「—見じ醉ひもせず」

—き川も深く渡れ。諺 淺き川も深き川の如く用意周到油斷せず渡れとの戒め。卽ち事を爲すには小事たりとて侮るべからずとの意。

—きに棚す。句 淺洲に船を乘上ぐること。

〔淺〕深の反對。「—薄」「—屬(虎の類にして毛のあさき獸)」

「梁—」

〔虎〕うはつらのこと。左傳序「更—引三公羊谷(コンヤウ)」

あさ-じ〔朝時〕名(佛) 佛前にて行ふ朝の勤行。

—まねり〔—參〕名 あさじに參詣すること。

あさ-じぬはら〔—ジラ〕〔淺篠原〕名 ㊀ 篠のまばらに生えたる原。古事記「腰なづむ、そらはゆかずあしよゆくな」

あさ-しほ〔—シ〕〔朝潮〕名 朝さしくる潮。

あさ-じみ〔朝凍〕名 朝のしみ。道路などの朝こほりてあること。東關紀行「道あしかるべし—のほどに立たばよかりなむといふを」

あさ-じめり〔朝濕〕名 あさのしめり。朝物又は地の霜露などの爲にしめりてあること。「名。

あさ-じも〔朝霜〕名 ㊀ 朝おく霜。㊁ 白酒の異

—の 枕 ㊀ 朝霜は日光にあたれば消え易きよりきゆ又その約けにかけていふ。續古今集「—けなばけぬべくおもひつゝかで此夜をあかしたんかも」

あさ-しやうが〔—ショウガ〕〔朝生薑〕名 朝食ふ生薑。

—夕山椒。諺 朝に生薑、夕に山椒を食へば目の藥なりといふ。

あさず〔不涸〕副 ㊀ かわかさず。ほさず。つぎかけつぎかけ。「一説に淺からず御心深く。古事記「まつりごしみきぞ—をせさき」

あさ-すがた〔朝姿〕名 朝おきいでたる時の姿。

あさ-すず〔朝涼〕名 夏の朝の間の涼しき時。曉涼。朝冷。「—に出て山を越ゆ」

あさ-すずみ〔朝涼〕名 ㊀ 夏の朝早く起きてすずむこと。㊁ あさすずに同じ。源氏物語「まだ—のほどにわたりたまはんとて」

あさ-すはう〔—オウ〕〔淺蘇芳〕名 すはう色の薄「きもの。

あさ-せ〔淺瀬〕名 瀬の淺き處。船—に乘上ぐ」

—に仇波。諺 底ひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波はたて」といふ歌の心に同じ。

あさ-だ〔淺田〕名 泥の深くなき田。底のあさき田

〔あさだ〕〔麻田〕攝津國にある市街。青木氏の舊藩地。

〔あさだ-きようえつ〕〔淺田恭悅〕漢方醫。下總の人。醫を淺田宗伯に學び明治十五年其養嗣子となる。後清國に聘せられて南京に赴く。歸りて四十二年七月歿す。年五十四。

（—そうはく〔—宗伯〕漢方の名醫。信濃の人。曾て幕府に仕へ、又東宮侍醫の職を奉じ頗る親任せらる。明治廿七年三月歿す。年八十一。名醫傳・先哲醫話等の著あり。皇太子の病を療せし功を以て從四位を贈らる。

〔あさだ-がうりふ〕〔—ゴウ—〕〔麻田剛立〕天文家。名は安彰。綾部綱齋の次子。初め杵築侯の侍醫となり後大阪にありて醫を業とし、天文を研究し深く造詣する處あり。寛政九年幕府之を招かんとせしが辭たけたるを以て辭し高弟高橋作左衛門・間五郎兵衛を遣す。同十一年歿す。年六十六。

（あさ-たいし〔阿佐太子〕百濟の王子。推古天皇五年我に朝貢。繪畫を善くし厩戸皇子の像を寫せりといふ。今法隆寺に傳ふるもの是なりといへど諸説あり。

あさ-だいもく〔朝題目〕名 あさ題目をとなふ「ること。

—に夕念佛(ユフネンブツ)。謎 天台宗にて朝に法華經を讀み夕に念佛を唱ふるをいふ。

あさただ-しふ(ウシ)[朝忠集]藤原朝忠の和歌を集めたる書。

あさ-だち[朝立]名 ⓑ 朝早く旅路に出で立つこと。早發。

[あさだ-の-こちよう[朝田古塚]筑後國浮羽郡にあり。一ケ所あり相距ること三十間餘各一小丘をなす。共に石窟ありて中には石を疊みて三區の室をなす。窟内周圍の石壁には悉く埴土を以て古武士の像を畫く。蓋し埴輪の略製なるべし。此塚往古貴人を葬りたる處なるべしと雖未だ其人と時代とを詳にせず。

あさ-ぢ[鰯]名(動) ㊀ おひかはの類。口大く鱗細くして斑あり。川に産す。㊁ おひかはに同じ。

あさ-ぢ[淺茅]名 茅の未だ繁茂せざるもの。

—**が-はら**[—原]名 あさぢの廣々と生えたる所。本家物語「古き都をきて見れば—とぞあれ」

—**の**[—野]名 前に同じ。

—**の-なは**(ワナ)[—繩]名 茅をよりて造りたる繩。祓の時に用ゐる。

—**の-ひだりなは**(ワナヒダリ)[—左繩]名 左よりになひたる茅の繩。

あさぢ-さけ[淺茅酒]名 肥後國より産する一種の酒。色白く味濃厚。夏日の飲料に供す。

[あさぢ-の-うら[淺茅浦]對馬國の上縣と下縣との間に灣入したる處。

あさぢ-はら(ワラ)[淺茅原]名 あさぢがはらに同じ。

あさぢ-はら(ワラ)[淺茅原]枕 茅の花をつばなともいふによりつばらつばらにかけていふ。萬葉集「—つばらつばらにものもへば」

あさぢ-ふ(ウ)[淺茅生]名 淺茅の生え廣がれる處。後撰集「—の小野の篠原しのぶれど」

あさ-ちや[朝茶]名 ㊀ 朝のほど飲む茶。㊁ 京阪地方にて朝粥をいふ。

—**の-しほ**(シオ)[—鹽]名 極めて少きこと(朝粥に少しの鹽を入るゝに出づ)手習鑑「—にも喰ひ足らねど貧はぬよりも奈い」

あさ-つき[淺葱]名(植) ひろの一種。葉は細くして圓筒形をなし其色淺緑なり。鱗莖は花蓋内に在りて外皮紅紫色を帶ぶ。此鱗莖と葉とを食用に供す。麥葱。絲葱。

—**なます**[—膾]名 一種の料理。ゆでたる淺葱とあさりのむきみとを酢味噌にてあへたるもの。上巳の節に供ふ。

あさ-づきん[麻頭巾]名 麻布にて造りたる頭巾。夏老人の冠りしもの。

あさづく-ひ[朝付日]名 ⓑ あさひに同じ。

あさづく-ひ[朝付日]枕 ⓑ 朝日はさしむかひて見るよりむかふにかけていふ。萬葉集「—むかひの山につきたてる見ゆ」

あさ-づくよ[朝月夜]名 ㊀ 有明の月をいふ。曉。㊁ 轉じて有明の月のある頃。

あさ-づけ[淺漬]名 食品の一種。大根を少し乾して麹又は糠に鹽をまぜたるものにつけたるもの。澤庵漬の對。

あさって[明後日]名 あさてに同じ。

—紺屋に今度鍛冶屋。謎 時刻を定めず遷延するものに云ふ。

あさ-づめ[朝爪]名 朝手足の爪を切ること。俗に朝爪を剪れば其日恥かき、夜爪を剪れば親の死目にあへぬと共に忌むなり。

あさっ-ぱら名 ⓑ ㊀ 朝の早き頃。早朝。未明。㊁ 轉じて、はじまり。あさめしまへ。朝腹。浮世床「なにこんな事は—の事さ」

—の茶漬。謎 事の容易に成し遂げらるゝにいふ。「朝飯前の茶漬」とも云ふ。

あさづま-ぶね[朝妻船]名 ⓑ 近江國阪田郡朝妻といふ處の宿船。此船中にて賣淫せし女をもいふ。夫木集「にほの海や—も出でにけり」

あさ-つゆ[朝露]名 朝のほどおく露。

—**の**枕 ㊀ 朝露は消え易きものなるよりはかなきいのちにかけていふ。萬葉集「—命はいけり」㊁ 又草木の上におくものなるよりおくにかけていふ。新續古今集「—のおきわかれなばなにごゝちせむ」「き日。明日の明日。みやうごにち。

あさて[明後日]名 今日より一日隔てゝ來べき日。

あさ-て[淺手]名 あさききず。輕微の負傷。微傷。ふかでの對。

あさ-て[麻手]名 ⓑ あさぬのに同じ。

あさ-て[朝出]名 朝外に出で行くこと。あさとで。

あさて-こぶすま[麻手小被]名 ⓑ あさぶすまに同じ。

あさ-てづくり[麻手作]名 ⓑ 手織の麻布。麻調布。「玉集「—はつきの枝にぬるもずの」

あさて-ほ-す[晒麻手]自動サ四 ⓑ 麻をほす。拾

あさ-ど[朝戸]名 ⓑ 朝開く戸。萬葉集「—あけてものおもふときに」

あさ-とがり[朝鳥狩]名 ⓑ 朝のほどに行ふ鳥狩。「あしたとがり。

あさ-とぐち[朝戸口]名 ⓑ 朝起きてあくる戸口。「—にはまろねしつらん」

あさ-どこ[朝床]名 ⓑ 朝いまだ起き出でずしてある床。萬葉集「—に聞けばはるけし泉川」

あさと-て[朝戸出]名 ⓑ 朝早く戸をあけて外に出づること。朝外出。朝疾出。「—の衣手寒し」

あさ-とび[朝鳶]名 朝のほど鳶の鳴くこと。

—鳴けば雨・夕鳶は晴。謎 次に同じ。

—に笠を着よ夕鳶に笠をぬげ。謎 朝に鳶鳴かば雨降り夕に鳶鳴かば晴天となるとの意。

あさ-どり[朝鳥]名 ⓑ 朝墻(モガキ)を立ち出づる鳥。

—**の**枕 朝鳥はこゝかしこに行き通ふものなるよりかよふにかけていふ。萬葉集「—通ひし君が」

あさど-やり[朝戸遣]名 ⓑ 朝あくる戸。萬葉集「—を早くなあけそ」「集「此川に—洗ふ」

あさ-な[朝菜]名 ⓑ 朝の食事に供する菜。萬葉

あざ-な[字]名 ㊀ 支那にては實名の外なる一種の名にて、他より其人を敬ひて呼ぶ時に用ゐるもの。「孔子名丘—仲尼」㊁ 我國にては支那風にならひて實名の外に自らつけたる學者文人の名、又は他より呼びならはしたる名をいふ。字治拾遺「—袴垂となむいはれさぶらふ」「頼山陽—子成」あだな。渾名。㊂ 市町村制に於ける市町村内の更に狹き區域の稱。あざ。

あさ-なあさな[朝朝]副 朝毎に。まいあさ。萬葉集「—かよひし君が來ねばかなしも」

あさ-なぎ[朝凪]名 日出頃海上の風のなぎたるさまにいふ。此時海風と陸風と交替する也)

あさなき-どり[朝鳴鳥]名(動) 大さかけすほどの鳥。尾は曲りて短く頭に青き毛冠あり、朝よく鳴く。深山に棲み春去り秋來るといふ。

あさな-け-に[毎朝]副 ⓑ まいあさ。あさなあさな。古今集「—見べき君としたのまねば」

あさ-なさな[朝朝]副 ⓑ あさなあさなの略萬葉集「—あがるひばりになりてしが」

あさ-なは(ワナ)[麻繩]名 麻をなひつくりたる繩。

あざなは-る(ワナ)[糾]自動ラ四 あざなふやうになる。からみあふ。まとはる。

あざな-ふ(ウ)[糾]他動ハ四 絲・繩などをからみ合はす。あはせ交ふ。なふ。よる。まとふ。「禍福は—へる繩の如し」「くれ。よろひる。

あさ-なゆふな(ウナ)[朝夕]副 朝に夕に。あけ

あさ-ならひ(ライナ)名 關東にて朝東北の方より吹き來る風をいふ。「をいふ。

—の夕南(ユフミナミ)。謎 夏の朝北風、午後南風の吹く

あさに-け-に[毎朝]副 ⓑ あさなけにに同じ萬葉集「—常に見れどもめづらしわぎも」

あさ-にじ[朝虹]名 朝のほど西の方にたつ虹。

—に河越すな。謎 俗に朝虹立てば雨降ると云ふ。依りて河を越さば歸りには河水增溢して渡られざるに至るべければいふ。

—は其日の洪水。謎 又[朝燒は其日の洪水]とも云ふ。朝虹たてば雨降るとの意。

あさ-には(ワニ)[朝庭]名 ⓑ 朝の庭。ゆふにはの對。萬葉集「—にいでたちならし」

あさ-ぬ[淺野]名 ⓑ 草の淺く生ひたる野。萬葉集「たぎのへの—のきさし」

あさ-ぬの[麻布]名 麻絲を以て織りたる布。「の。紵布。

あさ-ね[朝寢]名 朝おそくまで寢過すと。晏起。

—**がみ**[—髪]名 ねくたれがみに同じ。

—**ばう**(ボ)[—坊]名 朝寢をする者を卑めていふ。寢坊。

—の宵張(ヨヒバリ)。謎 [朝寢坊の夜ふかし]に同じ

—の宵まどひ。謎 朝寢する位の者は夜も又早く眠りたがるをいふ。

—の夜ふかし。謎 朝寢する者夜をふかすをいふ。[晩苑「喜三夜臥一者不レ能三蚤起一也」

—**晝寢**(ヒルネ)を好む夕寢坊(ヨネボウ)たまたま起きて坐睡坊。謎 睡眠を貧る者を嘲りていふ語。

—する者は貧乏性。謎 怠惰貧を招くの意。

—**八石**(ハッコク)の損。謎 朝寢の損害多きをいふ。

(あさねばう-むらく(アサネボウ)[朝寢坊夢樂]名は珍重、里見晉兵衛と稱し笑話樓と號す。有名なる落語家。天保二年正月歿。年五十五

あさの〔淺野〕姓は清和源氏。頼光七世の孫光衡より出づ。光衡の二男光時始めて淺野氏を稱す。

—たかかつ〔—高勝〕道世と云ひ、助左衛と稱す。最も智謀に富めり。初め明智光秀に從ひしが後德川氏に仕へて重用せられ數〻軍功あり。慶長十八年歿。年七十六。

—ともしち〔—友七〕有名なる京都の蒔繪師。安政六年十二月歿す。

—ながあきら〔—長晟〕幸長の弟。最も智謀あり。幼時秀吉に給仕し後家康に愛せらる。大阪役の起るや東軍に屬して殊功あり。寛永九年卒す。年四十七。

—ながしげ〔—長重〕又一郎と稱す。初め秀忠に近侍す。最も茶道に精しく鐵山道乎と號せり。寛永九年九月歿す。年四十五。

—ながのり〔—長矩〕名は又一郎、内匠頭と稱す。赤穗の城主たり。元祿十四年三月年頭の勅使辭見の盛儀行はるゝに當り接伴を命ぜらる。高家吉良義央其式を教へず却つて之を辱かしむ。長矩性短慮卽ち怒つて殿中に義央を傷く。將軍綱吉之に死を賜ふ。時に年三十五。

—ながまさ〔—長政〕尾張の人。織田信長の命に依り豐臣秀吉に屬し、頗る輔佐の任を盡し内外の機密與り聞かざるなし。文祿元年征韓の役に監軍となりて功あり。後封を其子幸長に讓りて閑居せしが關原役に秀忠に從ひて西上し功に依りて一萬石を賜る。慶長五年四月卒す。年六十五。

—ゆきなが〔—幸長〕長政の子。幼にして秀吉に近侍す。智謀を以て其名高し。征韓の役清正と相援けて進めり。關原の役東軍に屬して功あり。紀伊卅七萬石を食む。慶長十九年卒す。年三十八。

あさの-かとり〔朝野鹿取〕大和國の人にして漢史に精通し兼ねて詩文に名あり。承和十年歿す。年七十。

あさの-がは〔淺野川〕加賀國にあり。河北郡醫王山に發し河北潟に入る。

あさ-ばうず〔朝坊主〕名 朝我家に來り又は途中にてであひたる僧。僧は死人に關係する者なれば其日の緣起惡しとて人の忌むもの。

—は緣起よし。諺 實は不吉なるを祝ひ直し〔てかくいふなり。

あさ-はか〔淺〕名 考のあさあさしきさま。思慮深からざること。淺薄。卑淺。

あさ-ばた〔淺畑〕名 ㊐ ひらちの。のべ。朝思集—

あさばた-ぬま〔淺畑沼〕一に淺機、又麻機に作る。又鴻池とも云ふ。駿河國阿倍郡にあり。「葉の名所。周回一里餘。

あさはた-やま〔麻機山〕相模國にある山。紅

あさ-ばち〔朝鉢〕名 朝我家に來る托鉢僧。

—は弘法〔—ボウサマ〕。諺 弘法と思ひて敬ふべしの意。

あさ-はつね〔淺恥〕名 ㊐ はづかしくして面目なく思ふことならむ。元方集 —わが泣くなみだ人に知らせじ」

あさは-どり〔淺羽鳥〕名(動)ほとゝぎすの異名。

あさ-はなだ〔淺縹〕名 はなだ色のうすきもの。

あさ-はね〔朝跳〕名 朝勢よくはねまはること。

—の夕跛〔—ユフビツコ〕。諺 始め勢よくして後に弱るをいふ。

あさは-の〔淺羽野〕信濃國にあり。武藏國にありともいふ。「ること。夕羽振の對。

あさは-ふる〔朝羽振〕名 ㊐ 朝鳥のはゞたきす

あさ-はん〔朝飯〕名 あさめしに同じ。

あさ-ばん〔朝晩〕名副 あさとゆふべと。朝夕。

あさ-はら〔朝腹〕名 朝食前の腹。

—の茶の子〔—チヤノコ〕。諺 寺院にては茶菓子を茶の子といふ。之は腹に溜るほどの物にあらざるより極めて容易なる事に喩ふ。

—の丸藥。諺 前に同じ。

(あさはら-ためより〔淺原爲賴〕甲斐の人。八郎と稱す。武勇の士なり。正應二年潛に宮中に入り亂をなしし、事成らずして二子と共に紫宸殿に割腹す。時恰も兩統交立の爭あり、時人龜山上皇のなす處と云ひ上皇は誓書を時宗に賜ひ事漸く平ぎたり。

あざはる〔アザハル〕〔糾〕自動ラ四 ㊐ あざなはるに同じ。

あさ-ひ〔朝日〕名 朝東天に昇り始むる太陽。「旭。噴。

—かうがい〔ガイコウ〕〔—笄〕名 笄の一種。鹿の角を蘇芳にて染めて作れるもの。元祿の頃朝日櫛とともに流行せしもの。

—かげ〔—影〕名 あさひのひかり。

—がに〔—蟹〕名(動)蟹の一種。甲は長さ六七寸、廣さ四五寸、其色赤くして美麗なり。海に產す。しやうじやうがに。べにがに。紅蟹

—がひ〔イガ〕〔—貝〕名(動)蠣の類。大さ一寸に足らず、介殼は薄く蓋は扁くして色薄赤し。よめがひ。夕日貝の對。

—かまぼこ〔—蒲鉾〕名 かまぼこの圓き方の上面を紅にて染めたるもの。横に切れば邊紅に弓形をなして旭の如きを以て名く。

—ぐし〔—櫛〕名 櫛の一種。鹿の角を蘇芳に染めて造れるもの。元祿の頃流行せしもの。

—ながいも〔—長芋〕名 料理の名。長芋の皮をむきてゆでたるを紅にて染めたるもの。

—の枕 朝日の光はなやかなるよりふみさかゆにかけていふ。古事記 —ふみさかえきて」

—の-みはた〔—御旗〕名 我が日本の國旗。日章旗。

—まんぢゆう〔—饅頭〕名 紅色に染めたる「饅頭。

—もち〔—餅〕名 紀伊國高野山の名物。しんこを編笠形にして馨蕚の粉の紅餡をつめたるもの。

—が西から出る。諺 あり得べからざることを「いふ。

—さす夕日輝く其下に金千兩漆千杯。諺 日あたりよき土地は收穫の多きものなればいふ

—に霜。諺 消え易きに喩ふ。

—に向って弓引く。句 日に向つて戰ふを忌むこと。古事記 [吾者爲ニ日神之御子一向レ日而戰不良]

—の勢〔イキホヒ〕。句 勢力の次第に盛になるを喩へていふ語。

—の昇るが如し。句 勢の漸次に隆盛に赴くに喩ふ。

(あさひ-いけ〔朝日池〕越後國中頸城郡にあり。

(あさひ-がは〔ガワ〕〔旭川〕㊀ 石狩國上川平野の中央にある市街にして北海道中央に於ける一大都會たり。上川支廳第七師團司令部十四旅團司令部・警察署・郵便電信局・區裁判所出張所等あり。㊁ 一に朝日川に作る。一名西大川と云ひ、俗に御野川といふ。美作國高田川の下流にして兒島灣に注ぐ。流程三十三里。二十里間舟楫の便あり。

(あさひ-くわうざん〔ザンコウ〕〔朝日鑛山〕越後國中蒲原郡にあり。石油を產出す。

あさひ-こ〔朝日子〕名 ㊐ あさひに同じ。朝彥萬葉集 —が八重さすをのの玉笹の上に」

(あさひ-しやうぐん〔シヨウグン〕〔朝日將軍〕木曾義仲の別稱。

(あさひ-だけ〔旭嶽〕石狩國川上郡にあり。高さ八千尺。北海道第一の高山にして峰頭七に分れ、中間一大陷谷をなし熱湯を噴出す。蓋し昔時噴火の跡たり。山巔は悉く巉岩を以て成り白雪常に其上に覆ふ。

(あさひ-だけ〔朝日岳〕㊀ 羽前・越後の國境にあり。高さ七千尺。㊁ 磐城國西白川郡にあり高さ六千五百尺。㊂ 岩代國南會津郡の中央、赤松山の南方にあり。㊃ 蓮華山の一名にして越後國西頸城郡にあり。高さ約一萬尺にして噴火山なり。

(あさひ-でら〔朝日寺〕古山城國北野にあり「し寺。

(あさひな-よしひで〔朝夷義秀〕三郎と稱す。和田義盛の三男。勇武多力無雙と稱せらる建保元年父義盛北條氏の積惡を怒り兵を擧ぐ。義秀之に從ひ軍敗れて安房に走り終る處を知らず。或は高麗に赴くと云ふ。

—しまめぐり〔—島巡〕名 朝夷義秀敗戰後伊豆七島を巡りあるき鬼界ケ島にて一生を送りたりといふ傳說。

—じゆんたうき〔トウキ〕〔—巡島記〕曲亭馬琴の晩年の作。朝夷島巡を骨子としてかたはら源氏・北條氏の狀態を描寫せるもの。

—と首引〔クビヒキ〕。諺 朝夷は義秀をいふ。力匹敵せざる譬にいふ。

(あさひな-だけ〔朝日奈岳〕陸奥國下北郡にあり。高さ二千六百尺。「あり。

あさひな-ちまき〔朝比奈粽〕名 蒸菓子の一種。糯米を水にて洗ひ椿の灰汁に浸し後蒸籠にて蒸したるを粽の形狀に藁のしべ(稭)にて包み更に湯煮にしたるもの。

(あさひ-の-かた〔朝日方〕一に駿河御前と稱

す。豊臣秀吉の異父妹にして德川家康の室。容貌端麗、初め佐治日向守に嫁し後德川家康に嫁す。天正十八年正月歿す。年四十八。

〔あさひ-の-たき〔旭瀑〕伊豆國田方郡にあり。高さ三百四十尺、幅十七尺。「別稱。

〔あさひ-の-みね〔朝日峰〕山城國愛宕山の

〔あさひ-の-みや〔朝日宮〕伊勢大神宮を申す

あさひ-まる〔朝日丸〕名 後鳥羽上皇の佐藤憲清に賜ひし劍。

あさひ-まる〔旭日丸〕名 江戸幕府の軍船。江戸時代三大船の一。船體重く運行に難きを以て厄介丸と綽名す。

〔あさひまる-やま〔旭丸山〕阿波國 名西郡の西南隅にあり。高さ四千七百十九尺。

あさひ-ものがたり〔朝日物語〕三位中將家の清須在城の時、朝日村の舊事を知れる老人より聞きて筆記せしもの。

〔あさひ-やま〔朝日山〕一 近江國にある小市街にして水野氏の舊藩地。二 山城國にある山。紅葉霧櫻などの名所。

あさ-びらき〔朝開〕名 ⑥ 朝船の港を出づること。萬葉集「—漕ぎいでし舟のあとの白浪」

あさ-ひを〔朝氷魚〕名 ⑥ あじろにて朝とる氷魚。新撰六帖「—を細かにくだく氷とぞ見る」

あさ-ふ〔アソ〕〔淺〕自動ハ下二 ⑥ あさはかなり。深からず。高からず。源氏物語「まだ位などもー—へたるほどをなどおぼすに」

あさ-ふ〔淺〕自動ハ四 ⑥ あさくあり。淺くなる。萬葉集「淵は—びて瀬にかなるむ」

あさ-ぶ〔淺〕他動ハ四 ⑥ あなどる。輕んず。あさむ。續後撰集「罰あるべきなど—びあへる」

あさ-ふ〔アソ〕〔糾〕他動ハ下二 ⑥ あざなふに同じ。愛心集「手を—へ目をとち」

〔あさぶ〔麻布〕東京市十五區の一。東南は芝區に、西南は豐多摩郡に接し、西北は赤阪區に界す。

—で氣が知れぬ。謎 此は江戸の諺にて人の氣の知れぬことをいふ。麻布の附近の地名には赤阪・青山・白金臺・目黑村などあれど黃なし。黃が知れぬを氣と音通にて斯くは云ふなり。又一說には麻布に六本樹と云ふ所あり、何處にも六本の樹あるや知れず、木の知れずを氣に通じてかく云ふなりと。

あさ-ぶさ〔朝物〕名 あさぶち二に同じ。婦人「の語。

〔あさぶ-じやう〔ヨウ〕〔麻生城〕常陸國 行方郡麻生村にあり。

あさ-ぶすま〔麻衾〕名 ⑥ 麻布にてつくりたる蒲團。萬葉集「ほころへと寒くしあれば—ひきかさ

あさ-ぶせり〔朝臥〕名 あされに同じ。「ぶり」

あさ-ぶち〔朝物〕名 一 朝廷に毎朝、餅・粽などを獻ること。あさのもの。「御—」二 轉じて民間にて朝の食事前に食ふ物をいふ。あさぶさ朝扶持。「敬語。萬葉集「馬なめて—らむ」

あさ-ふ-ます〔朝蹈〕自動サ四 ⑥ あさふものあさ-ふ-む〔朝蹈〕自動マ四 ⑥ 朝その地をふむ。風雅集「狩人の—小野の草わかみ」

〔あさふ-やま〔麻生山〕播磨國飾東郡にあり。別稱を播磨小富士といふ。

あさ-ぶろ〔朝風呂〕名 あさゆに同じ。

あさ-ぶろしき〔麻風呂敷〕名 麻布にて作れるいひ、又遊惰なるさまにもいふ。「ふろしき。

—丹前〔シンシン〕長火鉢。謎 心持ののびやかなるさまに

あさ-ぼらけ〔朝朗〕名 夜明の空の薄くあかるみたる時。あけがた。開旦。

〔あさぼら-くわうざん〔ワンコウ〕〔安佐保長鑛山〕一名つつちか森鑛山と云ふ。陸中國 江刺郡にあり。鐵を產出す。

あさ-ま〔朝間〕名 朝のうち。あさのあひだ。竹取物語「—に走る晝狐かな」

あさ-ま-し〔形シク〕一 あさはかなり。おもひやり少し。たのみがひなし。古今六帖「恨みてもしるしなければ信濃なる淺間の山の—や君」二 驚く程に甚し。思ひの外にて肝潰る。善きにも惡しきにも驚歎。拾遺集「—きまでぬるゝ袖かな」三 興醒む。呆る。(多く惡しきに用ゐる)源氏物語「女—きに涙もいでこぬ」四 つらし。おそろし。平家物語「—かりつる夏もくれて」五 さもし。みすぼらし。卑劣なり。「—き心にもなり給ひけるかな」

〔あさま-じんじや〔淺間神社〕一 甲斐國南都留郡にあり。國幣中社。木花開耶姫を祀る。

貞觀七年の創建。二 甲斐國東八代郡にあり國幣中社。木花開耶姫を祀る。垂仁天皇八年の創建。三 駿河國靜岡市にあり。國幣小社。木花開耶姫を祀る。延喜元年の創建。四 駿河國富士郡大宮町にあり。初め富士山頂にありしもの。淺間大神とも稱す。駿河國一宮今は官幣大社。木花開耶姫を祀る。垂仁天皇三年の創建。

あさ-まだき〔朝未明〕副 朝早く。夜の未だ明け果てぬに。早朝。昧爽。

あさま-つげ〔朝熊黃楊〕名〔植〕つげの類の大なるもの。伊勢の朝熊山〔アサマ〕より多く出づ。樹皮は黃白色、枝は細小にして密。材質堅く緻密にして印材・櫛・挽物・卓机などを製するに適す。

あさま-づめ〔朝間詰〕名 朝魚を流すこと。

あさ-まつりごと〔朝政〕名 未明主上の出御を待ちて百官各自に政をとること。「惑の對。

あさ-まどひ〔ヒイヤ〕〔朝惑〕名 あされに同じ。胥

あさま-に〔淺〕副 はつきりと。あきらかに。「に同じ。あらはに。

あさま-にんじん〔朝熊人參〕名〔植〕なべわり

〔あさま-の〔淺間野〕信濃國 北佐久郡にある野。東西二里、南北六里。上野國に跨る。

〔あさま-の-たけ〔淺間嶽〕あさまやまをいふ火山。伊勢物語「信濃なる—にたつけぶり」

〔あさま-の-みかみ〔朝熊御神〕垂仁天皇の御字倭姫命の天照大神を五十鈴川の川上に鎭座しまつる時美船神とともに大神を御船に乘せ奉りて遷幸し奉りし神。

〔あさま-やま一〔淺間山〕一名淺間嶽と云ふ。信濃國北佐久郡にあり。高さ八千二百三十尺。山巔より絕えず白煙を噴出す。天武天皇白鳳十四年破裂し爾後屢大噴火ありて山麓の諸村其害を蒙るもの多し。天明三年七月の大爆發後山麓數里の間焦土と化し今尙草木を生ぜず。二〔朝熊山〕朝熊嶽といふ。伊勢國度會郡の中央宇治山田市の東方二里許の處にありて志摩國境に亙る。高さ一千七百尺。山頂に金剛證寺あり。有名なる萬金丹本舗は寺門の前にあり。

あざ-まる〔痣丸〕名 平景清の所持せし名劍の「名。

あさま-りんだう〔ドウ〕〔朝熊龍膽〕名〔植〕りんだうの一種。葉ひろくして花にあやたし。

あさ-まる〔朝參〕名 ⑥ あさまゐりの略。

あさ-まゐり〔朝參〕名 朝のほど神佛に參詣すること。

あさ-み〔淺〕名 一 あさきところ。伊勢物語「—こそ袖はひづちめ涙川」二 あさき度合。三 鬘の一種。芝居にて僧侶の扮裝に用ゐるもの。

—に鯉。謎 容易に大利益を得る喩にいふ。

あざみ〔薊〕名〔植〕春の初め芽を出す。葉は針狀の鋸齒を有す。莖には刺多し。花の色紫にして總花托は剛毛狀の小苞を有す。人家に植うるものははな—まゆはき—などいひて、花に紅・白・紫・黃等種々あり。

—ぐは〔ワ〕〔—桑〕名〔植〕桑の一種。葉は薊に似てきれこみの深きもの。やまぐは。雞桑。

—げし〔—罌粟〕名〔植〕庭園に栽培する草。莖は高さ一二尺にして刺あり。葉は羽狀に分れ花は黃色〔ヒトヒカ〕なり。

—の花も一盛り。謎 よからぬ花にも猶盛の時ある如くよからぬ人も一時ときめくをいふ。

あざみ-あ-ぶ〔ハフ〕〔憫合〕自動ハ四 ⑥ 驚きあふ。互にあきる。平家物語「こはいかにとて手をうちて—はれける」「部に位す。高さ三千五百尺。

〔あざみ-が-たけ〔薊嶽〕周防國都濃郡の北

あざみ-ぐさ〔朝見草〕名 ⑥〔植〕松の異名。

〔あざみ-けいさい〔淺見綱齋〕名は安正。初め高島顧良と稱す。近江國の人。醫を業とせしが後山崎闇齋に學びて儒となる。性頗る峻嚴後闇齋の神道學を唱ふるや、諫爭して遂に師弟の義を絕つ。正德元年十月歿す。年六十。

あさ-みどり〔淺綠〕名 一 淡き綠色。うすもえぎ。二 儺馬樂の呂の曲名。

あさ-む〔淺〕他動マ四 ⑥ 淺はかなりと賤しむ。考へ淺しと貶す。あなどる。あさぶ。徒然草「之を見る人あざけり—みて」

あざ-む〔惘〕自動マ四 ⑥ 思の外なりと驚く。あきる。驚嘆。更科日記「驚き—みたること限りなし」「はり。詐僞。

あざむき〔欺〕名 あざむくこと。たばかり。いつ

あざ-むく〔欺〕他動カ四 ㊀人を惑はし陷る。僞り誘ふ。たぶらかす。すかす。だます。かたる。㊁㊃そしる。あなどる。發心集「法師を見れどもたふとむ人なし教へ勸むる人あればかへりて之を—」

—き-おも-ふ〔オモウ〕〔—思〕他動ハ四㊃たのみ少く思ふ。ほいなきことに思ふ。水鏡「ひとへにあらはせるなるにやなど—べからず」

可レ—不レ可圖。〔クベクシテ ソノベカラズ〕いつはり欺き得れども道理を曲げてしふること能はざるをいふ。

〔欺〕あなどりてだますこと。あなどる方を主としたるは論語「君子可レ—不レ可圖」

〔詒〕單にだますこと。給と通用す。史記「田父—曰左、乃陷二大澤中一」

〔誕〕大言を吐きてだますこと。荀子「吾不レ知二子有二道而レ子一」「妄—」「荒—」

〔瞞〕漠然たることを言ひてだますこと。史記「樊噲妄言以二十萬衆一橫行、是面—也」「—着」

〔誘〕おびきだすこと。左傳「幣重而言甘—レ我也」

〔蒙〕人の目をくらますこと。左傳「上下相—」

〔あさむし-をんせん〕〔淺蟲溫泉〕陸奥國東津輕郡野內村大字淺蟲にあり。泉質鹽鹵泉。

〔あさむつ-の-はし〕〔朝六橋〕越前國足羽郡朝六川に架せる橋。あさうづのはし。

あさ-むらさき〔淺紫〕名紫色のうすきもの。

あ-さんくわちっそ〔ノサンカ〕〔亞酸化窒素〕名(化)無色にして甘味を有する氣體。冷水に解け易し。これを吸入すれば人をして笑ひを催さしむ。故に笑氣の名あり。更に吸入すれば一時感覺を失ふに至る。齒科醫はこれを痲醉劑とす。

あ-さんくわてつ〔カテツ〕〔亞酸化鐵〕名(化)三二酸化鐵を水素或は一酸化炭素にて還元する際に中間成生物として生ずるもの。又蓚酸第一鐵を空氣に觸れしめずして熱する時に生ずる黑色の粉末。

あ-さんくわどう〔カドウ〕〔亞酸化銅〕名(化)さんくわだいいちどうに同じ。

あ-さんづ〔淺水〕名雒馬樂の律の曲名。

あ-さんれん〔下三連〕名詩學の語。かさんれんの轉。韻格の一句の中に末の三字が平ならば平三つ、仄ならば仄三つ、相同じきものゝ揃ふこと。共に詩の病とす。

あさ-め〔阿佐女〕名古宮中にて主水とともに朝夕の御膳の事を執り行ひし女。

あさ-め〔朝目〕名㊃朝起きて見るもの。朝のなが め。「いふ。古事記「—汝とりもちて」

—よく副㊃早朝より緣起よきものを見るを

あさ-めし〔朝飯〕名朝の食事。あさげ。あさはん。朝饌。「ぬ。俗說

—に汁〔茶〕をかけて食ふと出世が出來

あさめし-まへ〔ニヤ〕〔朝飯前〕名㊃㊀朝の食事の前。いまだ朝飯を食はざるほど。㊁あさめしまへのしごとの略。

—の-しごと〔—仕事〕名極めて容易に爲し得べき仕事、卽ち朝飯前に爲し得べしとの意。

—には動かされぬ。諺物事の重大なるをいふ。朝飯前は空腹なれば力乏しく至大なる事は爲し能はざるより斯くいふ。詩經「愆如二朝飢一」

—の茶うけ。諺「朝腹の茶の子」に同じ。

〔あさめ-どの〕〔嬬殿〕下總國香取神社の末社の名。

あさも-の-みぞ〔麻裝御衣〕名㊃そふく〔素服〕に同じ。

あさも-よし〔淺毛吉〕枕よし共に助辭。麻裝は着るものなるよりきにかけていふ。又一說に淺葱の色のよきをいひ、其色のうるはしき葱にかけていふなりと。萬葉集「—木の川邊のいもとせの山」あさもよい。

あざやか〔鮮〕名うるはしくはきとしてあること。はつきり。あきらか。「く。

—に副はっきりと。うるはしく。あたらし

〔鮮〕あたらしとも訓じ元來生魚をいふより轉用して色あひのくっきりとした貌をいふなり。

〔粲〕さえさえしきこと。元來しらげよれの義にて、米の一粒づゝ白く分れて見事なるより轉用せるなり。

〔靚〕女の假粧の粧白く黛黑く黛白のあざやかに分るゝをいふ。「—粧」

あざや-く〔鮮〕自動カ四㊃あざやかになる。きはだはしくあり。はっきりす。源氏物語「ものものしく—きて」

あさ-やけ〔朝燒〕名日の出の前後に於て東天の赤く見ゆること。夕燒の對。

—は其日の洪水。諺「朝虹は其日の洪水」といふに同じ。「(漁夫の語)」

あさ-やま〔朝山〕名㊀朝の山。㊁朝の山の色。

—夕山。句海人等が朝夕は雲霞の加減にて山の遠く見ゆる故にかくは云ふなり。

あさやまりう〔淺山流〕名淺山內藏助の創めたる劍術の流派。淺山一傳流ともいふ。

あさ-ゆ〔朝湯〕名朝沐浴する湯。又朝入浴すること。朝風呂。

あさゆく-つき〔朝行月〕名㊃朝まで空に殘れる月。續後撰集「天の原—のいたづらに世にあまさるゝ心地こそすれ」「を怠ること。

あさ-ゆだん〔朝油斷〕名朝のほど爲すべき事

—に夕屆。諺朝油斷したる爲夕に至り屆託するをいふ。

あさ-ゆふ〔ユウ〕〔朝夕〕名あさとゆふと。あさ

—に副あさゆふごとに。あさなゆふな。

—の-みけつもの〔—御饌〕名毎日朝夕皇大神・豐受大神の兩宮に供する御饌。

あさ-よさ〔朝善〕名朝起きて心地よきこと。萬葉「—を誰まつ島そかたごころ」「ゆふ。

あさ-よひ〔ヨヒ〕〔朝宵〕名あさとよひと。あさ

あさら名種。

あさらか-に〔淺〕副㊃あさく。萬葉集「—思ひて妹にあはむものかな」

あざらか-に〔鮮〕副㊃あざやかに。あたらし く。土佐日記「或人あざらかなる物持て來り」

あざらけ-し〔鮮〕形一㊃あざやかなり。あたらし。日本紀「鮮魚、あざらけきいを」

あざらし〔海豹〕名(動)海獸にして頭は狗に似たり。前脚は短く後脚は魚の尾の如くにして岐をなす。五趾に蹼あり。水陸共に棲む。體四五尺、毛は密生す。蒼黑にして光澤あり。冬に至れば黑き斑を生じて美し。皮を馬具などの飾とし近時又敷物に用ゐる。脫毛して鞣成せるは手提鞄其他袋物用として賞用す。又脂肪より油を製す。北海道及千島の如き寒流に產す。

(しらさるゐ)

あさら-の-ころも〔麻衣〕名㊃らは助辭。あさぎぬに同じ。又一說に淺衣にて染色の薄き衣なりともいふ。萬葉集「あらそめの—淺らかに思ひて妹にあはむものかな」

あさり〔淺網〕名(動)蛤の類にして、介殼薄く表面は淡蒼色にして白色の雲紋あり、淡黑色の斑紋これに混ず。肉は食用に供せらる。我國東海內海に多く產す。あさりがひ。蛤仔。

あさり〔漁〕名あさること。すなどり。いさり。

アザリ〔阿闍梨〕名(佛)㊀〔梵〕阿闍梨〔アジャリ〕耶の略。軌範師と譯す。弟子僧俗の學解行儀を糺正指導すべき師範職。㊁僧の官名。僧綱より低く三綱より高し。後一條天皇長元七年敎圓法師始めて此職に補せらる。㊂轉じて一般に僧の稱號。アジャリ。

あさ-る〔漁〕他動ラ四㊀鳥獸の食物を求めあるくにいふ。求食。㊁探り求む。たづねさがす。搜索。㊂轉じて專ら魚介を探り採るにいふ。すなどる。いさる。漁。

あさ-る〔有隙〕自動ラ下二㊃人と人との間不和になる。なかたがふ。源氏物語「—ればみ情なきさまに見えじと思ひつゝ」

あざ-る〔彷徨〕自動ラ四㊃さまよひあるく。萬葉集「たち—りわれこひのめど」

あざ-る自動ラ下二㊃㊀〔戲〕たはむる。ふざく。ざる。源氏物語「なかなかなる事いひ出でゝ上も—れたりとぞおぼされん」㊁〔鰈〕魚肉などくさる。すゆ。爛。

あざれ-がま-し形二㊃戲れがまし。みだりがましい。紫式部日記「何か—とおもへばはなたず」

あざれ-ば-む自動マ四あざれがましく見ゆ。戲れぬきて見ゆ。源氏物語「すきずきしきなほさりごとを—まむもことにたがひて」

あざ-わら-ふ〔ワラウ〕〔嘲笑〕他動ハ四あざけりわらふ。そしりわらふ。せゝらわらひす。冷笑す。

あさね〔淺井〕姓は藤原。內大臣實雅の子公綱より出づ。公綱の子重政、近江國淺井郡に住す、依つて氏を稱す。

—さんだいき〔—三代記〕江州小谷城主淺井亮政・久政・長政の三代の事蹟を詳記

したる書。著者未詳。十八卷あり。

(—しうさい〔—周齋〕名は短賢、鳳剛園と號す。大阪の巨商、陶法に巧にして南山燒の祖たり。寛政十二年三月歿す。年八十。

(—すけまさ〔—亮政〕新三郎といひ、後備後守と稱す。世々京極氏の臣たり。永正十三年高家卒し子高峯、亮政を攻めて大敗せしより國人歸服する者多く、京極氏は唯虛名を持するに過ぎず。同十五年に至り江北悉く其有に歸す。天文十五年卒す。年五十二。

(—ちゆう〔—忠〕洋畫家。明治九年より美術學校にて研鑽し、廿一年同校教授に任ぜらる。廿四年佛國より歸朝、京都工藝學校教授に任ぜられ、四十年十二月病死す。年五十三。洋畫界の勃興に貢獻する所尠からず。

(—となん〔—圖南〕名は惟寅、頼母と稱す。京都の人。名醫なり。特に明脈に名あり。又畫を能くし墨竹に妙なり。世に御園中梁・宮崎筠圃・山科李蹊と共に平安の四竹と稱せらる。天明二年八月歿す。

(—ながまさ〔—長政〕近江小谷の城主。久政の子。幼名猿夜叉、後新九郎と改む。勇武智略將帥の器あり。織田信長妹を以て之に嫁す。後長政、信長と協はず、夫人及三女を送還す。天正元年信長に欺かれ憤悔して自殺す。是に於て淺井氏亡ぶ。時に年二十九長女茶茶は秀吉の側室となり、淀君と稱す。

(—ひさまさ〔—久政〕初め新九郎と稱し後下野守と改む。江州小谷の城主たり。性狩獵を好み軍事を顧みず、諫を拒み讒を信じ老臣を疎んず。兵力大に衰ふ。老臣大橋秀元切に諫む。久政大に怒り之を殺さんとす。秀元書を長政に送りて自刃す。天正元年、信長の將秀吉と戰ひ克たずして自殺す。年五十。

(—りうたう〔トリウ〕〔—柳塘〕南宗畫家。京都の人。谷口藹山に從ひて研鑽し、清國人徐雨亭につきて專ら山水を學び其風神を得、聲名一時喧し。明治四十年歿す。年六十六。

(—れうい〔ライヨ〕〔—了意〕字は子石、靜齋と號す。京都の人。有名なる戲作者。寛永六年九月歿す。年七十。

(あさね・そうずね〔阿佐井宗瑞〕大和國の醫最も女科に精し。故に世稱して阿佐井婦人醫と云ふ。大永の初め醫書大全を公にす。醫書を板刻にする此人に始ると云ふ。

あさ・ねて〔朝堅埭〕名㊐朝のねぜき。萬葉集〔—に來鳴くかほ鳥〕

あさ・を〔麻苧〕名 麻より製したる絲。

—づな〔—綱〕名 あさをにて造れる綱。苧綱

あさを〔淺尾〕加州侯の妾お貞の方の老女。貞及び大槻傳藏の惡計に與し事露はれて獄に繫がる。訊問甚だ嚴なるも白はず、寶曆六年四月舌を咬みて死す。或は云ふ、淺尾白狀せざるを以て蛇を槽に盛り之に投じたるも尚白はず、後竹鋸の刑に處せらると。

〔あさを〕〔淺尾〕備中國賀陽郡にある市街。蒔田氏の舊藩地。

あさ・をんな〔朝女〕名 朝途にてあひ又は我家に來れる年若き女。俗に緣起よしとて喜ぶ。

—に商すれば其日利益多し。俗說

あし〔足(脚)〕名 一動物體の肢。地上に立ち或は歩行の用をなすもの。二人類の足の踝以下の稱。あしくび。三足にて歩くこと。あゆみ。〔はや—〕歩。四すべて物の下にありて其體を支ふる脚に似たる物の稱。〔机の—〕脚。五山の下の方。ふもと。麓。六船體の水中に入れる部分の稱。吃水。七垂れさがりて見ゆるものの稱。〔旗の—〕〔雨—〕八餅などのねばりけ。〔—の強い牛皮餅〕九太刀の帶取をとほす金具。十錢の異名。おあし。十一利子。りそく。十二(歌)一の直線に垂線の出合ふ點。〔垂線の—〕

—の・うら〔—裏〕名 あしうらに同じ。〔—〕

—が痒いと金が出る。俗說

—に飯粒。句 こびつきて取れぬ義より、常に苦にする事に喩へていふ。

—の飯粒をこそげる。諺 卑吝なるにいふ

—をくすぐれば貧乏する。俗說

—を搔くと馬鹿になる。俗說

—の・かふ〔カウ〕〔—甲〕名 足くびの表の方。

—の・くび〔—頸〕名 あしくびに同じ。

—の・まがひ〔ガイ〕名㊐ 蹈みはづしたとしたる足のあやまち。足蹶。(訓)〔—なさしめずて〕

—の・やまひ〔マイ〕名 かつけ(脚氣病)などをいふ。脚疾。

—の・ゆ〔—湯〕名 旅客の宿屋に着きて足を洗ふ湯。

—を・そら・に 副 一足の蹈みどころも知らぬほどにあわてさわぐさまをいふ。源氏物語〔殿のうちの人—おもひ惑ふ〕二足を高くあげて走るさまをいふ。〔車夫は—走る〕

—を・はかり・に 副㊐ 足のつゞくかぎり。

—が揚がる。句 たよるべきところなくなる。官職を失ふ。

—が重い。句 動作鈍し。

—が地に就かぬ。句 心何となく浮きて定まらざる狀態を云ふ。恐怖のあまり足の震ふにもいふ。夫木抄〔わぎもこが夜戸での容みてしより心そらなり土は蹈めども〕

—が付く。句 失踪者の行方知らる。隱したる事露顯す。

—が強い。句 一足の丈夫なるをいふ。健脚。二餅などのねばりけ多きをいふ。

—が出る。句 おもひしより入費がかさむ。

—が流れる。句 〔あしがあがる〕に同じ。

—が無くては動かれぬ。句 足と錢とにかけていふ。

—が早い。句 一歩むこと速し。二食物腐り易し。〔夏の豆腐は—〕

—が棒になる。句 感覺を失ふほどに足の疲勞せしをいふ。〔—つてもう動かれない〕

—城市(シヤウシ)を履まず。句 隱遁して山野に居り都會の地に至らざるをいふ。宋史〔林逋居二西湖一二十年、足未嘗履二城市一〕

—で火を蹈み消すと火事に逢ふ。諺 火を粗末にすべからずと戒むるなり。

—の毛を剃れば逃げる時早く走れぬ。諺 手足の毛は剃らぬものなればかくいふ。

—の爪先(ツマサキ)から頭の旋毛(ツムジ)まで。句 全身の意

—の乘物(ノリモノ)。句 乘物に乘らず我足を以て歩むこと。方丈記〔手の奴—よく我心にかなへり〕

—の人さし指の長き人は親より出世する。諺 親指に勝るといふに出づ。

—の向いた方へ行く。句 何處に行くといふ目的もなく興に乘じ意に任せて行くこと。竹取物語〔足の赴きたるかたへいなんず〕

—を洗ふ。句 賤しき生業を止め其社會を脫して正業に就くをいふ。

—をくふ。句 わらぢの緒又は少し小き靴などにて足を傷つくるをいふ。〔程なるをいふ。〕

—を擂木(スリコギ)にする。諺 東奔西走して疲るゝ。

—を出す。句 一祕密をふと洩らす。馬脚をあらはす。二豫定金額を超過す。三利子を拂ふ。

—をつける。句 逃げ行きたる方を穿索す。

—を運ぶ。句 たびたびかよふ。幾度も行く。

—を蹈み込む。句 其家に行く。其家に侵入す。

—を向けて寢られぬ。句 恩義を忘れざることに敬意を表する意。

〔とにて、恩人に

—高(コトタカシ)。不謹慎をいふ。左傳〔若敖擧二趾一〕

—待也。(マツアリ)足をつまだてゝ速に事の到らんことを待ち望むをいふ。漢書〔大臣內畔、諸將外反—〕

重—仄目。(ヘヲカヤネテダツ)非常に恐るゝ狀態をいふ。漢書〔令二天下重—足而立仄—目而視一〕

裏—。(ツム)恐れて進まざるをいふ。史記〔杜—口—莫二肯嚮一秦耳〕

翹—。(マダツ)人を待つこと。史記〔可二—而待一〕

雪—。(ダフヌ)巾を以て足を拭ひ汚れをなくするなり。史記〔沛公遽—杖—矛〕

折—覆—餗。(ヲクツガヘス)鼎の足を折るときは鼎の上に供ふる鼎實を覆す、是と等しく小人を採用任官するときは重任に堪へずして遂に國家を覆すに至るを喩へたるなり。易經〔鼎折—足覆二公餗一〕

忘—。(ヲスル)履の能く足に適してあゆみよきまに履の行くを覺えて足の行くを忘るゝこと。莊子〔履之適也、忘—要帶之適也、忘二是非一心之適也〕

「如二龔之能衛一—」

〔足〕腰より下の總稱。左傳〔鮑莊子之智不—〕

〔脚〕足のはぎなり。坐する時には後へ却くる故に名づく。然れども足に通用せられ差別なし。

但手足とはいへども手—とはいはず。

あし〔葦〕名(植)水邊に多き水草。春蕾根より芽を出す。莖は中空にして枝なし。葉は竹に似て互生す。秋に至り莖の末に白き穗の如き花

を着く。よし。なにはぐさ。蘆。葭。蒹葭。
—の-じんじ〔—神事〕名 尾張國津島神社にて六月祓の時葦の束ねたるをあがものとして水に流し疫病を祓ふをいふ。
—の-つの〔—角〕名 あしかびに同じ。
—の-なは(ワナ)〔—索〕名 葦をなひて造れる縄。俗に禍を防ぐ禁厭なりとて門などにかく。
—の-まろや〔—丸屋〕名 ㊀葦にてふきたるまろや。㊁松永貞徳の庵の名。
—の-や〔—矢〕名 葦にて造りたる矢。朝廷にて十二月晦日追儺の式に方相氏の用ゐるもの。
—の-や〔—屋〕名 葦にてふきたる家。〔の。
—の-やどり〔—宿〕名 ㊀前に同じ。委華物語〔年頃送りし—柴のとぼそもげにすみよしに造りてけり〕
—を喇む雁。句 雁は遠く行く時、葦を口にカリ
あ-し〔亞子〕名 次男のこと。類書纂要〔次息、季子、—並次子之稱〕
あ-し〔啞子〕名 おし。稽雅纂〔—傚二手勢二〕
あ-し〔蛙市〕名 蛙のあまた聚りて鳴くこと。葛長庚〔—無聲萬籟沉〕
あ-し〔鴉嘴〕名 ㊀烏のくちばし。㊁鋤の一種形似たるによる。陸遊〔采レ藥常攜二—一鋤〕
あ-し〔阿姉〕名 姉を親しみて云ふ。あねさん。
あ-し〔惡〕形二 ㊀わるし。宜しからず。よくなし。正しからず。荀子〔形相雖レ善而心術—〕㊁好ましからず。快からず。陸雲頃觀レ之正使二人意—二㊂いやし。みにくし。史記〔濟臺滅明狀貌甚—〕㊃粗末なり。不良なり。左傳〔渠丘城—衆潰〕〔—食〕よしの對。
—き-みち〔—道〕名 ㊀よこしまなる道。邪道。㊁(佛)三惡道をいふ。外道。まよひの世界。
—き-もの〔邪鬼〕名 おに。あくマ。「疫病。
—き-やまひ(マイヤ)〔惡病〕名 はやりやまひ。
〔惡〕善の反對。又好・美の反對。左傳〔叔向欲レ娶二夏姬一、其母曰甚美、必有二甚—一〕。醜の字の義なるあり。左傳〔殺蔑—〕凶の字の義なるあり。〔歲—〕〔—歲〕。〔周鄭交—〕は中のあしきをいひ、〔亂レ國而—君王—也〕は君王の惡を表すをいふ。〔好—〕〔美—〕
〔醜〕形のみにくきことにて好・美・妍の反對。〔好—〕は善惡の意に用ゐることあり。〔桓公以レ功滅レ—〕はばちの義なり。〔美—〕〔—惡〕
〔慝〕心のあしきことにて心に匿すといふ義。淑の反對。類纂〔旌二別淑—一〕〔姦—〕〔邪—〕
〔凶〕いまいましき意にて吉の反對。喪禮を〔—禮〕喪服を〔—服〕といふ。
〔兇〕凶に從ひ人に從ふ。凶人卽ち惡人の義。〔元—〕は謀叛人。〔—身〕は律令の詞に大罪を犯したる當人。〔—猛〕〔—勇〕は猛惡の意。
〔否〕惡の義にて臧の反對。詩經〔未レ知二臧—一〕
〔莠〕惡の義にて穀に對す。詩經〔好言自レ口—言自レ口〕
〔秕〕穀物の實入りのよからぬ義より轉じて事の上に用ゐる。國語〔設二平公二軍無二政一〕

〔歹〕支那の俗語に好—と反對して用ゐ、〔—人〕はあしき人の義なれども、主として賊をいひ〔不レ曉二好—一〕はよしあしをわきまへぬ意。
〔アシ〕〔阿私〕印度古仙の名。釋尊の前生に於ては臣となりて奉事し、又釋尊が悉達太子として誕生せられし時は太子が人天の大導師として將來に大利益を施すべきを豫言したりといふ。阿私陀。阿私仙。「笠原氏の舊藩地。
〔あし〕〔阿志〕播磨國宍粟郡にある小市街。小
ア-じ〔阿字〕名(佛)阿は梵語字母の第一字母日本古來の字形は爻にして法隆寺古筴體の梵字と稱し、世界に現存する梵字形中古きこと第二位にありといふ。印度にて現今用ゐらるゝはデーヴァナーガリー(Devanagari)體にして其形は羽、其發音「ア」なり。
—くわん(ンカ)〔—觀〕名(佛)本不生の爻字を觀ずる觀法をいふ。
—の-いったう(トイウ)〔—一刀〕名(佛)阿字觀の功力は萬有本來の不生・不滅の妙現を了悟せしめて一切の煩惱束縛を斷絶するにより之を利刀に喩へたるなり。
—ほんぷしやう(シホンウ)〔—本不生〕名(佛)祕密佛教にては一一の梵字音につき特殊の支理を說き、一切萬有は本來不生のものなるが故に又不滅のものなりといふ。死人の額などに〔阿〕の字を書きて生死輪廻の苦を脫離せしむる作法あるは之が爲なり。なほ〔阿〕を見よ。
あ-じ〔阿二〕名 二番目の子女を云ふ。三番目四番目順次に阿三・阿四など云ふ。
あ-じ〔鵐兒〕名 ほらす。元亨釋書二魚市—「養成するもの。
あし-あげ〔脚擧〕名 器械體操の一技。臂力を
〔アジア-しう〕〔亞細亞洲 Asia.〕世界六大洲の一。アジアといふ語の起原は詳かならざれども、梵語のウシャース Ushas.(曉曙)又はセム語原の Aca.(日出)といへるに基因するが如し。本洲は夙に文化の發達せし所なりしが、第十五世紀末より歐洲諸國の侵略を蒙り、現今獨立せる國は我國を除き支那・シャム・ペルシヤ・アフガニスタン・ネパール・ブータン・ナマーンに過ぎず、其他は皆他國の保護國若くは領地なり。
あし-あし-に〔足足〕副 分れ分れに。おの〳〵足の向ふまゝに。各自に。
〔アジャウタサトル〕〔阿闍世王〕印度摩揭陀の王にして瀕毘沙羅の子。釋迦の敵なりしが後遂に佛に歸依す。摩訶迦葉王に說きて竹林精舍の西南毘婆羅山に五百の聖衆を會して第一回の三藏結集を行へり。王、新都を華子城(パトナ)に築き國勢を振へり。
あし-あと〔足跡〕名 歩みたる足の地面に殘せる跡。
あし-あぶり〔足炙〕名 火を盛りて足を炙り暖「むる器。あんくわ。脚爐。
あし-あらひ(ライ)〔足洗〕名 ㊀足を洗ふこと。㊁足にてふみあらふこと。㊂あしだらひ。㊃和船中央部の艙壇を外方より支ふる縱通材。
あし-いり〔足入〕名 ㊀海岸の泥ふかき處。㊁「量のつりあひ。船の積荷の重
—つりあひ(アイリツ)〔—釣合〕名 船の積荷の重
〔あ-しう〕〔阿州〕〔阿波國をいふ。
あし-うち〔足打〕名 ㊀器に足を添へたるもの。あしつき。㊁あしうちなしきの略。
—をしき〔—折敷〕名 折敷に足を添へたるもの。膳の足あるもの。
あし-うら〔蹠〕名 足の裏。足の底の地を踏む「の對。所の稱。あなうら。
あし-うら〔足占〕名 ㊀あうらに同じ。てうら
〔あしうら-やま〕〔足占山〕丹後國中郡にあり。高さ四千七百六十尺。又磯沙山とも云ふ。
あし-おし〔足押〕名 一種の遊戲。足くびにて互におしあひ勝負するもの。すねおしの類。
あし-おと〔足音〕名 歩み行く足の音。跫音。
あじか〔葦鹿〕名(動)海獸にして形かはうそに似、長さ四五尺より丈餘に至る。其鳴聲高く〔かん〳〵〕と遠く響く。全身茶色なるを常とす或は白・黑・白雜・蒼黑等あり。毛は密生す。柔にして短し。前脚は兩脇にあり。後脚は尾を挾みて共に鰭の如し。肉は稍食するに足り毛皮は能く濕潤を防ぐを以て防水用具とす。其他用途多し。北海に產す。うみをそ。海驢。
—の-ぼん〔—番〕名 ㊀あじかは晴天の日、岩の上に群りて眠る。其時眠らずして番をなすものあるをいふ。㊁轉じて代り合ひて眠ることにいふ。「ればいふ。
—のやうに眠る。諺 葦鹿はよく眠るものな
あじか〔籮〕名 古の農具。藁または竹などにて笊の如く造り土を運ぶに用ゐしもの。後に此物の不便を避けてかるこを造れり。今いふもつゝこなり。簣。
〔あしかが〕〔足利〕下野國足利郡に在る町。渡良瀨川の北岸に位し舊日本鐵道兩毛線に沿ひ又東武鐵道線も此地を過ぐ。有名なる養蠶機業地の中心市場にして織物の產額多し。鑁阿寺及足利學校・足利城址等あり。
—おり〔—織〕名 栃木縣足利郡及梁田郡地方より產する織物の泛稱。絹織・絹綿交織綿織の三種あり。
〔—がくかう-し(コウシ)〔—學校址〕下野國足利町にあり。鎌倉時代の學校にして初めは承和六年小野篁の建てしものとも、足利義兼の建てしものとも、又王朝時代の國學の遺蹤なりとも云ふ。爾來興衰あり。德川時代特に學田を寄附して士民を敎育せしが、今は僅少の書籍を保管するのみなり。然れども所藏古本中宋版五經・註疏・李唐以前古鈔本・古文孝經等は最も貴重すべきものなり。而して校內に孔子の像あり。其他愚子・孟子・曾子・顏

子及び小野篁の像もあり。

〔—じやう-し〔ヤウシ〕〕〔—城址〕足利町西北の山上にあり。天喜年間足利成行の築く所。

〔あしかが〕〔足利〕姓は清和源氏。其先は源義家より出づ。義家の子義國二子を生み、長を義重といひ新田氏の祖なり。次を義康といひ下野國足利に居る。依つて氏を稱す。

〔—あんわう〔—アンワウ〕〕〔—安王〕鎌倉管領足利持氏の子。持氏の上杉憲實に攻められて永安寺に自殺するや、佐竹等の族に奉ぜられ結城氏の古河城により兵を擧げしが敗死す。

〔—うぢみつ〕〔—氏滿〕父基氏の後を享けて正平二十年關東管領となる。二十三年平一揆を河越城に征し頗る聲望あり。義滿、陸奥出羽を授け從三位となす。應永五年薨ず。年四十。一に四十一に作る。

〔—しげうぢ〕〔—成氏〕持氏の第四子。鎌倉五代の管領たり。後執事上杉氏に追はれ下總の古河に走り此に館を構ふ。世稱して古河公方といふ。關東の八將等多く成氏を奉ず。明應六年古河に卒す。

〔—しゆんわう〔シシユンオウ〕〕〔—春王〕安王の弟。安王と共に兵を擧げしも克たずして死す。

〔—たかうぢ〕〔—尊氏〕貞氏の子。初高氏と稱す。累世北條氏と婚し當時に重んぜらる。元弘の役に歸順の功を以て武藏・下總・常陸の守護となり參議に拜せられ、且つ天皇の偏諱を賜りて名を尊氏と改む。經世の才ありて人心を收攬するに巧なり。加ふるに天皇皇后の寵を得、隱然將軍の姿をなす。護良親王之を憂へて誅せんことを請ふ。尊氏却つて親王を却く。建武二年遂に自ら征夷大將軍關東管領と稱し、公然叛旗を翻して官軍と戰ふ。又賊名を避けんが爲に光嚴院を立てゝ北朝となす。延元元年十一月幕府を室町に開き自ら將軍となり遂に天下に號令するに至る。正平十三年四月卒す。年五十四。後光嚴院之に從一位左大臣を贈らる。

〔—たかつね〕〔高經〕尊氏の一族。越前の守護となる。薙髮して道朝といふ。

〔—たかもと〕〔—高基〕成氏の孫。弟義明と爭ふこと久しかりしが遂に志を得ずして歿す。

〔—ただふゆ〕〔—直冬〕尊氏の庶長子なれども母の賤しきを以て愛尠し。爲人聰明にして武略あり。叔父直義に養はる。正平四年中國探題となる。後直義の事を擧ぐるに應じ軍敗れて九州に遁る。九州の諸將皆歸服し兵勢大に振ふ。天下遂に三分す。曰く宮方、曰く將軍方(尊氏の軍)、曰く右兵衛佐殿方(直冬の軍)と。後歸順して屢尊氏の軍と戰ひしが利あらずして應永七年石見に奔りて歿す。

〔—ただよし〕〔—直義〕貞氏の子、尊氏の弟。兄に從ひて創業の功あり。初め高國と名乘る建武二年北條時行の鎌倉に叛するや、直義防戰して敗る。この時直義人を遣して鎌倉に幽閉の護良親王を殺さしめて遂に尊氏と共に鎌倉に叛す。帝怒つて新田義貞をして之を討たしむ。尊氏・直義西海に走る。既にして尊氏上洛す。直義陸軍を率ゐて兵庫に入り楠木正成を湊川に破る。人となり强忍狡猾にして機智あり。尊氏の幕府を開く、功多く直義にあり。故に世竝び稱して兩御所といふ。後事を以て尊氏と隙を生じて歸順す。正平十六年再び尊氏と和し共に鎌倉に歸り暴かに歿す。年四十七。或は云ふ、尊氏之を毒殺すと。後光嚴院これに從二位を贈らる。

〔—ちゃちゃまる〕〔—茶茶丸〕堀越公方足利政知の子。延德三年父病死して其後を承く北條早雲機以て乘ずべしとなし之を討つ。茶茶丸敵する能はず願成就院に走りて自殺す

〔—はるうぢ〕〔—晴氏〕高基の長子。古河に居る。兩上杉と共に北條氏を河越に攻むるに及び軍破れ永祿三年五月卒す。

〔—まさうぢ〕〔—政氏〕成氏の長子。古河に居る。永正三年其子高基と協はず、交戰數回、後城を去りて閑居す。享祿四年七月卒す

〔—まさとも〕〔—政知〕(知或は智に作る、又氏政に作る)將軍義教の第三子。伊豆の北條(堀越)に居る。堀越公方といふ。以て古河公方に對抗す。延德三年病みて卒す。

〔—みつあき〕〔—滿詮〕義詮の第二子。左兵衛督を經て從五位に進み薙髮して道智と號す。應永二十五年五月卒す。年五十。左大臣從一位たり。小川禪閤と稱す。

〔—みつかね〕〔—滿兼〕氏滿の子。應永五年鎌倉管領となる。同十六年卒す。年三十三。世稱して鎌倉御所といふ。

〔—みつたか〕〔—滿隆〕氏滿の第三子。新御堂殿と稱す。鎌倉に入りて管領の事を行ひしが應永二十四年持氏に破られて滿仲と共に雪の下に自殺す。

〔—もちうぢ〕〔—持氏〕滿兼の子。鎌倉四代の管領たり。正長元年將軍義持薨ず。嗣なし持氏これに代らんことを望む。義政の將軍となるに及び持氏益〻不平なり。終に擧兵西上せんとし事成らずして永享十一年正月其子義久と共に鎌倉永安寺に自殺を遂ぐ。

〔—もとうぢ〕〔—基氏〕尊氏の子。初代の關東管領たり。世人基氏を鎌倉の將軍と呼び上杉氏を鎌倉管領と稱す。正平二十二年四月卒す。年二十八。

〔—よしあき〕〔—義晴〕義澄の子、義輝の弟。足利最終の將軍在職五年。慶長二年大阪に薨ず。年六十一。足利氏是に至つて亡ぶ。

〔—よしあき〕〔—義明〕政氏の子。父と協はず、小弓に居る。世之を小弓御所と云ふ。里見義弘及び房總の將士多くこれに歸す。天文七年北條氏綱大擧して下總に向ふ。義明、里見氏と之を國府臺に逆へ擊ちて大敗し義明遂に戰死す。

〔—よしあきら〕〔—義詮〕尊氏の第三子。足利二代の將軍たり。正平十四年後醍醐天皇を吉野に攻む。十九年南朝の舊臣多く降る。二十二年薨ず。年三十八。後光嚴院これに從一位左大臣を贈らる。義詮和歌を好くし又好みて常に地藏尊の像を畫きしと云ふ。

〔—よしうぢ〕〔—義氏〕義滿の第三子。母は時政の女。藏人檢非違使を經て左馬頭正四位下に進み剃髮して名を正義と改む。建長六年卒す。年六十六。

〔—よしかず〕〔—義量〕義持の子。足利五代の將軍たり。應永三十二年薨ず。年十九。左大臣從一位を贈らる。

〔—よしかつ〕〔—義勝〕義教の子。足利七代の將軍たり。嘉吉三年馬より落ちて薨ず。年僅に十歲。

〔—よしかね〕〔—義滿〕義康の子。三郎と云ふ。賴朝の兵を擧ぐるや來り屬し頗る東國の經營に力あり。東大寺に入りて法名を義稱と稱す。後下野足利に鑁阿寺を建てゝ此に入る晝を好くす。正治元年三月卒す。

〔—よしずみ〕〔—義澄〕堀越公方政和の子義政の養子。足利十一代の將軍たり。大內義興の東上するや近江に奔り遂に薨ず。時に永正五年。年卅二。太政大臣を贈らる。

〔—よしたね〕〔—義植〕義視の子、義政の養子。足利十代の將軍たり。大永元年細川高國の爲に淡路に追はる。三年阿波に薨ず。年五十八。世稱して島公方と云ふ。

〔—よしつな〕〔—義維〕義澄の子、義晴の弟。細川澄元と共に阿波にあり平島に居る。世に阿波御所又は平島公方と稱す。

〔—よしてる〕〔—義輝〕義晴の子。初め義藤と云ひ、天文十五年職を襲ぐ。足利十三代の將軍たり。永祿八年松永久秀の爲に弑せらる。時に年三十。最も畫に巧なり。

〔—よしのり〕〔—義教〕義滿の子、初め僧となり義圓と云ふ。足利六代の將軍となるに及びて義教と云ふ。性驕傲にして將士を輕侮す赤松貞村を寵し赤松滿祐の邑を割きて之を與へんとす。滿祐之を聞きて大に不平なり。終に事に託して義教を迎へて之を弑す。時に嘉吉元年なり。義教年四十八。

〔—よしはる〕〔—義晴〕義澄の子。足利十二代の將軍たり。在職二十五年。天文十九年薨ず。年四十。

〔—よしひさ〕〔—義尙〕義政の子。初め義熙と云ふ。足利九代の將軍たり。聰明にして學を好み文武の才を兼ね室町將軍中に其比を見ず。在職十八年。延德二年薨ず。年二十五。太政大臣を贈らる。

〔—よしひで〕〔—義榮〕義植の孫。足利十四

代の將軍たり。時に松永久秀三好黨と隙を生じ相攻擊す。織田信長の入京するに及び久秀等と阿波に奔る。幾もなくして疔を病んで暴に卒す。或は云ふ、久秀の鴆殺する所と。

(一よしまさ〔一義政〕義敎の子、義勝の弟。足利八代の將軍たり。在職久しきに度りて漸く政事に倦み驕奢逸樂を事とし、京都の强臣は跋扈して盜賊橫行し、貧民處々に蜂起す。然れども義政更に是を顧みず。後花園天皇詩を作りて諷し給ふ。曰く「殘民爭採三首陽薇、處々閉爐爲誰肥」と。義政これによりて稍々謹慎する所ありしが、既にして又盛に工役を起し東山に慈照寺東求堂を造りて此に居る。以て義滿の金閣に比す。卽ち銀閣寺これなり。此の如くして幕府の財政困難となり重稅を課し土倉役を徵すること一月に數回、又段錢、棟別錢を諸國及び京師に課し使を明に遣はして錢を給せんことを請ひしこと前後三回、且つ德政と稱して却つて暴政の令を出しゝこと一代中十三度に至れり。在職四十五年。延德二年薨ず。年五十六。太政大臣を贈らる。

(一よしみ〔一義視〕義敎の子、義政の弟。初め僧となりて義尋と云ふ。義政子なし、仍て義尋をして職を嗣がしめんとす。義尋乃ち還俗して名を義視(本名義躬)と改め今出川の館に入る。細川勝元執事たり。既にして義政の夫人富子義尙を生む。義政これを僧とするに忍びず、義尙を山名宗全に託す。卽ち應仁の亂の因となる。亂後また義政と和し子義村を以て義尙の嗣とし髮を削りて道存と號す。詔して三宮に准ぜらる。延德三年正月薨ず。年三十三。太政大臣從一位を贈らる。

(一よしみつ〔一義滿〕義詮の子。足利三代の將軍たり。正平十七年職を襲ぐや幕府を室町に開き大に政紀を整ふ。元中九年大內義弘をして南北兩朝を合一せしむ。職を義持に讓るや太政大臣に拜せられ公卿百官を見ること家臣の如し。剃髮の後天山道義と號す。土木を起し北山に鹿苑院を建つ、金閣寺これなり。而して天下大に困弊し苛稅日に重くなりき。されどこれが爲に佛敎美術工藝は頓に勃興せり。應永十五年薨ず。年五十一。朝廷太上天皇の號を贈られしも管領斯波義將、義持に勸めて之を辭せしめたり。義滿明の封冊を受け日本國王とせらる。後世之を批議するもの多し。

(一よしもち〔一義持〕義滿の子。足利四代の將軍たり。成敗式條を定む。子義量に職を讓りしが早世せしを以て再び職を攝し正長元年薨ず。年四十三。太政大臣を贈らる。

あしかが-じだい〔足利時代〕名 後醍醐天皇の朝、足利尊氏の征夷大將軍となりし延元三年より足利氏の滅亡せし正親町天皇の天正元年に至るまでの二百卅五年間をいふ。

あしかが-ぼん〔足利本〕名 昔足利學校にて印刷したりといふ本。或は洛京の舊本ならん。

あしかが-やう〔カヤウ〕〔足利樣〕名 足利時代流行の風俗。「—の長羽織」

あし-がかり〔足掛〕名 ㊀高き處に登るに足のかゝりとするもの。あしばし。あししろ。多くは建築普請などに用ゐる。㊁轉じて事をなし始めんとする手づるをいふ。ふみだい。あしかけ

あし-がき〔葦垣〕名 ㊀葦にてゆひたる垣 ㊁催馬樂の呂の曲名。

—の 枕 ㊀あしがきは多く古き家にゆゆものなればふるにかけていふ。萬葉集「—のふりぬる里と」 ㊁又細くして末の亂るゝものなればみだるにもかけていふ。萬葉集「—思ひ亂れて」 ㊂又細かくゆゆものなればまぢかしにもかけていふ。

あし-かけ〔足掛〕名 ㊀あしがかり。㊁機械體操の名。兩手にて鐵棒をつかみ片足を鉤狀に懸けて他の片足を振り其勢にて上るもの。㊂實際に經たる年月を精算せずしてたゞ年月のかはりたるを概略していふこと。おほよそ。大抵などの意に同じ。「—五年の間」 ㊃めかけ。てかけ。妾(語國物語)「妾—にめしかゝへられ」

(あじかさは-まち〔アヂカ〕〔鯵澤町〕陸奧國西津輕郡の中央海岸にある名邑。船舶の碇泊港として頗る繁盛の地なり。

あし-かし〔足枷〕名 ㊀古へ罪人を拘留する爲に其足にはめたる刑具。あしかせ。

(あじか-じま〔海嬾島〕相模三浦郡の東方にあり。寶島ともいふ。

あし-かせ〔械〕名 あしかし

あし-がた〔足形〕名 ㊀あしあとに同じ。

(しかしあ)

あし-がため〔足固〕名 ㊀足を健にし歩行になれしむる爲に遠足などすること。あしならし。㊁柔道にて脚部の關節を痛め又は脚部を壓迫して自由を得ざらしむる業の總稱。㊂柱の脚部を堅固にするため床下にて柱間に取附くる横木。㊃鞠見物の時の語。(諸禮筆記)「鞠の時に酒湯漬など出づるを—といふ」足堅。

あし-が-ちる〔葦散〕枕 古難波には葦の多かりしが其花の散る意にてなにはにかけていふ。萬葉集「—難波の水に」

あし-がなへ〔ナヘガ〕〔足鼎〕名 三つの足あるかなへ。まろがなへの對。「金物。

あし-かなもの〔足金物〕名 太刀の足をたせる

あし-がに〔葦蟹〕名(動) ㊀蟹の一種。葦の生えたる海邊に群棲するもの。㊁轉じて一般の蟹をいふ。

(あじか-の-だいみやうじん〔ミヤウジン〕(阿須伎神)「社の祭神。

あし-がは〔ワガ〕〔足革〕名 狩に鷹を使ふとき其足につけて大緒をつなぐもの。あしな。足纓。

あし-かび〔葦芽〕名 ㊀葦の芽だち。葦の芽は苗の如きものなればなへにかけていふ。萬葉集「—あしなへわがせつとめたぶべし」

—の 枕 葦の芽の萌え出づるに「抑へ難き勢を喩へていへるなり。

—のもえあがる。句 葦の芽の萌え出づるに

あし-がひ〔イガ〕〔葦貝〕名(動) 蛤の類。介殼は黃褐色にして葦の如き斑あるを以て此名あり。

あし-がま〔足釜〕名 足のつきたる釜。

あし-がも〔葦鴨〕名(動) ㊀普通の鴨。多く葦の生ひたる邊に居ればいふ。㊁鴨の一種。頭は灰色にして赤みあり。眼の上に白黑の小すぢあり。胸は赤黑く、腹は灰色に、翅には青羽交りて嘴、脚ともに黑し。

—の 枕 葦鴨はうちむれて行くものなればうちむれにかけていふ。土佐日記「—うちむれてこそ我は來にけれ」

(あしがら〔足柄〕相模國にある地名。

(—ざか〔—阪〕あしがらやまを見よ。

(—の-せき〔—關〕古昔足柄山にありし關。

(—やま〔—山〕相模國足柄上郡南足柄村にある山。古昔此山を越えて駿河國駿東郡足柄道に至る阪路を足柄路、足柄阪、足柄嶺などいひ、中途に關所を設けたり。

あし-がら〔足搦〕名 あしがらみの略。

あし-がらみ〔足搦〕名 ㊀柔術及び相撲の手の名。對手の足に己の足をからみつけて對手を倒すこと。㊁おほぢがふぐりに同じ。「じ。

あし-がらめ〔足搦〕名 おほぢがふぐりに同じ。

あしから-をぶね〔足輕小舟〕名 ふなあしの速き船なりともいひ、又足柄山の材にて造りたる船なりともいふ。足柄小船。

あし-かり〔葦刈〕名 ㊀葦を刈り取ること、又其人。㊁謠曲の曲名。

—島の故事。古、攝津國尼ヶ崎一帶の地は海濱にして葦生えたるより葦刈島といへり。此島に日下左衞門と云ふものあり。家貧なるを以て夫婦別をなし、婦は都に上り、夫は此島の葦を刈りて市に沽りて口を糊せり。然るに其婦都にて或貴人の北堂となりしに昔の男の戀しくて忍びやかに尋ね來りけるに、夫之を見、遁れ去りて贈りたる歌に「君なくてあしかりけりと思ふにもいとゞ難波の浦ぞ住みうき」婦の返歌に「あしからじとてこそ人の別れけめなにか難波の浦は住みうき」事は大和物語に詳し。

(あし-がり〔足輕〕名 ㊀徒歩にて合戰に出でたつ兵卒。雜兵。歩卒。㊁德川時代の大小名のものがしらの組下なる弓銃卒。

—がしら〔—頭〕名 足輕大將に同じ。

—こ〔—子〕名 昔の船戰にて卒どもの臨時に舟子となれるものゝ稱。

—しゆう〔—衆〕名 室町時代の職制に將軍外出の際輿に先立ちて疾走するものをいふ。

—たいしやう〔シヤウ〕〔—大將〕名 足輕を率ゐるもの。

あし-がろ-し〔足輕〕形一 たちはたらきが敏捷なり。

あし-ぎぬ〔絁〕名 ⊗ 太き絹絲にて織りたる帛。

あしきらひ-もの〔アシキラヒ〕〔凶棄物〕名 ⊗ 足の爪を祓のあがものとする時の名。よしきらひものの對。神代紀〔あたすゑ足端〕の—」

あし-きる〔刖〕他動ラ四 ⊗ 古の支那の刑罰五刑の一。膝蓋骨を切り去る刑に處す。

アシク〔阿閦〕名〔佛〕〔梵〕不動・無怒等と譯す。—佛・—如來は其敬稱。此佛は五智如來の一。此世界の東方なる阿比羅陀國の教主。金剛界曼荼羅には其中央大日如來の東邊にあり。無冠にして容顏は寂定相、降魔の印を結び蓮華座上に座せり。

あし-くさ 名〔植〕めどはぎに同じ。

あし-くせ〔足癖〕名 ㊀ 足につきたるくせ。㊁ 相撲にて對手の足に我足を掛けて倒す手にてかはづがけ・うちがけ・そとがけの類の總稱。「癖あるをいふ。

—が惡い。句 他人の履物を屢はきまちがふる

あし-くび〔足頸〕名 ㊀ 足の踝（クルブシ）の上の部分の稱。脚腕。㊁ 足の踝より先の方の稱。

〔あしくま-やま〕〔阿自久麻山〕常陸國にあり。雪・ゆづる葉などの名所。

あし-げ〔羣毛〕名 馬の毛色の名。白毛に黑其他の差毛あるもの。此差毛の色によりてまた種

あし-げ〔惡氣〕名 惡きさま。「種の名あり。騅。

あし-げ〔足蹶〕名 足にて蹶ること。

あし-げい〔足藝〕名 みせものの一種。舞臺に仰臥し足を以て手にてする如く種々の技を演ずるもの。

「—くもよけくも見むと」

あし-け-し〔惡〕形一 ⊗ 惡しきさまなり。萬葉集

あしけ-びと〔惡人〕名 ⊗ あしき人。わるもの。

あしげ-ひばり〔羣毛雲雀〕名 馬の毛色の名。ひばり毛のまじれる羣毛。「げに斑あるもの。

あしげ-ぶち〔羣毛駮〕名 馬の毛色の名。あし

あ-しこ〔彼處〕代 あそこに同じ。

—もと〔—許〕代 あのかた。あちらのかた。源氏物語「例の人々なほ—になど唆しきこゆ」

あし-どき〔足ごき〕名 兒童の遊戲の名。數兒各々片足を後に擧げて片手にて持ち他の片足にて或は跳ね或は進み或は止りて巧に身體を支へながら競走押合ひ等をなすもの。「ビ。

あし-どね〔羣五位〕名〔動〕ぼんなうさぎに同

あじさし 名〔動〕かもめに似たる水禽。形鷗より小くして細き嘴の末端曲れり。尾は燕に似て分岐す。常に海上を飛ぶ。種類多し。

あし-さはり〔アシザハリ〕〔足障〕名 ㊀ 歩むにさはりとなるもの。㊁ 足の裏に物の觸るゝ心地。「—言ふ」荒い板の間」

あし-さまに 副 ⊗ 惡しきやうに。惡きが如くに

あし-しろ〔足代〕名 ㊀ 材を組み立てゝ高き處に登る足掛りとするもの。あななひ。あしば。㊁ 間架。㊂ あしだまり㊁に同じ。

あし-じろ〔足白〕名 太刀の總體を金又は銅金具にて飾り、足だけをしろがね卽ち銀にて造れるをいふ。太刀の足とは鞘に帶取とて緒を通す所二つあるをいふ。「—の太刀」

「す。

あし-すだれ〔葦簾〕名 葦にて造れる簾。よし

あし-ずまう〔ミヅ〕〔足相撲〕名 遊戲の一種。すわりながら足の先にて對手の足をはねあげて對手を倒さんとする遊戲。早く倒れたるを負とす

あし-ずり〔足摩〕名 あしざるを。あがくを。蹉跎。

〔あしずり-ざき〕〔足摺崎〕土佐國幡多郡の東南海に斗出せる最南端にして、巉崖屹立舟行最も危險なる所。一に西寺崎、西鼻、佐田岬ともいふ。丹頂山は此處にあり。蹉跎山。

あし-ず-る〔足摩〕自動ラ四 怒り又は悔しがりて身をもがきながら足を蹈みならす。ぢだんだをふむ。あがく。「—りさけぶ」

あし-ぞろへ〔ロヒ〕〔足揃〕名 ㊀ 人馬の足を揃ふること。體操行軍などに進行を整ふること。ぜいぞろへ。㊁ 古昔五月五日の加茂の競馬に先だち馬の足を整へし式。足汰。㊂ 元祿頃京阪の劇場の儀式。顏見世の前に一座の俳優麻上下を着て太夫元の邸又は舞臺に列坐し、太夫元より盞を受け、各一藝を演じ了り、盞を太夫元に返す儀式。

あした 名 ㊀〔朝〕あさの時。さうてう。あさ。㊁〔明日〕⊗ 今日の次の日。あす。

—に紅顏あって夕に白骨となる。眞宗の

御文の句。人生のはかなきをいふ。和漢朗詠集「朝有二紅顏一誇二世路一暮爲二白骨一朽二郊原一」

—の雲・夕の雨。句 男女の契のはかなきをいふ。謠曲「翠帳紅閨に枕を竝べさまざまなりし情の末花も紅葉もちりぢりに—とふる（降、古）事も今の身も」

—控二富兒門一（ニ—ニハフジノ）金滿家に媚びへつらふをいふ。杜甫「—、暮隨二肥馬塵一」

—聞レ道夕死可矣。（ニ—ニシストモカナリ）論語の語道は事物の當然なる宇宙の眞理、苟も之をきくことを得ば人生最上の幸福なるが故に朝にきゝて夕に死すとも遺憾なしとの意。朝夕はその時間の近きをいへり。

—不レ謀レ夕。（ハカラズ）事の急迫して夕方まで待ちて考慮する暇もなきやうなるをいふ。戰國策「—無二一日之積一」

〔朝〕夜のあけはなれて太陽を仰ぎ見るの意。旦よりは遲き時刻。詩經「誰謂二宋遠一曾不レ崇レ—」「—暮」「—夕」

〔旦〕夜あけて太陽の地平線を離れたる時。詩經「噰々鳴雁、旭日始—」「—夕」「詰—」

〔晨〕太陽の動き出でたる頃にて、旦よりは早き時刻。唐詩「清—入二古寺一初日照二園林一」

〔牝雞—を告ぐ」「霜—」

あし-だ〔足駄〕名 下駄の一種。路のわろき時に用ゐるはきもの。臺は多く桐にて造り、それに樫又は櫻の高き齒をはめ、鼻緒をすげてはく。展。木履。

—**づくり**〔—造〕名 ⊗ 足駄を造ることを業

—**の-はいれ**〔—齒入〕名 足駄の齒を入れ換ふること、又其人。

—片足に草履片足。謎 あわててかけだす時の形容。又物の調和せざるにいふ。

—の齒缺くる夢は凶事の兆。俗說

—を洗ふと雨が降る。俗說

—をはく。句 他人より賴まれて物を買ふ時、その價を高くいつはりて中間にて利を貪ること「下駄をはく」ともいふ。

—いて首ったけ。句 深き水中に陷りて唯首のみを出す義より、深く戀慕したるに喩ふ

あし-だか〔足高〕名 ㊀ 膳の如き道具につきたる足の高きもの。枕草紙 ㊁ 動物の足の高きもの。

〔鵝のひたの—に白うをかしげなる」

—**ぐも**〔—蜘蛛〕名〔動〕くもの一種。脚は極めて細長し。之を高くして歩行すること遲し。體の長さ四五分、一目にして絲を吐かず。床の下又は箱の中などに棲む。あしながぐも。蠨蛸。

—**べにたけ**〔—紅茸〕名〔植〕菌の一種。菌傘は肉質にして深紅色又は柑色なり。菌褶は白く柄も亦白色にして高さ二寸乃至八九寸。最も恐るべき毒性を有す。歐洲にては蠅を殺すに用ゐる。殺蠅蕈。

〔**あしだか-やま**〔愛鷹山〕駿河國駿東郡の西部、富士山の南方に跨立し、高さ三千九百餘尺あり。足高山。

あした-ぐさ〔鹹草〕名〔植〕葉のうどに似たる草。莖より黃なる汁いづ。味微苦にして香氣あり。夏の半に白き花を開く。此葉と根とは食ふべし。又牛馬の飼料とす。あしたば。

あし-だち〔足立〕名 ⊗ 足の立ち處。竹齋五郎繪卷「赤阪は馬の—わろく候」

あし-たづ〔葦田鶴〕名〔動〕普通の鶴。葦の生えたる水邊に居るよりいふ。

—の 枕 語路の通へるよりたづにかけていふ。種蘇撰集「—あたたづたづし友なしにして」

〔**アシタツ-さん**〔阿斯達山〕朝鮮黃海道文化縣の九月山。檀君此山下に都し、殷の武丁八年山に入りて神となりしといふ。「に同じ。

あした-どころ〔朝所〕名 ⊗ あいたんどころ

〔**あした-の-はら**〔朝原〕大和國片岡の邊にありしなるべし。古今集「—は紅葉しぬらむ」

あした-ば 名〔植〕あしたぐさに同じ。

あし-だま〔足玉〕名 ⊗ 古昔あゆひ〔脚帶〕の飾りとし、足の踝の邊にまきつけたる玉。

あし-だまり〔足駐〕名 ㊀〔兵〕軍隊の暫時足をとどむる處。㊁ すべて足を蹈みとどむる處。足溜㊂ 轉じて足をふみしむること。

あした-もの〔朝物〕名 ⊗ あさぶちに同じ。

あした-やき〔足駄燒〕名 茶道にて眞壺の名。近江信樂燒の底に足駄の形ある和壺。

あし-たゆく〔足疲〕副 ㊐ あしつからしに。いたづらに。古今集「かれなであまの―來る」

あした-ゆふべ〔ケウベ〕〔朝夕〕名 あさゆふ。萬葉集「たましひは―に賜ふれどなが胸痛し戀のしげきに」

あし-だらひ〔ライ〕〔足盥〕名 足を洗ふ盥。あし「あらひ。せんそくだらひ。

あしたれ-ぼし〔尾宿〕名 東方に見ゆる星の名

あした-わび-し〔朝詫〕形二 ㊐ きぬぎぬのわかれわびし。拾遺集「わが如く―きかずはまさらじ」

あしだ-を〔足駄緒〕名 足駄のはなを。展絲。

あし-ついで-に〔足序〕副 あるきついでに。みちついでに。遙次。「足の動かしかた。

あし-づかひ〔カイ〕〔足遣〕名 踊り又は歩く時の

あし-つき〔足付〕名 ㊀ あしうちに同じ。足杯 ㊁ 歩むさま。あしづかひ。㊂ 足の形。

あし-つき〔葦付〕名 ㊐(植) みるの類の海草。萬葉集「―とると瀬にたゝすらし」

あし-つぎ〔足繼〕名 身のたけとゞかぬ高き處へ手をとゞけむがために上るに用ゐる臺。ふみつぎ。ふみだい。凳。

―ぶね〔―船〕名 はしふねに同じ。

あし-づつ〔葦筒〕名 ㊐ 葦の幹の空虛なる面にある薄き皮。葭孚。

あし-づの〔葦角〕名 葦の新芽。あしかび。蕨。

―の 枕 葦角は薄きものなればひとへにかけていふ。後撰集「―ひとへも君をわれやへだつる」

あし-つ-を〔葦津緒〕名 足緒の義。和琴の絲の端を組絲にて蜈蚣などのやうに結びかざりたる所。

あし-て〔足手〕名 手と足と。

―かげ〔―影〕名 手足の影。謡曲「都の人の―もなつかしう候へば」

―な〔―惡〕形 ㊐ 非常に多忙を極め、所謂てんてこまひをするにいふ。柴葉物語「こゝらの殿上人上達部たち―し立つ」

あし-て〔葦手〕名 文字の形をくづして葦の生ひたる狀にかきたるもの。水の流れたる狀に書きなすを水手、歌の意を繪にかきて「てにをは」などを假名にてかきそへたるを歌繪といふ。三者よく似たり。歌繪は繪をもとゝして文字をまじへ、葦手は字を多くして繪は附けあはせたるのみのもの。あしでがき。

(でしあ)

―がき〔―書〕名 あしでに同じ。

―がた〔―形〕名 あしでの書體。

―の-つるぎ〔―劍〕名 鞘に葦手の模樣の蒔繪を施したる劍。

―もじ〔―文字〕名 あしでに書きたる文字。

あして-がらみ〔足手搦〕名 物の手足にまとひつきて已が身の自由ならぬこと。又妻子など身のほだしとなるにもいふ。

あして-まとひ〔ハヒ〕〔足手纏〕名 ㊀ 前に同じ。㊁ 轉じて妻子などの稱。

あし-どまり〔足留〕名 あしだまりに同じ。

あし-どめ〔足留〕名 ㊀ 人の遠くに行くをとどめおくこと。㊁ みちどめ。㊂ 瓦屋根にて瓦及葺土の落下を防ぐために土居葺の上端に取附けたる細長き木をいふ。㊃ 染色の斑を防ぐこと

―きん〔―金〕名 技手又は職工等を使用して或工事を仕遂げたれども、尙必要ありて他に轉地せしめざる爲に與ふる金をいふ。

―ぐすり〔―藥〕名 染粉の染付を緩漫にし染色のあしどめに用ゐる藥。多く硫酸曹達練汁よりつくる。

あし-どり〔足取〕名 ㊀ 足はこびのさま。あるきぐあひ。㊁ あしづかひ。あしびやうし。㊂ 角力にて足を取りて敵を倒すこと。㊃ 取引所にて相場の高低を表す語。相場の騰貴を上―といひ下落を下―といふ。

―へう〔ヒヨウ〕〔―表〕名 日々若くは月々の足取を指數的にあらはしたる表。

あし-と-る〔掎〕他動ラ四 ㊀ 他人の片足をとる。足を捕へて自由にせざず。「―り角取る」 ㊁ (兵)敵の後の方面を制す。

(アシナ-カロ〔阿史那賀魯〕鬼歩利設特勒刼越の子。西突厥の可汗たり。貞觀二十三年唐太宗龜茲を討つに方り、賀魯請うて嚮導となる。詔して崑丘道行軍總管を授けられ左驍衛將軍瑤池都督に累擢す。後自ら沙鉢羅可汗と號し廷州に入寇す。是に於て朝廷諸方の將士を遣して之を討たしむ。遂に拘致せられ、貞觀二十七年病死す。詔を以て韻利の冢旁に葬り其槃を石に紀せり。

(―シャル〔―射爾〕突厥處羅可汗の次子。夙に智勇を以て聞えたり。遂東を征し大功を立つ。上の眷愛厚く、畢國公右衛大將軍となす。永徽六年卒す。輔國大將軍奔州都督を贈り諡して元と云ふ。

(―デイジュクホ〔―泥孰匐〕唐高宗調露の初、單于涓博奉職二部の爲に立てられて突厥の可汗となる。後二十四州と共に叛し大に克ちしが部下の爲に斬らる。

(―トシ〔―都支〕突厥の可汗。唐高宗咸亨二年左驍衛大將軍兼匐延都督となり吐蕃と連和し安西に寇す。子弟を率ゐて上謁するに及び遂に擒にせられ以て命を終る。

(―ビシヤ〔―彌射〕室點密五世の孫。世々莫賀咄葉護たり。唐太宗の貞觀中旗鼓を賜ひ立てゝ突利邸咄陸可汗と爲す。龍朔二年蘇海政に從ひ龜茲を討つに當り歩眞の爲に謀反を以て誣ひられ遂に斬らる。

(―フクネン〔―伏念〕突厥の可汗。唐高宗永隆中、溫傅部に迎へられて立つ。翌年原廣二州に寇するに及び、朝廷兵を遣はして討つ。伏念惶駭戰はずして執へられ京師に斬らる。

(―ホシン〔―歩眞〕突厥の人。唐高宗の時自立して咄陸葉護と爲る。龍朔二年蘇海政に從ひ龜茲を討つに當り舊怨を含みて彌射を誣殺す。乾封中死せり。

(あしな-もりたか〔蘆名盛隆〕奥州黑川の城主。田村清顯・伊達政宗等と屢戰ひて勝つ後勇武に誇り暴戾度なし。天正十一年大庭三左衛門に弑せらる。年二十四。

―の-してんわう〔シノウ〕〔―四天王〕前の蘆名氏に仕へし平田松本・佐瀨富田の四武將をいふ。

あし-なか〔足半〕名 一種の草履。馬のわらぢの如くにして、人の足の裏の半までなるもの。險しき山に登り又は船をひきてさかのぼらしむる時などに用ゐる。

あし-なが〔足長〕名 古人の想像の人種。其足「其だ長しとす。

―きばへ〔バエキ〕〔―黃蠅〕名(動)足長蠅の一種灰褐色なる長脚を有す。普通花間に飛び廻りて他蟲を捕食す。農家に有益なり。「じ。

―ぐも〔―蜘蛛〕名(動) あしだかぐもに同じ。

―だこ〔―蛸〕名(動) てながだこに同じ。

―ばち〔―蜂〕名(動) 最も多く見る蜂にして中胸背に四箇の赤褐條を有し、腹部に天鵞絨樣の粗毛を生ず。花間に多く集る。

―ばへ〔バエ〕〔―蠅〕名(動) 蠅の一種。脚細長く、多く水邊に棲みて他蟲を捕食す。農家の爲に有益なり。

(あしなづち-の-かみ〔脚名稚神〕大山祇神「の御子。

あし-なづな〔亭歷〕名(植) はまだかなに同じ。

あし-な-に〔惡〕副 ㊐ あしきやうに。

あし-な-ぶ〔ブク〕〔蹇〕自動ハ下二 足なへてはたらき不自由となる。足きかずなる。跛。

あし-なへ〔ヱナ〕〔蹇〕名 足のなへたること。足のきかぬやうになりたること、又その人。ねざり。びつこ。ちんば。痿人。

―がめ〔―龜〕名(動) すっぽんの一種。

―起つことを忘れず。謡 痿人は足不自由にて起てされども、常に起たんとを思ひて止まざるが如く常に思ふこと切なるをいふ。前漢書「僕之思レ歸如二痿人不レ忘レ起盲者不レ忘レ視」

あし-なべ〔脚鍋〕名 一種の鍋。脚のある鍋。酒のかんをするに用ゐる。「じ。

あし-なへ-ぐ〔ヱナヘグ〕〔蹇〕自動カ四 あしなふに同じ。

あしなへ-の〔ヱナヘノ〕〔葦苗〕枕 語路の通へるより塞にかけていふ。萬葉集「―あしなへわがせつとめたぶべし」

あし-なみ〔足並〕名 足取を揃へて行くこと。「人―に」副 足ごとに。謡曲「駒を並べてうち入れうち入れ―くつぱみをひたして責め戰ふ」

あしなゆ〔蹇〕自動ヤ下二 あしなふに同じ。

あし-ならし〔足馴〕名 あゆみかたの練習。あしがため。

あし-な-る〔足馴〕自動ラ下二 あるきなる。源氏物語「少し―れたる人はとく御堂に着きにけり」

あし-に〔葦荷〕名 ㊐ 葦を多く束ねたるもの。萬葉